
バカと白黒と召喚獣

ailia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと白黒と召喚獣

【Nコード】

N3452X

【作者名】

ailia

【あらすじ】

試験召喚システムを導入した試験校である文月学園。

そのFクラスに一人の少年が転入する。

少年は天然だったり、影が薄かったり、ちょっぴり不幸だったり。

そんな少年にはある秘密が。

笑いあり、涙はないけど時々シリアス？

少年とFクラスの愉快な仲間たちが繰り広げる学園物語開始します！

プロローグ

プロローグ

つい数日前まで短い命を精一杯燃やすように咲き誇っていた桜が、葉桜に変わるころ。僕は皆より三日遅い新年度を迎えた。

転入生の振り分け試験当日に今まで住んでいたアパートが火事になったんだ。

おかげで振り分け試験は受けそびれるし、引越し作業のせいで新学期に間に合わなかった。

ちなみに出火原因は下の階に住んでいる住人のタバコの火の不始末らしい。

あの親父次に会ったら一発殴ってやる。

そして今日が僕の新学期初の登校日なんだけど……

現在時刻 8:55

「……寝坊だあああああああ!!」

初日から完全に遅刻……。

僕は朝食を食べる暇もなく学校へ走る。

転入先の文月学園へ……。

主人公設定

名前 鮎川 蓮 16歳

容姿 黒髪にちょっと茶色っぽい瞳。髪は男としては長めで、肩に着く位。

顔は中性的。どちらかというと女性に近い顔立ちをしている。
身長は明久よりも少し低いくらい。華奢。

成績 学年主席クラス。

得意教科は数学と英語（600点近い）。

苦手教科は保健体育（30点行かない）

他の教科は古典と現国が300点台前半。地理、政治経済が400点前後。

他は400点台。（英語Wは500点台）

総合科目は12教科で5000点くらい。

召喚獣 上半身は黒のジャケット。

下半身は黒目のジーンズ

右手に両刃の剣。

左手は指が刃物のように変形している。（関節はある）

その為両手で剣をもてない。

腕輪能力 「衝撃波」

左手から竜巻状の衝撃波を放つ。反動で自身の召喚獣はすごい勢いで後退

するため、コントロールが難しい。召喚フィールドの端

で放ち、

反動を抑えきれずにフィールドの外へ出てしまうと、敵
前逃亡になる。

備考 一人暮らし。両親は死亡し、親類は姿を見せない。

バイトで生計を立てている。

主人公設定（後書き）

この小説では文月学園の教科は

数学、英語、英語W、物理、化学、世界史、日本史、

政治経済（現代社会）、地理、古典、現代国語、保健体育の

12教科とします。本来なら、生物が入ってないのはありえないのですが、生物も入れて13教科にしてしまうと、姫路さんの平均点が340点前後になってしまい、作中での姫路さんの

単教科の点数から「それはありえないだろ」ということから

作中で一度も使われた描写のない（野球でも出てこなかった）生物を除外することにしました。

第一問 人は見かけによらないのかも……

バカテスト化学

『調理のために火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」ではだめだという引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

鮎川蓮の答え

『問題点……マグネシウムは熱すると化学反応を起こして非常に脆くなる点。』

合金の例……アルミ鋳物合金』

教師のコメント

おおむね正解です。問題点は脆くなる前に発火して危険なので出来ればそちらを書いてほしかったです。合金の例で上げているアルミ鋳物合金は実際のフライパンなどで使用されている合金です。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

第一問 人は見かけによらないのかも……

「鮎川、転校初日から遅刻してくるとはいいい度胸だ。歯あ食いしばれ」

今の状況を説明するね。文月学園に転入した僕は初日から寝坊してしまっただ。

自分でも信じられないくらいにハイペースで走ってきたんだけど、後一步で学校、というところで立っていた筋肉隆々の大男に絡まれてしまっているんだ。

「あの……僕はお金なんか持ってないですよ。他の人にしたほうが……」

「誰が喝上げなどするか!!」

すごい勢いで怒鳴られた上に拳骨を落とされてしまった……
この人何者なんだ？

「もうじき一時間目が終わる。授業が終わったらすぐにお前を紹介するからここで俺と一緒に待っておけ」

振り分け試験を受けられなかった僕は、自動的にFクラスになった。授業が終わるまで時間があるし、文月学園のことを説明するね。

文月学園は、科学とオカルトと偶然で出来た「試験召喚システム」という、世界初のシステムを導入している試験校なんだ。

この学校では、二年生から試験召喚戦争という試験召喚システムで呼び出せる、

「試験召喚獣」を用いたクラス間戦争が出来る。この戦争はクラスの設定をかけているらしい。一年の終わりに次年度のクラス振り分け試験を受け、その結果を受けて、

A Fまでの六つのクラスに振り分けられるんだ。最も成績がいい生徒が集められているのがAクラス。B Eと続いて、最も成績が悪い生徒が集められているのがFクラスなんだ。

そして、クラスごとに教室の設備も分かれている。基本的に上位クラスのほうが設備が良いらしい。Fクラスは成績も設備も最低ってことか。大変そうだな。

いろいろと考えているうちに一時間目のチャイムが鳴った。

教室の中から出てきた先生とすれ違うように、筋肉隆々の大男もとい補習担当の西村先生がFクラスに入っていく。まさかあの人教師だったなんて……。

明久Side

まったく、須川の奴！ かわいい女子の転校生が来る、何て言うておいてもう三日たつじゃないか。Fクラスじゃなくて他のクラスへ転入したんだろうか。

どうでもいいや、とにかく今は糠喜びさせてくれた須川を肅清しなければ……

「お前ら席に着けー」

なにっ！ 鉄人だと！ なぜ授業が終わったばかりなのに鉄人が入って来るんだ？

まさか誰かが悪さをしたんだな！ 誰だ！

「今日、転入生を紹介する」

転入生だつて。新学期が始まってもう三日たつのに。須川の情報では怪我でも病気でもないらしいから普通に一日目に居ると思ったのに。でも、かわいい女子らしいからな。

男ばかりのこの空間に四人目の女子が来るなら大歓迎だ。

「先生！ 転入生は女子ですか？」

「男子だ」

すゝがゝわゝ……女子じゃないじゃないか！ 嘘つき！

須川のほうを見るともう仲間たちにボコボコにされていた。

「お前ら静かにせんか！」

鉄人の一声で静まり返る教室。この人の声は良くわからない力があるよ。

「おい、鮎川、入って来い」

鉄人が呼ぶと、転入生が入ってきた。

男子の制服を着た女子だった……

S i d e O u t

先生に呼ばれて教室の中に入った。

ボロい……。想像以上だ。所々窓は割れているし、壁には隙間がある。

机は壊れかけの卓袱台だし、椅子の代わりに綿の抜けた座布団が置いてある。

それに何より、教室全体がかび臭い。畳腐ってるんじゃないかな。それに、クラスメイトの9割は男子だね。別に良いけど。

あつ、こんなこと考えている場合じゃなかった。自己紹介しないと。

「えっと、始めまして。鮎川 蓮です。気軽に蓮って呼んで下さい。趣味は読書と、

体を動かすことです。これからよろしくお願いします」
こんな感じでよかったのかな。

自己紹介を終えて、席に着いた。まさか自由席だとは思わなかったよ……。

これから一年このボロい教室で勉強するんだ。それなりに平和そうだから良いか。

そんなことを思っていた僕だけれど、まさかその数分後に僕の思っていた平和が覆されることになるなんて……。

第二問 自己紹介は大事だよね！

バカテスト国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 「（１）得意なことでも失敗してしまうこと」
- 「（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え」

姫路瑞希の答え

- 『（１）弘法も筆の誤り』
- 『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも、（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』

（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

鮎川蓮の答え

- 『（１）猿を木から落とす』

吉井明久の答え

- 『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

第二問 自己紹介は大事だよね！

蓮Side

席について西村先生が出て行くとすぐに、僕の周りにクラスメイトが集まってきた。

転入生なんだから当たり前か。さあ何を言われてもきちんと言えな

いと。

「何で男子の制服を着ているんですか？」

「男だからです」

なにを当たり前のことを聞いて来るんだ。僕は男なんだから女子の制服なんて着られるわけじゃないじゃないか。

「おい、お前ら、まずは名乗りやがれ」

声のしたほうを見ると180cmはあるつかという大男が立っていた。

髪の毛はライオンみたいだ……

「俺は坂本雄二。このFクラスの代表をしている。俺のことは好きに呼んでくれ」

クラス代表か。各クラスの代表はそのクラスで最も振り分け試験の成績が良かった人になるはずだから、坂本君はFクラスで一番成績が良いってことになる。

「僕は鮎川蓮です。これから宜しく。坂本君。あと、僕は男だからね」

「分かってる」

おおっ！ 坂本君はちゃんと僕のことを男って思ってくれているみたいだ。

「そこにお前みたいな奴の先輩が居るからな先輩？誰のことだろう。」

そう思つて坂本君が指さした方向を見ると、かわいい顔をして、男子の制服に身を包んだ生徒がいた。

「ワシは木下秀吉じゃ。よく間違われるのじゃがワシは男じゃ」

なるほど。木下君も僕と同じで常日頃から女の子に間違えられるらしい。

「えゝ？ 秀吉は『秀吉』という性別じゃないか。男子でも女子でもないよ」

誰だ！ そんなとんでもないことを言つた奴は！

「あつ、僕は吉井明久。こゝこの学園を代表するバカ」だよ。つて秀吉！ 僕の声真似して変な台詞つながないでよ！ 誤解されるじゃないか！」

「何が誤解じゃ。これでお主の立場が間違いなく伝わったじゃろ」木下君つて声真似できたんだね。あと、僕らの敵は吉井君つて言うらしい。

よし、ここは一言注意してあげよう。

「吉井君。僕も木下君もちゃんとした男なんだよ。そんな頭の悪いこと言わないでよ」

あれ？ 言葉のチョイス間違つたかな？ 吉井君がものすごい勢いで落ち込んでる。

「え、えゝつと……」

「気にするな鮎川。明久のバカは昔からだ」

そつなんだ。じゃあ気にしない。別に女の子って思われたから、見捨てるわけじゃないよ。

「次はウチね。ウチは島田美波。海外育ちで日本語の読み書きが苦手です。趣味は……」

珍しい。女子だ。かわいいし、趣味も女の子っぽいんだろうな……

「吉井明久を殴ることです」

前言撤回。この女の子ものすごい危険人物だ。なんだよその物騒この上ない趣味は！

吉井君のほうを見ると、彼は青ざめて震えている。どうやら本当らしい……。

吉井君がかわいそうに思えてきたよ。

「えっと、私は姫路瑞希です。趣味は……」

今度は桃色の髪をした女の子だ。桃色か、珍しいね。この子もかわいけど油断は禁物だ。

こんな瘴気漂う空間に居るんだ。きっと島田さんのようになにか常識では測れない趣味を持っているぞ……

「料理です。よろしくお願いします」

ゴメン……。こない子疑ってしまった自分が恥ずかしいよ。

そういえば、姫路さんが自己紹介しているときに後ろで吉井君たちが身震いしていたけれど何かあったんだろうか？

「……土屋康太」

物静かな男子が名乗った。身長も低めだしきつと、気の弱い人なんだろうな。

「コイツのあだ名は寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

「……。(ブンブン)」

坂本君の言葉をすごい勢いで否定しているんだけど……。それにしてもムツリーニってどういう意味だろう？

「そのあだ名はムツリスケベという意味じゃ」

木下君が説明してくれた。声真似だけじゃなくて読心術まで使えるんじゃないだろうか。

ムツリーニのほうを見るけど、やっぱりすごい勢いで否定している。

なるほど確かにムツツリといわれればムツツリの気も……

ハッ！　そうか、ポケットから顔を覗かせているカメラはそういう意味だったのか！

……それ、犯罪だね……。

自己紹介も終わり、休み時間もなくなったので皆自分の席に着いた。

なぜか坂本君が教壇に立っているんだけど代表として何か話すのかな？

「一昨日Dクラスに勝利した。明日で回復期間もあける。そこで、次はBクラスを相手に宣戦布告をする」

宣戦布告って試召戦争のことだね？　じゃあこのクラスはDクラスに勝ったってこと？

ならどうして、こんなボロ教室のままなんだろう。

そしてこの日の昼休み。僕はこのクラスの恐るべき野望を知っていた……。

第三問 軽率な発言は命を危険に曝す……

バカテスト英語

以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「
● ♪ * x

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

第三問 軽率な発言は命を危険に曝す……

蓮Side

昼休み。僕は屋上でFクラスの面々と昼食を食べることになった。

「鮎川は、昼飯はどうするんだ？」

坂本君が聞いてきた。僕はいつも自分で弁当を作ってきてるんだけど。

「僕は弁当を作ってきたけど、坂本君はどうなの？」

「いや、購買でなんか買ってくるわ」

「じゃあ、僕も贅沢にソルトウォーターを……」

吉井君？ ソルトウォーターって要するに塩水だよな？

それは食べるって言わないじゃ……。

「明久よ、何度も言うがそれは食べるとは言わんぞ」

木下君も同じこと思ってたか。何度も、ってことは吉井君はいつもこんな感じなんだね……。

パンとかおにぎりとか買ってくれば良いのに。

「そう思うなら、なんか奢ってよ」

ちよっと待って、僕の予想しなかった台詞が飛び出したんだけど。

「吉井君は学校にお金持ってこないの？」

「鮎川、気にするな。明久は自業自得だ」

どゆこと？

「趣味に食費まで使い込む明久が悪い」
なるほど。

「あの……私、今日はみんなの分のお弁当を作ってきたんですけど……」

吉井君の救世主になったのは姫路さんだ。

趣味が料理って言ってたもんね。でも、全員分か。やさしい女の子も居るんだね。

Fクラスに居るのがもったいないくらいだよ。

「あ、いや、僕は今から雄二と一緒に購買でパンを買ってこようと思ってるんだけど……」

「吉井君、せっかく姫路さんが作ってくれたんだから皆で食べよう。そのほうが吉井君も食費の節約になるんじゃないの？」

「鮎川！ お主なんということを……」

「……………自殺行為」

僕間違ったこと言ったかな？ ものすごい勢いで咎められたんだけど……。

場所は変わって屋上。

何故だろう？ 僕以外の男子はまるで処刑される前の囚人みたいだ。

「鮎川君、恨むからね」

何で！ 僕は吉井君に恨まれるようなことしてないよ！ むしろ姫路さんの弁当が食べられるんだから恨むんじゃないやなくて喜ぶところですよ！

「明久、諦める。鮎川は姫路の料理を食ったことがないんだ……」

坂本君まで……。姫路さんの料理がなんだって言うんだよ。

「はい、皆さん召し上がれ」

「それじゃあ、遠慮なくいただきます」

僕は卵焼きを口に入れた。木下君とムッツリーニが合唱してるのが気になるけど……。

Side Out

明久Side

今日の前で鮎川君が姫路さんの弁当を口にしてしまった。

うわっ！ やっぱり倒れちゃったよ。とにかく無事を確認しないと。

「鮎川君、大丈夫？」

「吉井君？ 大丈夫だよ」

良かった……今日の弁当は威力が弱めのような……。

「川の向こうで母さんが手招きしてるんだ……」

「鮎川君！ ダメだ！ その川を渡ってはいけない！」

急いで蘇生しないと！ 鮎川君は姫路さんの料理は初めてのはずだから助かるかは三分と七分つてところか……。

「母さん、そんな格好で川に入ったら風引くよ……ハッ！」

良かった……何とか戻ってきてくれた。これでまた一つ尊い命が救われたのです。

Side Out

蓮 Side

危うく渡ってはいけない川を渡るところだったよ……。

「ゴメン、皆……」

姫路さんの料理があんな危険物だとは思わなかったよ。

「いいんだ……。残りは明久が食うから」

「雄二！ 何てこと言ってくれるんだ！ 僕は内臓が退化してるんだからあんなの食べたら死んじゃうよ！」

吉井君、今なら君の気持ちが良く分かるよ。

結局お弁当は吉井君がおいしくいただきました。

「そつえば、Dクラスに勝利した、とかBクラスに宣戦布告ってどういう意味？」

僕はさつき感じた疑問を坂本君に聞いている。もし試召戦争でDクラスに買っているんだったら、今Fクラスの設備があんなボロいはずがないからね。

「そのまんまの意味だ。俺たちは新学期初日にDクラスと試召戦争をして勝利した。

俺たちの最終目標はAクラスだからDクラスの設備は交換しないでいるだけだ」

ふーん。Dクラスじゃ満足しないってことだね……って、Aクラスが目標？

「そ、それって無謀な挑戦って言うんじゃないかな？」

成績最悪のFクラスと、成績最高のAクラスの点数は文字通り桁が違う、って西村先生が言ってた。そんなところと勝負して勝てるものなのかな？

「お前が言いたいことはわかってる。安心しろ。このクラスは……最強だ」

そういつて笑う坂本君の顔は獲物を虎視眈々と狙っているようで、それでいて、見ているものに安心感を与えるような、そんな自信たっぷりの顔だった。

第四問 作戦は大事。でも友達も大事・・・

バカテスト数学

「(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \equiv 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $??$?
の中から選りなさい。

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A$

$\sin B$ 」

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『(1) $X \equiv \pi/6$

(2) ?
』

教師のコメント

そうですね。角度を「 $。$ 」ではなく「 π 」で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X \equiv$ およそ3
』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『（２）およそ？』

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

第四問 作戦は大事。でも友達も大事……。

蓮Side

昼休みに、坂本君から聞いた話によると、明日FクラスはBクラスに宣戦布告をするらしい。そして、「必殺料理人」の姫路さんは本来ならばAクラス入り確実の学力を持つ才女らしい。振り分け試験のときに高熱を出してしまつて途中退席。

途中退席は全科目0点になつてしまつたらしい。そのせいでFクラスなんていう最低の環境で勉強しなければいけなくなつたつてわけかで、「大好きな」姫路さんのために吉井君が試召戦争を提案した、てことらしい。

やっぱり、吉井君は優しいよね。さっきの弁当の件は置いておくとして。

「鮎川、お前は明日対Bクラス戦が始まつたらすぐに回復試験を受けてくれ」

回復試験つてのは試召戦争が始まつたら基本的にいつでも受けられるらしい。

召喚獣の戦闘で消費した点数を、テストを受けて回復させることが出来るんだつて。

「あれ？ 鮎川君は戦闘に参加しないの？」

「いや、僕は「バカもいい加減にしろよ明久」そこまで思っていないからっ！」

僕は振り分け試験を受けられなかったから、新学期の姫路さんと同じで全科目0点なんだ。

「そこまでつてことは、僕のことバカだっと思ってはいるんだね…」

しまった、吉井君へのフォローを忘れてた。吉井君が教室の隅っこでいじけている！

「バカはほっという話を進めるぞ」

吉井君と坂本君は本当に友達なんだろうか？

「気にするな、明久と雄二はちよつと変わっておるのじゃ」

「分かった」

「分からないでえゝそこは気にして！」

吉井君がなんかいつてるけど知らない！ だって気にするなって言われたもん♪

「そついえばなんでBクラスなのさ？ 勢いは付いたんだから、Aクラスを攻めるんじゃないの？」

吉井君はようやく喋れたようだ。

「BクラスにもDクラス同様、俺たちがAクラスに勝つための要素がある。」

この際だからはっきりと言う。俺たちじゃ、どんな作戦を使ってもAクラスには勝てない」

「えっ？ それじゃあ、目標はBクラスに変更つてこと？」

吉井君が坂本君に疑問をぶつける。

Aクラスが目標つて言っておきながらAクラスには勝てないって言うし。

僕には坂本君が勝てない勝負をするような人には見えないんだけれど。

「いや、目標はあくまでAクラスだ」

「雄二（坂本君）さっきと言ってることが矛盾してるよ」

「まあ聞け。クラス単位では勝てないから、Bクラスと試召戦争のシステムを使ってAクラスとは一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ち？ どうやって？」

吉井君は納得していない様子。僕も、よく分かってないけど。

「明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合どうなるか知ってるよな」

吉井君はこの学園に二年いるんだからもちろん知ってるよね。

「ええっと……」

知らないんだね……。姫路さんが小声で教えてあげている。

料理の腕はともかく優しいな

「設備を1ランク落とされるんだよ」

「まあ良い。じゃあ明久上位クラスが負けた場合は？」

確か、負けた相手と設備を入れ替えなきゃいけないんだよね。

「悔しい」

僕の予想をはるかに上回る回答が返ってきた。

「ムツッリーニ、ペンチ」

「ややつ、僕を爪切り要らずの体にする動きがっ」

生爪か！ 生爪なのか坂本君！

それは拷問だぞ！

「相手のクラスと設備を入れ替えられちゃうんですよ」

姫路さんのフォローが。吉井君、命拾いしたね。

「そうだ、このシステムを利用してBクラスをAクラスに攻め込ませる。Fクラスに負けると最低の設備だが、Aクラスに負けてもCクラス相当の設備で済む。交渉はまず上手くいくだろう」

「Aクラスには、Bクラスとの試召戦争の後に攻め込むぞって言うて一騎討ちに持ち込むんだね」

「そうだ。鮎川が理解できてるんだから、明久以外は分かっただろう」

さりげなく吉井君への罵倒を混ぜる坂本君。
この二人の間柄が本当に気になる。

「というわけで明久、今日のテストが終わったらBクラスに宣戦布告に行つて来い」

あれ？ 下位勢力の宣戦布告の使者つて大体ひどい目にあうよね……。

「断る！ 雄二が行けばいいじゃないか！」

「やれやれ、それじゃあジャンケン決めよう」

「よし、望むところだ！」

どうしてだろう、吉井君が坂本君に乘せられているような感覚を覚える。

「ただのジャンケンじゃ面白くない。心理戦ありで行こう」

心理戦つていうと、自分はパーを出す、とかいつて本当にそうするかの駆け引きのことだね。

「じゃあ僕はグーを出す」

「それじゃあ俺は……明久がグーを出さなかったら打ち殺す」

えっ……。今、ジャンケンの心理戦で聞いたことない単語が出てきたよ……

「いくぞ、ジャンケン……」
問答無用か……

「ポン！」

坂本vs吉井
パーvsグー

吉井君、後出しだったのに負けたよ……

「よし、逝ってこい明久」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスのと看みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

やっぱり、宣戦布告の使者は殴られるんだ……

「それなら今度こそ大丈夫だ。保障する」
すごい自信だ。Bクラスに知り合いでもいるのだろうか。

「Bクラスには美少年好きは多いらしい」

「そっか、それなら大丈夫だね」

待つて！ 色々とおかしい点があると思うんだ。

吉井君もそれで納得しないで！ 確かに美少年といえなくもないけど！

「でも、お前不細工だしな……」

「失礼な！ 365度どこから見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度だな」

「微妙な少年だね……」

「皆大嫌いだ！……！」

吉井君は泣きながら去っていった……

「……言い訳を聞こうか」

ボロボロになった吉井君が帰ってきた。

坂本君、ここはちゃんとフォローを……

「予想通りだ」

ちよっ！ 坂本君、そんな事言ったら

「くきいー！ 殺す！ 殺し切るー！」

「吉井君おちも「落ち着け」」

「ぐふあっ！」

「あんまりだよ坂本君！ 吉井君がつ」

鳩尾に拳がめり込んで……

「先に言ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

坂本君が行っちゃったよ。

坂本君、君は鬼だ……

第五問 やる気？ 殺る気！

バカテスト物理

問 以下の文の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であつて（ ）である』

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

鮎川蓮の答え
下リコンプレス
『竜王の殺息』

教師のコメント

先生もとあるシリーズは好きですがあれば光とはまた違うと思います。

鮎川蓮のコメント

まさか真面目に返されるとは思わなかった。

第五問 やる気？ 殺る気！

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

Bクラスとの試召戦争当日を迎えた。坂本君は教壇に立って、クラスメイト相手に演説をしている。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

字が違う気がする……

『おおーっ！』

このクラスのやる気は十分みたい。

テスト漬けたたはずなのにすごいやる気だ。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開始直後の渡り廊下線は絶対に負けるわけには行かない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野郎共、きっちり死んで来い！」

いや、死んじゃだめだから。

「が、頑張ります」

姫路さん、若干引き気味だ。僕もだけど。

『うおおーっ!』

すごい。さすが姫路さんだ。たった一言で、前線部隊の士気を最大にまで引き上げている。

Fクラスの作戦を説明すると、まず試召戦争開戦直後の廊下での戦闘に勝ちに行くらしい。

戦力もFクラス五十人中四十人をつぎ込む。前線部隊の士気はFクラス一の才女姫路さんが取る。

廊下では勝てるだろうけど、代表の坂本君の守りが薄くなる。

僕も、まだ回復試験が終わってないから参加できないし。

キンコンカンコン

昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

S i d e O u t

明久S i d e

昼休み終了のチャイムが鳴り響き、僕たちは一斉に教室を飛び出す。

僕たちは数学を主力に、戦線を拡大して一気に渡り廊下を取る作戦だ!

「いたぞ、Bクラスだ」

「高橋先生を連れているぞ!」

正面からゆっくりとした足取りでBクラスメンバー十人程度が歩いてくる。

「生かして帰すなー！」

誰かの叫びが皮切りになり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男 vs Fクラス 近藤吉宗
総合 1943点 vs 764点』

『Bクラス 金田一裕子 vs Fクラス 武藤啓太
数学 159点 vs 69点』

『Bクラス 里井真由子 vs Fクラス 君島博
物理 152点 vs 77点』

だめだ！ 圧倒的過ぎる！

第一陣は話にならない。早くフォローしないと！

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

姫路さんがやってきた。男子の全力疾走には付いてこれなかったんだろう。

「来たぞ！ 姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが声を上げる。やっぱり姫路さんを警戒していたようだ。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行って、きます」

そのまま、戦場へ紛れ込む姫路さん。

あ、早速勝負を挑まれる姫路さん。

Bクラス二人掛りだ。

『Fクラス 姫路瑞希 vs Bクラス 岩下律子&菊入真由美
数学 412点 vs 189点 & 151点
』

姫路さんの召喚獣は、左手首にきれいな腕輪をしていた。

姫路さんの召喚獣が左手を相手に向けた、と思ったら相手の一人の召喚獣が消し炭になった。あれを、僕が喰らったらと思うと……

「岩下と菊入が戦死したぞ！」

Bクラス二人を戦死させると、Bクラスに驚愕の表情が浮かぶ。

「姫路さん、とりあえず下がって」

「あ、はい」

相手の士気は挫いたし、腕輪を使って消耗した姫路さんにはいったん下がってもらう。

クラスの皆もやる気になっているし、これなら、今日の戦闘は目標どおり、

Bクラスを教室に釘付けにすることで終了するだろう。

「明久、ワシらはいったん教室に戻るぞ」

「ん？ なんで？」

戦況を眺めていた僕のところへ秀吉がやってきた。

「Bクラスの代表じゃが、あの根本らしいのじゃ」

「根本ってあの根本恭二？」

「うむ」

根本恭二とは、とにかく評判が悪い。

噂ではカンニングの常連だとか。目的のためには手段を選ばないらしく、曰く

『球技大会で相手チームに一服持った』とか、『喧嘩に刃物は当然装備』とか。

さすがにそこまで卑怯とは思わないけど、用心に越したことはない。

「なるほど。戻っておいたほうがよさそうだね」
「雄二に何かあるとは思えんが、念のためにの」
姫路さんに一言報告して、僕と秀吉は何人かを連れて教室へと引き返した。

S i d e O u t

蓮 S i d e

僕が、一折の試験を受け終えて、Fクラスに戻ってみると、そこにはボロボロになった卓袱台、荒らされた教室、怪我をしている吉井君と、少しはなれたところで血をぬぐっている島田さんが……つてちよつと待った！

「島田さん、いくら吉井君が気に入らないからって、ここまで暴れなくても……」

「違うわよ！ 教室はウチが帰ってきたときからこんな感じよ！」
島田さんが吉井君を折檻している巻き添えでこうなったんじゃないんだ。

「鮎川、試験は終わったのか？」

坂本君が聞いてきた。

「うん。さすがに一日で全教科受けるのは疲れたよ」

最初は、試召戦争で使う教科だけを受けるつもりだったんだけど、Bクラスが総合科目も使ってきたから、急遽全科目受けることになったんだ。

「島田さんじゃないとしたら、この教室は誰がやったの？」
今、一番の疑問だ。

「俺がBクラスの連中に協定を持ちかけられてな。協定調印のために教室を空けている間にBクラスの奴らが教室を荒らしやがったんだ」

「どんな協定だったの？」

「午後4時を過ぎたら、その日の戦闘を終了し、翌日の9時に同じ状況から再開する。」

その間は試召戦争に係わる一切の行為を禁止するって奴だ」

「姫路さんのため？」

姫路さんが万全の状況で試召戦争に臨めるから、その協定はFクラスに有利になる。」

「そうだ。やっぱり明久とは頭の出来が違うな」

「なんだと！ バカ雄二！」

「吉井君は置いといて……」

「鮎川君！ 君まで僕をそんな風に扱うの？」

話が進まない……

「ハプニング（と言っていいのか？）はあったけど、今のところは順調に進んでるってことだね？」

姫路さんが万全の状態で戦える以上、Fクラスは有利だ。さっき吉井君から聞いたけれど、

Bクラスを教室に押し込む作戦も成功しているらしいし。

「……Cクラスの様子が怪しい」
ムツリーニか。

確か、Fクラスの情報参謀だったよね。

「漁夫の利を狙うつもりか、いやらしい連中だな」

FクラスがBクラスに勝っても、消耗は激しい。

もともとの点数が少ないFクラスが消耗していれば、他のクラスからは格好の的だろう。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、
とでも言えばおとなしくなるだろう。」

「それに、僕たちが勝つなんて思ってもないだろうしね」

「よし、今から行ってくるか」

「そうじゃの」

「いや、秀吉は残ってくれ。お前の顔を見られると、万が一のとき
にやろうと思っっている作戦に支障がでる」

作戦？ 坂本君にはまだ作戦があるのか。

「よく分かんが、雄二がそういうのなら従おう」

「じゃあ行こうか。ちよつと人数が少なくて不安だけど」

坂本君、吉井君、姫路さん、島田さん、ムッツリーニ、僕は協定
を結ぶためにCクラスに向かった。

第六問 罾と逃走と初戦闘！

バカテスト化学

問 ベンゼンの化学式を書きなさい

姫路瑞希の答え

『C 6 H 6』

教師のコメント

簡単でしたね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師の答え

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B - E - N - Z - E - N』

教師のコメント

後で土屋君と職員室へ来るように。

鮎川蓮の答え

『Benzol』

教師のコメント

それはドイツ語ですし、化学式ではありません。

第六問 罨と逃走と初戦闘！

蓮Side

僕たちFクラスの面々は、Cクラスと停戦協定を結ぶためにCクラスを訪れていた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。Cクラス代表はいるか？」

「私だけど。何の用？」

坂本君の呼ばれて出てきたのはいかにもきつそうな女子だった。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た」

「クラス間交渉？ ふうん……」

なんだろう。笑顔がいやらしいとかそんな問題じゃなくて、何か大事なことを見落としている気がするんだけど……

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……どうする？ 根本クン」

分かった！ これはBクラスの罨だ！ なるほど、BとCクラスの代表にはつながりがあったと言うことか。

CクラスをおとりにしてFクラスが協定を結びに来るように仕向ける。

Fクラスはこの時点で協定に違反している。本当はBクラスのほうが先に協定を破っているけれど、敵クラスにあんな妨害をしてきた

根本君のことだ、先生にも嘘八百で自分たちに都合のいいように説明しているだろう。

敵ながら天晴れと言わざるを得ないな。うん。いや、噂の出所を調査してから来るべきだったよ。

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

僕が思案にふけっていると根本君の怒号が聞こえた。

Fクラスの皆は…… ってもういない！

「ちよっ、皆何で置いていくのさ！」

幸い僕にBクラスの人の注意は向いていない。

Cクラスの後ろの扉から脱出する……。

Side Out

明久Side

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

今の状況はかなりマズイ。僕たちではBクラス相手に勝負にならない。

「はあ、ふう……」

「姫路、大丈夫か？」

姫路さんが遅れ始めた。この全力疾走は姫路さんにはつらいだろう。けれど急がなければBクラスに追いつかれてしまう。

「雄二！ ここは僕が残って食い止めるから、姫路さんを連れて早く！」

まさか僕がこんなことを言う日が来るなんて。

「……分かった。ここはお前に任せる」

「……（ぴたっ）」

ムツツリー二も残るつもりようだ。だけど、ムツツリー二にも大

事な役割があるはずだ。

ここで失うわけには行かない。

「ムツツリー二も一緒に逃げて。明日の戦争の鍵は多分ムツツリー二が握るから」

「んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら。隊長どの？」

僕の隣には一緒になって立ち止まった島田さんがいた。

「……頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

「……（グッ）」

ムツツリー二は僕たちに親指を立てて走り去った。

これで、雄二、姫路さん、ムツツリー二を逃がすことが出来た。

あれ？ 誰か忘れてる気がする。

「島田さん。鮎川君は何処にいるのかな？」

「あつ……Cクラスに忘れてきたわ……」

ゴメン！ 鮎川君！ 君の事は多分……忘れない！

「……さて。どうするの？ 隊長どの？」

「うん。僕に考えがあるんだ」

「え？ アンタに？」

島田さんの表情が物語っている。僕は信用されていない！

「僕だつて補習室なんかには行きたくない。任せといて」

「ふーん。ま、アンタがそこまで言うなら信用しましょうか」

『いたぞっ！ Fクラスの吉井と島田だ！』

『ぶち殺せ!』

正面から追っ手がやってくる。長谷川先生も一緒だ。

「Bクラス!　そこで止まるんだ!」

僕の手腕を見せてやる!!

Side Out

蓮Side

『こいつ馬鹿だあーっ!』

Bクラスの人に気づかれないようにCクラスから脱出して、辺りを彷徨っていると、

叫び声が聞こえた。

「もしかしたら、Fクラスの皆が戦っているのかもしれない」
行ってみよう。ここからはそれなりに遠いな。

「ウチのことを愛してるって、言ってみて?」

叫び声があったところに着いた。すると、消火器を持った島田さんが吉井君に告白紛いの事をしていた。二人に何があったんだろう。

「ウチのことを愛してる!」

「吉井君……さっきのはそういう意味じゃないと思うけど」
吉井君、どう思う思考回路してるんだろう?

『何だこいつ!』

『こいつもFクラスだぞ!』

あつ、吉井君に突っ込みを入れていたら見つかってしまった。

Side Out

明久Side

「鮎川君！ 無事だっただね！」
Bクラス三人に囲まれて窮地に陥っていた僕たちの前に戦死したと思っていた鮎川君が現れた。

「吉井君、僕のこと忘れてたよね？」
何でだろう。鮎川君の背後に鬼が見える……。

「何だこいつ！」
「こいつもFクラスだぞ！」

鮎川君もBクラスの標的になってしまった。
三対三になったとはいえ、相手はBクラス。まだこちらの分が悪い。

「えっと、試験^{サモン}召喚」

鮎川君が、戸惑いながらも召喚獣を召喚する。

『数学 鮎川蓮 vs Bクラス三人

516点 vs 合計381点』

勝負はあつという間についた。

Side Out

蓮Side

初めて試験召喚獣を呼び出した。思っていたよりも動かす感覚が自分の体と違う。
でも、誤差の範囲内かな。

僕の召喚獣は、上はジャケット、下はジーンズ。共に色は黒だ。
服装はその辺にいるチョイ悪親父みたいな感じんだけど、手に持つてる武器が穏やかじゃない。

右手には、幅も長さも長い両刃の剣。重そうだ。
そして、左手はなぜか人の形をしていない。指全体が刃物みたいになつてる。

しかも右手の指の何倍も長い。関節はちゃんとあるからパツと見ちよつと気持ち悪い。

『何だこの点数は！』

『こんな奴がFクラスにいたのか？』

Bクラスの人の驚いた声が聞こえる。たしか単教科で200点取れば学年でトップクラスだと聞いたから、500点は珍しいのだと思う。

「数学は得意だからね」

一応Bクラスの人に声をかけておく。

僕が言い終わらないうちに一番点数の高い人が突進してきた。
召喚獣を左に移動させて、すれ違いざまに右手の剣で攻撃する。その一撃で敵の召喚獣は消滅した。後二人。

『うおおおお！』

叫びながら、一人が攻撃してきた。振り下ろされる剣をこちらも剣

で受け止める。

点数に差があるからなのか、片手でも簡単に受け止められた。

「はあっ」

右手を大きく振って、敵の召喚獣を弾き飛ばす。相手が踏み込んできたところに剣の切っ先を突き出す。相手の召喚獣は自身の勢いを止められずに剣に突き刺さって消滅した。

後一人。

「隙あり！」

いつの間にか僕の召喚獣の後ろに回っていた敵が剣を振り下ろす。前に突き出している右手の剣は間に合わない。

キンッ

「何っ」

なんか硬そうに見えた左手でガードすると、甲高い金属音と共に相手の剣が止まった。

相手は驚いているけど、僕も驚いている。まさか剣を止められるほど硬いとは……。

驚いて隙が出来た相手に右手の剣を振り下ろす。

思ったよりもあっけなく、相手の召喚獣は全滅した。

「戦死者は補習うーー！！」

Bクラス三人は何処からともなく現れた西村先生によって連行されていった。

「凄いよ鮎川君！　どうやってそんな点数を？」

召喚獣での戦闘を終えて、一息ついていると吉井君がすごい勢いで迫ってきた。

「近い！　吉井君近いよっ！」

「数学は得意だからね」

吉井君を落ち着かせた後、Fクラスに戻りながら吉井君、島田さんと話した。

「ウチも数学は得意だけど、500点なんて絶対取れないわ」

「そくだよ、僕なんて100点すら取れないよ」

「吉井君、そこは威張って言うところじゃないよ」

「吉井君！ 無事だったんですね！」

Fクラス前では、姫路さんが待っていた。

「うん。鮎川君のおかげで生き延びたよ」

「吉井君、あんまり僕の点数は言わないでくれないかな」

吉井君に小声で話す。

「どうして？」

「あんまり期待されたくないのと、僕の点数が広まらないうちは奇襲が出来るからね」

Bクラス戦で出番はなくても、Aクラス戦では必ず奇襲が必要だろう。

奇襲できる高得点者の情報は出来るだけ隠していたほうが都合がいい。

「鮎川君がどうかしたんですか？」

「いや、なんでもないだあっ！」

姫路さんと吉井君が話していると、なぜか島田さんが吉井君の足を踏みつけた。

「島田さん、一体何を……」

「（キッ！）」

「あ。い、いや。美波」

あれ、この二人はいつの間にも名前呼び合うようになったんだろう。大体想像はつくけど。

「……二人ともずいぶん仲良くなつたみたいですね？」
何故だろう？ 温厚なはずの姫路さんの後ろに鬼、いや般若が見える。

「さて、お前ら」

坂本君が声をかける。

「こうなつた以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦と言
う形になるだろうが、
Bクラス戦の後にCクラスと戦うのはきつい」
Bクラスは上位クラス。FクラスにとってはBクラスだけでも勝て
るか分からないのにその後Cクラスに攻められたらまず間違いなく
負けるだろう。

「それならどうしようか？ このままじゃ勝つてもCクラスの餌食
だよ？」

「そうだね」

「そうじゃな……」

教室の空気が重くなる。

「心配するな」

坂本君が声を上げる。その顔は野性味たっぷりの笑顔を纏っている。

「向こうがそう来るなら、こちらにも考えがある」

「考え？」

「そうだ。明日の朝に決行する。目には目を、だ」

その日はそれで解散になり、続きは翌日へと持ち越しになった。

第七問 感じていた違和感が解決したときは大抵手遅れになっている。

バカテスト英語

問 goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『good - better - best
bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級や最上級は語尾に -erや -estをつけるだけではだめです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』、『乳製品』、『おっぱい』

第七問 感じていた違和感が解決したときは大抵手遅れになっている。

蓮Side

翌日。

「今から、昨日行った作戦を執行する。秀吉」

そういつて坂本君は木下君に女子の制服を……ってええっ！

「待つんだ坂本君！ 木下君が挑発に行くのにどうして女装する必要があるの！ それと木下君もそこは抵抗しようよ！」

『おおおおおっ！』

僕の突っ込みはその場で着替え始めた木下君に何故か興奮したFクラスの叫びでかき消された……

「どうじゃろうか」

うん。分かつてはいたけれど、木下君は女装が似合うね。

「ばっちりだ。よし、今からCクラスに向かうぞ」

「ねえ、どうして木下君を女装させたの？」

Cクラス前、一人でCクラスに向かっていく木下君を見ながら、僕は坂本君にさっきから感じていた疑問をぶつけた。

「まあ、見れば分かる」

八重歯を見せながら笑う坂本君。なんだかとても悪役っぽい笑みだ。

小声で話していると、木下君がCクラスに入っていく姿が見えた。

「静かになさい！ この薄汚い豚共！」

いきなり凄いい台詞が飛び出した。それに木下君の声がいつもと違って聞こえる。

『なによ！ アンタA……！ ちょっと……』

Cクラスの小山さんが何か言っているけど、ヒステリックな声の所為か良く聞き取れない。

「話しかけないで！ 豚臭いわ！」

自分からたずねておいて話しかけるな、はないんじゃないかな。

「私はね、こんなに臭くて醜い教室が同じ校舎にあるなんて我慢ならないの！ 増してブタ臭い貴女たちなんて豚小屋で十分だわ！」
『なっ！ 言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！』

「どうやら、小山さんにとってはブタ小屋＝Fクラスらしいね」

「否定は出来ないがな」

「いや、いくらFクラスでも、ブタ小屋よりは文明的な教室だと思うよ。一応畳もあるし」

ブタ小屋には畳は敷いてないよ。

「手が汚れてしまうから本当はいやだけど、近いうちに貴女達をふさわしい教室へ送ってあげようと思うの。今、試召戦争の準備もしているし、覚悟しておきなさい。近いうちに私たちが薄汚いブタの

貴女達を始末してあげるから！」

とてつもなくヘビーな捨て台詞を残して木下君が教室から出てきた。

その顔はどこか誇らしげであり、スッキリした様な顔でもある。

「どうじゃったろうか？」

木下君が聞いてくる。

「ああ、素晴らしい仕事だった」

「……（コクコク）」

坂本君の言葉に、ムツツリーニが頷いている。確かに、挑発としてはこの上ないほどに効果的だったと思うよ。小山さん以外のCクラスの人たちがかわいそうだ。

S i d e O u t

明久S i d e

「扉と壁を上手く使うんじゃ！」

秀吉の挑発の後、僕たちは昨日の試召戦争の続きをしていた。

雄二の作戦は『Bクラスを教室内に閉じ込める』らしい。

そんなわけで、Bクラス入り口付近を主な戦場にして、作戦を遂行させようとしているんだけど、さっきから姫路さんの様子がおかしい。

なんていうか、自分は試召戦争に参加しないようにしているように見える。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」
秀吉の檄が飛ぶ。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

左出入り口にいるのは古典の竹中先生だ。

Bクラスは文系が多いので、文系教科で攻められれば分が悪い。

「姫路さん、お願い！」

「あ、そ、そのっ……！」

姫路さんは、戦線にも加わらず、泣きそうな顔でオロオロしている。
このままじゃ突破される！

僕はBクラス左側の出入り口まで走り、竹中先生に耳打ちした。

「先生、ズラ、ずれてますよ」

「っ……！」

頭を押さえて周りを見回す竹中先生。こんなところで「いざと言う
ときの教師脅迫ネタ〈古典教師篇〉」を使うことになるとは思わな
かった。

「しょ、少々席をはずします！」

これで少しの間ができる。

「古典の点数が残っている人は左側へ回って！ 消耗した人は補給
を受けるんだ！」

この隙にクラスへ指示を出す。これですこしは持ちこたえられるだ
ろう。

「姫路さん、どうかしたの？」

姫路さんに声をかける。姫路さんがこうなっている原因を見つけな
いと動きが取れない。

「そ、そのっ、なんでもないですっ……！」

そういつて大きく頭を振る姫路さん。その動作は不自然なほど大きく、何かあるのがバレバレだ。

「そうは見えないよ。何かあったのなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし」

「ほ、本当になんでもないんです！」

そうは言うけど、今日の姫路さんは絶対におかしい。

「右側入り口、教科が現代国語に切り替えられました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致られた模様！」

右側入り口までBクラスが得意とする文系教科に切り替えられるなんて、結構ピンチだ！

「私が行きます！」

そういつて戦場に加わろうと駆け出す姫路さん。

「あっ」

しかし、何かを見た途端にその動きを止めた。

何かあると思って、姫路さんの視線の先、Bクラスの中をたどってみると、腕組みしながらこちらを見ている卑怯者……根本君の姿があった。その手にはかわいらしい封筒が握られている。

「……なるほどね。そういうことか」

昨日の協定からおかしいとは思ってたんだ。体の弱い姫路さんに有利になる協定をBクラスから持ちかけてくるなんて、まるで姫路さんを無効化する手段を持っていたとしか考えられない。姫路さんさえ無力化できればあの協定はBクラスに有利なものになる。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれだけじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕はあるから行くね」

「あ……！」

姫路さんは何か言いたげだったけど、気にせず背を向けて走り出す。大事な用ができたから。

「面白い事してくれるじゃないか、根本君」
思わずそんな台詞が口からこぼれる。

あの野郎、ブチ殺す。

S i d e O u t

蓮 S i d e

Cクラスから帰ってきた後、すぐに始まったBクラス戦二日目。
僕は、本陣に残るように言われ、坂本君と教室に残っていた。

「ねえ坂本君、どうして僕を本隊に入れたの？」

転入生で、召喚獣の扱いにもなれていない新人を代表を護る役目がある本隊に入れるなんて普通は避ける。

「お前が戦力になるからだ」

「どういう意味？ 僕は転入生で試召戦争どころか、召喚獣にもなれてないんだけど」

実際、昨日吉井君たちを助けたあの一回しか召喚したことないし。

「お前が、Cクラスから無事に帰ってきたからだ」

「それはBクラスに人の注意が坂本君たちに向いていたからで……」

「そつちじゃない。明久と島田を助けたときだ」

あれ？ 坂本君には話してないはずだけど。

「島田と明久がBクラスの追っ手を食い止めて、尚且つ戦死せずに戻ってくるには正攻法じゃ無理だ。それこそ、消火器で煙幕を張るとかな」

確かに、昨日僕が駆けつけたときには島田さんがピンを抜いた消火器を持っていた。

消火器を煙幕代わりにするつもりだったんだ……

「だが、明久たちが消火器をぶちまけた、と言う話は入ってきていない」

消火器なんて勝手に撒いたらそれなりに話題にはなるよね。

「つまり、明久と島田は、正攻法でBクラスを食い止めてから戻ってきた事になる……」

お前と一緒にな」

坂本君は最後の部分を特に強調した。

「確かに僕はFクラスに戻ってくる途中で吉井君たちと合流したよでも、そのときにBクラスの人は三人に減っていたし、三対三なら正攻法でも……」

「無理だな。Bクラス一人が撤退に追い込まれるほどのダメージを与えるまでに、明久はともかく、島田はかなり消耗していたはずだ。教科は数学だったしな。」

つまり、お前がBクラス三人を相手に出来るほどの戦力を持ってい

る事になる」

坂本君は何処まで知っていて、何処からが推理なんだろう。とても最下位クラスの間人とは思えない頭の回転だ。

「もし、僕にそんな戦力があつたとして、それなら戦線に出たほうが良かったんじゃない？ Bクラスを閉じ込めるのは難しいと思うよ」
「ああ、そこはちゃんと考えてあるし、何よりお前は伏兵だ。Aクラス戦用の……な」

まだBクラスに勝つてもないのに、もうAクラス戦のことを考えて策を立てている。

一流の軍師、策士とは、こういう人のことを言うんだろう。決して他人を蹴落とすだけの卑怯者じゃない。

だけど。

「坂本君は、Bクラスを押さえておけると思っている？」

Aクラス戦も、Bクラスに勝たなきゃ始まらない。目下の問題はそれだ。

それに気になることもある。

「ああ、Bクラスごときなら、姫路がいれば何とかなるだろう」
姫路さん。学年トップクラスの彼女なら……

「昨日の協定に違和感があるんだ。Bクラスが態々こちらに有利な条件を提示してくるなんてありえない」
あの協定がFクラスにとって有利なのはある一点だけだ。だけどFクラスはその一点を生命線にしている。もしその生命線を封じる事ができるとしたら……

「Cクラスへおびき出すための布石だったんだ。気にする事はない」
違う、それだけじゃない。

「何か姫路さんを動けなくする策が『雄二!』」

教室に吉井君が飛び込んできた。

第八問 男には、やらないといけない時がある！

バカテスト保健体育

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎えることで第二次成長期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、

初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43Kgに達する頃に初潮を見ることが多いため、

その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また体重のほかにも初潮年齢は人種、気候、社会的環境や

栄養状況などに影響される』

教師のコメント

詳しすぎです。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

鮎川蓮の答え

『ふあ、ファーストキス……』

教師のコメント

回答から何故か気恥ずかしさを感じますが外れです。

第八問 男には、やらなきゃいけない時がある！

蓮Side

僕が坂本君に昨日の協定について感じた違和感を話そうとしていたとき、吉井君が教室に飛び込んできた。少し息が切れていて、何か緊急事態があったことを思わせる。

「雄二ー!!」

「何だ明久、脱走か？ チョキでしばくぞ」

「坂本君、たぶんここはシリアスな場m」話しがあるんだ」

遮られた。吉井君には僕は見えていないのだろうか……。

昨日Cクラスに行ったときといい、僕はFクラスのメンバーに無視されてる気がする……

でも、取り敢えず、シリアスな空気になった。

「根本君の着ている制服がほしいんだ」

「……お前（吉井君）に何があつたんだ（あつたの）？」

僕の知る限りでは、吉井君はノーマルだったはず……はっ！

まさか今朝の木下君の着替えを見てソツチ方面に目覚めてしまったのか！

「ああ、いや、その。えーっと……」

吉井君は口ごもっている。そりゃ、いきなりカミングアウトしてしまったんだから。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそのくらい何とかしてやるう」

「人の好みはそれぞれだよな」

「ちよつと待つて、雄二はいい。いや、雄二の顔もむかつくけどそれよりも鮎川君、

君は何を想像しているんだ！」

「僕は吉井君がノーマルじゃなくても気にしないよ。あ、でも僕はノーマルだからね」

「違うつ！ それは大きな誤解だ！僕はノーマルだ！」

「別に隠さなくても……」

「だから誤解だつて『話が進まん。それだけか？』」

坂本君に遮られた。今は吉井君がノーマルかどうかなんてどうでもいい。「良くないよ」

なんか聞こえた気がするけど無視だ。今は、Bクラスに勝つことだけを考えないと。

「姫路さんを戦闘から外してほしい」

悪い予感が当たってしまったようだ。やっぱりBクラスは何かしらの手段で姫路さんを無力化しているのだろう。こうなると昨日の協定はBクラスに圧倒的に有利だ。

「理由は？」

姫路さん抜きでBクラスと戦うのは自殺行為に等しい。

「理由はいえない」

「どうしても外しないとダメか？」

「うん。どうしても」

坂本君も吉井君も引かない。おそらくだけど、姫路さんはBクラス……いや、根本君に何か弱みを握られてる。

制服に入るサイズの弱みとなると……写真、メモリー、手紙といったところか。

メモリーだと、姫路さんに中身を確認してもらう必要がある。姫路さんは根本君と関わりが薄いはずだから、可能性は低い。姫路さんが良く知らない男子生徒に簡単についていくとも思えない。

写真は……女子の写真を持っているとなると根本君は変体扱いじゃないかな……

となると、手紙か。姫路さんが人の悪口を手紙に書くとは思えないから好きな人か？

ラブレター、もしくは島田さんと手紙の交換をしていたか、どっちかだな。

「頼む！ 雄二」

僕が姫路さんが握られている弱みに当たりをつけていると、吉井君が坂本君に頭を下げていた。

「……条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役わにをお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ」

「もちろんやってみせる！ 絶対に成功させるさ！」

一見根拠のない自信。だけど、吉井君には何とかしてしまいそうに感じる。

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい」

「みんなのフォローは？」

「ない。しかも教室の入り口は今の状態のままだ」

「僕が吉井君のフォローに回るよ」

根本君はBクラスの中にいるだろう。吉井君一人では成功確率は低い。

「いや、ダメだ。お前は本陣に残れ」

「どうして？」

「今の戦力でBクラスを押さえておけるとは限らない。明久が攻撃を仕掛けるまでBクラスの出入り口は死守する必要がある。お前はその為の戦力だ」

「……分かった」

坂本君にも一理ある。今出払っている戦力でBクラスを押さえ込めるかと言うと、厳しいだろう。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させろ」

「それじゃ、上手くやれよ」

思考に耽り始めた吉井君を残して、坂本君はどこかに行くようだ。

「Dクラスに指示を出してくる」

「分かった」

「明久、お前は点数は低いが、秀吉やムツリーニのようにお前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「僕も、皆と会ってまだ時間はたっていないけど、Fクラスの皆が点数じゃ計れない何かを持っている事は分かる。僕は手伝えないけれど、吉井君の事を信じてるから」

「……雄二、鮎川君」

「うまくやれ。計画に変更はない」

僕は、坂本君と一緒に、Dクラスへ向かった。

Side Out

明久Side

雄二と鮎川君が出て行った後、僕はBクラスに奇襲を掛ける方法を考えていた。

僕に秀でている部分……。狭い場所での戦闘である以上、操作性や細かい動きは役に立ちそうもないし……

「あっ」

一つだけあった。秀でている、とはいえないけれど、他の人とは違う、僕だけの特徴が。

「美波！ 武藤君と君島君も、協力してくれ！」

補給を受けるために戻ってきた三人に声を掛ける。

「どうしたの」

「何か用か」

「補給テストがあるんだけど」

この三人は既に点数を消費し、補給テストを受ける事が任務になっている。

「補給テストは中断。その代わり、僕に協力してほしい。この戦争の鍵を握る大事な役割なんだ」

「……随分とマジな話みたいね」

「うん。ここからは冗談抜きだ」

「何をすればいいの？」

「僕と召喚獣で勝負してほしい」

あの下種野郎、目に物見せてやる！！

第九問 Bクラス戦終結！

バカテスト保健体育

問 人が生きていくうえで必要な五大栄養素を全て挙げなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『？たんぱく質 ？脂質 ？炭水化物 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石です。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満のときは早発月経という。また、十五歳になっても初潮がないときを』

遅発月経、更に十八歳になっても初潮がないときを原発性無月経といい・・・』

教師のコメント

保険のテストは一時間前に終わりました。

第九問 Bクラス戦終結！

蓮Side

僕は、坂本君と一緒にDクラスへ指示を出しにあったあと、Fクラスに戻ってきていた。

「吉井君は、どうやってBクラスに奇襲を掛けと思う？」
坂本君に尋ねる。

「DクラスとBクラスの間壁を召喚獣でぶっ壊して直接Bクラス
ないに攻め込むつもりだろうな」

予想外の返答が返ってきた。

「そんなことしたら後で酷いことになるよ！ それに召喚獣って物体に触れられないんじゃないかな？」

「いや、明久の召喚獣は特別仕様だ。観察処分者は教師の雑用を手伝わされるんでな、召喚獣が物体に干渉できるんだ」

「そうなんだ……便利な召喚獣だね」

「いや、そうでもないぞ。物体に触れられる代わりに召喚獣が受けたダメージの何割かは、召喚者にフィードバックするからな」

「そんな使用の召喚獣で壁を壊したら、吉井君も痛いよね？」

「ああ。だがそれを含めてあいつは覚悟したんだろう。鉄人あたりにかつてり絞られるだろうがな」

「凄い。何て男らしいんだ吉井君。自らの身を省みない策を執行するなんて……」

『Bクラス出入り口、突破されそうだ！』

伝令が来た。試召戦争が始まったのが今朝の9時。今は3時半を過ぎていてからかなり持ったほうだと思う。

「坂本君！」

「ああ。今から俺たち本隊も出る！ Bクラスに勝手を許すな！」

『おおーっ！』

坂本君の号令で、教室に残っていた本隊が動き出す。

こちらの戦力を全てかけた、文字通り総力戦の始まりだ！

S i d e O u t

明久Side

「おおおっ！」

ドコンッ！

叫び声と共に壁にこぶしを叩きつける。力が強い召喚獣といっても、一撃で教室を隔てる壁を壊せるわけなく、僕の手に痛みが返ってくる。

「ぐうっ！！」

「怯むな！ ここを凌ぎ切れれば勝てるんだ！」

「消耗した人は下がって！ 戦死はしないように！」

「坂本と本隊だ！」

教室の外から声が聞こえてきた。

姫路さんを戦闘からはずした影響は思ったより大きかったようだ。あらかじめ出ていた戦力だけではBクラスを抑えきれずに、雄二と本隊まで出てきているんだろう。まさに総力戦だ。

「雄二たちにここまでさせてるんだ……必ず成功させる！！」

Side Out

蓮Side

僕は、坂本君率いる本隊の一員として、Bクラスに援軍に来た。代表まで出てきた以上、もう隠せる戦力はない。文字通り総力戦だ。Bクラスの面々はFクラス代表の坂本君が出てきたことに驚きなが

らも、その首をしきりに狙っている。こちらにも負けずに、本隊の戦力でBクラスの出入り口を押さえ込む。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の入り口に群がりやがつて、暑苦しいことこの上ないつての」

「なんだ、軟弱なBクラス代表様はそろそろギブアップか？」

ドオン！

根本君が口を開くが、我らが代表坂本君は挑発で返す。

「ハア？ ギブアップするのはソツチだろ？ Fクラスはクズの集まりの上に、頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜえ？」

ドオン！！

初めて会ったときから感じていたけど、根本君の人を見下した態度は気に入らない。

挑発の意味も含んでいるだろうけれど、あの顔は本気でFクラス……いや、自分以外の人間を見下している。成績や頭の回転、策だけで人間の全てが決まるわけじゃない。

自分を過信している人は嫌いだし、今から痛い目見るよ。

「お前ら相手じゃもつたいたいからな。今は休ませておくのさ」

「けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組つてのがFクラスのことならお前が今から負け組代表だな」

ドオン！！！！

「ちっ！ さっきからドンドンとうるせえな！ てめえらの仕業か

？」

「知らねえな。人望のないお前に対する嫌がらせじゃないか？」

「けっ！ 言ってる」

だんだん、吉井君の召喚獣が壁を叩く音が強くなってきた。

「坂本君……そろそろ」

「ああ……一旦引くぞお前ら！」

「オイ！ 散々吹かしておいて逃げるのか！！」

僕は最後尾についていく。万が一Bクラスの人が追いついてきたら……

「だあああああしやああああ！！！！」

ドゴオッ！！

吉井君の叫びと共に、DクラスとBクラスを隔てていた壁が崩れ去る。

「根本恭二！ 覚悟おー！」

吉井君を筆頭に、島田さんと数名Fクラスメンバーが根本君に襲い掛かるが、

Bクラス親衛隊に阻まれて身動きが取れなくなってしまった。

「はっ！ 俺が一人だと思っていたか！ お前らの奇襲は失敗だ！

オイ、お前ら！

さっさと坂本を仕留めて来い！」

そろそろ、根本君の一方的な物言いに我慢できなくなってきたな……

… やっちゃんおうか。

「そうはさせない！ Fクラス鮎川蓮が、召喚エリア内にいるBクラス全員に数学勝負を申し込みます！」

「鮎川君！」

『何だアイツ』

『Fクラスの癖に調子乗ってんじゃねえよ』

『さっさと倒して坂本を仕留めに行くぞ！』

吉井君も驚いているけど、Bクラスの人からも色々な反応が返ってくる。

怒っている人が多いようだけど、そうやって冷静さを失うと足元をすくわれるよ。

「試験^{サモン}召喚！」

『ぶっ潰してやる！！ 試験^{サモン}召喚！』

『数学 Fクラス 鮎川蓮 VS Bクラス 12人
516点 VS 平均 147点』

やっぱり文系の人が多いBクラス相手ならこの人数でも何とかなる！

『なんて点数だ！』

『あんな奴が何故Fクラスに！』

驚いてるね。だけど、召喚獣が固まっている上に動きが止まっているよ！

「衝撃波！！」

僕は右手の剣を床に突き刺して体を固定した後、左手をBクラスの集団に向ける。

左手の腕輪が光を発し、召喚獣の左手から圧縮された空気の渦が発生する。

渦は僕の召喚獣との距離が離れていくうちに大きくなり、Bクラスの召喚獣を飲み込んだ。

「数学	Fクラス	鮎川蓮	VS	Bクラス	6人
	436点	VS	平均	78点	」

初見で驚いた上に、皆固まってくれたおかげでクリーンヒットした。

6人も戦死に出来たのは大きい。僕の腕輪の能力は発動する前に準備が必要だから、

同じ相手に何回も当てる事が出来ない。その分威力は高いけど。

『何だ今のは!!』

『腕輪か!』

「驚いてくれてるのは嬉しいけど、隙だらけだよっ!」

混乱しているBクラスの召喚獣に向かって走る。

僕の召喚獣が接近してきたことであわてて戦闘態勢を取るけど、もう手遅れ。

一番近い人に接近し右手の剣で一閃。すぐさま隣の召喚獣に横薙ぎの一撃を入れる。

斬りかかってきた一人を左手で受け止め、上段から剣を振り下ろす。後三人。

一人がたてを構えて突進してくる。剣で打ち返すが、矢が飛んでき

て被弾してしまう。

出来た隙に二人係で攻撃してくるのを、一人を剣で受け、もう一人を左手で受けて蹴飛ばす。剣で受けているほうの召喚獣を左手で切り裂く。

「なんなんだお前は！」

この有様を見た根本君が何か言ってるけど無視。もう十分隙は作った。

根本君は吉井君と僕が立て続けに奇襲したことで窓際まで下がっている。

根本君の後ろには開け放たれた窓。四月にしては暑い天気に加え、クーラーの故障。条件は揃った。

ダンッ！

開け放たれた窓から、ロープを使ってムッツリーニと保健体育の大島先生が飛び込んでくる。

「ムッツリーニッ」

僕と吉井君の声が重なる。

「……Fクラス土屋康太。保健体育勝負、試験^{サモン}召喚」

『保健体育 Fクラス 土屋康太 vs Bクラス代表 根本恭二
441点 vs 203点』

『

ムツツリー二の召喚獣が根本君の召喚獣を一閃する。

Bクラス戦は幕を閉じた。

第十問 勝利と戦後対談・・・・・・・・のはずけどなんか喜べないものがあつた

バカテスト世界史

問 黄金のマスクで知られるエジプトの王を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『ツタンカーメン』

鮎川蓮の答え

『トウト・アंक・アメン』

教師のコメント

二人とも正解です。

鮎川君の回答を繋げて読むとツタンカーメンとなります。

土屋康太の答え

『クレオパトラ』

教師の答え

確かにクレオパトラもエジプトの女王ですが、ツタンカーメンからは

かなり後の時代の人物です。

木下秀吉の答え

『マルセル。シュオップ』

教師のコメント

誰ですかそれは。

鮎川蓮のコメント

フランスの作家で、『黄金仮面の王』という作品を残した人物です。

この作品は後に江戸川乱歩が「黄金仮面」という作品の参考にしたと語っています。

第十問 勝利と戦後対談……のはずだけどなんか喜べないものがあつたりする。

蓮Side

ムツツリー二と大島先生の奇襲で、意外とあっけなくBクラス戦は終結した。

今、戦後対談に向けてそれぞれのクラスから代表者が集合している途中なんだけど……

「ううっ……痛いよお、痛いよお……」

吉井君が手を押さえて呻いている。召喚獣を介してとはいえ、壁を殴って壊したんだから痛みもあるし、怪我もするでしょ。

「明久も、思い切った行動に出たのう」

「ま、お前らしい作戦だな」

「でしょ、もつと褒めてもいいと思うよ」

多分木下君と坂本君が言いたいのはそのじゃないけど……

「後のことを考えず、自分の立場を追い詰める、男気あふれるおぬしらしい作戦じゃな」

吉井君を落としたのは意外にも木下君だった。

「……遠まわしにバカって言ってない？」

「いや、結構ストレートに言ってると思うけど」

「……（ガクッ）」

しまった、つい言ってしまった一言で吉井君に止めをさしてしまった！

「ま、それが明久の強みだからな」

バカが強みって言われる人は世界中探しても吉井君くらいだろう。

「さて、それじゃ嬉し恥し戦後対談といくか？ 負け組代表？」

「そうだね。 散々汚い手まで使って負けたんだから言い訳できないね？」

「なんか鮎川君が黒い気がするんだけど……」

「奇遇じゃな、ワシもそう思っていたところじゃ……」

なんか二人が言ってるけど、こっちは根本君への怒りを抑えるのに結構必死なんだよね。

戦争って言っても、利用していいものと悪いものはあるよ。他人の気持ちを利用するなんて最低だしね。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところなんだが、特別に免除してやらんこともない」
坂本君の言葉にB、Fクラス両方がざわつく。

「落ち着け、皆。俺たちの目標はAクラスだ。Bクラスがゴールじゃない」

坂本君はFクラスを制すと、根本君…… もといBクラス代表の外道に向き合う。

「…… 条件は何だ」

「口が悪いね？ そっちは敗者なんだよ？ それにせつかくペナルティを免除してあげるって言ってるのに上から目線はないんじゃない？ 散々汚い手使って負けておいてまだ自分が上だと思ってるの？ 救えない程バカだね？ もう頭腐ってんじゃない？」

「…… お、落ち着け鮎川。こいつへの制裁は後回しだ」

しまった！ つい我慢できなくて。 ああ！ BクラスだけじゃなくFクラスの皆も引いていらっしやる！！

「気を取り直して……条件はお前だよ、負け組代表さん？」

「俺……だと？」

待つんだ坂本君、その発言はいささか危ない方面に取られるぞ。現にBクラスの女子の

何人かが妄想の世界に飛び立っては顔をしかめている！

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

坂本君の言葉にばつが悪そうに下を向く外道。そりゃあんだけやってるんだ、否定できるわけがない。

それにBクラスの人も誰一人フオローしようとしない。

「ああ。そこで取引だ。Aクラスに行つて試召戦争の準備が出来ていると伝えて来い。」

ただし宣戦布告はするな。そうしたら戦争が避けられなくなる。あくまで戦争の意思とその準備が出来ていることだけ伝えるんだ」

「それだけでいいのか？」

訝しむ外道。そうだね、自分のやってきたことから考えてこのくらいで許されるわけないと思ってるらしい。その通りだよ。

「だけど、その外道はいろいろとやっちゃいけないことをやってくれたからね。」

本来ならFクラス全員と吉井君の召喚獣でミンチにするとところだけど……今回はこれで勘弁してあげるよ」

僕は女子の制服（Dクラスの人が僕に着せようとしてきた物）を取り出す。

「お前がこれを着て、さっき言ったとおりの行動をしてくれたら設備は見逃そう」

坂本君のとどめの一撃。

「ば、バカなことをいうな！ この俺がそんなふざけたことを！」

「Bクラス全員で、必ず実行させよう！」

「任せて！ 必ずやらせるから！」

「これくらいで教室を守るなら、やらない手はないな！」

Bクラスが外道を取り押さえる。フフツ、やっぱり人望はなかったね。

「やっぱり随分と評判が悪いな、お前は」

「じゃあ、早く着替えよつか（ニコッ）」

「く、来るな変態ぐふうっ」

ああ、僕が殴ろうとしたのにBクラスの人が先にやっちゃった。

「とりあえず、黙らせました」

「お、おう……ありがとう」

「吉井君、時間がもつたないから早く着せちゃおう」

「う、うん」

僕が制服に手を書けたときに外道がうめき声を上げた。てか、目開いてるし。

「丁度良いや、どうしても気が済まなかったんだよね」

外道の胸倉を掴んで無理やり立たせると、左足を軸にして回転。外道の右あごを後ろ回し蹴りの踵で蹴り抜いた。

『……………』

なんか、皆が僕を見て固まってるけど、どうしたんだろう。

「鮎川、お前かわいい顔して案外えげつないな……」

「心外だな坂本君。これでもちゃんと手加減してるんだよ？」

本気ならハイキックの後に首投げのコンボだ。

「き、気を取り直して着替えさせようか。根本君は目覚めないようだし」

吉井君と根本君の制服を剥ぎ取り、女子の制服をあてがおうとするけど、やり方がわからない。

「これ、どうするんだろう？」

「えっ？ 鮎川君は着たことないの？」

「ないよ！ 僕は男だし女装癖もないからね！」

結局、Bクラスの子が着付けを担当してくれることになった。

Bクラスを後にし、外道の制服を探す。ポケットの中にかわいらしい封筒が入っていた。

やっぱり手紙だった。それもラブレターのほうか……もう一発殴ろうかな。

「あ。鮎川君、それは……」

「あ、はい。吉井君から返しておいて。」

「どうして？ 鮎川君が見つけたんだし、別に僕じゃなくても」

「いいから。吉井君は痛い思いをして突破口を開いてくれたんだし、このくらいの得はしてもいいんじゃない？」

昨日、吉井君と島田さんの様子を見て姫路さんは嫉妬してたみたいだし。多分……

「そういうことならもらっておくよ。ありがとう」

「気にしないで。あと、外道の制服は僕が処分しておくから」
燃やした後に灰は撒いておこう。雑草がみるみる枯れるはずだ。

吉井君を見送った後でBクラスに戻ると……

「ほら、キリキリ歩け！」

「な、何だこの服、スカートがやけに短いぞ！」

おぞましい物体がそこにはあった……

「坂本君」

「ああ。自分で言うっておきながら吐き気がする……」

「き、貴様！ よくも俺にこんなことを！」

外道が突っかかってきた。まだ名前は知られてないみたいだね。

「あー盛り上がっているところ悪いが、このあと撮影会があるんだ。
早くしてくれ」

「撮影会？ そつ、そんなの聞いてないぞ！」

言っていないもん。

「これ以上あれを見てたら精神が汚染されそうだし、戻ろうか」

「そうじゃの」

「……（コクコク）」

こうしてBクラス戦は本当に幕を閉じた。

後日、根本に「女装癖で変態な最低外道」という噂が立つが、本当なので気にする必要もないだろう。

第十一問 危険は意外と身近に潜んでいるって良く聞けけど自分が体験すること

バカテスト地理

問 バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい。

姫路瑞希の答え

『エトニア ラトビア エストニア』

教師のコメント

その通りです。

鮎川蓮の答え

『バーレーン ルーマニア トルコ』

教師のコメント

バ、ルトで始まる国ではありません。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『高知 愛媛 徳島 香川』

教師のコメント

正解不正解の前に数があっていないことに違和感を覚えましょう。

第十一問 危険は意外と身近に潜んでいるって良く聞くけど自分が体験することは少ない……

蓮Side

Bクラス戦から数日。
消費した点数の補充も終え、僕たちはAクラス戦の作戦会議をしていた。

壇上に立っているのはもちろん坂本君だ。

「まずは、皆に礼を言いたい。不可能とまで言われた試召戦争をここまで勝ちあげたのは皆のおかげだ。本当にありがとう」

坂本君からこんな言葉が出るなんて思わなかったよ。

「どうしたのさ雄二、らしくもないよ」

吉井君も同じことを思っていたらしい。ちなみにあの後本人に聞いてみたところ姫路さんとは何の進展もなかったらしい。と、いうかラブレターの相手は坂本君だと思っているようだ。結構分かりやすい好意なのに気づかないなんて、かなり鈍感だね……

「ああ、自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の本心だ」

「感謝するのはまだ早いんじゃない？」

「ああ。ここまで来た以上、Aクラスにも絶対に勝ちたい。勝って生き残るには勉強だけじゃないと大人共に見せ付けるんだ！」

『おおーっ！！』

D、Bクラスに勝利して、Fクラスの皆が自信を持っていた。きつと全ては坂本君のシナリオどおりなんだろう。

「さて、そのAクラス戦だが……一騎討ちで勝負をつけたい」

「誰が勝負するのさ？」

Aクラス、特に上位10人の成績は他の2年生とは桁が違うと聞いたし、Fクラスで太刀打ちできるとは思わないんだけど。それは皆も同じようで顔には困惑の色が見える。

「勝負するのは当然俺と翔子だ」

「バカの雄二が勝てるわけなあっ！」

ヒュンッ！（坂本君がカッターを投げる音）

トスッ！（カッターが吉井君の頭の横に刺さる音）

冗談だと思う。本気で友人の頭めがけてカッターを投げるような人

はいないと思いたい。

「次は耳だ」

冗談だと信じたいっ！

「じゃが、明久の言い分ももつともじゃぞ。雄二と霧島が勝負して勝てると思えん」

友達の命が間一髪助かったという状況なのに何故か落ち着いている木下君……

いや、木下君の意見には賛成だよ。Fクラスで一番成績がいいといつても所詮はFクラス。

Aクラス代表、つまり学年主席の霧島さんとの差は天地ほども離れているだろう。

「まあ、その通りだ。まともにやって勝てるとは思っていないが、それはDクラスBクラスのときも同じだったろう？　だが俺たちはその戦いに勝った。今回も同じだ。

俺は翔子に勝ち、Aクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない……皆俺を信じてくれ。

過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる！」

『『『おおーっ！』『』』

坂本君の一言で皆の指揮が更に上がった。

やはり上位クラス2クラスに策略で勝ってきたことが大きいらしい。

「で？　まともにやり合って勝ち目がないって自覚してるらしいけど、具体的にはどうするの？」

「ああ。具体的には……フィールドを限定する。内容は日本史の限定テスト勝負。

小学生レベルの問題で100点満点の上限ありだ！」

「それなら両方100点でしょ？」

「そうだよ雄二。同点だったら延長戦になるし、問題のレベルも上げられちゃうよ？」

「おいおい。お前らあんまり俺をなめるなよ？ 幾らなんでもそこまで運に頼りきった勝負をするつもりはない」

坂本君がこう言うつてことは、何かしらの秘策があると考えていい。一番確実なのは霧島さんの集中力を乱すとか、かな。

「雄二は霧島さんの集中力を乱す方法を知ってるの？」

「いや、翔子にとって小学生レベルの問題なんて集中してなくても余裕で100点だろう」

「じゃあどうするのよ？」

「集中してなくても100点つて、要するに勝ち目がないってことだからね？」

集中しなくても満点が取れる相手なんて勝ち目がないにも程がある。

「いや、一問だけアイツが間違える問題がある」

「そんな問題があるの？」

「ああ。その問題とは……大化の改新！」

「大化の改新なんて小学校で習ったっけ？」

「そうじゃの。内容までは習っておらんかった気がするが」

「いや、内容を答えるほど掘り下げた問題じゃない。もつと簡単な問題だ」

「簡単……というと何年に起こった、とかかの？」

「ああ。そうだ」

大化の改新は「無事故の改新」だったから645年だ。

「大化の改新というと、645年かの？」

「ああ。こんな問題は明久でも間違えない」

坂本君が言った瞬間に吉井君が顔を背けたのを僕は見逃していない。吉井君が小学生レベルの問題も答えられないとは思わなかったけど。

「だが翔子はこれを必ず間違える」

「あの……坂本君は霧島さんと仲がいいんですか？」
今まで口を開かなかった姫路さんが坂本君に聞く。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員、狙えっ！！」

吉井君の号令でFクラス男子全員（僕と木下君を除く）が上靴を坂本君に向けて構える。

「い、いきなりどうしたの皆？」

「鮎川君、止めないでくれ！　僕はこの男の敵を始末しないといけないんだ！」

「鮎川よ、止めるだけ無駄じゃ。こやつらはこうなるとなかなか止まらんからの」

僕か？　僕がおかしいのか？　というかFクラスに本来いないはずの姫路さんはどうしてこの空気になじんじゃってるの？　君に何があつたんだ！

「お、お前ら俺と翔子には何も」

「黙れ男の敵！　須川君、靴下はまだ早い。それは押さえ込んだ後に口に押し込むものだ」

「はい！　隊長！」

「吉井君。吉井君は霧島さんみたいな人が好きなんですか？」

姫路さん、やっぱり好きな人の好みは気になるよね。

ただ、微妙に殺気がにじみ出るのが気になるけど……

吉井君、ここは彼女の気持ちに気づいて……

「うん。美人だし」

アウトオ！ 吉井君、その答えは引き金を引くことになるぞ！

「ちよつと、姫路さん？ どうして僕に向かって戦闘態勢をとるの？ 美波もどうして

僕に向かって教卓なんて危ないものを投げようとしてるのさ？」

やばい。吉井君の一言で恋する乙女二人が臨戦態勢だ。

「と、とにかく。俺はアイツに昔間違つて嘘の年号を教えたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。あいつが今年主席にいるのもその影響が大きい。だから俺たちはそれを利用して翔子に勝つ。そうすれば俺たちの机は……」
「……システムデスクだ！」「……」

吉井君の危機の傍らでは皆のテンションが最高潮を迎えていた。

「今から宣戦布告に行くぞ。明久とムツツリーニも付いて来い」

「あ、ウチも行くわ」

「私も行きますっ」

「じゃあ僕も行こうかな。Aクラスにも興味があるし」

「分かった。取り敢えず早く行くぞ」

――所変わってAクラス――

僕たちは試召戦争の交渉のためにAクラスに赴いた。

「ナニコレ？ ここは外国のホテルかなんかなの？」

Aクラスに付いた僕の第一声がこれだった。照明はシャンデリア。

机はシステムデスクだし、
リクライニングシートと個人エアコンまで付いている。
日本の学校でこれ以上に設備を持つ学校はないだろう……。

「あら、何の用？」

目の前には木下君女装ver.が立っていた。

「あれ？ 木下君いつの間にAクラスに？ それに女装なんてして
るから男として見られないんだよ？」

どうしてだろう、目の前の木下君がうつむいて震えてるんだけど……

「鮎川よ、ワシはここじゃ」

あれ？ じゃあ、僕の目の前の人は……

「私はそいつの姉よ！」

「うわああ！ ご、ごめんなさいっ！」

「どいつもこいつも秀吉ばかり……許さないわ！」

「ちょ、き、木下さん？ 人間の身体構造上その関節はソッチの
方向には曲がらなあああああああああああああああああ
あああっ！……！」

意図せずに木下さんの逆鱗に触れてしまった僕はAクラスとの交渉
を終えた皆が助けしてくれるまで木下さんのサブミッションを喰らい
続けたんだ……

Side Out

No Side

蓮が優子に関節技による説教（拷問）を受けているころ。雄二たち

Fクラスの面々は

Aクラスとの交渉のテーブルについていた。

「で？ 今日は何の用かな？」

Aクラスの交渉役は学年次席（瑞希が振り分け試験を途中退席したため）の久保利光。

「ああ。Fクラス代表として一騎討ちを申し込みに来た」

「その要求を呑むことでの僕らのメリットは？」

「昨日、Bクラスから使者が来たはずだ」

「あの女装した……失礼。確かに来たがBクラスはFクラスとの試召戦争に敗れて

3ヶ月間は宣戦布告が出来なくなっているはずじゃないかい？」

「いや、あの戦争は公式には和平交渉にて終結、となっている」

「それは脅迫かい？」

「まさか。お願いをしているだけさ」

「だが、一騎討ちを受け入れることは出来ない」

「安心しろ。Fクラスからは俺が出る」

「しかし……『受けてもいい』代表？」

Aクラス代表霧島翔子が交渉の席に加わる。殆ど気配を絶って近づいたため、Fクラスにメンバーは驚いているようだ。

「雄二の提案を受けてもいい」

「代表がそういうならば良いだろう。ただし、1対1ではなく代表者による5対5にしてみたい」

「ああ。それで良い。だが、勝負内容はこっちで決めさせてもらおうぜ？」

「それは……」

「そっちの方が上位クラスなんだ。そのくらいのハンデはあっていいだろう？」

「なら、全5回戦のうち3回Fクラスが、2回Aクラスが教科を決める、ていうのはどうだい？」

「それでいい。じゃあ、10時からで良いな？」

「ああ。構わないよ」

「……待つて。Aクラス代表として提案がある」

代表戦の勝負内容が決まったところで翔子が口を挟んだ。

「なんだ？」

「……負けたほうが勝った方の言う事をなんでも一つ聞く」

「ちよつと、代ひよ『ああ。別にいいぜ』」

「ちよつと雄二！ まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

雄二が提案を受け入れると、翔子が何を言うと思ったのか明久が雄二を止めにかかる。

「大丈夫だ。姫路に迷惑は掛けない」

「もう、良いかな？」

「ああ。それじゃあ、俺たちは帰るぜ」

「雄二、さつきから鮎川が姉上の折檻を受けて折るのじゃが」

「あ？ それは自業自得だろ？」

「いや、そうなのじゃが、あれはさすがに拙いというか……」

秀吉に言われFクラスメンバーが蓮のほうを見ると、蓮は優子にサブミッションを掛けられながら、白目を剥いている。

「ちよ、ちよつと待つてくれ木下さん！ 鮎川は代表戦に出てもらわなきゃいけないんだ。

だからその辺でやめてくれ！」

雄二が慌てて優子を止め、蓮は一命を取り留めた。

Side Out

蓮 Side

「うう……ありがとう坂本君……死んじやうかと思ったよ……」

僕は坂本君のおかげで命からがらAクラスを脱出することが出来た。

「いや、鮎川が『蓮でいいよ』、蓮がそこまで感謝するようなことはしていない」

「いや、坂本君が『雄二で良い』、雄二が来てくれなかったらきつとあのまま殺されてたよ」

「ねえ秀吉。秀吉のお姉さんってそんなに凶暴な人なの？」

「いや、普段はそうでもないんじゃないか……」

木下君はそう言っているけど、僕は実際に殺されかけたよ？

「じゃあ、結局5対5の代表戦になったんだね？」

僕は雄二からAクラスとの交渉の結果を聞いていた。

一騎打ちじゃなくても、5対5の代表者戦に持っていけたのは大きい。

クラス同士の対決じゃ絶対に勝てないからね。

「ああ。お前にも出てもらう予定だから準備しておけよ」

「うん。僕と、明久（名前で呼ぶことにした）、ムッツリー二と姫路さん、雄二の5人だね？」

「え？ 僕も出るの？」

名前を出された明久が不思議そうにしている。

「明久は召喚獣の扱いが上手いし、Aクラス相手でも点数によって

は勝てるかもよ？」

「ああ。俺はお前を信頼している」

「そ、そうなんだ……」

どうしたんだろう？ 明久は面と向かってほめられたことがないのかな？

打ち合わせをしているうちに約束の時間が迫ってきた。

「よし、行くぞお前ら！ 最終決戦だ！」

「「「「おおーっ！」「」「」」」

いよいよAクラス戦の始まりだ！

第十二問 英語と実技とAクラス戦（前書き）

一日あいてしまったことをお詫びします。

今日、PVが3000を突破したことを確認しました。
ちよつとでもこの駄文を覗いてくださった方全員に感謝しています。

第十二問 英語と実技とAクラス戦

バカテスト化学

問 周期表16族の元素を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『O……酸素 S……硫黄 Se……セレン Te……テルル P
O……ポロニウム』

教師のコメント

正解です。元素記号だけでなく元素の名前まで答えられるとは思
いませんでした。

吉井明久の答え

『水兵リーベ僕の船』

教師のコメント

君は周期表の意味を分かっていますか？

土屋康太の答え

『O、S、Se、Te、Po』

教師のコメント

正解です。土屋君、どうしたんですか？

鮎川蓮のコメント

16族の語呂合わせを考えればムツツリーニが覚えてるのは当然。

第十二問 英語と実技とAクラス戦

蓮Side

僕たちは再びAクラスを尋ねた。もちろん今回はFクラス全員だ。

「それでは、試召戦争を開始します」

開戦の合図を出したのはAクラス担任で学年主任でもある高橋洋子先生。

美人で才女……らしい。

「アタシが出るわ」

Aクラスの一人目は木下優子さん。僕はさっき殺されかけたから、

苦手って言うか、
トラウマが……。

雄二の話では一回戦は明久が「蓮、行け」で、ええええええええええええええつ！！！！！

「待つて、話が違うよ雄二！一回戦は明久って言ったじゃないか！」

「大丈夫だ。死んで来い」

「それ大丈夫じゃないから！死刑宣告だよね！」

人が殺されそうになったの知ってるくせに何てことを言っんだ！

「どうしました？早く出てください」

くっ、仕方がない。

「ぼ、僕が出ます……」

「あら、さっきはどうも」

木下さんからいきなりの先制攻撃。こっちのトラウマをこれでもかというほど刺激してくる。

「だいたい、Fクラス程度がアタシ達に勝てるわけないわ」

「どうして？少なくとも僕たちはDクラスとBクラスに勝ってここまで来たんだけど」

「フン。努力もしないで成績が上がるわけないわ」

完全にFクラスを見下している。木下さんをはじめ、Aクラスの人たちは成績も良いし、

それに見合うだけの努力もしてきたんだろう。

だけど、成績だけで人は測れない。特にFクラスは、ね。

「じゃあ、木下さんが一番努力した教科で勝負しようよ。努力して、良い成績とってるんだよね？それを証明してよ」

「ハ？ 何言ってるのよ？ そんな条件じゃ勝てるわけないわ」
まだ、バカにしている木下さん。だけど僕だって勝算なしにこんな挑発してるわけじゃない。

「そつか。努力した教科で負けるってことは努力が意味なかったって認めることだもんね。

怖いよね？」

ちよつと溜めああとに口角を上げて言い放つ。

結構分かりやすい挑発なんだけど、分かりやすいからこそ効果も高い。

「何ですって！ いいわ。そこまで言うなら英語で勝負よ！」

「後悔しないでよ。Fクラス鮎川蓮がAクラス木下優子さんに英語勝負を申し込みます」

「Fクラスの分際でアタシにけんか売ったこと後悔させてあげるわ！
試験召喚^{サモン}」

木下さんは召喚獣を呼び出す。

西洋風の鎧を纏ってランスを構えている。見るからに強そうだ。

「試験召喚^{サモン}！」

僕も召喚獣を呼び出す。点数表示が終わる前に木下さんが突進してきた。

「消えなさいっ！」

スピードそのままでランスを突き出してくる。並みの召喚獣ならこの一撃で決められる。

だけど、僕にこんな単調な攻撃は通じない！

ガキンッ！

ランスを右手の剣で受け、滑らせるように勢いを逃がす。
そして近づいてきた木下さんの召喚獣の頭を左手で掴む。

「なっ！ 離さないよ！」

「離せって言われて離すと思う？ 『衝撃波』」

右手の剣を床に突き刺し腕輪を発動する。

反動が強い代わりに、複数の召喚獣を一度に葬れるほどの威力を持つ攻撃を、

木下さんの召喚獣はゼロ距離で、しかも頭に受ける。

そのまま、召喚獣の頭を吹飛ばし、勝負は決まった。ここまで10秒足らず。

『英語 Fクラス 鮎川蓮 vs Aクラス 木下優子

545点 vs 392点

』

勝負が付いてから、ようやく二人の点数が表示される。

僕は腕輪を一回使ってるから本来の点数 - 80点だ。

木下さんも400点近かった。さすがに一番努力したってだけはあるね。

だけど、英語は僕も負けられない教科なんだよね。

『何だあの点数は』

『500点台だと！』

『なんであんな生徒がFクラスに』

『あのかわいい子が天才だったなんて』

『蓮ちゃん愛してる！』

僕の点数に、Aクラスだけじゃなく、Fクラスの皆も驚いている。けど、最後の人には一度お話しする必要があるそうだ。

「何だよ。どうして……」

木下さんは、よほど悔しかったのか涙目になっている。

「木下さんが自分を過信して他人を見下していたからだよ。」

どんなに優秀でも、成績が良くても人を否定して言い訳じゃないんだ」

「くっ……」

言いたいことは言った。ここからは木下さんが自分で考えることだ。

「蓮！ 英語もすごかったんだね！」

「ああ。俺も驚いたぞ。あそこまで高い点数をとっていたとはな」

「僕にとって、英語は母国語みたいなものなんだよね。だからその辺の教師よりできる

自信はあるよ」

「じゃあ、運が良かったってこと？」

「いや。雄二じゃないけど、僕も運任せであんな挑発はしないよ」

「勝算があったということかの？」

「そう。英語は積み上げ教科だからね。日々こつこつと勉強しないと出来るようにはならない。僕にとってはそれが日本語だったんだけどね」

一番努力した、つまり最も時間を掛けた教科は何かと聞かれたら大抵の人は英語か数学と

答える。それが分かった上で挑発したんだよ。

「しかし、蓮が勝って来るとは思わなかったぞ。良くやった」

「へえ」。やっぱり僕は捨て駒だったんだ」

試合前の態度で分かっていたけど、面と向かって言われると凹む。

「秀吉？」

あれ、木下さん？ 何のようだろう。

「なんじゃ姉上？」

「忘れてただけど、Cクラスの小山さんって知ってる？」

秀吉の命が危ない気がするの僕だけだろうか？

「はて？ 誰じゃそれは？」

秀吉が言った途端木下さんから殺気が！

「ふゝん、ちよつと来てくれるかしら」

「なんじゃ姉上。何故ワシの腕を掴むのじゃ？」

「あんたCクラスで何を言ったのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしたことになってるのかしら？」

「はっはっは、それはワシなりに姉上の本性を推測して……ちが、姉上！ ワシの関節は

そつちには曲がらな……ギャアアアアッ！！」

試合に負けて落ち込みながらもしつかりと恨みを晴らしに来るとは……木下さん恐るべし

「それでは、次鋒戦を始めます」

Aクラスからは佐藤美穂さん。Fクラスからは我らが観察処分者明久が出る。

教科は物理が選択された。

「明久、やってこい。大丈夫だ、俺はお前を信じてる」

「フ……それは僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。お前の本気を見せてやれ」

な、なんだって？ 明久はまだ本気を出していなかったってことか？ もし今までの成績がこの一戦のための演技だとしたら……

「まさか貴方は？」

「そう。僕は今まで本気なんて出しちゃいない。僕本当は……」
明久の言葉に両クラスの生徒が息を呑む。

「左利きなんだ」

『物理 Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 佐藤美穂

62点 VS 389点

』

勝負は一瞬でついた。

点数差は6倍以上か……操作技術で勝てる点差じゃないな。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

明久は島田さんに関節技を喰らっている。

「み、美波、ただでさえフィードバックで苦しんでるのに更に殴るのはやめて！」

「島田さん！ それ以上やったら明久が死んじゃうよ！ 君は自分の好きなhゴフウ」

何故だろう。明久を助けようとしたはずなのに僕がボロボロにされている……

「それでは三回戦を始めます」

「……（スクツ）」

Fクラスからはムツツリーニ。保健体育では負け知らずの猛者。

「じゃあAクラスからはボクが出るよ」

そういつて立ち上がったのは黄緑色のショートヘアの女の子。

こういつては失礼かもしれないけれど、男物の服を着たら男子で通りそうだ。

「教科はなんにしますか？」

「……保健体育」

ムツツリーニが教科を選択する。もちろん保健体育。

ここでムツツリーニが保健体育を選ばないなんて天地がひっくり返ってもありえないと思う。

「ボクは工藤愛子。君、保健体育が得意なんだってね。でも僕も得意なんだよ。君と違って……実技で、ね」

フッシャーアアア
「……実技」

「ムツツリーニ！」

工藤さんの言葉でムツツリーニが鼻から赤い噴水を出して倒れる。けど、さっきの言葉にそんな要素あったっけ？

「吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、僕が教えてあげようか？ もちろん実技で、ね」

「フ……望むところ」

「吉井君にはそんな機会一生ないから必要ありません！」
「そうよ。アキには必要ないわ！」

明久が死ぬほど悲しい目をしているんだけど、別に一生スポーツやらない訳ないんだから本気にしなくてもいいのに。

「じゃあ、鮎川君……だっけ？ 君はどう？」

「特に苦手なスポーツもないのでいいです」

『え？ スポーツ？』

あれ？ 僕なんか変なこと言った？

「えっと……君は実技ってなんだと思ってるの？」

「ソフトボールとかサッカーとか？」

「君、保健体育の点数何点？」

な、何故そんなことを聞いて来るんだ！ 保健体育は……

「に、二十点くらい……かな」

嘘です。本当は16点です。

「そうなんだ……ゴメンネ」

どうして？ 何で僕謝られたの？

「蓮……お前みたいな奴、嫌いじゃないよ」

本当に皆どうしたんだろう。

「そっか……じゃあ、ムツツリー二君、二人で鮎川君に保健体育を教えてあげようか？」

「……さ、3……（ブッシャアアア）」

「どうして？ どうしてそこで倒れるのムツツリー二！」

鼻血なのに出血量が半端ないことになってるんですけど！

「ムツツリー二！」

僕と明久が倒れたムツツリー二に駆け寄る。

「ムツツリー二しっかりして！」

「あ、明久……」

「しゃべらないで！」

「……後は、頼む（バタツ）」

「ムツツリーニイイイイイ」

命の危機のはずなのに、コメディ臭がする……

「どうしました？ 早く召喚してください」

高橋先生！ ムツツリー二が作っている血溜りが見えないんですか！

「うちの不戦敗でいい」

「分かりました」

坂本君が敗北宣言をする。それを受けて高橋先生がキーボードに何か打ち込む。

『生命活動 Fクラス 土屋康太 V S Aクラス 工藤愛子

DEAD V S WIN

』

突っ込まない。もう突っ込まないからね！

「それでは四回戦を始めます」

「私が行きます」

Fクラスは姫路さんAクラスからは、いかにも知的な雰囲気纏っている眼鏡の男子が出てきた。

「ここが正念場だぞ」

雄二がつぶやく。

「どうして？」

「Aクラスから出てきたのは学年次席の久保だ。今までの成績は姫路とたいした差はない」

「どっちが勝ってもおかしくないってこと？」

「そうだ」

「教科はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「まずいな。総合科目は点数がそのまま戦闘力になる。分が悪い」

「どうしてさ。姫路さんだって元学年次席でしょ？ さつき雄二が言っただけにたいした差はないよ」

「だいたいかな」

姫路さんと久保君が召喚して……そして勝負は一瞬で着いた。

『総合科目 Fクラス 姫路瑞希 vs Aクラス 久保利光』

4409点 vs 3998点

『

「何だあの点数は？」

「霧島翔子に匹敵するぞ！」

「すごいよ姫路さん！」

「驚いたよ。いつの間にそんなに強くなったんだい？」

「私、このクラスが好きなんです」

「Fクラスがかい？」

「はい。人のために一生懸命に慣れるこのクラスが。私の好きな人のいるこのクラスが、好きなんです」

姫路さんが勝って、2対2。全ては次の最終戦で決着がつく。

「それでは、最終戦を始めます」

第十三問 世の中には理不尽なことがあふれている、なんていうけれど自分が休

バカテスト地理

問 日本国土で最南端の島の名前を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『沖ノ鳥島』

教師のコメント

正解です。最東端の『南鳥島』と間違える人が多いのですが、
姫路さんは引っかけりませんでしたね。

木下秀吉の答え

『南鳥島』

教師のコメント

見事に引っかけりましたね。

吉井明久の答え

『与那国島』

教師のコメント

それは最西端です。沖縄県ということ、南にあるというイメージは分かります。

吉井君にしてはまともな間違え方で驚いています。

鮎川蓮の答え

『竹島』

教師のコメント

……君からこんな救いようない答えが出るとは思いませんでした。

第十三問 世の中には理不尽なことがあふれている、なんていうけれど自分が体験すると自分だけ不幸なんじゃないかって思える。

蓮Side

「それでは、最終戦を始めます」

高橋先生の号令で、最終戦の幕が開いた。

Aクラスの代表者は学年主席の霧島翔子さん。

Fクラスからは、もちろん我らが代表坂本雄二だ。

「ついに始まるね」

「うん。あの問題が出るといいけど……」

「確かに、その問題が出なければ勝てぬからのう」

雄二は運任せの勝負はしない、って言うてたけどこの勝負も案外運負かせなのかもしれない。

「教科はどうしますか？」

「教科は限定テスト対決。内容は歴史の小学生レベルで100点満点の上限ありだ」

雄二が勝負内容を伝えるとあらかじめ聞かされていないAクラスはざわつく。

小学生レベルならば両方100点を取って当たり前。集中力の精神力の勝負になる。

「分かりました。それでは問題を用意しますので付いて来て下さい」
高橋先生について雄二と霧島さんが視聴覚室へと向かう。
視聴覚室の様子と、テストの問題はAクラスのプラズマディスプレイに表示されるようになっていく。

テストは進み、年号を答える問題が表示される。

関が原、応仁の乱、鎌倉幕府……大化の改新、あつた！

「あつたぞ！」

「うん」

「僕たちの勝ちだ！」

「これで僕たちの机は……」

『『『システムデスクだ!!』』』』

何度目か分からないFクラスの合唱。

雄二の作戦通りに事は運んだ。

あとは、結果を待っただけだ。

『歴史限定テスト対決　Aクラス代表　霧島翔子
97点』

「やった！　Aクラス代表は100点を逃したぞ！」

「そんな……代表が……」

霧島さんの点数が表示されると、Fクラスは雄二の思惑通りに霧島さんが満点を逃したので

歓喜に沸く。対するAクラスはあきらかに落ち込んでおり、中には絶望したかのように

ひざを着く生徒の姿もある。

『Fクラス代表　坂本雄二
53点』

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった……

――Aクラス教室――

「何かいい訳はある？　雄二」

「……雄二、私の勝ち」

「……………殺せ」

「いい覚悟だ！　殺してやる！　齒を食いしばれ！」

「落ち着いてください吉井君！」

「どうして止めるんだ姫路さん！ コイツには僕らの期待と信頼を裏切った罰が必要なんだ！」

「で、雄二、この点数なんだけど……」

「いかにも俺の全力だ」

「このアホがああああ！！」

明久が怒り狂ってる。まあ僕も同じ気持ちだけど。

「アキ、落ち着きなさい。アンタだったら30点も取れてないでしようが！」

「それについては否定しない！！」

「いや、出来ない、の間違いじゃないかな？」

「だったら、坂本君を責めちゃだめです！」

「くつ、何で止めるんだ！ このゴリラには喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに」

「それは体罰じゃなくて処刑です！」

「ねえ。僕はあのテストでも少なくとも雄二よりは点数取れるし、代表戦でも勝ったから、

雄二にお仕置きしてもいいかな？」

そろそろ我慢の限界だ。

「そ、それは……」

「いけ、蓮！ そのゴリラに人の信頼を裏切った罰を与えるんだ！」
「りょくかい」

雄二？ ちょっと寝てもらおうよ？

「鮎川君、止めなさい！」

「どうして止めるんだ木下さん！ コイツにはお仕置きが……て、木下さん？」

「どうしてアタシだってわかった途端いやな顔するのよ」

「そりゃ、殺されかけたあああああああああああああああ
あああああ！！！」

僕は再び地獄を見た。

Side Out

No Side

優子による蓮へのお仕置き（折檻）が終わり、Fクラスの騒ぎも一応収集した。

「……雄二、約束」

「ああ。好きにしろ」

「どうしよう！ 姫路さんの貞操が危ない！」
「危ないといいながらカメラを準備するムツツリーニとレフ版を持つ明久。」

なんとも欲望に忠実な二人である。

「……雄二、私と付き合って」

「……え？」「……」

空気が凍った。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと雄二が好き」

「その話は何度も断っただろう？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて興味ない」
「拒否権は？」

「……ない。だから今からデートに行く」

「ぐあ！ 離せ！ やっぱり約束はなかったことに……」

翔子は雄二の首を掴んで持ち去ってしまった。

皆が呆然としている中、Aクラスの鉄人こと西村教諭が入ってきた。
「さて、Fクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ。これから我がFクラスについての説明を始めようか」

「え？ 我が？」

「おめでとう。お前らの試召戦争敗北のおかげで、Fクラスの担任が福原先生から俺に代わるそうだ。これから一年死に物狂いで勉強できるぞ！」

『な、なんだって』

当然のことながら、Fクラスは悲鳴を上げている。

「いいか、お前たちは良くやった。しかし、「学力が全てではない」といつても、人生をわたっていく中でそれは大きな武器となる。全てではないからといって蔑ろにしている理由にはならん」
もつともである。

「吉井に坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ開校以来の観察処分者と、A級戦犯だからな」

「そうは行きませんよ。なんとしても監視の目をかいくぐって今までどおりの楽しい学園生活を送ってやる！」

「……お前らには悔い改めるという発想はないのか？」
あつたら何時までも学園位置の問題児ではいられまい。

「とりあえず、明日から授業と別に補習の時間を二時間設けてやる」
う」

Fクラスが悲鳴を上げる。

「さあ、アキ、ウチらもクレープ食べに行きましょう？」

「え？ それは週末のはずじゃ……」

「だめですよ！ 吉井君は私と映画を見に行くんです！」

「ちよつと待って！ それは話題にすら上がっていないよ！」

「はい。今決めました！」

「いやー！ 僕の食費がー」

その傍から見ればほほえましい光景を見ている蓮に後ろから接近する影が。

「映画か……それもいいわね」

「待つんだ木下さん。なぜに僕を見ながらそんなことを？」

「そりゃ一緒に……」

「待ってくれ！ 僕は試召戦争で木下さんに勝った筈だ！ 奢られるいわれはない！」

「あら？ 約束はAクラスとFクラスの試召戦争の結果よ？ 個人での勝負の結果は関係ないわ。さあ、敗者は勝者に従いなさい」

「理不尽だあああああつ……！」

その場にいたAクラス全員が思った。「ああ。これは復讐だ」と。

「そうね……確かに鮎川君はアタシに勝ったから……暇なときの荷物もちで勘弁してあげるわ」

「それは勘弁したとは言わないよ！」

「さあね？ じゃあ、今度暇なときに連絡するから。覚悟するときなさいよ」

「そんな……」

この戦争で一番割を食ったのは実は彼かもしれない。なぜなら……

「ただ今から異端審問会を開始する」

「え？ どうして？」

「被告鮎川蓮（このものを甲とする）はAクラス木下優子（このものをヘルソルジャーとする）に対し、我らが教示に反する行為を行った可能性がある。

甲はヘルソルジャーに対し、脅迫、およびいせつ行為をしていたところを目撃

現在に至る」

「ええい、御託はいいから結論を述べたまえ！」

「楽しそうに話していた後、デートの約束をしていたのでうらやましいであります！」

「えええ！ ちょっと待ってよ！ 僕はデートの約束なんてした覚えがないよ！」

「判決、死刑！」

「ぼ、僕の話聞いてくれ」

「に、西村先生、明日からといわず今日やりましょう個人でいいですから！」

思い立つたが仏滅です！」

「吉日だ、バカ。お前がやる気になったのは嬉しいことだが無理することはない。」

今日だけは存分に遊ぶといい」

「おのれ鉄人！ 僕が苦境にいると分かった上での狼藉だな！

ならば、卒業式、伝説の木下で釘バットを持ってお前を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「さあ、アキ行くわよ」

「吉井君はどの映画が見たいですか？」

「うわああー僕の食費がー！ 生活費がー！」

二人の悲痛な叫びがAクラスに木霊した。

ちなみに、襲撃してきたFFF団44名を3分で沈めることとなった蓮は、

その光景を目撃していたAクラスの面々から畏怖の念を抱かれることになるのだが

これはまた別のお話。

第十四問 その場のノリは結構大切

バカテスト英語

問 「私は何か悪いことが起きるのを知っている」を和訳しなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『I know that something bad will occur.』

教師のコメント

正解です。君達には簡単でしたかね。

吉井明久の答え

『I don't want to back my sister.』

教師のコメント

君の願望は聞いていません。それにしても、姉や、妹に帰ってきてほしくないとはどういうことでしょうか？

坂本雄二の答え

『I know that Shoko come soon.』

教師のコメント

霧島さんがやってくることが悪いこととはどういうことでしょうか？

鮎川蓮のコメント

もう二人の英語が間違ってることにはノータッチなんですネ……。

第十四問 その場のノリは結構大切

蓮Side

Aクラスとの試召戦争が終結して、僕は家路についていた。
だいたい、FFF団ってのはなんなんだろうね。あんなに理不尽な
襲撃を受けたのは久しぶりだよ。

「明久君！ これを見ましよう！」

なんか姫路さんの声が聞こえる。

「……じゃあ、僕はいいかから二人だけで行って来なよ」

明久、食費がピンチなのは分かっているけど、二人は“君と一緒に”映画を見に来てるんだからその提案は……

「えゝ、じゃあアニメにする？」

「いやそうじゃなくて……」

覚悟を決める、明久。僕みたいにトラウマのある相手に理不尽な条件突きつけられてないだけまだよ……

「アタシが何時理不尽な条件突きつけたかしら？」
え？

「き、木下さん？ まさか僕の心を読んだの？」

「声に出てたわよ」
しまった。

「で？ アタシが何時アタに理不尽な条件突きつけたのよ」

「いや、普通トラウマのある相手からいわれのない荷物もち宣告を受けるのは十分理不尽だと思うけど……」

「ふーん……」

恐い！ ちょっと口角が上がっているところとか正に悪魔だよ！

「明久、諦めろ」

うん？ なんか聞きなれた声が。

「男とは、無力だ……」

Side Out

明久Side

「男とは、無力だ……」

「雄二？」

僕の目の前に、手枷をはめられている雄二と、その手枷から伸びる鎖を握っている霧島さんが現れた。

まるでゴリラとその調教師だ。

「おい明久。今なんか失礼なこと考えなかったか？」

「き、気のせいだよ」

このゴリラは侮れない。

「で？ 雄二は何しに来たの？」

「翔子にデートに連行されてきたんだ……」

「……雄二、何が見たい？」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ、地獄の黙示録完全版」

「おい、それ3時間23分もあるぞ！」

「……2回見る」

「一日の授業より長いじゃねえか！」

「……授業の間雄二に合えない分のう・め・あ・わ・せ」

「くっ、帰る」

「……今日は、帰さない」

「おい、まて翔子それは、あ、ば、ぎゃああああ！」

逃げ出そうとした雄二が霧島さんのスタンガンによって眠らされた

……

「……学生二枚、二回分」

「はい学生一枚気絶した学生一枚無駄に二回分ですね」
「いいの？ 気絶した学生はスルーなの？」

「仲のいいカップルですね」

「あこがれるよね」

姫路さん、美波、あのカップルはちょっと違う気がする……

「覚悟を決める、明久」

僕の後ろからまた聞きなれた声が……

「男とは、搾取されるものだ……」

「蓮、止めてよ！ 今の状況の僕にとどめの一言なんて！」

「いや、明久は別に搾取されてないだろ」

「何処をどう見たらそうなるのさ！ 明らかの僕の財布がピンチじゃないか！」

「いや、お前はまだそれなりに自分の意思でここにいるし、なににより前々から約束していたじゃないか！ 僕なんて……ただその場のノリ的な要素でこの悪魔に

搾取されようとしているんだぞ！」

「誰が悪魔って？」

「あ、いやその別に木下さんのことを悪魔って言った訳じゃあああああああああ！！」

断末魔が響き渡った。

「き、木下さん。どうして蓮と一緒にいるの？」

「ふえ？ い、いやえつと……そうノリよノリ！ 別に一緒に帰ろうとあとをつけたわけじゃ……」

「えつと、後半よく聞こえなかったんだけど？」

「別に何も言ってないわよ！」

こ、恐い……

Aクラスでの蓮の悲劇を目撃してるだけあって恐怖五割増だ。

「木下さんは何の映画を見るんですか？」

「え？ そうね、あんまり考えずにきちやったから特に決めてないわ。」

せつかくだから姫路さんや、吉井君と同じ映画にしましょうか」
木下さん。君が同意を求めている相手は既に戦闘不能だよ……

「木下さんさえ良ければ一緒に見ませんか？」

「そうね。大勢で見たほうが楽しいし」

「そう？ それじゃあ一緒に……」

「待つんだ。そもそも僕は映画を見ることすら承認していない！」

蓮も復活したみたいだ。

「ちょっとアキ、これは約束でしょ？」

「約束は週末だったはずだろ？ それにその約束の中に映画なんて単語は一度も出てきていない！」

「そうだ！ 明久は自業自得だからともかく、僕はただ映画館の前にただで

勝手につれてこられたんだ！ 開放を要求する！」

「蓮！ 今僕を売ろうとしたね！」

「売ろうと何てしていない。僕は事実を言ったまでだ」

「ほら。鮎川だってこういつてるんだから。行くわよ、アキ」

「ぼ、僕の………食費が……」

「さあ。アタシ達も行くわよ！」

「ちょ、木下さん！ どうして僕まで！」

「嫌なの？」

「もちろんいやあああああああああああああああああああ！

！……」

僕を追いかけるように、二度目の断末魔が響き渡った。

第十五話 フィクションの中の出来事で、リアルでも起こってほしいことは起

バカテスト日本史

問 次の（ ）に正しい年号を入れなさい。

『（ ）年、キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

鮎川蓮のコメント

『無神論者にとってはとてつもなくどうでもいい』

教師のコメント

君の思想はともかく、テストですので真面目にお願いします。

第十五話　フィクションの中の出来事で、リアルでも起こってほしいことは起こらないくせに現実では起こってほしくないようなことは起こる不思議。

蓮Side

週末。僕は秀吉と買い物に出ていた。

「どうして僕が演劇部の買い物に付き合わされるのさ？」

「部長殿から頼まれたからかのう」

「どうして？」

「ワシも詳しくは知らんのじゃが“転入してきた男の娘をゲットしないわけには行かない”とか言っておったのを聞いたぞ」

「秀吉。その部長さんの言うことを聞いちゃだめだ。なんか取り返しの付かないことになりそうな気がする」

というか、そこまで露骨に言われているのにどうして秀吉は気づかないんだ？

「で？ 買い物は終わったの？」

「いや、最後に駅前で小道具と衣装の下見を……」

「衣装ならさつき買ったし、小道具だって部室にたくさんあるじゃないか」

一応説明しよう。

僕は今週秀吉に連れられて演劇部の部活見学に行っていたりしたのである。

「甘い。甘いぞ蓮！」

「何故に怒られる？」

「演劇の小道具や衣装というものは、それこそ演目の数だけあるものなのじゃ！」

決して似たようなものがあるから、とか、これで代用できるから、などという理由で

妥協しては人々を感動させる演劇などできぬ！」

なんという情熱……

その情熱を一割でもいいから勉強のほうに生かせばFクラスにはいることもなかったのに。

「そういえばお主、この前姉上とデートしたそうじゃな」

「デート？ そんなのしてないよ」

「そうなのかの？ 姉上がおぬしと一緒に映画を見たといっておったからてつきりデートをしたものじゃと……」

「確かに映画は見たけど……」

「なんじゃ。やっぱりデートしておるではないか！」

「あれをデートと呼ぶ人がいたらその人には今すぐ精神科へ行くことをお勧めするよ」

「いや、一緒に映画を見るのは十分にデートじゃと思うんじゃが……」

……」

「あれはデートじゃない。僕が君の姉から一方的に搾取されただけだ」

「随分な言われようじやの……何があつたのじや？」

「中に明久たちがいて、面白そうだから眺めてたら雄二たちも来て、おまけに木下さんが僕の後ろにいて、それでよく理由も分からないまま無理やり奢らされた」

「後ろに姉上が、のう。今のようにか？」

「そうそう。今みたいに僕の後ろに立っていてええええええええええええええええ！」

「冗談じゃ」

冗談かよ！ 本当にビビるからマジで……

一応辺りを見回して、木下さんの気配がないことを確認していると、前方から土煙が近づいて来るのが見えた。

「秀吉！」

「なんじゃ明久！」

「アキ、来るわよ！」

「くっ、秀吉こっちに来て！ 蓮も！」

――明久たちにつれこまれた茂みの中――

「どういふことじゃ明久」

「えっと、これには深いわけが……」

「豚野郎——！！」

「……明久、一つ聞いてもいいかな」

「な、なに？」

「どうして僕たちまでこんなやばそうなことに巻き込んだの？」

明久に質問する。もちろん笑顔で。

「れ、蓮？　なんか笑顔が恐いんだけど……」

「大丈夫。納得できるように説明してくればへし折ったりしないから」

「それってムグウ」

「アキ、静かにしなさい！」

島田さんに取り押さえられて、明久には事情を聞けないし、しょうがない。

逃げる準備だけしておこうか。

「尾根い様に家畜のにおいを付けでもしたら火あぶりにしてやります」

……どうしよう。今すぐ逃げ出したい。逃げないと拙い気がする。

「なにやらよう分からんが、明久たちは追っ手に追われているということかの？」

「そうなんだよ秀吉」

「なら、変装するというのはどうじゃろう？」

「変装？」

「ここに丁度演劇部の衣装があるのじゃが、これを着て変装すれば」
「ナイスだよ秀吉！」

着替え中……

「秀吉……これ女物だよ？」

「おかしいのう……部員がワシ用にと渡したんじゃが」

「秀吉用のが男物のはずないじゃないか！」

「明久、その突っ込みはおかしい！　そして何で秀吉まで着替えるの！」

「……それはそれでいい（パシャパシャ）」

ムツッリーニ？　何故ここに。

「……自主トレ」

「心を読まれた」

「あ、明久君……」

「えっと……」

だめだ！ 姫路さんと島田さんは使えない！

「とっても似合ってます……」

「困っちゃうんだけど」

「あ、明久そんな大きな声出したら！」

「見つけました！」

ほら見つかった！

「美春とお姉さまの愛を冒流する豚……め？」

よし、敵は戸惑っている。今のうちに脱出を！

「ふ、不潔です！ 女の格好をすればお姉さまが好きになってくれると思ったら大間違いです！」

「いや、君が大間違い」

しまったあ！ つい突っ込んでしまった！

「神聖な美春とお姉さまの愛を冒流する豚共め、許しません！」

豚……共？

「いつの間にか僕までターゲットに入ってる！」

僕と明久の逃走劇が始まった。

「どうしよう？」

「こうなったら4方に分かれて逃げましょう」

「それって、僕か明久に生贄になれってこと？」

「私にいい考えがあります！ 文月学園に逃げましょう」

「そうか！ 学園なら！」

「試験召喚獣が使える！」

―― 一路学園へ ―

「いた、竹内先生だ！」

「竹内先生は現国よ！ ウチぜんぜん戦力にならないんだけど」

「今はそんな贅沢言ってられる状況じゃない！」

「竹内先生！ 模擬試召戦争をしたいんですけど」

「はい。承認します」

「―― 試験召喚獣、試験召喚！」「――」

召喚フィールドが展開され、僕たちはいつせいに召喚獣を呼び出す。

『現代国語 Fクラス 姫路瑞希&島田美波&吉井明久&鮎川蓮
345点&16点&68点&334点』

『

「ひどい！ 美春たちの愛を邪魔する気ですか！」

いや、ひどいのは一緒にいただけで僕まで追い掛け回す君だと思う。

「試験召喚！」

『現代国語 Dクラス 清水美春
132点』

Dクラスにしては点数が高い。文系、てことか。

「姫路さんと蓮の召喚獣がいれば恐くない！ この勝負もらった！」

僕と姫路さんの召喚獣が先頭に立って突撃する。

「ごめんなさい！」

姫路さんの召喚獣が大剣を振りかぶる。

「そつは行きません！」

清水さんの召喚獣がジャンプした。

僕と姫路さんの召喚獣を飛び越える。しまった！ 狙いは……

「ウチ？」

島田さんの召喚獣が清水さんの召喚獣に倒される。

けれど、僕の召喚獣が空きの背中に剣を振り下ろし清水さんの召喚獣を消滅させた。

「0点になった戦死者は補習うー」

何処からともなく現れた西村先生に、清水さんと島田さんが担がれていった。

「補習は嫌ー」

「美春はお姉さまと一緒になら鬼の補習も天国です」

最初からこれが目的で召喚してきたのか……

二人を担いでいた西村先生がふと立ち止まる。

「吉井、目覚めたのか？」

「誤解です！」

「大変だったね……」

「蓮は途中参加だからいいじゃないか。僕は駅前から追いかけてきたんだよ？」

「まず、僕が追いかける理由がなかった気がするんだけど……」

「まあ、終わったことだし気にしない」

「はあ……まあ、無事に終わったことだし『無事？』」

「木下さん？」

「吉井君と姫路さんは外してくれる？ 今から鮎川君に大事な話があるの」

「う、うん。わかったよ」

吉井君と姫路さんが階段を上がっていく。

「さて、それじゃあ、大事な話をしましょうか」

「大事な話って？」

「さつきね、秀吉と会ったんだけど……」

「やバイ……木下さんの背後に鬼が見える。」

「鮎川君には話したわよね？ 秀吉に女装させないようにつて」

「いや、今日のは秀吉が演劇の衣装を着ただけというか、不可抗力
というか」

「なんでメイド服だったのよ……！」

無事に終わることは出来なかった。

第十六問 学園祭って一番テンションが上がるのは準備の時だったりするよね。

今日、PV5000突破を確認しました。

こんな駄文に付き合ってくださいる方がいることに

感謝の念を禁じえせん。

今後も一層精進していく所存ですので

どうか、よろしく願います!!

第十六問 学園祭って一番テンションが上がるのは準備の時だったりするよね。

学園祭の出し物を決めるアンケートにご協力ください。

『あなたが今一番ほしいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になるような、そういった出し物もいいかもしれませんね。

写真館なども候補になると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか？

吉井明久の答え

『カロリーー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

鮎川蓮の答え

『平穏な日常』

教師のコメント

もうFクラスには慣れましたか？

第十六問 学園祭って一番テンションが上がるのは準備の時だった
りするよね。

僕が文月学園に転入してから早一ヶ月が経った。
今、文月学園の中は近日に迫った学園祭、「清涼祭」に向けて準備
を行っている。

そして、文月学園一の問題児、我らがFクラスはというと……

「来い、明久！」

「勝負だ吉井！ お前の球なんて場外まで飛ばしてやる！」

「言ったな！ 勝負だ、須川君！」

野球をしてるんだよね……。

今、Fクラスの教室にいるのは、僕と秀吉、姫路さんに島田さんの四人だけだ。

当然、清涼祭に向けての話し合いをするつもりだったんだけど、この四人だけで何かが決まるわけもなく、僕は窓からグラウンドで命知らずな行いをしているクラスメイトを眺めている。

「さあ、ホームルームを始めるぞ」

教室の扉が開き、西村先生が入ってきた、が、がら空きの教室を見て固まっている。

「他のバカどもは何処だ？」

「グラウンドで野球してます」

「何故止めなかった？」

「止めましたよ。止めて聞くようならFクラスじゃないでしょ」

「それもそうだ。俺はあのバカどもを引っ張ってくるからお前たちは少し待っておくように」

そういつて西村先生は教室から出て行ったけど……怒りで声が震えてた。

「なぐにをやつとるかバカ共！！」

グラウンドから怒鳴り声が聞こえる。明久、ご愁傷様。

「さて、それでは清涼祭での出し物について意見を求めたい。実行委員の島田、任せた」

帰って来たはいいけど雄二が完全にやる気なしモードなんだよね。
「ちよつと、ウチだけじゃ無理よ」

「じゃあ、副委員を選出するからそいつと二人でやってくれ。皆、副委員にふさわしいと思う奴を推薦してくれ」

『やっぱり坂本がやるべきじゃないか？』

『いや、吉井だろ』

『我らが蓮ちゃんでも……ぎゃああああああ！！』

皆口々に意見を述べ始める。最後の人は何度言っても聞かないから強硬手段に出たけど。

「それなら姫路さんが適任じゃないの？」

「いや、姫路は全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムオーバーだ」

「どういうこと？」

「要するに、姫路さんは誰かの意見を切り捨てられる人じゃないから、丁寧に話し合いをしているうちに何も決まらないまま清涼祭が来ちゃうってこと」

ここまで噛み砕いて説明すれば明久でも分かるだろう。

「ここまで噛み砕かれないと理解できない明久は本当のバカだな」
「なんだとバカ雄二！！」

「落ち着け」

雄二もいちいち火に油を注がないでほしい。

「と、言うわけだ。島田、さっき上がったやつの中から二人選んで

決選投票をしろ。

それで選ばれた奴が副委員だ」

島田さんが黒板に書きは始める。

島田さん個人の気持ちとして、明久は候補に上がるだろうからあとは須川君あたりを対抗馬にすれば明久が副委員に……

『候補？……吉井

候補？……明久』

凄い。まさかそう来るとは思ってたよ。

「じゃあこの二人から選んで」

「待って、美波、その候補の上げ方はおかしい気がする」

明久、気がする、じゃなくて本当におかしい。

『うーん、迷うな』

『ここは吉井じゃないか？』

『どっちもクズだからな』

クラスメイトは真剣に悩んでいる。演技だよね？

「こら、君たちも真剣に考えるフリをするな！ それと最後の人！

クラスメイトをクズ呼ばわりする君は人間のクズだ！」

明久、それだと君はクラスメイトと自分の両方からクズのレッテルを貼られることになるぞ。

「じゃあ、アキに決定ね」

貴女が目論見でしょうが！ まあ、島田さんの機嫌がいいと明久の命の危険が少なくなるからいいか……。

「じゃあ、文化祭の出し物で意見がある人は手を挙げて発表して」

「……（ピッ）」

「じゃあ、土屋」

「……写真館」

ムツツリー二、君の言う写真館とは学校の、それも一般人も来る様なところで

展示してもいいようなものなのだろうか……

と、言うか危険な香りがぶんぶんする。

ふと黒板のほうを見ると、書記の明久がムツツリー二の意見を板書していた。

『候補？ 写真館「秘密の覗き部屋」』

明久。僕は今君のネーミングセンスに感動している。

ムツツリー二主催の写真館がどういったものになってしまうのか一目で分かるネーミングだ。文化祭には適さないが。文化祭には適さないけど。

大事なことなので二度言わせてもらった。

「じゃあ、他」

「メイド喫茶……は使い古されていると思うので、ここは斬新にウエディング喫茶を提案する」

クラスメイトの一人が提案する。なんか下心があるような気がするけれど、斬新さ

という面では悪くない意見だと思う。

「ウエディング喫茶ってどうなの？」

「別にやることは普通の喫茶店と変わらないんだが、ウエディングドレスを着て接客するんだ」

「明久が？」

「蓮！ どうしてそこで僕の名前が出てくるの！ 着るのはもちろんかわいい姫路さんと秀吉に決まってるじゃないか！」

「アキ？ どうしてうちが入ってないのよっ！」

また明久が自爆した。明久だってそれなりにかわいい顔してるんだから似合うと思うけど、

だめだ。明久に着せると僕まで着せられてしまいそうな気がする。ウエディング喫茶は回避せねば。

『斬新でよさそうだ』

『女子も喜びそうだな』

『でもウエディングドレスって動きづらくないか？』

『それに男は嫌がらないか？ 人生の墓場って言ってくらいだしな』

また皆が好き勝手言ってる。真面目に議論してくれるだけよしとしよう。

『候補？……ウエディング喫茶「人生の墓場」』

明久は真面目に書いてるよね？ ウエディングと結びつかないような単語が入ってるけど。

「じゃあ、須川」

「中華喫茶を提案する」

今度は須川君だ。

「中華喫茶って、チャイナドレスでも着るの？」

「いや、俺の言っている中華喫茶はそんなイロモノ的なものじゃない。

本格的なウーロン茶と軽い飲茶を出す店だ。

そもそも食の起源は中国にあるという言葉があることから分かるように、こと『食べる』

という文化に対しては中華ほど奥が深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による

中華料理の淘汰が世間では見られるが本来食というものは――」

どうしたんだ？ あの須川君が熱く語りだした！
言ってることは半分くらいしか分からないけどとにかく何かしらの
信念があることは良く伝わったよ。

『候補？……中華喫茶「ヨーロッパ」』

明久は本当は天才なんじゃないだろうか……

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

ドアから西村先生が入ってきた。西村先生は僕たちを顔を一度見た
あと、

島田さんに声を掛けた。

「今のところ黒板に書いてある3つの案が出ています」

西村先生は黒板に目線に移す。当然ながらその黒板には明久の天才
的ネーミングセンスの
結晶が書かれているわけで

『写真館「秘密の覗き部屋」

ウエディング喫茶「人生の墓場」

中華喫茶「ヨーロッパ」

』

「補習の時間を倍にしたほうがいいかも知れんな……」

補習が倍？ 今が毎日2時間だから4時間？ 帰るのが8時近くに
なるじゃないか。

別に僕が遅くて困るような家族はいないからいいけど、Fクラスの
面々は

補習が増えることを必死で回避しようとする。

「違います、これは吉井が書いたんです」

「バカなのは吉井であって決して僕たちがバカなわけではありません

ん！」

皆が明久を売る。

どうしてこのクラスはこういう時だけ変な団結力を発揮するんだろ
う……

「見苦しい言い訳をするな！」

おお！ 西村先生が明久をかばったよ。やっぱりこの人も教師なんだな。

「先生はバカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行為だといってるんだ」

こんな人が教師でいいのか！

「まったくお前たちは……少しは真面目にやったらどうだ？」

稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか思わないのか？」

Fクラスが色めき立つ。その発想はなかったけど、この学校でそれは認められるんだろうか？

「西村先生、そんなことしていいんですか？」

「ああ。本来は認められないことだが、今のFクラスの設備はあまりにもひどい。

学力によって差をつけるのがこの学校の教育方針だからといってその所為で体を壊しては

本末転倒！ 今回は俺が特別に学園長に掛け合ってやる」

うーん……あのばあさんが一教師の言うことを聞くとは思えないんだけど……

『出し物どうする？ 利潤の多い喫茶店がいいんじゃないか？』

『けど初期投資の多い写真館のほうが』

「いや、写真館は文化祭に出せないようなものになるに決まってる

でしょ」

『中華喫茶なら外はないだろ』

『それだと目新しさに欠けるな。ただでさえ旧校舎は汚いせいで人が来ないんだ。』

特徴のなさは致命的じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ儲けは出ないだろ』

『リスクが大きいからこそリターンも大きいはずだ』

『いや、そもそもうちのクラスは女子が少ない。ウエディング喫茶だと』

ドレスの着て接客する人数が少なくて人手不足は避けられない』

西村先生の言葉で一氣に活気付いたFクラス。

さまざまな意見が飛び交っている。それに何よりちゃんと議論になっていることが意外だ。

「はいはい。ちょっと皆静かにして」

島田さんが皆を制止するがお構いなしに議論は続く。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きトウモロコシを売ろう』

島田さんが呆れ顔になっている。やっぱり雄二がいないとこのクラスはまとまりに欠けるよ。

「もうっ！とにかく静かにして。決まりそうにないから店はさっき上がった候補の中から選ぶからね！」

島田さんの一喝でようやくクラスが静かになった。

が、島田さんの発言を聞いて今度はブーイングが飛び交っている。

「ほら！ ブーブー言わないの。この三つの中から一つだけ選んで手を上げること。」

「いいわね」

有無を言わさない島田さん。彼女は意外と人をまとめる才能があるのかもしれない。

「じゃあ、写真館」

手は余りあがらない。ムツツリー二の写真館が文化祭では危険なものになると

皆良く理解しているようだ。

「次はウエディング喫茶」

これは阻止しなければ。僕や明久、秀吉は確実に着せられてしまう！

「最後に中華喫茶」

僕はここに手を上げる。

というかこじかまともな利益を上げられそうな案がない。

島田さんが上がった手の数を数えている。結果、

「Fクラスの出し物は中華喫茶に決定します！ 全員、協力するよ
うに！」

良かった。ウエディング喫茶は回避できたようだ。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

そういつて須川君が立ち上がる。さつきも熱く語っていたし、中華にはこのクラスー
精通しているだろう。

「……（スクツ）」

それと、ムツツリー二も立ち上がった。きっと自分も厨房を引き受ける、いう意思表示だろうけど、

「ムツツリー二、料理なんて出来るの？」

僕と明久の声が重なる。

「……紳士の嗜み」

意外と立派な理由だ。てつきりチャイナ服目当てで中華料理屋に通っているうちに

見よう見まねで覚えた、とかそんな理由だと思っていた。

「まずは厨房班とホール半に分かれてもらうわね。厨房班は須川と土屋のところに。」

ホール班はアキのところに行って頂戴」

いつの間にか明久がホール班筆頭に立たされているけどいいのかな。そして、僕は厨房班に並んだけど、同じ列に姫路さんがいる！

「それじゃあ私は厨房班に——」

「だめだよ姫路さん。君はホール班じゃないと！」

姫路さんを厨房に入れると、学園祭で使者が出かねない。

「明久よくやった」

「明久グッジョブじゃ」

「……（コクコク）」

僕、秀吉、ムツツリー二は冷や汗をかきながら明久のファインプレーにアイコンタクトをする。

「どうして私はホール班じゃないといけないんですか？」

「それは姫路さんが厨房に立つと死ぬムグウ！」

「ほら！ 姫路さんはかわいいからホールでお客さんと接したほうが店として利益が痛ぁ！」

いや、危なかった。危つく姫路さんに本当のことを伝えてしまうところだった。

「か、かわいいなんて……吉井君がそういうならホールでも（・・）」

頑張りますね」

「いや、ただでさえ女子が少ないんだからホールは専任のほう効率がいい。」

姫路さんはホール専門で動いてくれないかな？」

「は、はい。そういうことなら」

これで危機は去った！

「じゃあ、僕は厨房にしようかな（かの）」

「だめだよ！ 蓮も秀吉もそんなにかわいいんだからもちろんホールに決まってみぎや！」

み、美波様、折れます！ 腰の骨が！ 命に係わる大事な骨がぁ！」

「……うちもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

明久が死に掛けている中。僕たちFクラスの人並みの学校生活をかけた

学園祭の出し物は中華喫茶に決まった。

第十七問 人間は些細なことで勘違いするって言うけど、その勘違いが命の危機

バカテスト 世界史

問 エジプト第18王朝のファラオで、多神教を廃し、世界初の一神教を始めるなどの

『アマルナ改革』で有名な人物を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『アメンホテプ4世』

教師のコメント

正解です。彼が崇拝した唯一神のアトンから、『イクナートン』とも呼ばれます。

吉井明久の答え

『イエス・キリスト』

教師のコメント

違います。キリスト教も一神教ですが、エジプト宗教よりもかなり後のものです。

鮎川蓮の答え

『ルイ18世』

教師のコメント

そんな人物はいませんし、そもそもエジプトの人物ではありません。

島田美波の答え

『ハイデルベルク』

教師のコメント

古い人物を答えればいいというものではありませんし、
『ハイデルベルク人』は原人です。

第十七問 人間は些細なことで勘違いするって言うけど、その勘違いが命の危機をもたらすこともあると覚えておいてほしい……

「アキ、ちょっといい？」

帰りのHRも終わって、明久と帰ろうとしていたら島田さんに呼び止められた。

「ん、何か用？」

「用って言うか、相談なんだけど」

島田さんのことだから学園祭に関することだろう。

「相談？ 僕でよければ聞かせてもらおうけど」

「うん。ありがと。アキが言うのが一番だと思うんだけど――」

その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

確か雄二がいればFクラスもまとまるし、中華喫茶もいい方向に持って行ってくれるだろう。

島田さん本人が無理に言うより、仲が良い明久が行ったほうがいいと考えるあたり、

島田さんも賢明な人だと思う。

「うん。それは難しいかな。雄二は興味のないことには徹底的に無関心だし」

「それは僕も思う。前の試召戦争は雄二自身がやりたいと思ってたからあそこまで

皆を先導して突っ走ったけど、興味の無いこととか普段の生活ではろくな事してないからね」

この一月、明久たちと関わって分かったことだ。ちなみに、僕は試召戦争でのことも

関係あるのか、明久たちと仲が良い。明久の家には良く遊びに行ってる。

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

何故島田さんはそんなに確信を持っているんだろう。

明久を期待をこめたまなざしで見ているし。

「え？ 別に僕が頼んだからといってアイツの返事は変わらないと思うけど」

「うっん。そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって――」

「確かに良くつるんではいるけど、だからといって別に」

「だってあんたたち愛し合っているんでしょ？」

「どうしてそうなった！ 島田さんに何があつたんだ！

僕が見る限り明久にも雄二にもBでしな趣味はないはずだ。

というか、雄二は霧島さんって言う彼女がいるんだから明久と、何てことある訳ない。

「もう僕お婿にいけない！」

明久はなんか想像してしまつたのか絶望しているし。

「何で雄二なんかと！ だったら僕は断然秀吉や蓮のほうがいいよ！」

「……あ、明久？」

偶然近くにいた秀吉が立ち止まる。さっきの明久の発言を聞いていたんだろう。

何処から聞いていたかは分からないけど、もし明久のさっきの台詞しか聞いていなかったら、絶対勘違いする。

「そ、その、おぬしの気持ちは嬉しいのじゃが、お主とワシの間には色々と

障害があると思うのじゃ……その、年の差とか」

だめだ！ 秀吉が壊れている！ 早く何とかしないと……

「ひ、秀吉！ 違うんだ！ さっきのはただの言葉のアヤで！

それと、僕たちの間にある障害は決して年の差じゃないと思う！」

「強いて言うなら性別の差だね……あれ？ それじゃあ僕が上がつたのは何故？」

明久まで僕のこと女の子としてみてるわけじゃないよね。もしそうならちょっと、お、は、な、し、しないと。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「う、うん。そういうことになるかな」

明久だけじゃなく、秀吉まで頭を振っている。

「何とかできないの？ このままだと、喫茶店が失敗に終わるような……」

今回の清涼祭はFクラスにとってチャンスでもある。

利益を上げて設備を買うことが出来れば体の弱い人、主に姫路さんの負担も軽くなる。

出来れば成功させたい。

「ところで、おぬしらは何の話をしておるのじゃ？ そこまで思いつめた顔をするところを見ると、深刻な話のようじゃが」

まだちよつと顔が赤い秀吉。

「深刻って程の話じゃないよ」

「うん。ちよつと清涼祭の喫茶店の経営やクラスの設備の話で――

――

「ちがうわ。アキ、鮎川。本当に深刻な話なのよ……」

「え？ どういうこと？」

島田さんの台詞はなんか妙に現実味を帯びている。

何か、僕たちにとって良くない問題が起こっているのか……

「本人には誰にもいわないでほしいって言われてたんだけど……事情が事情だし……

いい？ これから話すことは絶対誰にも言っちゃだめだからね？」

「う、うん。わかった」

「真剣な話みたいだしね。他言はしないよ」

「実は、瑞希なんだけどね」

なるほど。大体分かった。

「姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

明久が首をかしげる。なんか頭から湯気が出てるし、目が虚ろだ。

「いかん！ 明久が処理落ちしておるぞ！」

「もうっ！ 本当に不測の事態に弱いんだから！」

「落ち着くんだ。まずは頭をはずして熱を逃がさないと！」

「「アンタ（お主）が一番落ち着きなさいよ（落ち着くのじゃ）」
僕、なんかおかしいこと言っただけ？ 機械が熱を持ったらまず熱を逃がさないと……」

「明久、目を覚ますのじゃ」

明久の肩を持つて揺らす秀吉。そうか！ 明久は人間だから頭が外れる訳ないよね。

「秀吉……モヒカンになった僕でも好きでいてくれるかい？」

明久から異次元の反応が返ってきた。

「……どういう処理をしたら瑞希の転校からこんな反応が返ってくるのかしら」

「ある意味稀有な才能かも知れんのう……」

「確かにこのレベルのバカは世界中探してもなかなかいないよね……」

……

「美波！ 姫路さんが転校って、どういうことさ！」

明久が復活した。急に島田さんを問い詰めるから、島田さん顔が赤いよ。

「ど、どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……？」

多分姫路さんはまだ、転校を勧められている段階だと思う。

原因は多分Ｆクラス的环境、といったところか。

「島田よ、姫路の転校とさっきの話がぜんぜん繋がらんのじゃが」
「そうでもないでしょ。姫路さんが転校する、多分まだ転校を勧められている段階だと思うけどその理由は『Ｆクラス的环境』なんだから」

「鮎川のいうとおりよ」

「ってことは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて……」

「純粹に設備の問題になるわ」

「いや、それだけじゃない」

島田さんだけじゃなく、明久と秀吉まで首をかしげている。

「それだけじゃないってどういうこと？」

「姫路さんの両親が転校を勧めている理由は一つじゃない」

「だから、それはなんなのよ」

「一つはさっきまで島田さんが言った『Ｆクラス的环境』。

振り分け試験で体調を崩す娘が最悪の設備で暮らしている。普通の親なら心配する」

「じゃあ、他には？」

「二つ目は『教室自体』」

「教室そのものが問題、ということかのう？」

「そう。老朽化して汚れている教室。隙間風も入るし、衛生的とはいえない」

「なるほど」

「最後に『競争相手の不在』」

「競争相手？」

「そう。Ｆクラスは最低クラスだから、当然姫路さんのクラスメイトはレベルが低い。

勉強だけじゃなく、何事においても人は競争相手がいてこそ自分を高めることが出来る生き物なんだ。競争相手不在のこの状況は姫路

さんの成績に悪影響を及ぼしかねない」

「え？ でも、姫路さんの成績は……」

「実際にはFクラスに来てから姫路さんの成績は上がってるけど、それはFクラスの

影響だと姫路さんの両親は認めてない可能性がある」

「蓮。解決方法はないの？」

「一つ目はともかく、二つ目と三つ目は難しいのう……」

「いや、そうでもない」

「そうなの？」

「うん。三つ目の『レベルの低いクラスメイト』は島田さんがもう手を打っているでしょ」

「あ、召喚大会……」

「そう。そこで優勝できれば、Fクラスでも上位クラスと渡り合えるクラスメイトがいる、

という証明になる。それと、二つ目の『老朽化した教室』だけど、これは学園長に頼むしかない」

「それって難しくない？」

「いや、ここは教育機関だ。いくら教育方針で設備に差をつけるといっても、

勉学に支障をきたすならば改善する義務があるはず。ていうのが僕の考えなんだけど、

やっぱり僕だけじゃ一つ目のクリアは難しい」

「結局は雄二を連れてこないといけないうってことだね」

「そういうこと」

「アキ……瑞希が転校とか、嫌だよな？」

島田さんが聞くけど、なんか他意があるような聞き方だ。

「もちろん嫌に決まってる！ それが美波や秀吉であつても！」

「アキ……」

「明久？ それって僕は転校してもいいってことかな？」

「そ、そういう意味じゃないよ！ 蓮だつてせつかく友達になれたんだから転校なんていやだ！」

やっぱり明久らしい。こういうところをもてる理由なんだろうね。

「そういうことならなんとしてでも雄二を焚きつけてやるさ！」

「ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん！」

「なら、まずは雄二に連絡を取らないとね」

明久が携帯電話を取り出して電話をかける。

「あ、雄二？ え、ちよつと雄二？」

「どうしたんじゃ明久？」

「なんか『見つかつちまった』とか、『かばんを頼む』とか言うてた」

霧島さんだね……

「ちよつと美波！ そんな使えないな、見たいな目で見ないで！」

「でもこれじゃ、坂本と連絡を取るの難しいわね」

「いや、これはチャンスだ」

「明久、どう見てもチャンスには見えないんだけど」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すにはちょうどいい状況なんだよ。三人とも、協力してくれる？」

「それは別にいいけど、どうするの？」

「人の考えを読めるのは雄二だけじゃないってこと」

「何か考えがあるようじゃの」

「まあね」

「それなら僕も協力するけど、どうしたらいい？」

僕らに作戦を伝えた後、明久はどこかへと去って行った。

「さてと、この後は明久から電話があるまで待機、でよかったよね

「？」

「うむ」

「といっても、何かするのは木下だけだね」

今回の作戦は、簡単に言えば雄二を脅すものだ。その為に電話口で秀吉が霧島さんの

声真似をすることになっている。

待機すること十数分。秀吉が持っている携帯電話に着信が入った。

「……雄二、今何処？」

やっぱり秀吉の声帯模写は完璧だ。面と向かって言われても気づかないくらいだし。

「人違いです」

すごい勢いで電話が切られた。

雄二に殺されかけてる明久が目には浮かぶ。

「秀吉、島田さん、ちょっと明久が危なそうだから迎えに行ってくるよ」

明久は確か体育館に向かったはずだ。

体育館に向かっていると、二階の空き教室から明久と雄二の気配がした。

「明久、生きてる？」

「ああ、今から明久を殺そうとしていたところだが……」

お前も一枚噛んだのか？」

雄二が鋭い目つきで僕に問いかけてくる。一目で怒っていると分かる。

「雄二、僕がそんなことに……協力しないわけじゃないか！」

僕個人的には雄二は早く観念して霧島さんと結ばれるべきだと思う。

「そつか、なら……お前からだあ！」

雄二が殴りかかってくる。

「甘いよ、雄二！」

雄二の右手を取り、そのまま腰をひねって投げ飛ばす。

雄二が窓際まで吹っ飛び、窓ガラスが大きな音を立ててゆれた。

「ここに誰がいるの？」

空き教室のドアを開けて入ってきたのは我が天敵、木下さんだ。僕は最近何故か良く木下さんに会うし、絡まれるし心臓に悪い。

「吉井君に坂本君……鮎川君までどうしてここにいるのかな？」

ものすごい笑顔で木下さんが聞いてきた。

何故彼女はこんなに怒っているんだろう。

「れ、蓮！ 頼まれた物は渡したから僕は行くね！」

「ああ。蓮また後でな！」

そっくり残してすごい勢いで去っていった明久&雄二。

ものすごく嫌な予感を感じるのは気のせいじゃない。

「『頼まれたもの』？ 鮎川君は何を頼んだのかしら？」

「まず、なぜ木下さんが明久と雄二を追いかけていたのか聞かせてもらえませんか？」

「あの二人が女子更衣室に忍び込んでいたんだけど、まさか鮎川君も一枚噛んでたなんてね……」

「き、木下さん！ 僕はあの二人から何も貰ってないし、そもそもあの二人が

女子更衣室にいたことすら知らなかったんですが？」

「こんな状況でそんな言い訳が通じると思うの？」

ハハッ……今日が僕の命日のようだ。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。

清涼祭アンケート

『喫茶店を経営する場合、どのような服装をするのが良いでしょうか』

姫路瑞希の答え

『可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかかりませんし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。

色は白を基調をした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返し
が得られるくらいの物を用意し、

裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書かなくても。

鮎川蓮の答え

『迷彩服』

教師のコメント

君は喫茶店で何をするつもりなんですか？

吉井明久の答え
『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。

明久&雄二に売られ、十数分。僕はいまだに木下さんのサブミッシヨン地獄にいた。

「ちょ、き、木下さん、し、死ぬ、それ以上やったら死んでしまう
うううう」

もう限界に近い。早く脱出しなくては命が危ない。

「じゃあ、許してほしいんだ？」

許してもらわないといけないようなことをした覚えはないけど、こ
こは素直に相手に合わせたほうがいい。

「はい」

「じゃあ……」

あ、マズイ。この間はマズイ気がする。

そう、何か交換条件を言い渡されるような……

「じゃあ、アタシのこと、名前で呼んで。アタシも蓮って呼ぶから」
「な、なんでええええええ！」

全部言う前に関節に痛みが！

「何？ 秀吉は名前で呼んでるくせに、アタシのことは名前で呼んでくれないの？」

まず、何処にも名前と呼ぶ要素が見当たりません！

「で、でも……女の子を名前で呼ぶのには抵抗があるというか、な
んというか」

「べ、別に何か特別な意味があるわけじゃないわよ！」

「そ、それに、アタシだって結構恥ずかしいんだから……」

木下さんが赤面しながら僕の腕を極めている！

「わ、分かった！ 分かったからもう放して！」

ようやく僕の腕が苦痛から開放される。

僕が腕の痛みから立ち直ると、空き教室に僕と木下さんの二人が向かい合って座っているという、少々奇妙というか、気恥ずかしい空気がする空間が出来上がっていた。

「じゃ、じゃあ、アタシのこと、これから名前で呼ぶことでいいわね。れ、蓮？」

「分かったよ……ゆ、優子」

言っただけだけど絶対顔赤いよ僕！

木下さんも顔赤くて変な雰囲気になってるし。

「じゃ、じゃあ僕はクラスの展示物の打ち合わせがあるから。

じゃあね木……優子」

「うん。じゃあね蓮」

木下さんもといて優子と別れ僕はFクラスに向かった。

もちろん明久と雄二にはO H A N A S H Iしないと。

—Fクラス—

僕がFクラスに着くと、雄二&明久は島田さん、秀吉と一緒に話し込んでいた。

「……雄二、見つけた」

雄二の死角から気配を消して霧島さんの声で話しかける。

雄二は話しかけられた瞬間にビクウツ！ と大きく反応して、ギギギツと、

壊れた機械みたいにゆっくりとこちらに顔を向けた。

「な、何だ蓮か。脅かさないでくれ……」

「とりあえず僕に何か言うことは？」

「あ、ああ。さつきは生贄にして悪かった」

「よろしい」

我ながら甘いと思う。さっきの優子とのやり取りでちよつと気分が浮かれてるのかな？

「明久……」

「ちよ、僕は雄二がいるところに行きただけで元はといえば雄二の責任なんだからね?」

「島田さん。明久がさつき女子更衣室にいたらしいんだけど」

「ね、蓮！ 何てことを言うのさ！」

「アキ？ アンタウチ達が瑞希の心配してるときにそんなことして
たんだあ……」

「み、美波様、雄二を捕まえるために仕方なくやっただけです！」

ど、どうかご慈悲をおあああああああああああああ
ああああ!!」

明久への復讐完了。島田さんのことから生かさず殺さずで仕上げてくれるだろう。

「しかし、蓮の声真似は見事じゃったのう」

秀吉が声を掛けてくる。

「うん。人の真似をするのは得意だからね」

「どうじゃ？ 演劇をする気はないかの？」

演劇も楽しそうだとは思っけど……部長さんがね……

「ま、前も言ったけど、学校や周りに慣れるまでは部活は遠慮して置くよ」

実際は生活費を稼ぐためにバイトしないといけないからだったりす

る。

「で？ 雄二は協力してくれるの？」

「ああ。さっきまで島田から状況の説明を受けていた。

明久が大好き（・・・）な（・・・）姫路の（・・・）ため（・・・）、でもあるしな。協力してやろう」

明久は雄二の協力を取り付けられたらしい。これで中華喫茶はなんとか成功するだろう。

「で、坂本？ どうするの？」

「姫路の転校か……それだと設備だけでは不十分だな」

「そ、それ蓮も言ってたよ……」

明久が口を挟んでくるけど、まだ島田さんから受けたダメージが回復してないみたいだ。

さすがに可哀想だからこれでさっきのことは水に流してあげよう。

「さて、本題に戻るが、俺が言ったことを蓮も言ってたことは、お前らは今の状況を理解していると思って話を進めるぞ」

「うん。それで、教室の設備のために中華喫茶を成功させたいんだ」

「ああ。だが、それだけでは不十分だ。レベルの低いクラスメイト、については

姫路と島田が召喚大会でいい結果を残せば何とかなる」

「問題は教室の修繕、だよな？」

「そうだ。こればかりは学園長に直接掛け合ってみるしかない」

「じゃあ、ウチも行くわ」

「いや、姫路の事情を知っている島田が学園長室へ行ったら俺たちに事情を話したと思われるからな。お前は残ってくれ」

僕たちは一路学園長室へ。

「ちょっと待って」

「蓮、どうしたの？」

学園長室から人の声が聞こえてきた。

『……賞品……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月グランドパークに……』

二人が言い争っているようだ。

「どうした？」

「いや、学園長室の中から言い争うような声が……」

「なら、学園長はいるんだね」

「ああ。目的が中にいるんだ。さっさと入るぞ」

明久と雄二がさっさと中に入っていくてしまった。

「失礼しまーす」

「ちょ、明久っ」

「お主ら……」

僕と秀吉の制止も何処吹く風と、明久と雄二はすかずかと入り込む。
「本当に失礼なガキだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

部屋においてある立派な机に座っていたのは長い白髪に皺の刻まれた顔を持つ

文月学園の学園長、藤堂カヲルだった。

試験召喚システムの開発者でもあり、システムの軍事転用に反対している人物でもある。

「やれやれ、取り込み中だというのにとんだ来客ですね。これでは話をするのもままならない……まさか貴女の差し金ですか？」

学園長と言いつ争っていたのは教頭の竹原先生のようなのだ。

鋭い目つきのクールな態度で一部の生徒からは人気らしいけど僕はあまり好きじゃない。

「やれやれ、取り込み中だというのにとんだ来客ですね。これでは

話をするのもままならない……まさか貴女の差し金ですか？」

「バカを言わないでくれ。何でアタシがそんなせこい手を使わないといけないのさ。」

「負い目があるわけでもないのに」

「どうでしょうか。学園長は隠し事が得意のようですから」

「さつきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ！」

「……そうですか。そこまで否定されるのならこの場はそういうことにおきましよう」

明らかに教育現場に似つかわしくない会話を終えた教頭が学園長室を出て行く。

最後に教頭が一瞬目を向けた場所を見てなにか引つかかることを感じたけど。

「んで、ガキ共、用件はなんだい？」

「今日は学園長にお話しがあつて来ました」

「アタシは今、それどころじゃないんでね。学校の経営に関することなら教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会のルールってもんだよ。覚えておきな」

「失礼しました。俺は2年Fクラス代表の坂本雄二」

「僕は同じクラスの鮎川蓮です」

「同じくFクラスの木下秀吉じゃ」

「そしてこちらの二人が……2年を代表するバカと、学園を代表するムツツリです」

雄二が、明久とムツツリー二をちよつと失礼な方法で紹介する。

「そうかい。あんたらが吉井に土屋かい」

「ちよつと待つて学園長！ 僕らは一度も名乗ってませんよね」

「……心外」

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないかい」

「Fクラスの設備の改善を要求しにきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいね」

「今のFクラスの現状は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるようなひどい状況です」

雄二のメッキがはがれはじめた。

「学園長のように戦国時代から生きているような老いばれならともかく、現代の学生には

この状況は危険です。健康に害を及ぼす可能性が高いと思われます」雄二の言動がだんだん通常時に近づいてくる。

「要するに、隙間風が吹き込むような教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるからさっさと直せ、クソババアということです」

「雄二が大変なしつムグウ!!」

秀吉が謝ろうとしているのを僕が抑える。交渉の途中で相手に謝るのは愚の骨頂だ。

学園長のほうはなにやら考え込んでいるようだ。

「ふむ……丁度言いタイミングだね」

「あの、学園長？」

なにやらつぶやいた学園長に、明久が声を掛ける。

「よしよし。あんたらの言いたいことは良くわかったさね」

「じゃあ、直してもらえるんですね!」

明久が自分たちの要求が通ったと思い声を上げる。

「却下だね」

「雄二。このババアをコンクリに詰めて海に捨ててこよう」

ここは僕も参加しておこうか。

「明久、それじゃあ証拠が残る。この学園には焼却炉があるんだからそこに突っ込んで燃やしたほうがいいよ」

「お前ら、失礼だぞ!!」

「雄二が言えたことではないのじゃ」

「まったく、このバカ共が失礼しました。ともかく理由を聞かせてもらえますか？ババア」

「そうですね。教えてくださいババア」

「あんたらは本当に教えてほしいと思ってるのかね！」

学園長の怒りも、それなりにもっともだと思う。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針さね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、このなまっちょろいガキ共」

「でも、それじゃ体の弱い生徒が……」

「と、いつもなら言っているんだけどね、かわいい生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやろうじゃないか」

学園長はクロ確定だ。教頭がらみで何かしらの問題を抱えているのは確かだ。

となりで雄二も黙り込んでいる。

「その条件ってなんですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるね？」

「ええ。俺と明久で出ようと思ってました」

それは初耳だ。

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

確か、トロフィーと「白金の腕輪」。副賞に如月グランドパークのプレミアムペアチケット

だったと思う。

「優勝賞品がどうかしたんですか？」

結局、学園長が僕らに出した条件は優勝賞品の如月グランドパークのプレミアムペアチケットの回収だった。

「間違っても優勝者から強奪、何てするんじゃないよ！ 譲ってもらうのもだめさね。」

あたしはアンタ等に召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

「分かりました。雄二、ペア分けはどうする？」

「俺と明久、蓮と秀吉でいいだろ」

雄二は前回の召喚大会で一回も召喚してないから当然と言えば当然だ。

「あ、言い忘れてたけど鮎川は出場するんじゃないよ！」

「「どうしてですか？」」

僕と明久の声が重なる。

「アンタの召喚獣は刺激が強すぎるからだよ。」

さきのAクラス戦でもアンタ、相手の召喚獣の頭を吹飛ばしたらしいじゃないかい。

スポンサーも見に来る召喚大会でそんな戦いは見せられないさね」

うーん……もつともだ。召喚獣はデフォルメされてはいるけど人間の形をしている。

その頭が消し飛ぶなんてあまり見せられる光景じゃない。

「なら、蓮が戦い方を自重すればいいんだなババア？」

「……ま、まあそれならいいさね」

さっきの呟きといい僕を出場させたがらないことといい怪しすぎる。

「よし、それならさっき言ったようなペアで出るぞ」

「宜しく頼むぞ、蓮」

「うん。こちらこそ」

「用は済んださね？」

「いや、一つ頼みたいことがある」

「……なんさね？」

「この召喚大会は一回戦数学、二回戦英語……といったように勝ち進むごとに教科を変えてやっていくと聞いている」

「それがどうかしたさね？」

「組み合わせが決まったらその教科の指定を俺たちにやらせてほしい」

「ふむ。点数の水増しとかだったら一蹴していたけどそれくらいならいいさね」

学園長の発言で雄二の目が細くなる。

多分僕と同じことを考えていると思う。

「ここまでしてやるんだ。当然優勝できるんだろうね？」

「当たり前だ。俺たちを誰だと思っている」

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ約束を忘れないように」

「明久たちには負けぬのじゃ」

「僕がいることを忘れないでよね？」

全員やる気はある。問題なく勝ち進めるだろう。

「それじゃ、坊主共任せたよ！」

こうして僕たちの召喚大会出場が決まった。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。（後書き）

そろそろ、ストックがなくなってきたので

毎日、もしくはそれに近い間隔の更新が出来ない可能性が出てきました。

もちろん出来るだけ毎日更新していきますが、

更新できない日が出てきたときは暖かい目で見守っていただけると幸いです。

第十九問 謀略渦巻く清涼祭！ ていうとカッコイイけど要するに内輪もめ。

更新が遅くなると宣言した途端に2日あいてしまいました。
すみません。

第十九問 謀略渦巻く清涼祭！ ていうとカッコイイけど要するに内輪もめ。

バカテスト 現代社会

問『PKOとは何か説明しなさい』

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『Peace Keeping Operation（平和維持活動）の略。』

国連の勧告を元に、加盟各国で行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですがUnited Nations Peacekeeping Operationとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくといいでしょう。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tuki Oppaiの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカーのこと』

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

鮎川蓮のコメント

どうして中途半端に古い人ばかりなんだ？

第十九問 謀略渦巻く清涼祭！ ていうとカッコイイけど要するに
内輪もめ。

学園長との交渉を終え、雄二たちが帰った後僕は学園長と話をしていた。

「学園長は何を隠しているんですか？」

まず目下の問題はこれだ。この学園長がペアチケットに企業の陰謀が係わっている程度の問題で僕たちに協力を取り付けるはずがない。

「何の話さね？ あたしは何も隠していないさね」

「ならどうして僕の出場を嫌がったんですか？」

「別に、アンタの戦い方が外部の人間に見せるに多少適さないだけさね」

やっぱり何か隠している。

僕は紙とペンを取り出し文字を書いてから学園長に見せる。

『この部屋は盗聴されているのでここからは筆談で用件を話します』
『何時気づいたんだい？』

『教頭がこの部屋から出て行くときに植木鉢の付近を見ていました。雄二とあなたが話しているときにちよつと調べてみたら盗聴の気配がありました』

『まったく…… あんたは本当に化け物さね』

『そんな化け物を入学させたのはあなたですよ…… 関係ない話はおいておきましょう。』

何故“低得点者”に優勝してほしいんですか？』

雄二、明久、秀吉の三人と僕の決定的な違いは点数。

雄二はちよつと予測できないけれど、明久と秀吉は総合1000点行か行かないかだ。

それに対して僕は4000点を超えている。

『本当に頭が回るね』

『そりゃどうも。まあ、本当の目的は僕が事前に聞くと影響があるかもしれないから』

良いとして……僕が決勝に進んだ場合は使う科目以外を0点にすれば問題ないですね？』

『……そこまで気づいているなら何故止めないんだい？』

『雄二はもう気づいていますよ。それに……あなたは一応恩人ですから』

『……それで良いさね。くれぐれも他言は無用だよ』

『了解……あと、盗聴器はそのままにしておきましょう』

『何故さね？』

『盗聴器が外されれば教頭は自らの企みがばれたと思い、何かしらの行動を起こすでしょう。その行動がFクラスのメンバーを危険に曝すことになるかもしれません』

『……分かった。盗聴器はそのままにしておくよ。用が済んだら怪しまれないうちに』

早く出て行くさね』

『分かりましたよ。じゃあ、召喚大会は期待しててください』

僕はそう書き残して部屋を出て行く。

清涼祭初日。僕らの中華喫茶も雄二の指揮の下かなりまともなものになった。

店内の装飾もそれなりのものになり、あのFクラスの設備で作ったとは考えられない出来になっている。

「このテーブルなんて本物と見分けがつかないよ」

並べられたテーブルはFクラスのみかん箱を並べて、

何処からか持ってきたテーブルクロスをかけただけのもの。

「ま、見掛けはそれなりになったがの。その分クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がテーブルクロスを捲る。

当然その下にはFクラスならではのみかん箱が鎮座しているわけで

「これを見られたら、店の評判はがた落ちね」

「大丈夫でしょ。いちいち店のテーブルの下まで確認するお客さんはいないだろうし、

もし見られても心のうちに閉まっておいて貰えるって」

「そうですね。態々クロスの下をアピールする人はいませんよね」

「おいおい姫路、たかが文化祭で営業妨害する奴はいないって」
雄二の言うとおりだ。

そんなことしても何一つメリットはない。

思いのほかきれいにまとまった店内を、姫路さんは成功するかも、という希望で一杯の顔で見渡す。

「……飲茶も完璧」

いつの間にかムツツリーニが加わっていた。

「ムツツリーニ、厨房はどう？」

「……味見用」

そういつてムツツリーニが差し出したのは小皿に盛り付けられた胡麻団子。

「おいしそうね。土屋、これ、貰っていいの？」

「……（コク）」

「では、遠慮なくいただこうかの」

言うが早いか秀吉がその中の一つを口へ運ぶ。

それに続くように姫路さんと島田さんも胡麻団子を頬張った。

「お、おいしいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし」

「甘すぎないところも良いのう」
よほどおいしいのか、三人とも目を細めて幸せそうな表情をしている。

「それじゃ、僕も貰おうかな」
「僕も」

明久に続いて僕も皿に残った胡麻団子を口に入れる。

「ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる
味わいがとっても……」

「ンゴパツ!!」

胡麻団子にはありえないような味に、僕と明久は天に召されたのだ
った。

「……それは姫路が作ったもの」
「知ってたなら止めてよ!」

「そうだよ! 僕も明久も危つく天に召されるところだったんだけ
ど!」

改めて姫路さんの料理の威力を思い知らされた。

「うーっす。帰ってきたぞ……明久と蓮はどうして震えてるんだ?」
そこへ何も知らない雄二が帰ってきた。

「あ、雄二お帰り」
「えっと、これはね」

「ん? なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ……」

雄二は皿に残った“明久の食べかけ”を躊躇なく口に運んだ。

「……大した男じゃ」
「雄二、君は今最高に輝いているよ」

「人の話は最後まで聞こうね？」

「……合掌」

「？ お前らが何を言ってるのか分からんが……ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとっても……ンゴパツ！！」

あ、なんか既視感^{デジャブ}。

「雄二、大丈夫？」

明久が雄二を突きながら聞く。

「ああ。何の問題もない」

良かった。雄二も大丈夫だったみたいだ。

「……あの川を渡ればいいんだろう？」

「「だめだ雄二！ その川を渡ったら戻れなくなっちゃう！！」」
思わず声が重なる。

明久が雄二に必死に心臓マッサージ。

もちろんちよつと遠くで話している姫路さんたちに怪しまれないように

口では「雄二起きろ」なんて軽い言葉を吐いている。

「六万だと！ バカを言え！ 普通渡し賃は六文と相場が決まって

……ハッ！」

こうして尊い命がまた一つ救われたのです。

「ところで雄二は今まで何処へ行っておったのじゃ？」

「ああ。ちよつと話し合いにな」

ということは学園長に科目の指定をしてきたところだろう。

ちなみに作戦なども雄二任せなので科目も雄二に一任してある。

「ご苦労様。喫茶店はいつでもいけるよ」

「ばつちりじゃ」

「……お茶と飲茶も大丈夫」

唯一の心配事は姫路さんが本当に厨房に立たないかということである。

僕たちはともかく、お客さんの口に入ったら……考えたくない。

「よし、少しの間喫茶店は秀吉と蓮、ムツツリー二に任せる。明久、俺たちは先に

一回戦済ませるぞ」

「あれ？ 坂本君と吉井君も召喚大会に出るんですか？」

「うん。あと、蓮と秀吉も出るって」

「折角だしね。秀吉と雄二は召喚経験が少ないから僕と明久でそのサポートをするんだって」

僕も経験は少ないけれど、点数がある程度あるから何とかなる。

島田さんは姫路さんのために、ということを知っているので嬉しそうだ。

ちなみに、学園長からは“チケットの裏事情は誰にも話すな”という緘口令が敷かれている。

「もしかして、賞品が目的なんですか？」

姫路さんが聞く。賞品が賞品だから気になるよね。

「うーん。そういうことになるかな」

チケットが目的といえば目的だけど、ちょっと意味は違う。

「……誰と行くつもりなの？」

「え？」

「私も知りたいです！ 吉井君、誰と行くのか教えてください！」

島田さんの目が一気に攻撃色を帯びる。

姫路さんまで明久に詰め寄った。

「え、ええつと……」

明久は答えにくそうだ。

もともと誰かと行くつもりはないんだから当然といえば当然だね。

「明久は俺と行くつもりなんだ」

「待て！ 雄二！」

突っ込みたい。突っ込みたいが、ここで出て行くと僕にまで雄二の間の手が及びそうだ。

すまない明久！ 君のことは忘れない……多分。

「ちょっとアキ！ どういうこと！」

「吉井君、男の子なんですから女の子に興味を持ったほうが……」
明久がすごい勢いで誤解されていく。

「それが出来れば明久だつて苦労はしないさ」

「雄二、もつともらしくそんなこと言わないで！ ぜんぜんフオロ
ーになってないから！

それと蓮！ なんか言つてよ！」

「僕は男色家じゃないんだ」

「蓮のバカ野郎——！！」

もうここまできたら巻き込まれないようにするので精一杯だ。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ、明久」

「つく、と、とにかく誤解だからね！」

もう既に色々と手遅れになっている気がする。

明久と雄二が出て行った後。

「さて。僕たちも行くのか」

「そうじゃの」

「あの、鮎川君、木下君」

僕たちも召喚大会に行こうと思っていたところで、姫路さんに声を掛けられた。

「どうしたの、姫路さん？」

「鮎川君と木下君はチケットはどうするつもりなんですか？」

「特に使い道もないから売るか、誰かに譲るつもりだけど、まずは召喚大会に勝たないとね。姫路さん達も」

「そ、そうですね。頑張りましょう！」
危なかった。

「見事じゃったのう」

「秀吉も見てるだけじゃなくて何かフォローしてくれば良かったのに」

「お主ほど上手くあしらえる自身はなかったのな。」

それにしても、姫路もだいぶFクラスに染まってきたのう」

僕らには召喚大会の勝敗よりも姫路さんたちの壊れ具合のほうが心配だったりする。

召喚大会一回戦。召喚大会はスポンサーへのアピールの目的もあるが、

それだけに良い試合を見せなくてはいけない。

そのため二回戦までは校内の人間だけの後悔に限られている。

僕と秀吉の一回戦の相手は、Eクラス代表の中林宏美さんと、同じく三上美子さんだ。

「あら。私達の相手はFクラスコンビみたいね」

中林さんが対戦表を見ながら言う。次になんていうかは予想できるけど……

「楽勝ね」

「秀吉、召喚獣の練習にはちょうどいい相手だから、頑張ってね」
実際ちよつどいい。

「何よ！ Fクラスの分際で生意気だわ！」

「はいはい」

中林さんは独りでにヒートアップしてるけど放っておこう。

「では、始めてください」

「――「試験召喚」――」

先生の合図で一斉に召喚する。

僕の召喚獣はいつも通りの剣とよく分らない左手。

秀吉の召喚獣は着物に長刀を装備している。

僕達に相対する召喚獣は、

中林さんが野球のプロテクターにバットとグローブ。

三上さんが白いローブに分厚い本を装備した出で立ちだ。どうして本で戦えるんだろう。

『数学　Fクラス　鮎川蓮&木下秀吉vsEクラス　中林宏美&三上美子

603点&69点　vs　94点&88点

』

「なっ！　何よその点数は！」

「僕と数学で当たったのが運のつきだったね」

別に数学以外でも負けないけど（保健体育以外）。

「じゃあ、秀吉、そっちの三上さんの召喚獣の相手をしていて危なくなったら手伝うから」

僕は中林さんの召喚獣の前に立つ。秀吉が三上さんと戦っている間、邪魔されないようにしないと。

「点数だけじゃ勝負は決まらないのよ！」

「さっきはFクラスの点数をバカにしたのに今度は点数だけじゃ決まらない、ねえ？」

「うるさいっ！」

中林さんの召喚獣が突っ込んでくる。

「取り敢えず黙って」

倒してしまわないように注意しながら、バットだけを斬る。

大いに驚いている中林さんから目を離し、秀吉のほうを見てみると、
「ハッ、ホッ、ハアッ!!」

三上さんの召喚獣と一進一退の攻防を繰り返していた。

点数は三上さんのほうが有利だけれど、秀吉は前回の試召戦争の経験から

三上さんと互角に渡り合うことが出来ている。

「無視すんな!!」

中林さんの召喚獣が、殴りかかってくる。

「ちゃんと注意してるよ。それに不意打ちしたいなら声は出しちゃだめだよ」

殴りかかってきた腕を取って壁に向かって投げ飛ばす。

僕の点数の召喚獣は思いのほか力が強く、中林さんの召喚獣は壁にすごい勢いで衝突した後、消えてしまった。

「セイヤアッ!」

秀吉も三上さんの召喚獣を切り伏せて、僕らの勝ちに終わった。

「勝者、Fクラス鮎川、木下ペア」

先生の勝ち名乗りも受け、僕達は空けてしまった喫茶店へと戻った。

第二十問 クレームと逃走と召喚大会二回戦！（前書き）

自分の筆の壮絶な遅さが恨めしい作者です。

話は変わりますが、初めて感想をいただきました。

自分の予想以上に嬉しいものです。ありがとうございました。

今後も、より楽しんでいただけるようなお話を考えて行きたいと思っています。

第二十問 クレームと逃走と召喚大会二回戦！

清涼祭アンケート

問 『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのよう
に選ぶべきですか？

「？可愛らしさ ？統率力 ？行動力 ？その他（ ）」

また、そのときのリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『？可愛らしさ 候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

鮎川蓮の答え

『？統率力 候補……島田美波』

教師のコメント

クラスでの話し合いではリーダーシップを発揮したそうですね。

吉井明久の答え

『？可愛らしさ 候補……姫路瑞希（訂正）、木下秀吉（訂正）、

島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

坂本雄二の答え

『?その他(結婚相手) 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

第二十問 クレームと逃走と召喚大会二回戦！

僕と秀吉は、召喚大会一回戦を終わらせると、すぐに喫茶店に戻ってきていた。

「こんなテーブルで人に物食わせてんのかよ!!」

喫茶店から叫ぶ声が聞こえる。

「どしたの？」

「あつ！ 鮎川、あいつ等を何とかしてくれない？ 営業妨害よ！」

僕が思わず声を上げると、島田さんが近づいてくる。

「何があつたの？」

「知らないけど、いきなりあの二人がテーブルのクロスはがして中にお客さんに聞こえるように大声で話し始めたのよ！」

姫路さんの転校阻止がかかっている分、島田さんの怒りは平常時の5割増しになっている。

「取り敢えず、雄二が帰ってきたらすぐに連れてきて。あと、秀吉は……」

秀吉に耳打ちをする。

「用意できんこともないが、あつても二つ程度じゃぞ」

「構わないよ。それじゃあ宜しく。僕はあの二人と話してくるから」

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表は！」

「代表はただ今召喚大会で不在ですので、代わりに私が承ります」「なんだてめえ？」

「この2・Fの代表代理、とでもお考えください」

「そうか、ならこの机はどういうことだ！ 汚ねえ机に食い物はまずいし、」

どうなつてんだこの店は！」

目の前の坊主が大声でまくし立てると、店の中からそれに同調する声上がる。

「この机に関しましては、こちらの手違いにより急遽使っているものです。」

本来の机が届き次第、そちらに入れ替えて営業いたします。

料理の味のほうですが、私どもは味見と衛生管理をした上で自信を持ってお客様にお出ししております。こちらと致しましても、まずい、などといわれるのは心外なのですが？」

机に関しては嘘だ。この場合はこうするしか切り抜ける方法はないし、

雄二が来たらまた調達に行けばいい。

「そんなことで納得できるか！ とにかくこんな汚い店を学園祭で出されると迷惑だつて言つてんだよ！」

「お客様の迷惑を考えずに、大声で怒鳴り散らすあなた方も相当に迷惑だと思つのですが？」

「なんだとっ！」

坊主頭が僕に殴りかかってくる。

僕はその拳をあえて避けずに、打点をずらしながら殴り飛ばされる。僕が殴り飛ばされたのを見て、お客さんは坊主とモヒカンを非難するような目で見える。

一部、僕にさも「自業自得だ」的な視線を向ける奴がいるので、後で個人的にお話しよう。

「お客様、このような公の場で暴力行為とはどういうことでしょうか？」

「こんな大勢の前でやったんだ。言い逃れは出来ねえよな？」

いつの間にか雄二も近くに来ていて、威圧するような声を二人に向ける。

「こ、これはそのウエイトレスの態度がむかついたただけだ！　だいたい店員の教育も出来ねえのかよ！」

「ウエイトレス？」

坊主が苦しい言い訳を並べてくるが僕にとっては最初の言葉が大問題だ。

「ただ、僕は女の子って思われてるとしたら……」

「それではあなた達はムカついたから、という理由で女性を殴るような方なのですね？」

それを利用させてもらおうか。

僕の言葉に店内からは一層冷たい視線が坊主とモヒカンに突き刺さる。

「うちの店員に手を出しておいて、無事で帰れるなんて思うなよ！」この隙に雄二が迷惑コンビを脅す。

「う、うるせえ！　俺達は客だぞ！」

「そうですか『グヘエ』」

雄二がモヒカンを殴り飛ばす。そうですか、解禁ですか。

「あなたはどうしますか？　『ブベラッ』」

僕も坊主を殴り飛ばす。

「お、お前ら、何の真似だ！」

「それは私どもの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涇ですか？」

すごい台詞だ。

「パンチから始まる交渉術」なんて言葉も聞いたことないけれど、それ以上に、これだけやってまだ交渉しているつもりなんて。

「ふ、ふざけるなよ手前ら……グフォッ」

坊主がまたしゃべったので、僕がアッパーカットを入れておいた。ちなみに坊主は宙に舞った後床に倒れて悶えている。

「次に『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で閉める交渉術』」

「が待っておりますので」

「わ、分かった。もう十分だ退散させてもらっ」

「そうか、ならこれでおしまいだっ!!」

そういつて雄二がモヒカンの腰に手を回す。

「ちよつと待て、もう帰ろうとしているのにそんな大技を……ゴフ
アア!」

「じゃあ、僕も……」

「ま、待ってくれ! 反省しているからもうグフアッ!」

皆まで言わせずに坊主の首に足を掛け、体重移動の勢いで投げ飛ばした。

いわゆる首投げ、という奴だ。

「な、夏川!」

雄二にバツクドロップを掛けられて悶絶していたモヒカンのほうが、僕に投げ飛ばされた坊主を見て叫ぶ。あの坊主は夏川とか言うらしい。

「クソッ! てめえら覚えてろよ!」

モヒカンが気絶した坊主を背負って店から出て行く。

最後の覚えてろ、と言う台詞は忘れていいって相場が決まっているから忘れよう。

こうして常夏コンビ（雄二命名）による営業妨害は幕を閉じたわけだが、

それでも迷惑コンビが店に及ぼした影響は大きく、既にお客さんの何人かは席を立って移動しようとしている。

「あっお客さん!」

明久が必死で客を呼び止めようとしている。座っていた客の中で一番最初に席を立ったのは紛れもない教頭だったりする。

あの教頭が常夏コンビに一枚噛んでいると見てよさそうだ。

『雄二』

『なんだ』

お客さんに聞かれないように雄二とアイコンタクトで意思の疎通を

図る。

「お客様、失礼しました。此方の手違いでテーブルの到着が遅れていたために暫定的にこの様なものを使つてしまいました。ですが、たつた今本来のテーブルが到着しましたのでご安心ください」

雄二が声を上げるのとほぼ同時に、秀吉とFクラス数名がきれいなテーブルを運び入れた。

新しいきれいなテーブルに入れ替えることでこの場は何とか収まった。

「いや、助かった。あらかじめテーブルを用意していてくれるとはな」

「常夏コンビだっけ？ そいつらが汚いとか言つてたのは聞こえてたからね。」

少なくともきれいなテーブルを用意しておいたほうがいいと思って」

「でもどうするの？ 秀吉が持つてきてくれた演劇部のテーブルだけじゃ

喫茶店には足りないと思うんだけど」

明久が聞いてくるがそれは心配無用。

「それについては考えがある」

「そうなの？」

「蓮、お前達次の試合は何時からだ？」

「大体11時過ぎくらいの予定だから小一時間あるかな」

「よし、ならお前も手伝え。明久行くぞ」

「何処に行くの？」

「もちろん、テーブル調達だ」

「それってまさか！」

「こら、坂本君に吉井君、鮎川君まで、待ちなさい！」

僕と雄二、明久はただ今教師に追い掛け回されている途中である。もちろん清涼祭が始まっているので、まともな方法でテーブルが調達できるわけなく、

応接室からテーブルをパクツて、現在運んでいるところなのだ。

「明久、もっとスピードを出せ！　つかまったら生活指導室行きだぞ！」

「鉄人の根城！？　冗談じゃない！！！」

「現在の状況が分かったら全力で走る！　先生はそんなに早くないから！」

追ってきている化学の布施先生は運動不足なのかそこまでのスピードはない。

「どうして机を背負ってそんなに早く走れるんですか……」

こうなったら西村先生に応援を」

布施先生はそうやって携帯電話を取り出す。マズイな。

机を背負って鉄人こと西村先生から逃げ切るのは至難の業だ。

「明久！！！」

「おうよっ　雄二！」

鉄人乱入を阻止する手段を考えると、明久と雄二が何かを示し合わせたようだ。

明久が自分の上履きを脱ぐと、そのまま雄二に向かって蹴り上げる。雄二がそれを空中で蹴り、蹴った明久の上靴はそのまま布施先生の右手、

正しくは手に持った携帯を寸分違わずに弾いた。

「流石雄二！」

「雄二！ 連絡は！」

「この先の空き教室に机を置いていくぞ！ そこからは回収部隊が教室に運んでくれる手はずになっている」

Fクラスの別働隊、回収部隊が僕達がかっぱらった机を喫茶店まで運んでくれるらしい。

「よし、次は職員室そばの休憩室を攻めるぞ！」

「ハア、蓮はともかく僕と雄二はいつか停学になる気がするよ」

「仕方ないでしょ。机を手に入れるにはこれしか方法がないんだからっ」

こうして、僕達の必死のダッシュのおかげか、Fクラスの悪評の元、汚れたテーブルは新しいテーブルへと全て入れ替えることができた。

そして次は召喚大会二回戦。

「雄二、次の教科は英語でよかったよね？」

「ああ。お前の点数なら誰が相手でも何とかなるだろう？」

「英語ならね。それより、雄二と明久は大丈夫なの？」

「ああ。問題ない。次の対戦相手はあのカップルだからな」

あのカップルといえばおなじみ卑怯者とヒステリックさんです。

あの二人、特に根本もとい外道はFクラス（特に雄二と僕）に弱みを握られている。

汚い手も容赦なく使う雄二のことだ、外道は悲惨な末路をたどるだろう。

—そして二回戦—

僕と秀吉の相手は3年Bクラスのペア。

ここでもBクラスと当たるなんて。

「なんだ？ 相手は2年でしかもFクラスかよ？ 楽勝だな」
「当たり前だろ。俺達のコンビの前に敵はいないっての」
「なんだろう。一回戦の中林さんも結構イラつとしたけれど、
この二人は更にムカつく。3年はテストが難しいから2年と条件は
変わらないのに。」

「それでは、始めてください」

「……試験召喚」^{サモン}「……」

先生の合図で四人全員が召喚獣を呼び出す。

僕と秀吉の召喚獣はいつもどおり。

敵さんの召喚獣は、最初に2年Fクラスをバカにした短髪が
特攻服にハンマー！

相方の髪にウェーブがかかったセミロン毛男が西洋風の鎧に剣だ。

「ハッ！ 流石最低クラス、召喚獣の装備も貧弱だなあ！」

僕も秀吉も召喚獣が防具をつけていないことからこんな台詞が出て
くるんだろう。

てか、アンタの召喚獣も防具つけてないでしょ。

「そうやって舐めてると足元すくわれますよ、セ、ン、パ、イ」
続いて彼我の点数が表示される。

『英語 2年Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

633点& 79点

VS

3年Bクラス 鯖島健&石田爽一

167点&201点

』

『なにっ！』

僕の点数を見て会場全体がざわめく。

600点なんて教師並みの点数らしいからFクラスの生徒が取れるなんて夢にも思っていないだろうから。

「て、てめえみたいな奴がなんでFクラスに！」

「その台詞はもう聞き飽きました。じゃあ、さよなら先輩」

召喚獣を鯖島とかいう先輩の下に走らせ、動揺と点数差からまともに反応できていない

先輩の召喚獣を一閃する。

『英語 鮎川蓮vs鯖島健』

633点vs22点 『』

悪運が強いのか、両断されるすんでのところで防御されてしまった。だが、もう点数は無きに等しい。

もう一人のほうは、

「くっ、意外としぶといな」

秀吉が粘ってくれている。

秀吉の点数ならすぐに方が着くと思っていたのだろう。

だけど、相手も三年生。点数はおるか召喚獣の扱いでも石田先輩のほうが上だ。

『英語 木下秀吉vs石田爽一』

18点vs188点 『』

「くっ、蓮！」

「りょーかい」

やられそうになっている秀吉のもとへ走る。

石田先輩は僕が援軍に来ることも想定していたようで、短髪よりも反応が早い。

だが、彼我の点数差は3倍以上。突き出される相手の剣をいなして、左手で切り裂く。

体勢が崩れたところに右手の剣を突き出し、セミロン毛の召喚獣は消滅した。

ようやく此方に追いついた短髪の召喚獣もあっという間に沈めて僕達の勝利となった。

第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々策をめぐらせてたりするけど結局

最近、何かを続けるのはとても難しいと身をもって実感しています。
更新も急激に間が空きだしましたね。

努力します……………

第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々策をめぐらせてたりするけど結局頭

バカテスト 化学

問『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

鮎川蓮の答え

『ハーバー法とは、400度～600度の高温下で、窒素と水素を直接反応させてアンモニアを生成する手法である』

教師のコメント

どうやら、問題の記述に誤りがあったようですね。

ですが、できれば塩化アンモニウムと反応する物質も書いてほしかったです。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々な策をめぐらせていたりするけど結局頭悪い人ばかりだよな。

「しかし、蓮の英語は流石の点数じゃの。それ点数に勝てるものは教師くらいじゃろ」

「その辺の教師には負けたくないけど。それに僕にも苦手な教科はあるし」

「あれかの？」

「あれです」

あれ、というのはもちろん保健体育のこと。

ただ苦手なんじゃなくて僕はある理由で保健体育の内容を覚えられないんだけどね。

その理由は万が一機会があれば。

「鮎川蓮君だね？」

秀吉とFクラスに戻る途中で、後ろから声を掛けられた。

「はい。僕が鮎川蓮ですが、何か用ですか、教頭先生？」

僕に声を掛けたのは今回の清涼祭での第一級要注意人物、というか僕の見立てでは黒幕の竹原教頭だった。

「召喚大会の件で少し話がある。時間は大丈夫かね？」

「秀吉、僕は教頭先生と話してから戻るから、先に喫茶店に帰っておいて」

「分かったのじゃ。お主も遅くならんようにの」

秀吉に先に戻らせる。これで僕と教頭の2人だけがここにいる。

「……付いてきなさい」
教頭は短く僕にそういうと一人で歩き始めた。
終始無言に見えるけれど、「これが学園長の……」とか、
「捨て駒にはちようどいい」とかぶつぶつ独り言を言ってる。
特に二番目は気に入らない。僕を捨て駒扱いか。

「入りたまえ」
通されたのは教頭室。

教頭は僕を無視してさっさとソファーに座ってしまった。

「話ってなんですか？」

「まずは座りたまえ」

そついわれて、僕もソファーに腰掛ける。

「それで話というのは？」

「まあ、そう急かさなくていいか」

「僕はクラスの出し物もあるので、出来れば手短にお願いしたいのですが」

「ふむ……ならば単刀直入に言おう。君、私の下に付きなさい」

「単刀直入ですね」

「君にはもう察しが着いているのだろう？」

「隠す気はない、ということですね？」

「まあ、そういうことにしておいてくれ」

「それで？ 下に付け、とは？」

「ああ。簡単なことだよ。この清涼祭期間中、私の命令に従って動いてくれればいい」

教頭は僕が一般性とのカテゴリに入っていることを知らないのだろうか。

一般生徒とこんな取引のようなことをするなんて教育者として失格だ。

「まさか、ただでこんな危険性のあることを生徒にやらせようとは思いませんよね？」

「もちろんだよ。君が私の下についてくれるならば、学校生活を送る上で

あらゆる君への高待遇を約束しよう。君の本来の振り分け先であるAクラスにも

入れるように手配しよう」

鎌をかけただけのつもりだったのだが、教頭はまったく気づかずにべらべらと話してくる。

「教頭先生の目的はなんですか？ こういった取引は表沙汰になればあなたにも都合が悪いはずですが？」

「ふふ、聞いたとおり聡明だな。私の目的か、そうだな、

『駒を最適なところに置く』かな」

こいつは試験召喚システムが目的か。

それも、誰かに雇われているのだろう。

「成る程。大体の条件は分かりました。確かに僕にとってはいい条件のようだ」

「そうか、ならば」

「お断りします」

「っ！ な、何故だね！」

「僕は自分ひとりのためにその他大勢、今回はこの文月学園全体を危険に曝すことはしたくないんですよ。それに……」

「それに、何かね？」

「僕はそれなりにFクラスが気に入ってますし」

「だが、私の計画が成功すれば」

「『文月学園は乗っ取られる』もしくは『文月学園はつぶれる』ですか？

そんな大それた事あなたに出来るわけないでしょう？

それに、人を捨て駒扱いするような人間に付いていけるほど甘い環境で育ったわけではないので」

捨て駒発言。教頭はこれを聞かれているとは思わなかったのか大層驚いている。

「何故それを聞いている！ 君は私から10m以上離れていたはずだ！

普通の学生ならあの距離の独り言など聞き取れるわけがない！」

「まあ、“普通の学生なら” 聞き取れないでしょうね」

「な、なら君は」

「はい、今日はそこまでにしましょうか。僕もクラスに戻らないといけないので」

「くっ…… まあいいだろう。だが、私の誘いを断ったこと、後悔するよ」

教頭が言い終わる前に部屋を出て行く。

そのときの僕はきつとこう呟いていただろう。

「そういう台詞は死亡フラグだぜ、三下」

教頭との腹の探りあい（というか僕が一方的に探っただけだが）を

終え、

僕はFクラスの喫茶店に戻ってきた。

「あ、お帰り蓮」

明久が声を掛けてくる。

「ただいま。って、皆どうしたの？」

僕が入ってこなかったほうの入り口近くでFクラスの皆が人垣を作っている。

「うん。なんか小さな女の子が来て、皆そっちにかかりきりになっちゃって」

なんともFクラスらしい理由である。

と、いうかあいつらは女なら年は関係ないのか？

「で？ 探してる人はどんな人なんだ？」

「はい。バカなお兄ちゃんでした」

とんでもない会話が聞こえてくる。

雄二が皆を見回す。“バカなお兄ちゃん”という特徴に当てはまる人を探しているんだろう。

「そうか……沢山いるんだが」

否定できない。

「他に何かないか？」

「えっと……とってもバカなお兄ちゃんでした」

「……吉井だな」「……」

クラスの声が一致する。明久を見ると、哀れだ。ちょっと涙目になっている。

「雄二、僕に小学生の知り合いなんていないよ？きつと人違い」

「あつ！ バカなお兄ちゃんだ！」

「人違い……ねえ？」

「人違いだと……いいなあ」

明久、そろそろ腹を括ろっ。

君の特徴は良くも悪くもその頭から来ている。

「で？ その子は誰なの？」

「うゝん……僕に君みたいない知り合いはいないよ？ 人違いじゃないかな？」

明久はこの期に及んでまだ思い出していないらしい。

「知らないってひどい！ 葉月一生懸命『バカなお兄ちゃんは何処ですか』って

いろんな人に聞いて来たのに！」

こ、この子何者だ！ 明久の急所を無意識ながら的確に攻撃している！

「そうか……バカなお兄ちゃんがバカで悪かったな」

「バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう」

「でもでも、葉月はおにいちゃんと結婚の約束もしたのに！！」

爆弾を投下した。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！！」

「ぐわあ！！」

流れるような、端から見れば美しいような動きで

姫路さんと島田さんは明久の首を絞めていた。

「姫路に島田、どうやら勝ったようだな」

「雄二、今心配するのはそこじゃないでしょ」

「瑞希、首をそのまま捻って！ ウチはひざを逆方向に曲げるから！」

「はい！ えっと、こうですか？」

イカン。このままだと近いうちに死人が出かねない。

「ちょっと待って！ 僕は結婚の約束なんて全然」

「ふええええん！ 酷いです！ ファーストキスまであげたのに！」

これは……明久の自業自得だな。

「坂本！ 包丁持ってきて！ 5本あれば足りると思うから！」

「吉井君！ こんな悪いことするのはこの口ですか！」

「ほへはいへふ！ ははひひひへふはい！（お願いです！ 話を聞いてください！）」

二人はヒートアップしちゃってるし。

「仕方ないわね、2本刺したら聞いてあげるわよ」

島田さん、包丁は1本刺さるだけで十分に致命傷だと思うんだ。

「ちょ、美波！ 包丁は一本刺さるだけでも致命傷なんだよ！ お願い助けて！ 雄二！ 蓮！」

仕方がない。明久が殺される前に止めるか。

「二人とも、それ以上やったら本当に洒落にならないから！

明久を拷問するのは清涼祭が終わってからでもいいでしょ！」

「待って蓮！ それだと根本的に僕の危機が回避されたわけじゃないよ！」

一日でも寿命が延びたんだから後は自分で何とかしてよ。

「止めないで！ 僕はこいつを殺さないといけないのよ！」

「……ゴメン明久」

「諦めるの！？ もうちょっと粘ってよ！」

ここまで僕の話聞いてくれないとちょっと凹む……

「あつ、お姉ちゃん！ 遊びに来たよ！」

「あれ？ 葉月？ え？ 葉月とアキって知り合いなの？」

「うん……あつ、思い出した！」

「何？ 結局、明久と葉月ちゃんは前に会っていたってことでいいの？」

「うん。去年ちょっとね。それより、美波は何で葉月ちゃんを知ってるの？」

「何でって、ウチの妹だもの」

ほう……それはつまり

「島田さんは自分の妹の声も分からずに明久を殺しかけたってことだね」

「うつ……クラスの人ごみで声が良く聞こえなかったのよ！」

まあ、そういうことにしておこう。

「吉井君はずるいです、どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？」

もしかしてもう『お義兄ちゃん』になつてたりして……」

「姫路さん、取り敢えず戻ってきて……」

本当、事態の收拾が追いつかなくなってきた。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

雄二の言葉で、皆は辺りを見回した。

僕が帰ってきたときにはもう、店は閑古鳥が鳴いていた。

「そういえば葉月、ここに来る途中でいろんな話を聞いたよ」

「ん？ どんな話？」

葉月ちゃんの言葉に一番早く反応したのは明久だった。

「えっとね、『中華喫茶は汚いから行かないほうがいい』って」

店内は掃除もいきわたっているし、装飾もすっかりしている。唯一“汚い”のは、テーブルだったけど、そのテーブルは新しいものに替えたから
そんな噂が立つ原因がない。

「ふむ……例の連中の妨害がまだ続いているんだろうな。探し出してシバキ倒すか」

「常夏コンビってそこまで暇なの？」

「まあ、後輩の店を営業妨害するような人間だから、十中八九自分のクラスでもお荷物扱いでしょ」

もしかしたらそれ以外の理由があるかもしれないけど。

「まず、様子を見に行く必要があるな。チビツ子、その話は何処で聞いたんだ？」

「チビツ子じゃないです、葉月です！」

「じゃあ、葉月ちゃん、その噂は何処で聞いたか教えてくれない？」

「はい。えっと、短いスカートの女の人がいっぱいいるお店でした！」

多分何かのコスプレをしているお店なんだろうけど、そんなことを言ったら真っ先に反応するのが……

「何だって！ 雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 店のために（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」

そんなことを口走りながら、明久と雄二は走り去ってしまった。
そんな中、残されたメンバーは、

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

「取り敢えず、明久たちだけに任せておくのも不安だし、僕達もお昼の休憩をかねて行ってみようか？」

「……そうじゃの」

僕達も明久と雄二の後を追う。

厨房からムツツリー二の気配が消えているのが気になるけど。

第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々策をめぐらせてたりするけど結局

なんだか蓮の性格変わってね？ と思われる方もいるかと思いますが、

蓮の素は案外黒かったりします。

次回も出来るだけ早くに……

第二十二問 女装が似合う男って女性から見てどうなんだろう……（前書き）

PV10、000アクセス突破を確認しました！

ものすごい速度で更新が滞り始めた気がします、これを糧にまた
どんどん書いていけたら、と思っています。

第二十二問 女装が似合う男って女性から見てどうなんだろう……

バカテスト 日本史

問『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年である』

姫路瑞希の答え

『603』

鮎川蓮の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

いったいどうしたのですか？ 驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前をただけでバツをつけた先生を許してください。

第二十二問 女装が似合う男って女性から見てどうなんだろう……

「明久、ここは止めよう」

「雄二、ここまで来て何言ってるの？」

「明久、僕は雄二に同感だ。ここだけは止めよう……」

僕達が葉月ちゃんの家内のたどり着いたのは

2-Aクラスのメイド喫茶『ご主人様とお呼び!』だった。

もう、どう突っ込んで良いか分からないネーミングだよ。

「そっか、ここは雄二の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「だめですよ坂本君、女の子から逃げ回ったりしちゃあ」

「でも、どうして蓮まで嫌がってるのさ？」

「……優子と一緒にいると何時関節技をかけられるか分からない恐怖で

まともに座ってられないんだ……」

「……蓮、お前も苦労してるんだな」

「……雄二」

なんか、雄二に女性関係でこんなにも癒される日が来るなんて。

「……（パシャパシャパシャパシャ）」

ものすごい連続したシャッター音が聞こえる。

「……ムツツリーニ？」

「……人違い」

「どう見てもムツツリーニだろ！ 厨房責任者が何してやがる！」

「……敵情視察」

「喫茶店から出てくるときにもうムツツリーニの気配を感じなかったからまさかとは思ってたけど、本当に付いてきたんだね」

「ムツツリーニ、盗撮はだめじゃないか。そんな事したら

撮られている女の子が可哀想だと……」

「……1枚100円」

「2ダース買おう……可哀想だと思わないのかい？」

明久、普通に注文してるし、説得力皆無だぞ。

「アキ、普通に注文してるわよ」

「はっ、何時の間に！」

「明久がムツツリー二から写真を買うのはもう条件反射になってるんだね……」

「……そろそろ帰る」

「全く、ムツツリー二にも困ったものだね」

「少なくとも、さっきムツツリー二の写真を買っていた明久にはその台詞いえないと思う」

「明久君、その写真どうするんですか？」

「いやだなあ、姫路さん。もちろん捨てるに決まってるじゃないか。そろそろお店に入ろうよ。僕もうおなか減っちゃったよ」

見事に話題をそらせたな。

「それもそうね。ほら、坂本、鮎川、覚悟決めなさい」

「くそっ」「」

仕方がない。多分優子も衆人環視の中で関節技はかけてこないだろう……多分。

「あっ！ 映ってるの男の足ばかりじゃないか畜生！」

「「しっかり見てるじゃないか（見てるじゃないですか）！」」

「ご、ごめんなひゃい。くひをひふあふあふあいで」

明久は姫路さんに口を引っ張られながらの入店となった。

「じゃあ、入るわよ」

島田さんが一番手となって、店の中に入っていく。
出迎えるのは、学年主席美人メイド霧島翔子さん。

「わぁ、きれい……」

僕はこういうのに慣れていないけれど、それでも霧島さんがきれい
だってことは分かる。

「それじゃ僕らも」

「流石Aクラスじゃの。店内の装飾も桁違いじゃわい」

「失礼します」

「お姉さん、きれいですっ」

続いて明久たちが入っていく。

「……お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様」

霧島さんは模範的な礼儀（ver・メイド喫茶）で出迎えた。

僕と雄二は乗り気じゃない為最後尾で入っていく。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

霧島さんはかなりアレンジを加えた台詞で雄二を出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ。今日はへし折らせていただきます」

……ナンテイッタ？ ヘシオル？ ナニヲ？

ボクノウデヲ。

ダッ！（僕が全力で走り出す音）

ガシッ！（優子が僕の腕をとる音）

ボキユメキユ（僕の腕が粉々になる音）

「~~~~~（声にならない悲鳴）」

「……全く、同じ服を着ているのにどうして代表ばかり見ていたのかしら？」

「……優子、居たの？」

「……………へえ、アタシは眼中になかったってことね！！」

地獄を見た。

優子にサブミッション（と呼べるかどうかも怪しいレベルのやばいもの）を

散々喰らった後、僕はようやく明久たちが座っているテーブルに行くことができた。

「あ、お帰り蓮」

「……ただいま」

「今日の姉上はすさまじかったのう」

「本当だよ。どうして優子に気づかなかったただけで地獄を見せられないんじゃないのさ」

「……姉上も大変そうじゃのう」

秀吉、この状況で大変なのは天に召される危険もある僕だ。確かに優子も殺人犯になる危険はあるけど。

「それで？ 常夏コンビはいた？」

雄二に尋ねる。Aクラスまで来た目的は、僕らへの営業妨害を止めることだ。

「ああ。今注文したところだが……あの中央の奴らがそうだな」

雄二の視線の先をたどると、見覚えのある汚物が二つ目に入った。

「それにしても、この喫茶店はきれいでいいなあ！」

「そうだな。さっき行った2・Fの喫茶店は酷かったからな！」

「テーブルは腐ってたし、虫もわいてたもんな！」

わざとらしい。こんなわざとらしい営業妨害なのに誰一人として注意しないのか。

「おい、明久と蓮。とりあえず落ち着け」

「雄二、どうして止めるのさ！？ あの連中を早く止めないと！」

「落ち着け、こんなところで騒ぎを起こしたら更に悪評が広まるだけだ」

言われてみるとそうだ。

「あの店、出してるものもやばいんじゃないか？」

「言ってるな。食中毒でも起こらなきゃいいけどな！」

「2・Fには気をつけろってことだな！」

「……雄二、僕もう限界なんだけど」

「まあ、ちょっと待て。翔子！」

「……何？」

雄二が霧島さんと呼ぶと、すぐに現れた。
彼女は雄二センサーでも付いているんじゃないだろうか。

「メイド服がほしいんだが」

「……分かった」

その場で自分が着ているメイド服のボタンを外し始める霧島さんって
「うわああああ！ な、何してるの霧島さん！」

明久は隣で鼻血を出している。

「……雄二が私をほしって言ったから」

「違う！ 余ってる予備のメイド服があれば貸してほしいって意味だ！」

「……そう。今持ってくる」

「露骨に分かりするな！」

雄二も苦勞してるな……

「雄二？ メイド服なんて何に使うの？」

「着るに決まってるだろう」

「そうか、姫路さんが着るんだね」

「いや、それはないでしょ」

「どうして？」

「姫路さんが着たとして、常夏コンビを撃退なんて出来ないだろうし」

「それもそうか、じゃあ誰が着るの？ 秀吉？」

「ああ、着るのは明久、お前だ」

「いいやあああああ！」

雄二から事実上の死刑宣告。

僕も女装はいやだからね。明久の気持ち本当に良くわかるよ。

「雄二が着ればいいじゃないか！ 無理をしたら着られるはずだよ

！」

いや、雄二のメイド服姿は出来れば目にしたくない。

「やれやれ、わがままを言う奴だな。ならあっち向いてホイで決めないか？」

雄二が提案する。

おそらくは試召戦争の宣戦布告のときみたいにまともじゃない戦法を思いついたんだろう。

「よし、その提案受けるよ」

……さよなら。明久。

結局、雄二が明久の目に指を突き入れ、明久が悶えているうちに明久の顔が向いている方向を指すというとてもなく卑怯な方法で雄二が勝利を手にした。

「あの、吉井君。大丈夫ですか？」

姫路さんが心配している。霧島さん並の目の潰し方だったからね。明久が感じている痛みは普段の比じゃないだろう、うん。

「ありがとう。まったく、雄二の卑劣さには驚かされるよ」

「あ、あはは……でも、きっと大丈夫ですよ」

「そうだね。きっとこんな勝負は無効——」

「吉井君ならきっと可愛いと思います！」

そっという問題じゃない。

「くっ、この上ない屈辱だ……」

秀吉のメイク技術によって明久はそこらへんのメイドに負けないくらいに見栄えに仕上がった。

「明久、存外似合つておるぞ」

「うん。僕もそう思うよ」

「ああ、そうだ」

秀吉と共に、明久の女装姿にそれなりの驚きを示していると、

雄二が声を掛けてきた。どうやら彼には明久を無理やり女装させた罪悪感は全くないらしい。

「メイド服は後一着余ってるらしいから蓮、お前も着ろ」

[illegible]

「……いや、明久のバックアップというか、明久が失敗したときの保険のつもりだったんだが……」

「雄二！ それ良いよ！ 蓮なら絶対似合うよ！」

雄一の爆弾発言。

それに加えて明久まで雄二に乗っかってきやがった……

「僕は女装は遠慮したいんだけど……」

「そうか、別に明久だけでも事足りるしいいか」

「そう？　蓮なら似合うと思うんだけど」

明久、女装とは似合えばいいというわけではない。

「あんた達、何の話をしてるの？」

廊下で騒いでいたためか優子がひよこつと顔を出した。

「いや、明久の女装が似合っていたからそれについて話をしていた

「ただだよ」

「ねえ、木下さん。蓮のメイド服姿、見てみたくない？」

何故明久は優子にそんなことを言うんだよ？

優子は僕に何の興味もないんだからそんなこと言っても無駄――

「それは是非見てみたいわね！」

何でええええええええええ！！（本日二回目）

「ホラ、木下さんもそういつてることだし、蓮、着替えてよ」

「いやいや、別に優子がなんと言おうが僕は着替えない――」

「着替えなさい」

「へ？」

「蓮、メイド服に着替えなさい。あたしも見てみたいわ」

「ちょ、それは理不尽『じゃあ行こうか』理不尽だああ――」

――蓮、強制連行＆着替え――

「……明久よりも似合っておるではないか」

「……ああ。俺も勧めては見たがまさかここまでとは」

「……もう、蓮が常夏を懲らしめればいいんじゃないかな？」

「……見たいつて言ったけど、これは女として自信をなくすわ……」
強制的に着替えさせられたわけだけど、僕以外の四人が固まってる。

「……。（パシャパシャ）」

いつの間にかムツツリーニまで来てるし。

「ハア、結局着るはめになったよ……」

「似合っておるからいいのではないかの？」

「そんなわけないだろ！　これかなり恥ずかしいんだよ！」

「……二人とも、盛り上がつてるとこ悪いがそろそろ戻るぞ。

あんまり遅くなると常夏がAクラスを出て行っちゃうかもしれないからな」

雄二にせかされて、Aクラスに戻る。

一応、僕は明久が失敗した時用のサポートらしい。

『とにかく汚い教室だったな！』

『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな！』

常夏はまだそんな会話を続けていた。

僕らの営業妨害が目的なのだろうけど、そんな会話をしたら旧校舎に教室があるクラス全部に影響がある。

「お客様」

常夏と明久が接触した。

案の定、常夏は今近づいてきたメイドが明久だと気づいていない。

「お客様、足元を掃除しますので少々よろしいでしょうか？」

「掃除？　さつさと済ませてくれよ？」

その足元を汚した張本人であるお前らにそんなこと言う権利はない。

「ありがとうございます。それでは——」

「ん？　何で俺の腰に抱きつくんだ？　まさか俺にほれて」

天地がひっくり返ってこむら返りを起こして七つに分かれたとしてもお前に惚れる女はいないから安心しろ。

「くたばれええ!!」

「ごばあつ!!」

明久が坊主―確か夏川だったと思う―にバックドロップを決めた。奴には首投げのダメージが残ってるはずだ。

「き、貴様、Fクラスの吉井……まさか女装趣味が――」

生きてやがったか。どこぞのGなみのしぶとさだ。

「こ、この人今私の胸を触りました!」

「ちよつと待て! バックドロップをするために当ててきたのはお前だし、そもそもお前は男だと――ぐばあつ!」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が!」

そういつて坊主を殴り飛ばしたのは我らが代表の雄二だ。

倒れている坊主に代わってモヒカンが雄二に抗議している。

その間に明久が坊主の頭にブラジャーを接着剤でくっつけていたからもう手遅れの気がするけど。

「さて、痴漢行為の取調べのため、ちよつと来てもらおうか?」

「くつ! 行くぞ夏川!」

流石にこの状況を不利と感じたのか逃げ出すモヒカン。

「こ、これ、外れねえじゃねえか! 畜生! 覚えてろ変態め!」

坊主にいたっては頭にブラジャーつけたまま逃走を図っている。

「逃がすか! 追うぞアキちゃん!」

「その必要はありませんよ、お客様」

「何だ貴様! どけ!」

「あら、目の前の痴漢犯を見逃すほど私達は甘くないわよ?」

口調が変わってるから分かりづらいと思うけど、常夏の前に立ちはだかっているのは僕だ。

「くそっ！ いいから退け！！」

痺れを切らしたモヒカンが僕に掴みかかってくる。

「現行犯ですね」

掴みかかってきた手を捻り、モヒカンの顎に拳を叩き込む。

まだ意識があつたようなので、眉間、顎、鳩尾に追撃をねじ込んで意識を刈り取った。

「つ、常村あ！」

「お連れのことよりも、まずはご自身の身の心配をされたほうがよろしいのでは？」

完全に隙だらけな坊主の手を取って一本背負いを決める。

叩きつけられた坊主の眉間に掌底を叩き込む。

「ぐぼらあっ！」

明久と雄二によるダメージもあつてか、坊主も沈黙した。

「……お前容赦ないな」

「そう思うならまず逃がさないようにしてよ」

常夏の首根っこを掴み、Aクラスの奥に連行する。

「常夏コンビはどうするのさ？」

「特に考えてはなかったがな。捕まえた以上何かしらしないとな」

雄二も、常夏をどうするかまでは考えてなかったらしい。

「……考えてないなら、あたし達が証言するから西村先生にでも引き渡せば？」

「……それだっ！」「」

優子の案に皆が賛同する。

他クラスへの営業妨害ならきつと鉄人が連行してくれるだろう。

「そうか、ならこの二人は俺が預かっておく」

思いのほかあっさりと、鉄人は常夏を担いでいった。

AクラスとFクラスの証言ではここまで対応が変わるのか……

第二十三問 弱い犬ほど良く吠えるって言葉は的を射ていると思う。(前書き)

また遅くなってしまいました……。

週末のほづがPCに触れないってどういことよ(汗)

第二十三問 弱い犬ほど良く吠えるって言葉は的を射ていると思う。

バカテスト 英語

？と？に当てはまる語を答えなさい。

『マザー（母）から「？」を取ったら「？」（他人）です』

姫路瑞希の答え

『マザーから「M」を取ったら「o t h e r」（他人）です』

教師のコメント

その通りです。MotherからMを取るとo t h e r（他人）という単語になります。

こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザーから「M」を取ったら「S」です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザーから「お金」を取ったら「親子の縁を切られるの」（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

鮎川蓮の答え

『マザーは「故人」です』

教師のコメント

……… 済みません。

第二十三問 弱い犬ほど良く吠えるって言葉は的を射ていると思う。

「で？ 三回戦は不戦勝だったのね？」

「うん。対戦相手が食中毒で棄権したんだ」

「僕と秀吉の対戦相手もそうだったよ」

Aクラスで時間を喰ったため、急いで召喚大会の三回戦に向かったのだけど、

待っていたのは不戦勝の勝ち名乗りだった。

『ムツツリー二、姫路さんは厨房に立ってないんだよね？』

『……問題ない』

小声でムツツリー二に確認を取る。

姫路さんが厨房に立ってしまったら十中八九瀕死の重傷者が出る。

「時間が出来たようじゃから、喫茶店の立ちなおしもせねばならぬのっ」

常夏の所為で喫茶店は閑古鳥が鳴いている。

「そうだな。一度失った客を取り戻すため、何かインパクトのあるものをやる必要があるだろうな」

「流れちゃった噂はもうどうにもならないだろうからね」

人の口には戸は立てられぬ、って言うけど、ここまで噂の広がりがある早いとは思わなかった。

「ふむ。それで何をするかじゃが……」

秀吉と明久が教室内を見回す。

狭い上にボロい教室だから出来そうなのは特に何も無い。

「特に出来そうなことはないね」

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎるだろうが効果は絶大なはずだ」

そう言つて雄二が取り出したのは、白と水色のチャイナドレス。

「確かに、それならインパクトはあるね」

「ああ。コレを——明久が着る」

すごいインパクトだ。

「やめて雄二。メイド服の次にチャイナドレスまで着たら、きっと僕は本物だつて認識されちゃうよ！」

「もう、僕も明久も手遅れ気味だと思うけど……」

まさか僕までメイド服を着るはめになるとは思わなかった。

「冗談だ。コレを秀吉と姫路と島田と蓮にきてもらつ」

「そつかゝよかった」

「僕が着るのは冗談ではないの（かのう）？」

僕にまでチャイナドレスが回ってきた。

「何言つてるのさ。秀吉も蓮もそんなに可愛いんだから着なきゃだめだよ」

「秀吉はともかく、明久が着ないなら僕も着ないからね」

「ちよつと待ちなさいよ！　なんでウチたちが！」

島田さんも便乗してくる。

確かに須川君はチャイナドレスを着たりはしないって言つてたけど、まだ島田さんたちは性別があつて分いいんじゃないかな？

「店の宣伝のためと、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

雄二は明久を利用するつもりらしい。

ここで明久が嘘をついてくれれば――

「大好――愛してる」

明久に期待した僕がバカだったよ。

「お前は本当に嘘がつかない奴だな」

「し、仕方ないわね。お店の売り上げのために、仕方なく着てあげるわ！」

「そ、そうですね！　お店のためですしね！」

姫路さんと島田さん陥落。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？　葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い？　あ、うん。お手伝いするから葉月にもそのお洋服頂戴！」

……チャンス！

「なら、僕が押し付けられた分を上げるよ」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

僕が持っていた分のチャイナドレスを葉月ちゃんに手渡す。本人も喜んでいるようだしコレで一件落着だ。

「ちょっと！　蓮も着なきゃいけないのに！」

「……明久は葉月ちゃんのお願いを聞いてあげないのか？」

「うっ！　分かったよ……」

どうしてそんなに残念がるんだろう？

ガシッ！

ついでに、いつの間にかやってきて裁縫をしていたムツツリー二を止める。

「……何故っ」

「僕が着たら全力でムツツリー二の撮影を妨害することになるけど、良いの？」

「……仕方がない」

どうやら諦めてくれたようだ。

「それじゃあ、三回戦が終わったら着ますね？」

姫路さんが時計を確認しながら話す。

でも、多分雄二は――

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ」

「で、でも、この格好では恥ずかしいというか……」

三回戦からは一般公開が始まる。

そこにチャイナドレスを着た美少女が出れば嫌でも注目を集めると、雄二は考えるだろうから僕は意地でも回避したのだけれど。

「二人とも、お願いだ」

明久が二人に頭を下げる。

姫路さんの転校を防ぐために喫茶店を成功させないといけない、というのもあるだろうけど、今の明久からはなんか邪な目的がある気がする。

「明久、お前は本当に——チャイナが好きなんだな」

雄二がフオローすべきはそこじゃないと思う。

「もしかして吉井君、私の事情を知って——」

「仕方ないわね。クラスの設備のためだし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

明久のいつもと違う態度に、何かを感じたのか姫路さんが何かを言おうとするけど、それを島田さんがフオローする。

「あ、はい。これ位お安い御用です！」

どうやら姫路さんも快諾してくれたよう。

「それなら、すぐに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分達の所属がFクラスであることを強調するんだぞ」

全校の生徒＋外部の人間も見に来る召喚大会でのPR効果は計り知れないものがある。

まさかお客さんもPRに出てきた二人がクラスでただ二人の女子だとは思わないだろうし。

「オツケー、任せといて。行くわよ、瑞希」

「はいっ」

チャイナ服を片手に教室を出て行く二人。

あの二人はよっぽどのがないと負けないだろうし大丈夫だと思う。

「しょうがない。着替えるとするかの」

「ちょ、秀吉、ここで着替えるの？ちゃんと女子更衣室で着替えなきゃだめだよ」

チャイナ服に着替えようとした秀吉を明久が必死で止めている。

「……最近、明久がワシのことを女として見ておる気がするのじゃが」

僕には最初から女扱いに見える。

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」

「うん。雄二の言うとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』でいいと思う。男とか女とかじゃないさ」

「……俺が言ったのはそういうことじゃない」

「……明久？ 性別の問題は結構大きいって口をすっぱくしていつてきたよね？」

「ちよつと待って、蓮？ いや、じよ、冗談だって……ぎゃああああああ！！」

明久には、男が女と間違われるつらさを教えてあげないといけない。

「だんだんお客さんも増えてきたね」

「ああ。流石雄二だよ」

姫路さん達が召喚大会に出向いてからしばらくして、お客さんが増え始めた。

もうだいぶ席が埋まっている。

「たっだいまー」

「ただいま戻りました」

噂をすれば姫路さんと島田さんが戻ってきた。

「丁度良かったよ。二人とも疲れているところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」

「厨房班はムツリーニが何とかしてくれてるけど、ホール班はち

よっと人手が足りないんだ」

女性客に声を掛けるウェイター（変態）を増やすわけにもいかないし。

「良かった。だんだん持ち直してきたのね」

「良かったです」

「女性客も増えてきているんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」

僕と明久はハズレを引いたから良くわからないけれど、お客さんの反応を見ている限り、飲茶の味は相当なものらしい。

女性客が増えた所為でウェイターを選ばなくちゃいけなくなった。

「じゃあ二人とも、ウェイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オッケー」

噂の元になっている二人が加われば、更にお客さんも増えていくだろう。

「君い、注文いいかな」

「はい。かしこまりました」

二人の後姿を見ていると、後ろから声がかかった。

「ねえ君」

「はい」

「君はチャイナドレス着ないの？」

「……は？」

「だって、君も可愛いじゃないか。早くチャイナドレス着てご奉仕してくれよぉ」

……何を言ってるんだコイツ？

「お客様。ここは中華喫茶であつて、お客様が想像されているようないかがわしい店ではありません」

「でも、あつちの三人はチャイナドレスを着てるじゃないか」

「あれは『女子』の制服です」

約一名性別があつてないのもいるが。

「なら君だつてチャイナドレス着なきゃだめだろお」

……シケイ

「はあ……… ったく何処にいてもこつという馬鹿はいるんだな」

「…………… え？」

「自覚がないのがバカの証拠なんだよこの変態野郎！！」

「ぎゃああああああああああ………」

中年小太りのいかにもな感じの変態を処理し、お客さんに向かって呼びかける。

「当店は喫茶店であり、このような迷惑行為及びそれに類する行為をされたお客様につきましてはこの変態と同様の末路を歩んでいただきますのでお気をつけ下さい」

店内の息が荒い奴らが静まり返った。

「アキ、厨房の土屋から伝言。茶葉がなくなつたから持ってきて欲しい、だつて」

ふと島田さんの声が聞こえたのでそちらを見てみると、島田さんが明久に伝言を伝えているところだった。

「ん、わかったよ。先生、ちょっと行ってきたでもいいですか？」

「構わんよ。特に用事があったわけではないのでね」

「？ そうだったんですか？」

明久と話しているのは……教頭？

あの狐また何か企んでるのか？

とにかく用心するに越したことはない。明久を追って空き教室へと向かおう。

「ちょっと良いかね？」

「……はい」

教頭から声を掛けられた。僕を明久のところに向かわせない気だな。

「君、さっきはどういうつもりなのかね？」

「さつきとは？」

「君は先ほど外部のお客さんに暴力を働いただろう。とても許される行為ではない」

「それでは、教頭先生はちょっと露出の多い服を見ただけで盛るような変態に生徒が襲われてもいいとおっしゃるのですか？」

「……いや、そういうわけではないが」

「口頭で注意しても全くといって聞きにならなかったのやむを得ずご退席（処刑）いただいまたです。逆恨みされて根も葉もない噂を流されても困りますので」

「……。」

結局インテリ気取ってても所詮は期を誤りうかつな行動を取る三下

ということだな。

「では、お客様を待たせておりますので」
急いで喫茶店から離れる。
急げばまだ間に合うはずだ。

「逃げんなこら！ 大人しくしてろ！」

「いや、そんな事言われても」
倉庫代わりの空き教室へ着てみると案の定明久と柄の悪い声が聞こえた。

時間を掛けるのがもったいないのでさっさと済ましてしまおう。

「明久、早くしないと料理が滞るよ。あと、そろそろ餡子も切れるころだからもって行ってあげて」

「え？ あ、蓮！ えつと……」

「後は任せておいて大丈夫だから」

「分かった！ じゃあ宜しくね！」

明久と入れ違いになるようにして教室の中へと入る。

「何だデメエは！ 俺は吉井って奴に用がアンだよ！」

「彼はまた別の仕事がありますので僕がお話をお聞きます」

「んだと！ さっさと退けよ！ お前に話す事なんかねえよ！」

「……話があるのはこっちだバカ」

掴みかかってきたピアスを蹴り飛ばす。

少々荒っぽいけど、力づくで黒幕（おそらく教頭）の名前を吐いてもらおう。

——しばらくお待ちください——

「うう……」

「……クソオ……」

「……………」

ヤンキー気取ってる割には根性もないやつらだ。

一分かからずにボロボロのヤンキーモドキが三つできた。

「さて、誰に頼まれてこんなことしたのか吐いてもらうよ」
一番元氣そうな奴の胸倉を掴んで問いかける。

「し、知らない！」

「本当の事言わないとへし折らなきゃいけないんだけど」

「ほ、本当に知らないんだ！」

男に嘘をついている様子は見られない。

「……ふん」

「ヒッ」

僕が何か言葉を発するたびに情けない声を上げておびえている。

「ま、いいや。さつさと帰れ。次に校内でお前らを見つけたら何やつてるかに関らず問答無用で半殺しだから。OK？」

「は、はいっ」

これ以上尋問しても無駄っぽいので三人を解放する。

「……改めて思うけど、蓮って強いよね」

後ろから明久の声がするので振り向いたら、明久が立っていた。

「いや、三人相手するのは難しいんだよ」

「え？ でも特に攻撃喰らってなかったし……」

「……口が聞けるように手加減するのも難しいんだ」

「……」

明久が半笑いの顔で固まっている。

「とにかく、あんまりお店をあけるわけには行かないから戻ろう」
「う、うん」

僕と明久は茶葉と餡子を抱えて教室に戻った。

第二十四問 恋する人の思考回路はどこが狂ってると思う……

バカテスト 物理

問『原子核において、プラスの電荷を持つ陽子を結びつける働きを担っている電荷がゼロの粒子の名前を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『中性子』

教師のコメント

正解です。ちなみに、原子核に陽子を一つしか持たない水素の原子核には中性子はありません。

吉井明久の答え

『重力子』

教師のコメント

物体を結びつける 重力と、吉井君にしてはまともな答えですね。ですが重力子は、重力の伝達を担うとされている素粒子で、現在でもまだ見つかっていない理論上の素粒子です。

鮎川蓮の答え

『反陽子』

教師の答え

そんなものが原子核の中に存在していたら、地球は大変なことになります。

土屋康太の答え

『故障したコピー機』

教師のコメント

最近土屋君の考えが読めるようになってきたと思っていた先生が甘かったようです。

鮎川蓮のコメント

陽子 用紙、電荷 電化（製品）

第二十四問 恋する人の思考回路はどこか狂っていると思う……

明久を襲っていたチンピラをボコボコにしてから二時間がたった。

「明久、そろそろ四回戦だ」

「え？ もうそんな時間なの？」

もう時刻は午後二時を回っている。

喫茶店での仕事が忙しくて、あつという間に時間は過ぎていた。

「あれ？ アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？ 実は私達もそろそろ出番なんですよ」

島田さんの姫路さんがこんなことを言ってるけど、僕の記憶が確かなら明久と裕二の次の対戦相手は島田さんと姫路さんペアだったはずだけど……。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこかいっちゃうの？」

葉月ちゃんが明久のズボンの裾を握っている。

「チビッ子。バカなお兄ちゃんはこれから大事な用事があるんだ。だから大人しく待っていないとダメだ」

雄二が葉月ちゃんを説得している。前から思っていたけど、雄二は意外と子供の扱いに慣れているところがある。

「うっでも」

葉月ちゃんはそれでも頬を膨らませている。

「その代わり、いい子にしていたら——」

雄二は何か交換条件を出すようだ。多分胡麻団子をサービスするかだと――

「バカなお兄ちゃんオトナのデートを教えてくれるからな」
明久を生贄にしゃがった。

「葉月お手伝いしてくるですっ」

「ち、違うんだよ葉月ちゃん！ 僕には君が期待するほどの財力はないんだ！ ねえ、聞いてる？」

明久の静止も聞かずに早速喫茶店の仕事に戻る葉月ちゃん。

「アキ、ちよつと校舎裏まで来て」

島田さんが怖い声を出して明久の肩を掴んでいる。

傍から見れば妹を守る立派な姉に見えるのだろうけど、おそらくその実態は自分の妹にすら嫉妬をするような恋する乙女（般若？）だ。

「美波ちゃん、ちよつと待ってください」

姫路さんが割り込む。明久は助かったと思っていそうな顔だけれど、おそらくその逆だ。

「次の対戦相手は吉井君たちのようですから、召喚獣でお仕置きしたほうが遠慮なく出来ますよ？」

笑顔での死刑宣告。見ているだけでも怖い。

「ちよつと待つて！ 僕の召喚獣はダメージのフィードバック付きなんだよ！？ 姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕自身も酷い目に――」

「フン、望むところだ」

「雄二！ 勝手に僕の生命を左右しないで！」

「雄二、ここで明久が死んだら喫茶店にも影響が――」

「明久なしでも店が回るようにシフトは考えてある」

「――なら別にいいか」

「蓮！そこは僕の味方をしてえ！」

「上等よ。早く会場に向かいましょうか。アキがどんな声で啼くのか楽しみだわ」

島田さん。その発言はぎりぎりだと思う。いろんな意味で。

「いいだろう。そこまで言うなら、明久に何処まで大きな悲鳴を上げさせられるのか、じっくりと見せてもらおうか」

「雄二、早々に明久を見捨てた僕が言えることじゃないかもしれないけど、そんなにあおると本当に明久が死んじゃうよ……………」

――時は流れて――

「蓮よ、そろそろワシらも四回戦の時間じゃぞ」

明久たちが出て行ってからおよそ10分。僕と秀吉のペアにも四回戦の時間が来たようだ。

「次の四回戦に勝てば準決勝じゃったのう」

「うん。そうだけど相手も四回戦まで来るような人だから相当成績もいいはずだし、気を引き締めていかないかね。教科も古典だし」

説明すると、僕は数学や英語が得意なんだけど、国語系、つまり現国と古典の点数は余りよくない。せいぜい350点くらいだ。

― 召喚大会会場 ―

「やあ。君達が勝ちあがってきたのかい？」

「久保君？」

意外だ。久保君はこんなイベントごとにあまり興味はなさそうだったのに。

「どうして久保君はこの召喚大会に？　あまり目立ちたがりには見えないけど」

「……賞品がね」

…………… 明久のためにも勝ってあげないと。

「しかし、久保のペアは誰じゃ？　同じＡクラスかの？」

「秀吉、Ａクラスの佐藤美穂さんだよ。ほら、Ａクラスとの一騎打ちのときに明久を物理でボッコボコにした」

「ああ。そうじゃったの」

どうも佐藤さんは影が薄いようだ。

「でも、確かにいいチームを組んだね」

「？　何故じゃ？　そこまで仲が良いようには見えんのじゃが」

「久保君は文系の教科が得意だよな」

「ああ、そうだね」

「秀吉、佐藤さんは物理の点数が良かったよな」

「そうじゃが……まさか！」

「そういうこと。久保君に不足している理系の点数を理系が得意な佐藤さんが補って、佐藤さんが苦手であろう文系教科を久保君がフォローする。コレが久保君たちのペアの戦い方だね」

仲のいい人とペアを組んで、チームワークで勝ちあがろうとするペアもいれば、こういう風に自分の穴を埋めてくれる人とペアを組む方法もありだ。

「では、始めてください」

立会いの先生の声がかかる。

「『『『試験召喚』』』』」
サモン

四人全員がいつせいに召喚獣を呼び出した。

『古典 Fクラス 鮎川蓮 & 木下秀吉

311点 & 64点

VS

Aクラス 久保利光 & 佐藤美穂

396点 & 224点

』

僕と秀吉の点数を足しても、久保君一人にすら届いていない。

「ここまで点数差があるとは思わなかったよ」

「済まないけど、ここは譲ってもらおうよ！」

「そうは行かんのじゃ！」

二回戦のときみたいに一対一に持ち込むことは出来ない。

それぞれが不利な戦いを強いられる上に秀吉は佐藤さん相手でも勝つことは出来ない。

「秀吉！」

「分かったのじゃ！」

「『！？』」

秀吉が相手の召喚獣に突撃する。
まさかここまでバカ正直に突進してくると思わなかったのか、久保君、佐藤さん二人とも反応が遅れた。

「セイヤッ」
「くっ」

秀吉の召喚獣は佐藤さんの召喚獣に切りかかる。
佐藤さんの召喚獣の得物は鎖鎌。距離を詰められると武器の特性が生かし辛い。

「よそ向いている暇はないよ！」
「勝負だ、鮎川君」

僕の召喚獣は、久保君の召喚獣に向かって走り出す。
久保君も、無理に佐藤さんと対峙している秀吉を狙おうとはせずに、僕と一対一に持ち込むつもりらしい。点数には開きがあるし当然といえば当然。

「こっちは一対一に持ち込むつもりはないけどね！」
「なにっ！」

久保君の召喚獣に切りかかる、と見せかけて体当たり。
態勢が崩れた久保君を放って、秀吉の元へ走る。

「秀吉！ ジャンプ！」

僕の声で秀吉の召喚獣が思いつきりジャンプする。
僕の召喚獣は秀吉が跳んだことで出来た隙間に体を入れて、佐藤さんの召喚獣の足を掬う。

「え？ うわっ！」

転倒した佐藤さんに秀吉の召喚獣が大上段から長刀を振り落とす。
僕の召喚獣もすぐに立ち上がって、佐藤さんの召喚獣に向かって右手の剣を突き出す。

『古典 Aクラス 佐藤美穂

0点 』

何とか佐藤さんの召喚獣を倒すことが出来た。

「くっ！」

「なるほど。最初から二対一に持ち込むつもりだったのかい？」

「そういうことじゃ」

「久保君の召喚獣の体勢さえ崩せれば行けると思ったからね」

『古典 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

309点&51点

VS

Aクラス 久保利光

378点 』

合計点数の差は18点。

さっきの体当たりで久保君の点数を削れたのが良かった。

「秀吉、無理はしないで。二対一で攻めることに意味があるんだから」

「了解じゃ」

「フツ、そう簡単には負けないよ！」

三人が一斉に走り出す。
もちろん僕の召喚獣が前を走り、秀吉がそれに続く形だ。

「おりやつ！」

「セイッ！」

僕と久保君の召喚獣が切り結ぶ。お互いに武器は片手持ち。
両者共にダメージもないまますれ違う。

やっぱり、二対一なのが利いてる。久保君は両手の武器を両方僕に使うことが出来ない。もしそんなことをしてしまうと、秀吉に致命的な隙を曝すことになるからだ。

後ろから迫る秀吉の一撃は久保君の召喚獣にあっさり片手で受け止められてしまった。

「秀吉、久保君の片腕を抑えて！」

「分かったのじゃ！」

秀吉の召喚獣が、久保君の召喚獣の左腕を両腕で押さえ込む。

「くっ、離してもらっよう！」

「させると思う？」

久保君の召喚獣が振り上げた右手を、僕の召喚獣が剣で押さえる。
今動けるのは……僕の召喚獣の左手！

「うおりゃあつ！」

渾身の力をこめて、僕の召喚獣が左手を振るっ。

鋭利な刃物のような指先は、久保君の召喚獣を切り裂く。

「それっ！」

「ぐっ!？」

力が弱くなつた久保君の召喚獣を僕の召喚獣が本日二回目の体当たりで弾き飛ばす。

「秀吉い！」

「はあああっ！」

転んだ久保君の召喚獣に秀吉が長刀を突き出す。

長刀は久保君の召喚獣の胸に刺さり、久保君の召喚獣はゆっくりと消えていった。

『古典 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

298点&33点

VS

Aクラス 久保利光

0点

』

『勝者、Fクラス、鮎川蓮、木下秀吉ペア』

先生の勝ち名乗りを受け、僕達の準決勝進出が決まった。

―Fクラス―

四回戦を終え、喫茶店に戻ってみると更に混雑していた。店の中には明久や姫路さん達の姿もある。

「ただいま」

「あつ、蓮、お帰り。どうだった？」

「勝ったよ」

「そうか。とりあえず早く着替えて手伝ってくれ」

明久と話していると、雄二が催促する。

店内はお客さんでこった返しているので、店側としてはまさに『猫の手も借りたい』状態だ。

「そういえば、明久ペアと姫路さんペアはどっちが勝ったの？」
明久を処刑するとか何とか言っていたので気になる。

「……雄二だね」

「？ 明久は同じペアなのに負けじゃったのかの？」

「坂本の一人勝ちね」

大体分かった。

「とりあえず、仕事に戻ろうか。さっきから変な視線も感じるし」
おそらくはウエイトレス目当てでやってきたお客さんの視線なんだろうけど、気持ちが悪い。出来ることなら視線を感じた瞬間に退場（処刑）させたいところだ。

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんね」

「そうね。ちよつと視線が気になるけど、売り上げのためにも頑張りますか！」

「はいっ！ 葉月も頑張りますっ」

「さて、じゃあ秀吉、チャイナドレスに着替えて」

「明久よ、ワシは一応男なのじゃが……」

ついに秀吉の言葉に『一応』が付くようになった。

喫茶店の売り上げのために、しぶしぶ着替えに行く秀吉。

その後姿を見ている僕に、明久が近づいてきて、

「蓮もチャイナドレスに着替えないと」

ふざけたことを抜かしやがった。

「……どうして僕が着替えないといけないのか三文字以内で説明してくれるかな？」

「短っ！ それもう理由聞く気ないよね！」

「理由を聞く気もないし、チャイナ服を着る気もない。どうしても
つて言うんなら……」

「言うんなら？」

「……明久や雄二、ムツツリー二も道連れにする」

「……着なくていいです！」「」

言った瞬間に名前が上がった三人からすごい速さで返事が来る。
と、というか自分は着たくないのに人には無理やり着せようとしてた
んだ……

第二十五問 テストで保健体育の点数だけやたら良いつて奴クラスに一人は絶対

PCのファイルをいじくつて、ディスク容量をあげようとしたら、
今まで使ってたChromeが使えなくなりました。

さらに新しくインストールすらできないという状況（泣）

仕方が無いので、これからは動きの遅いIEで生きていきます……

第二十五問 テストで保健体育の点数だけやたら良いつて奴クラスに一人は絶対

バカテスト 現代社会

問 『男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる部分における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を教授することが出来、且つ、ともに責任を担うべき社会』のことをなんと言うか答えなさい。

姫路瑞希の答え

『男女共同参画社会』

教師のコメント

正解です。この社会を実現するために1999年に「男女共同参画社会基本法」が制定されました。男女が平等な権利を持ち、お互いに助け合える世の中が早く来てほしいものですね。

鮎川蓮の答え

『文月学園において実現できないもの』

教師のコメント

間違いですが否定できません。

吉井明久の答え

『美、美波様！ どうか命だけは——』

坂本雄二の答え

『しょ、翔子、俺は何もやってなギャアアアア——』

教師のコメント

ますます否定できません。

第二十五問 テストで保健体育の点数だけやたら良いつて奴クラスに一人は絶対いるよね

「それじゃ、準決勝に行つて来るね」

「僕と秀吉も時間だから抜けるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね！」
「わかってるって」

大繁盛の喫茶店の中で動き回ること一時間。

いよいよ準決勝の時間になった。決勝戦は二日目の午後に予定されているから次の試合が今日ラストになる。

そして分かってはいたけど僕への応援はないんだね……

「？ 蓮、どうしてうなだれておるのじゃ？」

「……いや、人気の格差を思い知らされていたんだ」

「明久、蓮。次の試合は特に負けられないからな」
雄二が発破をかけてくる。

雄二の目は、今までで最上級にマジだ。それもそのはずで次の相手は、

「霧島さんと、木下君のお姉さんが相手なんて、大変そうですね……」

二年生の成績上位筆頭コンビ。優勝候補の霧島さん、優子ペアと明久たちが当たる。

「大丈夫だよ。雄二に作戦があるみたいだし」

「まあな。あんなバケモノどもとともに勝負するほどバカじゃない。うまくやってやるさ」

雄二の作戦か。

秀吉と優子を入れ替える、とか？

いくらなんでもそんな単純な訳ないよね。前の試召戦争でも姉弟入れ替わりネタは使ってるんだし。

「で、雄二、作戦ってどんなの？」

四人で会場に移動しながら明久が尋ねる。

「今回は俺達だけじゃなくて秀吉や蓮、ムッツリー二にも協力してもらおう」

嫌な予感。

「秀吉とムッツリー二？」

「ああ。あの二人には弱点はないが、付け入る隙はある」

「狙いは秀吉の姉、木下優子だ。奴を利用して一気に戦局を傾ける」

「秀吉のお姉さん（優子）？ そんなことしなくても、雄二が霧島さんとうまくやってくれればいいと思うんだけど」

「うるさい黙れ」

不機嫌そうな雄二に会話を打ち切られた。

僕や明久のことは嬉々としてからかうくせに。

「で、雄二、僕が協力する内容ってのを教えてくれないかな。まだ聞いてないんだけど」

「……お前には試合直前で話す。お前はバックアップだから本命の作戦が成功してくれれば何もしなくて良い」

その本命の作戦ってのが怪しいというか不安というか。

もう、優子に秀吉の入れ替え作戦は通用しないと思うんだけど……。

「とにかく気合を入れる。この戦いに負ければ明久は大好きな姫路を失うし、俺は今後の人生を失う。命がかかっているとさえ思え！」

「その『大好きな』てのは止めてほしいけど了解！ 絶対に負けるもんか！」

「……先に試合するのは僕と秀吉なんだけど」

二人して盛り上がるのはいいけど、僕と秀吉のことも忘れないでほしい。

「そうだったな。お前らの相手は誰なんだ？」

「常夏コンビ」

僕が言い放った瞬間、明久と雄二の表情が固まる。

「どしたの？」

「……スマン」

何故いきなり謝るの！　なんかすごく不安なんだけど！

「まさか常夏コンビがここまで上がってくるとは思わなかった。てつきり生活指導室に監禁されているものとはかり……」

いくら鉄人先生でも召喚大会くらいは出してくれると思うけど。

「別に常夏コンビだからどうってことはないと思うんだけど」

「……次の教科は保健体育だ」

え？

「ちょっと待って、準決勝なんだよ？　何で態々僕の苦手教科を持つてきたのさ！」

「いや、翔子に婚約を取り消させるためには優勝しないといけなくてな、準決勝で蓮が負けてくれれば優勝しやすいと思った」

「バカヤロー！！　それじゃあ僕達は最初から決勝に進ませない気

だつたな！」

「いや、本当にスマン。まさかお前らの相手が常夏になるとは思わなかった」

くつ、常夏コンビにだけは負けなかったのに！

「……常夏に、負ける僕ってどうなのよ……」

「蓮よ、そんな戦う前から諦めるでない」

秀吉が励ましてくれてるけど、僕の保健体育の点数で常夏をどうこう出来るとは思えない。仮にも向こうは3年のAクラスなんだし。

「と、とにかくお前らが負けても俺達が決勝で敵を取ってやるからきつちり死んで来い！」

雄二に送り出されてしまった僕達はステージへ。

「秀吉」

「なんじゃ？」

「とりあえず作戦」

秀吉と、試合開始時刻まで、可能な限り作戦会議をする。
ここが正念場だ。

「おい、あいつらFクラスの奴だぜ？」

「おいおい、Fクラスのクズがどうやって準決勝まで上がってきたんだあ？ 八百長かあ？」

僕に二度もボコボコにされたくせに威勢だけは良い常夏コンビ。
僕達がFクラス所属ということで召喚大会では負けることはないと

思ってるんだろう。

実際保健体育では勝てないけど。

「八百長なんか出来るわけないでしょ。ちゃんと実力で上がってきましたよ、先輩」

「どうだかな。実力でFクラスのゴミ共が勝ちあがってこれるほどこの召喚大会は甘くないんだよ！」

「そうですね。……アンタ等も教頭のバックアップを受けてるんだろっしな」

「「「!?」「」」」

一応観客や立会いの先生には聞こえないような声量で言い合う。

「手前、気づいてやがったのか」

「まあ、一応。僕自身にも教頭は接触してきましたしね」

「……ちっ」

「聞いておきます。教頭先生に協力している理由はなんですか？」

「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ、受験勉強とはおさらばだ」

何の臆面もなく坊主の方（確か夏川だったと思う）は言い切った。

「……………そっちの、常村とか言うのも同じ理由か？」

「まあな」

くだらねえ。

こいつらはそんな理由で僕達の清涼祭をぶち壊そうとしていたってわけか。

「秀吉」

「了解じゃ」

こいつらはなんとしてもここで潰す！！

「では、始めてください」

「『『『試験召喚』』』」
サモン

常夏の召喚獣はオーソドックスな剣と鎧の装備。
根は腐っても高得点者なのか質はよさそうだ。

『保健体育 Aクラス 常村勇作&夏川俊平

198点&207点

』

200点前後。やはりAクラスに入っているというだけはある。

『保健体育 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

29点&69点

』

こちらとの戦力差は明らかだ。僕なんてこれでも自己最高点なのに
(保健体育で)。

「『ギャハハハハ！ 何だその貧弱な点数は！』」

うるさい。

「こんな奴らに掛ける時間が勿体ねえな。さつさと終わらせてやる
ぜ！」

坊主の召喚獣が僕に、モヒカンの召喚獣が秀吉に突っ込んでくる。

僕と秀吉は、その一撃を避け、時に召喚獣を交差させながらやり過ごし続ける。

「おいおいなんなんだよ。さっきから逃げてばっかじゃねえか！どうせ負けるんだからさっさとやられやがれ！」

狙い通り、常夏は良い感じにヒートアップしてきた。武器での攻撃にこだわり、動きもだんだんと力任せになってきている。

その上、僕と秀吉が牽制のために繰り出しているパンチやキックを気にも留めていない。

『保健体育 Aクラス 常村勇作&夏川俊平

151点&166点

』

二人ともだいぶ点数が減ってきた。

それに対して僕と秀吉は基本的に相手の攻撃に当たらないことを最優先に動いているため、召喚獣は殆ど消耗していない。

『保健体育 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

25点&62点

』

そろそろ試合を始めて10分。

「おい、どうして俺達の点数がこんなに減ってやがんだ？」

「常村、何言って……マジかよ！」

常夏もようやくこの事態に気づいたらしい。

「秀吉！」

「了解じゃ！」

秀吉に声を掛けて、作戦の開始を合図する。

秀吉は基本的に今までと同じ動き。ただ、今までよりもあまり現在位置を動かないようにしてもらった。

「さっさと死ねや！」

「うおっと！」

僕は坊主の召喚獣を相手しながら、気づかれないように移動していく。

そして、僕、坊主、モヒカン、秀吉の召喚獣が一直線に並んだ。

「そりゃあつ！」

「なっ！ くそっ！」

僕は右手の剣を思いっきり投げつける。

まさか自分の得物を投げけるとは思わなかったのか、坊主は完全には避けきれずに剣に掠った。

「へっ！ そんなんで倒せると思ってたのかよ！」

「思ってないし、倒そうと思って投げた剣じゃない……アンタには（……）ね」

「何を言ってー『ぐあつ！』何っ！！」

坊主の召喚獣の後ろでは、モヒカンの召喚獣の背中に僕が投げた剣が深々と突き刺さっていた。

「秀吉！！」

「この好機、逃しはせん！！」

モヒカンの召喚獣の動きが止まり、その頭に秀吉の召喚獣が長刀を

突き出す。そのまま首を飛ばすように横に振るい、モヒカンの召喚獣は消滅した。

「ナイス！ 秀吉！！」

「くそ、常村！——よそ見してていいのか！」

「ちゃんと見て——うつ！」

坊主の本体から一瞬目を離れた僕の目に何かが飛び込んできた。

これは——砂利？

「お前を倒して、形勢逆転だ！」

坊主が僕の召喚獣に剣を振り下ろす。その剣を左手で横からはじくように受け流す。

その後も続く坊主の猛攻。この際小さな動きで繰り出されるパンチは無視する。

召喚獣の踏み込み、振るわれる剣。その微かな『音』を頼りに回避し続ける。

「くそつ！ 見えてねえはずなのになんで当たらねえんだよ！」

「……僕だけに集中してて良いんですか？ 先輩」
「しまった！」

坊主の召喚獣が振り向いたときには、既に秀吉の召喚獣が長刀を振りかぶっていた。

キンッ！

秀吉と坊主が鏖迫り合いをする。

そのがら空きの背中を、左手（忘れている人もいると思うけど武器

になつてゐる）で切り裂いた。

『保健体育 Aクラス 常村勇作&夏川俊平

0点& 0点 』

『保健体育 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

6点& 32点 』

『2-F所属。鮎川蓮、木下秀吉ペアの勝利です』
先生の勝ち名乗りが上がる。

「そ、そんな……」

「まさか……」

自分達が負けるなんて微塵も思つてなかったのだらう。
常夏コンビはその場で崩れ落ちた。

「『戦いは、正を以て合、奇を以て勝つ』、冷静さを欠けば敵の奇法に対抗できませんよ。先輩」

常夏コンビの敗因は、冷静さを欠いて、力任せに攻めてきたことだ。
『戦いは、正を以て合、気を以て勝つ』。つまり、戦いは正攻法で敵と対峙し、戦況に合わせた奇法で勝利を掴むもの。僕達は防御に徹するといった正攻法で対峙し、武器をペアが戦っている相手に投げる、という奇法で勝った。

常夏コンビが冷静に攻めてきたら、こちらでも作戦を実行しにくかつただらう。

「しかし、よく勝てたもんだな」

僕達がステージから降りると、雄二が驚いた表情で近づいてきた。

「そりや僕達だって常夏コンビには負けたくないからね。ちょっと博打になるけど倒せそうな策を考えたんだよ」

「そりや結構なこと。はあ、これで明日の決勝は蓮たちとか」

「その前に霧島さんと優子に勝ってからね」

「ああ。任せろ。絶対に勝つ！」

いよいよ、明久&雄二の試合が始まる。

第二十六問 ラブコメ的展開って、よく死人が出ないよね。

バカテスト 日本史

問『南北朝時代を舞台に、鎌倉幕府の滅亡や、南北朝の分裂、室町幕府2代将軍足利義詮の死と、細川頼之の管領就任などを描いた軍記物語を何と言うでしょう』

姫路瑞希の答え

『太平記』

教師のコメント

正解です。太平記は、騒乱を描いていますが、名前の「太平」は平和を意味するため戦いで命を落とした人々への怨霊鎮魂的な意味もあるといわれています。

鮎川蓮の答え

『朝鮮戦争』

教師のコメント

南北違いです。

土屋康太の答え

『……………興味が無い』

教師のコメント

興味が無くても、テストですので、しっかり考えて答えを書いてください。

鮎川蓮のコメント

軍記物は女性がほぼ出てこないから。

吉井明久の答え

『枕の源氏』

教師のコメント

……度肝を抜かれました。

第二十六問 ラブコメ的展開って、よく死人が出ないよね。

常夏コンビとの準決勝（保健体育）に辛勝した僕と秀吉は、雄二と明久の応援に来ている。さつきから秀吉の姿が見えないのだけれど、雄二の言っていた『作戦』に関係あるんだろうか。

『お待たせいたしました！ これより準決勝第二試合を開始します！』

審判兼立会の先生の声が会場に響く。

『出場選手の入場です』

階段を上がって、明久と雄二が登場した。向こう側には霧島さんと優子の姿も見える。

「……雄二、邪魔しないで」

「そうはいくか。俺にはまだやりたいことがたくさんあるんだ！」
「そこまで霧島さんと行きたくないなら最初にしっかり断っておけばいいのに。」

「……雄二、そんなに私と行くのが嫌？」

き、霧島さんの必殺上目遣いだ！

可憐な少女にここまでされて無下に断れる男はもはや人間じゃないと思う。

「ああ。嫌だ」
人間じゃない。

「……やっぱり、一緒に暮らして分かり合う必要がある」
霧島さんもあまり気にしてない様子で、すぐに返す。

それにしても、この大歓声で聞こえていないとは言っても、こんな

大胆なことをこれだけの人数が見ている前で言っただけの霧島さんは相当な勇者だと思う。それが雄二以外目に入っていないか。

僕的には後者だと思う。

「ハッ！ 残念だったな。そんな寝言は俺達に勝ってから言うことだ！」

雄二がこんな台詞を言うともものすごく悪役臭がすると思うのは僕だけだろうか。

「……分かった。そうする」

雄二vs霧島さんの痴話喧嘩も終わり、いよいよ試合が始まる。

「雄二、作戦はどう？」

明久が雄二にささやいている声が聞こえる。

なぜ歓声鳴り止まぬこの会場で選手のささやき声まで聞こえるかというと、僕がいるのはステージ脇の明久たちに一番近い位置だからだ。ボクシングで言うところのセンコドの位置にあたる。

「任せておけ、抜かりはない。——頼むぞ秀吉！」

雄二が優子に向かって秀吉と呼びかける。

悪い予感が当たったようだ。

「……ふふっ」

優子が口に手を当てて笑っている。

そりゃ本人からすれば爆笑物だと思うけど。

「秀吉、もう木下さんの演技はいいから、早く僕らと――」

「秀吉？ 秀吉ってあのゴミのこと？」

優子がステージ脇の一角を指差す。そこにあったのは――

「ひ、秀吉！？ どうしてそんな姿に！」

ボロボロにされた挙句に手足を縛られた秀吉の姿だった。

優子…… 仮にも自分の弟をゴミ呼ばわりは止めようよ。

「バ、バカな！」

雄二が目を大きく見開いている。

「…… 雄二の考えていることくらい、私にはお見通し」

霧島さんが笑みを浮かべている。

明久は、まるで『今回は幼馴染という立場が仇になった』みたいなことを考えていそうだけど、別に幼馴染じゃなくても試召戦争のときの雄二を見れば気づくと思う。

「ま、匿名の情報提供もあっただけだね」

優子が妙なことを言った。

匿名？ 僕はしてないし、秀吉やムツリーニがばらすはずもない。僕ら以外だと、常に雄二と明久をマークしている相手…… ああ。教頭か。

『蓮、俺達を売ったな！』

雄二が目で訴えてくる。

『僕じゃないし、秀吉やムツリーニでもない。おそらくは常夏コンビを操っている黒幕だと思う』

僕も目で返事をする。

雄二は忌々しそうな顔をした後、黙り込んでしまった。

「く……すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……」

転がされていた秀吉が起き上がって唇を噛んでいる。

別に秀吉がムツツリー二並みの隠密行動を取れていたとしても、今回の結果は変わらなかったと思う。

「……………（パシャパシャパシャパシャ！）」

「ムツツリー二何時の間に！」

ムツツリー二がカメラを構えて一瞬のうちに現れたかと思うと、縛られている秀吉の姿をカメラに収めていた。

「撮影なんてしてないで（その写真）、早く（後）秀吉^での縄（売）を（って）解いて（欲）あげて（しい）よ！」

「明久、本音が混ざっているぞ」

もう、明久は試合前の緊張感といったものがないんじゃないだろうか。

「……………了解」

ムツツリー二は明久の言葉に頷くと（おそらく二つの意味で）秀吉に駆け寄って、その縄をすばやく解いた。

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

優子の降伏勧告。雄二は顔をゆがめていると思っていたら、思いのほか涼しげな顔をしている。

「フツ、作戦が一つしかないと思っていたのか？」

こんなことを言っている。

（蓮、お前の出番だ）

雄二がこちらに声を掛けてくる。

（何をすればいいの？）

秀吉が失敗した時用のバックアップといってたけど、僕は優子にも霧島さんにも化けることは出来ない。

（木下姉を口説け）

「もうお前ら負けちまえ！」

つい大きな声が出てしまう。

うわっ、優子がものすごく怪しんでこちらを見ている！

（とにかくやってくれ、頼む！）

（どうして優子なのさ！ それに口説けなんて、そんなことしたら殺されるよ！）

（大丈夫だ。口説かれて嫌な気持ちになる女子はいない）

（こんな大勢の前で口説かれて良い気分になるのは雄二に口説かれた霧島さんくらいだよ）

（変なことを言うな！ とにかく俺達の勝利のために頼む！）

（僕の命が危険なんだよ！）

こんな大勢の前で優子を口説いたりしたら、冗談抜きで殺されかねない。

（俺が口説けば木の下と翔子に殺されるが、お前が口説く分には大丈夫だ！）

「その自信はどこから来るんだ！」

「さつきから何を話しているのかしら？」

「「うつ」……」

優子が話しかけてくる。

（とにかく、こうなった以上やるしかない！）

（くっ……分かったよ）

一度胸の前で十字を切手から優子に向き合う。

「優子」

「……何よ」

「……初めて会ったときから、優子のことが好kグオフォツ!!」

な、何て素早さだ……見えなかった……

「成程。惚れた相手にここまで言われれば照れ隠しもしたくなるか」

「にゃ、にゃにをっ！」

意識がなくなる直前に、雄二と優子の話し声が聞こえた気がした。

「うつ、うつん……」

「あ、気がついた？」

僕が目を開けると、目の前に優子の顔があった。

えっと、僕は今寝ているはずで、顔が向いている方向は上のはず……。

それなのに、優子の顔が正面に見えるってことは優子は僕を上から覗き込んでいるってことで……って、この体勢は！！

体を起こして確認してみると、さっきまで僕の頭があった位置に優子の足があるわけで。

所謂『膝枕』という奴だ。

ヤバイ。確認してみると、メチャクチャ恥ずかしい。

「えっと……どれくらい？」

「な、何が？」

「え、そ、その……」

「何よ」

「……どのくらい膝枕してたの？」

「ふえ！ え、えっとまだ五分くらいよ」

「そう」

（思ったより早く気がついちゃうんだから……）
優子が何か呟いている。

「え？ 何か言った？」

「なんでもないわよ！」

何故僕が怒られるんだろう。

「そっといえば、準決勝はどうなった？」

「えつと……アタシ達の負けよ」

「えええっ！　なんで？」

真つ向勝負で勝てる相手ではなかったから、まだ何か作戦でもあったんだろうか。

「……それは、本人か、クラスの人から聞いて頂戴」

優子の表情が微妙なものになる。

まあ、優子の負けず嫌いも筋金入りだから、負けたことにショックを受けているのかもしれない。

「それじゃあ、雄二と明久を探してくるね」

「うん」

優子と別れ、明久たちを探す。

『霧島さん！　雄二には決勝もあるからクスリは許して！』

僕がステージの上にかかるのと、明久の叫び声が聞けてくるのはほぼ同時だった。

「……えつと、どういう状況？」

「あ、蓮！　目が覚めたんだね！」

「……僕が気絶したのはその目が虚ろになってる奴のせいなんだけど」

まあ、もう既に報いは受けているみたいだから許してあげないこともない。

「とりあえず、秀吉は先に喫茶店に帰っててよ。雄二は僕と明久で

何とかしておくから」

「分かった。お主達もあまり遅くならんようにの」

秀吉は先に喫茶店に戻ってもらう。

秀吉目当てで喫茶店にやってくるお客さんもいるから、あまり遅く
なると売り上げに影響するかもしれない。

男目当てで来る男っていうのもちよっと、いやかなり違和感がある
んだけど。

「明久、雄二はどうして死んだ魚みたいな目をしてるの？」

「えっと、それはカクカクシカジカ——」

僕が優子に気絶させられた後、明久は雄二にプロポーズ（嘘）を無理やりやらせて、霧島さんを懐柔したらしい。

そんでもって試合後に霧島さんが雄二を持ち帰ろうとした結果がこれか。

文月学園の女子には多少思考回路がおかしい人が多い気がする。
いや、FFF団のことを考えると、男子もちよっとおかしい。

「でも、霧島さんに変な薬を盛られたってことは、雄二は今日中の
復帰は難しそうだね」

使われた薬の種類によっては明日もこれないかもしれない。

「いや、大丈夫だよ」

明久はそんなことを言うと、雄二の首根っこを持って、トイレに入
っていった。何をするつもりなんだろう。

「ホラ、雄二、起きろ！」
「ちょ」

明久は雄二を洗面台の前に立たせたかと思うと、いきなり雄二の腹を殴った。

ガードも何も取らずに、男子高校生の一撃をもろに受けた雄二は洗面台に吐いている。

「……明久、いくら普段酷い目にあってるからって、いきなりそれは酷いんじゃないかな」

「違うよ！ これは雄二に薬を吐かせるためにやったんだよ！」
知ってるよ。

ただ、パンチを繰り出す明久の顔があまりにも嬉々としていたものだから。

「じゃあ、次は日陰に寝かせるかして……」

「起きろつつてんだよ！」

「あ、明久あ？」

明久は雄二の顔を、水を張った洗面器に突っ込んだ。

そこは普通日陰や風通しの良い場所に寝かせて、目が覚めるまで待つものだとワタクシは思うわけですが、どうやら文月学園では違うらしい。

「ゴボゴボゴバア！ ……ハッ！ ここは」

そんないい加減な処置で復活する雄二も相当常識が通用しないと思う。

「明久、貴様……」

「はいはい、積もる話は教室に戻りながらしようよ」

雄二も復活したことだし、早く手伝いに戻らなきゃ。

あんまり遅くなると、明久が島田さんや姫路さんに殺されかねない。

―教室へ移動中―

「明久、今日という今日は貴様をコロス」

「あはは。やだなあ雄二、目が怖いよ」

雄二が明久を殺すなら、僕も雄二を殺させてもらう。

「だいたい、雄二の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないか。相手はあの霧島さんなんだから、十分考えられた事態のはずだよ？」

「ぐつ。それを言われると反論できん……」

何度も言うけど、別に霧島さんじゃなくても考え付くと思う。

実際に雄二の作戦を読んで霧島さんと優子に匿名で情報提供している人もいるんだし。

「ところで、姫路や島田は教室にいるのか？」

「あつ！　そうか、忘れてた！」

「？　確認はしてないけど、いるんじゃないの？」

秀吉を帰らせてからだいぶ立つし、喫茶店も繁盛し始めてから、そんなに多くの人が休憩できるわけじゃなくなっただからクラスの大半は働いているはずだ。

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずなんだが……」

「常夏コンビも死んだからな……」

『勝手に殺すなあ！』

はっ！　今何か聞こえた気がしたぞ……気のせいかな。

雄二が気にしているのは喫茶店への妨害活動のことだ。今日の午前

中から常夏コンビが店への風評被害をもたらしてくれたけど、その常夏コンビが召喚大会で敗れた今、そして雄二と僕という抑止力が教室から離れている今が仕掛けるには絶好のタイミングのはずだ。

「……………雄二」

教室の前までやってくると、出入り口の扉の前に立っていたムッツリーニが駆け寄ってきた。

「……ウエイトレスが連れて行かれた」

「ええ！ 姫路さん達が！？」

「しまった！ やられたか！」

「やはり、俺や明久、蓮と直接やりあっても勝ち目がないと考えたか。当然といえば当然の判断だな」

おそらく教頭が差し向けたであろうチンピラ三人組をボコボコにした時点で、次は僕達の周りを狙ってくると予想できたはずなのに！

油断した！

「ってそんなことより、姫路さん達は大丈夫なの！？ 何処に連れて行かれたの！？ 相手はどんな連中！？」

「落ちて着け明久、これは予想の範疇だ」

「え？ そうなの？」

「ああ。もう一度僕達に直接ちよっかいをかけてくるか、僕たちが阻止できないタイミングで喫茶店に妨害をかけてくるか。そのどちらかで妨害工作をしてくるとは予想できたからね」

今回は、ウエイトレスを連れ出す方法で来たか。

たしかに僕達の喫茶店の人気が出た最初の理由はウエイトレスのレベルの高さだ。その人気の元のウエイトレスを連れ出されれば、喫

茶店の売り上げにも多少どころじゃない影響が出るだろう。

「なんだか、随分と物騒な予想をしてたんだね」

「引つかかることが随所にあつたからな」

学園長室で今回の召喚大会の出場が決まったときから、雄二は何か考えている時間が増えた気がする。おそらく、教頭が黒幕、ということにも気づいてると思う。

「取りあえず、被害の確認だ。ムツツリーニ、誰がさらわれたの？」

「……………姫路に、島田姉妹。それに木下姉妹」

「ちよつと待つて！ どうして優子が？」

「……………たまたま来ていた」

僕と別れた後、Fクラスに来ていたってことが…………。

「……………行き先は分かる」

「本当？ ムツツリーニ」

僕の言葉に無言でムツツリーニが取り出したのは何かの機械…………と
どうか何かの受信機。

「なにこれ？ ラジオ見だいに見えるんだけど」

「……………盗聴の受信機」

「オーケー。敢えて何でもってるかは聞かないよ」

クラスメイトに軽犯罪者がいて助けられるとは思わなかった。

「さて、場所が分かるなら後は簡単だ。かるくお姫様を助け出す
としましょうか、王子様？」

「そうだね。僕達のせいで関係ない人を被害に合わせるわけには行
かないよね？ 王子様？」

「そのニヤ付いた目が気に入らないけど、今は雄二に感謝しておく

よ。姫路さんたちに何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」

「……それが向こうの目的だろうがな」

「え？」

「とにかく、今は皆を助け出すことが先決だ。僕と明久、雄二が表で暴れるから、ムッツリー二は隙を見て裏から皆を助けてあげて」

「……………わかった」

「蓮、僕らが暴れるってどういうこと？」

「昔から王子様の役割は一つしかないよね」

「王子様の役割って？」

「「お姫様をさらった悪者を退治することさ」「」

何処の誰かは知らないが、地獄を見せてやる。

第二十六問 ラブコメ的展開って、よく死人が出ないよね。（後書き）

今回の投稿で、ストックが完全になくなりました。

遅筆ながらも頑張りますので、今後も生暖かく（笑）宜しく願います。

第二十七問 物理法則や、人間の理から外れていなければチート能力ってありな

今回の話は、色々やってしまった感があります（汗

ありえねーだろ、と思われる方もいらっしやると思いますが、温かい目で見ていただけると幸いです。

第二十七問 物理法則や、人間の理から外れていなければチート能力ってありな

バカテスト 現代社会

問 『日本国内における、銃は刀剣類の所持を取り締まる法律をな
んというでしょう』

姫路瑞希の答え

『銃刀法』

鮎川蓮の答え

『銃砲刀剣類所持取締法』

教師のコメント

二人とも正解です。鮎川君の答えが、この法律の正式名称になります。

坂本雄二の答え

『翔子とお袋にだけは絶対に持たせてはいけない』

教師のコメント

霧島さんと、坂本君のお母さんに限らず、一般人は持つてはいけません。

吉井明久の答え

『ガンナー以外が銃を装備しても当たらない』

教師のコメント

当たる当たらないの問題ではありませんし、君はいい加減ゲーム

から離れなさい。

第二十七問 物理法則や、人間の理から外れていなければチート能力ってありなんだろうか？

――前回までのあらすじ――

なんだか、僕まで酷い目にあつた召喚大会準決勝が終わり、つかの間の喜びを味わいながら喫茶店の戻ってみると、ウエイトレスがさらわれたって言うじゃないか！

え？ 優子も？

犯人共め……何処の誰かは知らないがただで済むと思うなよ！

あらずじ終――

僕たちは、ムツツリー二案内のもと、文月学園から歩いて五分ほどのカラオケボックスにやってきていた。

「グフウ……」

僕は、カウンターの男性を眠らせたところだ。

「ちょっと蓮！ 何やってるのさ！」

「え？ この人にも報いを受けてもらっただけだけど？」

「この人は関係ないよね！」

「何言ってるんだ？」

「え？ そこで雄二まで！」

どうやら、明久にはどうして僕がカウンターの男を眠らせたのか分かってないらしい。

「明久……カラオケボックスって、監視カメラあるって知ってた？」

「え？ あるの？」

「うん」

「じゃあどうして店の人は助けってくれないんだよ！ 助けられなくても、警察を呼ぶとか、学校に連絡するとかしてくれてもいいのに

！」

「そりゃ、この店も誘拐犯に協力してるんだろ」

「雄二正解」

そもそも、監視カメラ云々の前に、店に入店した時点で怪しまれるはずなんだけど。

女の子が抵抗していたり、ましてや気絶していたりすると、まともな人なら普通に部屋に通したりしないはずだ。さっきからこのカウンターのは監視カメラで、姫路さんたちの映像を見ている筈なのに何のアクションも起こさなかった。これは黒。

「てことは、そのモニターで姫路さんたちの様子が見れるってことだね!？」

言うが早いか、明久がカウンターを乗り越えてモニターを覗き込む。

「あれ？ この部屋だけ砂嵐だよ？」

……完全に黒じゃないか。

監視カメラが壊れているのにその部屋に通すなんてありえない。しかも、他の部屋には誰もいない。

「貸し切ったようだな」

隣で監視カメラの様子を見ていた雄二が呟く。

そう。いま、このカラオケボックスは犯人達の貸しきり状態だ。

つまり――

「「思いつきり暴れられそうだ」」

取りあえず、姫路さん達が捕らえられている部屋も分かったので、その部屋へと急ぐ。

『さてどうする？ 坂本と——吉井に鮎川だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『さて。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズイ。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしてたらしいからな』

『坂本つて、まさかあの坂本か？』

『ああ。出来れば事を構えたくないんだが……』

『気持ちは分かるがそうも行かないだろ？ 依頼はその三人を動けなくすることなんだから』

僕たちは、ムツツリー二から貰った受信機で、中の様子を確認している。

犯人たちは、やはり誰かに依頼されたらしい。

「雄二、この連中つて」

「ああ。黒幕に依頼されたチンピラだろうな」

『お、お姉ちゃん……』

『アンタ達！ いい加減葉月を話しなさいよ！』

葉月ちゃんと島田さんの声が聞こえる。

優子と並んで、誘拐されたメンバーの中で最高の攻撃力を誇る島田さんも、葉月ちゃんを人質に取られて、碌な抵抗も出来なかったてことか。

『お姉ちゃん、だつてさ！ かつわいいー！』

『ギャハハハ！』

中から聞こえる外道の声は7、いや8人分つて所か。

とりあえず、今は外道が優子たちに危害を加えないかどうか様子を見たほうが良い。

「待て明久、勝手に行動するな。気持ちは分かるが、まずは人質の

救出が最優先だ。ムッツリーニがうまくやるまで待っている」

「……わかったよ」

隣では、明久を雄二がなだめていた。

明久は優しいから、こういうときは我を忘れるほど怒ってしまおうと思う。

僕も、だいぶ頭にきているけど。

「……………灰皿をお取替えします」

バイトに扮したムッツリーニの声が聞こえる。

「おう。で、このオネーちゃんたちどうする？ やっちゃっていいの？」

「だったらおれはこの巨乳ちゃんが良いな！」

「あつ、ズリー！　じゃあ俺二番目ね！」

「俺はこのそっくりな二人がいいなあ」

「おいおい、お前二人いつぺんに行くつもりかよ」

……………ムッツリーニがうまくやったら、こいつら全員半殺しにしよう。
僕が新たな決意をしていると、更に声が聞こえてきた。

「あ、あのっ！　葉月ちゃんを話して私たちを帰らせてください！」
「だつてさ」。どうする？」

「それはオネーちゃんたちの頑張り次第だよな？」

「やつ！　さ、触らないで——」

「ちよつと、止めなさいよ！」

「こんなことして許されると思ってるの！？」

「あーもう、うっせえ女共だな！」

「きゃあっ！」

ドンッ！　という何かを突き飛ばしたような音と優子と島田さんの悲鳴。その後数瞬遅れて、テーブルか何かを巻き込み、倒れたよう

な音が聞こえてきた。

「おい明久！」

ふと横を見ると、雄二が中へ入っていかうとしている明久を止めている。

だが明久は何かトンだよな顔をしていて、雄二の言葉に耳を貸していない。

「雄二、もう良い」

「蓮！？」

「……仲の奴全員半殺しにしても優子たちは助けられる」

僕も我慢の限界だ。

「おじゃましまーす！」

「ちよつと失礼？」

明久と一緒にドアを開けて中に入る。

「よ、吉井君！？」

「アキ……」

「れ、蓮……」

身を縮めている姫路さんと、尻餅をついている島田さん。それに、倒れた体を起こしている優子。

大体予想したとおりの光景が広がっていた。

「ハア？ お前ら誰よ？」

入り口付近に座っていた男が声を掛けてくる。

「それでは失礼して……」

明久がその男の手首を握る。そして――

「死に腐れやああつ！」

「ほごあああつ！」

股間を思いつきり蹴り上げた。

「て、てめえ！ ヤスオに何しやがる！」

鈍い音と共に明久が殴られる。けれど、

「イッシャアアアツ！」

「ごぶあああつ！」

明久はお返しのハイキックでそいつを床に沈めた。

「てめえ！」

明久に近づくもう一人の男。僕はその男に近づいて、

「お前ら、自分の立場が分かってないようだな――」

「ぐばらあつ！」

「――全員半殺しだ、クソ野郎」

膝を叩き込んだ後に裏拳で部屋の反対までふっ飛ばした。

「テメエら、よくも美波に手を上げてくれたな！ 全員ブチ殺してやる！」

明久も吠えている。こうなった明久は、ちょっとやさそつとでは止められない。

「ホイツら、吉井に、鮎川って野郎だ！」

「どうしてここが！？」

「とにかく来ているのなら丁度良い！ ぶち殺せ！」

テーブルを蹴散らして残り五人が向かってくる。

「たった二人で調子くれえんじゃねえよ！」

「舐めてんのか！」

「お前らバカだろ」

「『『『『アア!?』』』」

僕の言葉に突っかかってくる外道共。

僕はずんずんと近づいてきた二人に拳を突き刺し、

「『ぐぼああっ!』」

意識を刈り取った。

「——お前ら程度、僕一人でも十分だ」

「舐めてんじゃねえぞ!」

雑魚だと思っていた人間に、仲間が次々と戦闘不能にされていく状況に、外道が足を止める中、一人だけ僕に向かってくる男。

「いい加減学習したらっ!」

「ふんっ!」

「!?!」

寝かせるつもりで放った拳を——受け止められた?

「ガハハハハ!、俺はな海の方こうで兵隊やってたんだよ! 手前みたいな奴にやられるかよ!」

成程、傭兵崩れか。

「オラオラオラ! さっきの威勢はどうした!」

力任せに拳を放ってくる。力任せではあるが、流石もと傭兵。威力だけなら鉄人に迫るかもしれない。

「蓮!」

優子の心配そうな声が聞こえる。

「大丈夫！」

「何が大丈夫なんだあ？」

「……こういうこと」

「なにっ！？」

男の拳を手のひらで受け止める。

「流石元傭兵なだけはある。パンチにもしっかりとインパクトの瞬間があつて、見極めるのに時間がかかったよ」

インパクトの瞬間に打点をずらせば、勢いをなくした拳は簡単に受け止められる。

「このお！」

横から一人殴りかかってきた。

まだいたのか。

「雄二、パス」

体を捻つて交わし、背中を蹴つて雄二にパス。

「つたく、貸しイチ、だからな？」

そんなことを言いつつも、嬉々としてこぶしを叩き込んでいる。さらに、膝が鳩尾に入った。

「……さてと。傭兵崩れさん、まだやる？」

「……舐めるんじゃないやねえよ、カス共があー！」

「……！？」

突然激昂した傭兵崩れは懷に手を入れたと思うとその手をこちらに向けた。

その手には拳銃が握られている。

「……それ、銃刀法違反だよ？」

「知るか！ お前ら全員ぶっ殺せば口も封じれる！」

「……ぎりぎりだね」

「アあ？」

「それトカレフでしょ？ 7・62mm口径の装填数8発。ここにいる君の敵は8人だから一人一発で仕留めたとしてちょうど8発」
周りを見回すと、明久や雄二だけでなく、チンピラたちも動きを止めている。

それほどに今のこと男は危険だ。傭兵崩れなんだから銃の撃ち方くらいは知っているだろうけど、狙いが外れたら弾は何処に飛ぶか分からない。

「そうだなあ、一発で仕留めねえとな……まずはお前からだ！」
そう言い、銃口を僕に向ける。

「蓮っ！」

優子の声。

僕と男の距離は5メートル。

男の指は引き金にかかっている。

男の指が動いた。

銃声が響いた。

蓮Side Out

明久Side

今僕の目の前には、拳銃を向けられている蓮がいる。部屋にいる人、誰もが動かない、いや動けない。

銃声が響いた。

僕は、大きな音と友人の悲惨な姿を想像してしまい、思わず目を閉じた。

僕が目を開けたとき、僕の目の前には――

蓮が立っていた。

「な、何でだ……俺の狙いは完璧だったはず！ 何で死んでねえ！」

「……拳銃撃てば勝てると思ってた？」

蓮がゆっくりと口を開く。

後ろからは表情は見えないけど、声はすごく冷たく聞こえる。

「お、お前なにをしたんだ！」

「なにつて、銃弾を弾いただけだよ？」

「バカな！ 俺が引き金を引いたとき、お前は何ももっていなかった！」

「うん。だから手で弾いたんだよ？ ホラ」

蓮が皆に見せた右手はわずかに皮膚が割れて、血が出ていた。

「う、嘘をつくな！ 拳銃の弾を素手でなんて……」

銃を持った人が混乱している。

僕も混乱している。銃なんて身近で打つのを見たのは初めてだし、

それを素手で弾いた蓮のことはもつと分らない。

「誰も、『撃たれてから反応した』とは言っていないよ?」

「何?」

「トカレフの初速は秒速約420m。僕とアンタの距離は5m。銃弾が放たれて僕のところまで来るのにかかる時間は約0.012秒。対して、普通の人間が刺激を感知してから反応して行動するまでは約0.17秒。どうやっただって間に合わない」

「な、なら——」

「だけど、『引き金にかかった指に力が入った瞬間』から動き始めれば何とかなる。まあ、飛んでくる弾に対して横、または斜めに手を出さないといけないから、他にも考えないといけないことはあるんだけど、不可能ではない、とだけ言っておくよ」

……何を言ってるんだろう。ちつとも分からない。

「……チイツ!」

「二発目を撃たせると思う?」

また銃がこちらに向けられたかと思うと、蓮があつという間に男に近づいて銃を蹴り飛ばした。そのまま男の顎に左フックをお見舞いし、元傭兵だという男は沈黙した。

「お、お前ら! このお譲ちゃんがどうなってもいいのかあ?」

ふと気がつくと、向こうの一人が葉月ちゃんを羽交い絞めにしていた。女の子に、それも小学生に何てことしやるんだ!

「いいか? おとなくしろよ? さもないと、ヒデエ傷を——」

「「負うのはお前^だ」」

「あがぁっ!」

後ろからムツツリーニがクリスタル製の灰皿を振り下ろすと、すか

さず蓮が降りてきた頭を蹴り抜いた。

「お、お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「葉月っ！ 良かった……。怖かったよね……」

解放された葉月ちゃんを美波が抱きしめる。感動の再会だ。

「吉井君っ！」

姫路さんが両手を広げて駆け寄ってくる。これはもしか——チャンスカ！？

「姫路さん！」

僕も両手を広げて構える。さあ、ドンと来い！

「吉井い！ ヤスオをよくも！」

「ぐぶあっ！」

ドンと来たのはチンピラのパンチだった。

明久Side Out

蓮Side

「な、何だコイツ？ 血の涙流してるぞ……」

ムツッリーニと一緒に葉月ちゃんを助けて、しびれて感覚がなくなっている右手の確認をしていると、こんな声が聞こえた。見れば、明久が血の涙を流してチンピラの一人をにらみつけている。

ホント、何やってるんだろっ……

「蓮……」

「ん？」

明久を横目に右手の状態確認を進めていると、優子の声がした。

「手……」

「ああ、大丈夫だよ。折れてはない。罅位は入ってるかもしれないけど、拳銃の弾を弾いてこれくらいで済んだんだから御の字だよ」

実際、自分でも驚くほどのことをやったわけだし。

「蓮！ 女子達を連れて逃げろ！」

「了解！」

「雄二、貴様まで僕の邪魔をするのか！」

雄二から撤退の指示が出たので従っておく。

明久が何を言っていたのかは気になるけれど、今は優子たちの安全が優先だ。

「皆、取りあえず大通りまで走って！」

優子たちとカラオケボックスを出る。

後ろから雄二の笑い声とチンピラの悲鳴が聞こえてきたのでおそらく外道共は地獄を見ているだろう。

霧島さんに迫られているタイミングの雄二に喧嘩を売るなんてチンピラたちも運が悪かったね……。

第二十七問 物理法則や、人間の理から外れていなければチート能力ってありな

今回の蓮の銃弾弾きは『緋弾の○リア』見てて、蓮にもやらせてみたものです。

もちろん常人には不可能ですが、蓮には可能な理由がありますので。

それでは次回の更新でお会いしましょう。

第二十八問 一日目終了！ 二日目も頑張ろう！ (前書き)

今回は短いです。

切る所を考えながら書かないと、文字数がばらばらになってしまいますね (汗)

第二十八問 一日目終了！ 二日目も頑張ろう！

バカテスト 現代国語

問『落ち着いていて、どんなことにも驚かないさま』を表す四字熟語を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『泰然自若』

教師のコメント

正解です。

鮎川蓮の答え

『不動明王』

教師のコメント

確かに驚きませんが、間違いです。

土屋康太の答え

『動かざること山の如し』

教師のコメント

意味はあっているようなきもしますが、間違いです。

吉井明久の答え

『返事がない。ただの屍のようだ』

教師のコメント

屍が転がっていても驚かないことはすごいです、まず熟語にすらなっていないことに違和感を覚えてください。

第二十八問 一日目終了！ 二日目も頑張ろう！

誘拐騒ぎが無事、とはいえないまでも解決し、一日目も終わったFクラスの教室は、僕や明久の貸しきり状態になっていた。

教室に残っているのは、僕、明久、雄二、ムッツリーニの四人だけだ。

島田さんや、姫路さん。優子も、話を聞きたいといってきたが、遅くなる前に帰ってもらった。その為に秀吉まで帰ることになったのはちよつと誤算だった。

「明久、そろそろ来る時間だぞ」

「？ 来るって誰が？」

「学園ちよー」

「え？ 学園長がここにくるの？」

「うん。雄二が呼び出したんだよね？」

「ああ。さつき廊下であつたときに『話を聞かせる』ってな」

「話、ねえ……。ダメだよ雄二、相手は一応目上の人なんだから、用事があるならこつちから行かないと」

明久にそついう常識があるなんて……意外だ。

「用事もクソも、この一連の妨害の原因はババアにあるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因が——えええっ！」

「いくらなんでも、誘拐事件に、殺人未遂まで行われた事件の原因が生徒にあるわけないでしょ」

今回の事件は一步間違えれば死者が出るくらい危険だった。

裏を返せば、死者を出すような相手が敵のバックにいる、ということだ。

「あ、あのババア！ 僕らに何か隠してたのか！」

明久の憤りももつともだと思う。

学園長がしっかりと事情を説明していれば、僕らはともかく、優子や姫路さんたちにまで危険が及ぶことはなかったはずだ。

「……やれやれ、折角来てやつたつて言うのに、随分とご挨拶だねえ、ガキ共が」

しわがれた声と同時に、教室の扉が音を立てて開かれた。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

自分は被害者なんだとアピールせんばかりに、大げさに肩をすくめる学園長。

「黒幕ではないだろうが、俺達に話すべき事を話してないのは十分な裏切りだと思うがな」

「ふむ……やれやれ、賢い奴だとは思っていたが、まさかアタシの考えに気が付くとは思ってなかったよ」

「フン。俺だけじゃなく、蓮も気づいているぞ」

「そのジャリは気づいて当然さね。アンタ達とは出来が違うんだよ」

ハア……あんなこと（誘拐事件）があつた後でそんなこといわれたら、僕まで雄二に疑われるじゃないか。

「……まあいい。俺としては、最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思ってたんだ。あの話だったら、何も俺達に話すことはない。もっと高得点を叩き出す事の出来る優勝候補を使えばいいんだからな」

「あ、そういえばそうだよな。優勝者に後で事情を説明して譲ってもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。態々俺達を擁立するなんて効率が悪すぎる」

明久が『擁立』の意味を考えているような顔をしている。

「話を引き受けてきた教頭の手前、おおっぴらに妨害することは出来ない、とか考えなかったのかい？」

「それなら教室の改修なんか渋ったりしないはずだ。教育方針の前

にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出させるためにわざと渋ったってこと？」

「そういうことになるな」

「雄二は、学園長への提案で確信を持ったようだけどね」

「あの、教科を決めさせろって奴かい？」

「ああ。めばしい奴ら全員に同じ話をしている可能性を考慮してな。もしそうだとしたら、俺達だけが有利になるような話には乗ってこない」

だけど、学園長は雄二の提案を呑んだ。これはそのまま僕達以外に優勝されると困る、という学園長の考えを表している。

「他にも、学園祭程度で営業妨害が出たり、俺達の対戦相手に情報を流す密告者がいたりと色々あったしな。それに何より、誘拐事件が決定的だった。ただの嫌がらせならそこまでしない」

それもただのチンピラの誘拐じゃない。元傭兵の、それも拳銃を持つてる奴まで出張っていた。

「そうかい。相手はそこまで手段を選ばなかったか……済まなかったね」

学園長はそういつて僕らに頭を下げた。

隣では明久がすごく驚いた顔をしているけど、別に学園長だって鬼じゃないんだから、謝るくらいはするよ。

「アンタらの点数だったら、集中力を乱す程度で潰れてくれると思ってたのが、決勝まで進まれて焦ったんだろうね」

「それ以上に、常夏が僕らに負けたのが決定打だ」

敵方のメンバーが全員敗れたんだ。あれだけの強硬手段に出るしかなかったのも頷ける。

「さて、こちら側の種明かしは終わりだ。次はそっちの番だ」

「はあ……あたしの無能をさらす話だから、出来れば伏せておきたかったんだけどね……」

「どうせ、白金の腕輪の欠陥でしょ？」

「……!？」

「アンタ、何処でそれを知ったんだね？」

僕の言葉に学園長が問い詰めてくる。

「まず、雄二と明久に優勝してほしいこと。次に、ペアチケットなら、秘密裏に回収しても問題ないこと。そして、優勝しろ、ということは賞品を勝ち取れ、ということ、回収するわけではないこと。この三つで大体分かると思いますが、一番の理由は、教頭が手段を選ばなかったことですかね」

「さて、教頭だと!？」

雄二が聞いてくる。雄二も学園町室へ行ったときに、教頭と争っているのを聞いていたはずだけど。

「そう。と、いうか、教頭自身が僕に『手下になれ』って言うてきたんだよね。もちろん断ったけど」

「そうかい。で、何処まで分かっているのさね？」

「一つ、白金の腕輪のどちらか、もしくは両方は低得点者しか使えない。」

二つ、教頭は何らかのルートでこの欠陥のことを知っている。

三つ、新技術である腕輪は回収できない上に、この腕輪の欠陥が世に知られれば、文月学園にとってはかなりの痛手になる。以上」

「ハア、そこまでわかっていたとはね。このジャリのいうとおりさ。今回の黒幕は、教頭の竹原に間違いないさね。近くの市立に出入りしていた、という目撃情報があるさね」

「それだけじゃないかもしれないけどね」

「おい、蓮。どういうことだ？　うちに生徒を取られている私立以外に、うちの失脚を狙うやつらなんているのか？」

「……召喚システムを軍事利用したい奴らなら、学園長、ひいては文月を潰したいと考えているんじゃないかな？」

雄二、学園長が息を飲む。明久は『分かりませ〜ん』と顔に出ている。

「明久の召喚獣のように、物理干涉できる召喚獣は、軍事転用も十分可能なレベルになっているし、兵士を数千数万と雇うよりもコストが低くて済む。狙わない理由がないと思うよ？」

「なるほどな……あんな物騒なものが出てきたのはその所為か」

「うん。まあ、そいつらもおおっぴらに事件を起こせない以上直接攻撃は出来ないし、教頭の手下である常夏コンビが敗退した以上、もう暴走の心配はないけどね」

「でも、これって、かなりマズイ問題だったんだね」

「ああ。文月学園の存亡がかかっている話だな」

「もう、ほぼ解決したけどね」

「そうさね。もう問題は解決しているんだ。これ以上何もなければ丸く収まるんだよ」

何もなければ、か。今の状況でその言葉は怖いなあ。

「とにかく、これで解決したわけだし、学園長としても教育者としても、アンタ達には礼をさせてもらっよ」

「ちよーとストップ！！」

「何だ明久」

「あのさ、明日、もし蓮たちが優勝したら、腕輪の暴走が起こるんじゃないの？」

「それは問題ないさね。腕輪の暴走が起こるのはあくまでも総合得点が平均点を上回ったときだけさね」

「そういうこと。僕は、決勝戦の日本史以外の点数を0点にすれば暴走は起こらないから、明日は真剣勝負だよ、明久、雄二」

「うん！」

「当たり前だ」

「それじゃ、話もまとまったようだし、アタシは帰るさね」
学園長は、教室から出て行った。

「それじゃあ、僕も帰るね」

「蓮、ちよつと待て」

教室から出て行くこうとすると、雄二が声を掛けてきた。

「……何？」

「教頭のたくらみを知っていたり、学園長のあの信頼。そして、誘拐事件。お前を普通の高校生というにはおかしい点がいくつもある」

「……そうだね。それで？」

「単刀直入に聞く。お前は——何者なんだ？」

あれだけのことをしたんだ。疑われるのも当たり前、か。

普通ならこんなことを言う雄二を止める明久も黙ってみているあたり、明久も同じようなことを思っているのかもしれない。

「そうだな——」

こう聞かれたとき、僕が言うことは決まっている。

「――僕が聞きたいくらいだよ」

第二十九問 召喚大会決勝戦！ F対Fの頂上決戦。

バカテスト 日本史

問『鎌倉時代末期から、南北朝時代にかけての武将で、足利尊氏らとともに活躍した河内国出身とされる人物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『楠木正成』

教師のコメント

正解です。生涯の殆どが謎に包まれていることもあり、知らない人も多いのですが、姫路さんは知っていたようですね。

鮎川蓮の答え

だいなんこう
『大楠公』

教師のコメント

出来れば、人物名を答えてほしかったのですが、それも楠木正成のことをさしているので今回だけ正解にしておきます。しかし、君のそのマニアックな知識は何処で仕入れているのですか？

鮎川蓮のコメント

禁則事項です♪

吉井明久の答え

『ワトソン』

教師のコメント

国や時代、行ったこと全て違いますが、まず日本人でないことに
気づきましょう。

第二十九問 召喚大会決勝戦！ F対Fの頂上決戦。

「アキ、おはよ〜」

「おはようございます、吉井君」

「あ。二人とも、おはよう」

「僕のこととは無視ですか……」

清涼祭二日目。

二人してやってきた島田さんと姫路さんが明久に挨拶をする。僕を（・）無視して（・・）。

「あゝその、昨日はぐっすり眠れた？」

「え？ はい。ぐっすりでしたけど」

「そう。それじゃあ、朝ごはんはきちんと食べてきた？」

「はい。きちんと食べてきました」

「えっと、それじゃ、変な夢とかは——」

明久、いくらなんでも心配しすぎだと思う。

「——ふふっ。吉井君、心配すぎですよ」

姫路さんの声はいつもと遜色なく聞こえる。

暴行未遂どころか近くで発砲までされたから、明久の心配も分かるんだけど。

「大丈夫です。大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いていますから」

「そうなの？」

「はい。結局全員無事でしたし……それに、きっとまた吉井君が助けてくれますから」

姫路さん。ここに決して無事と言えない人がいるのですが。

「アキというよりは、坂本か鮎川かもしれないけどね」

姫路さんの島田さんも、昨日のことを気にしている様子はない。

「元気そうで良かったよ。それで、今朝は特に問題は——」

「……………異常なし」

「不信な連中はおらんかったぞ」

「明久はちよっと心配しすぎだよ」

「そつか。ありがとう」

ちなみに、何故か僕まで優子の迎えに駆け出された。
秀吉と一緒に来ればよかったのに。

「お、今日は無事だったんだな二人とも」

雄二はちよつと心配しなさ過ぎかもしれない。

「あれ？ 坂本ももう来てたの？」

「吉井君も坂本君も早いですね」

「朝一番でテストを受けていたからね。ふああ……」
ちなみに僕も受けた。

迎えに行くために明久たちよりも早く起きないといけなくなったのは雄二の策略ではないと信じたい。

「もう、そんな状態で大丈夫なの？ 相手は鮎川なんですよ！」

「そうだね。準決勝に保健体育を持ってきたのは失敗だったかな」

「大丈夫だよ明久」

「え？」

「僕に…… 勝る趣味はないから」

「ちよつと、僕が心配してるのはそんなことじゃないんだけど！？」

一撃で仕留めてあげるよ。

「と、言うわけだから、明久の心配をするくらいだったら、喫茶店の準備でもしてくれ。ふああ……」

「なんだか他人事ねえ…… 喫茶店の手伝いはしないの？」

「ゴメン。寝かせてもらえるかな？ このところあまり寝てなかった上に、昨日は徹夜だったから眠くて」

「そつえば、鮎川君と木下君は大丈夫なんですか？」

「僕は大丈夫だよ。2、3日寝なくても大丈夫だから。秀吉は辛そ

うだけど」

さつきから秀吉の目が虚ろになってきた。

「2、3日って……アンタいたいどんな体してんのよ……」

島田さんがあきれたような声を出すけど、実際に寝なくても大丈夫なんだよね。

「でも、鮎川君も疲れてるはずなので、吉井君たちと一緒に休んできてください」

「え、いいの？」

「はい。右手の怪我也気になりますし……」

「あつ！　そういえばどうだったの？」

姫路さんと明久が包帯が巻かれた僕の右手を見ている。

「ん？　打撲と皮膚がちょっと切れただけで済んだよ？」

雄二を含め、昨日の誘拐事件を知っているメンバーが僕の手を凝視している。

「本当、蓮の手ってどういう構造してるんだろっね……」

「いや、普通の人間の手だよ、多分」

「まあいい。明久、秀吉行くぞ」

僕達は屋上に向かう。

教室を出るときに、後ろから、

（やっぱり一緒に寝るんでしょうか？）

（間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……）

という会話が聞こえたけれど、忘れることにしよう。

夢見が悪くなるどころか、一緒に眠れなくなりそうだから。

「ねえ、蓮……」

「ふえ？」

教室から出て、階段を上ろうとしたところで、優子に声を掛けられた。

「えっと、その……」

「雄二、明久、秀吉、先に行つて。僕も優子と話してから行くから」

明久たちを先に行かせる。

「で、何かな？」

「うん。右手は大丈夫だったの？」

なんだそんなことか。雄二みたいに答えにくい質問が来るんじゃないかと思つて身構えてしまった。

「ああ。打撲と、ちょっと血が出たくらいで済んだけど」

「そう、良かった……」

そういつて、微笑む優子の顔にちよつとドキツとしてしまったのは内緒だ。

「えっと、もう行つていいかな？　あまり寝てないから、仮眠を取りたいんだけど」

「え？　うん。いつてらっしゃい」

優子に背を向けて、階段を上る。

「頑張つてね！」

後ろからの声に振り向いたとき先には、誰もいなかった。

「さてと、行こうか」

明久の声がかかる。

結局、僕は喫茶店の手伝いを30分くらいしかしていない。

疲れているだろうから、と気を遣ってくれたらしい。僕も、起きてすぐ手伝いに行ったんだけど、返されてしまった。

「後で私達も応援に行きますね」

「いい試合をしないと許さないからね」

チャイナ服姿の二人。その声援は明久だけに向かっている気がしてちょっと寂しい。

「言っておくけど、手加減するつもりはないからね」

「うむ。いくら明久相手といっても、全力で当たらせてもらうのじゃ」

「ふん。望むところだ」

「うん。僕も本気で行くよ」

軽い宣戦布告。どちらが優勝しても目的は果たされるわけだから真剣勝負だ。

「そういえば、決勝戦前に、最後の妨害がくると思ってたけど来なかったね」

「昨日で懲りたんじゃないか？」

「確かに、昨日あんなにボッコボコにしたんだから懲りてもらわないと困るよね」

「喫茶店のほうはムツツリー二が警備しておったしのう」

ムツツリー二は明らかに違法じゃね、というようなスタンガンを使っていた。

服の上からでも感電するような代物らしい。

「後はもう何もない。ただ、いい試合をするだけだな」

「そうだね」

それ以降は会話もなく、会場へ向かう。

「流石に決勝戦。観客も多いね」

「そうじゃのう」

明久と雄二とは反対側。

ステージの裏から聞こえる歓声を聞く。

全く緊張していない、といったら嘘になるけど、昨日拳銃を向けられたときに比べれば随分と楽な気持ちでいられる。

秀吉も、演劇で観客の前に立つのは慣れているのか顔色も普通に緊張は窺えない。

「鮎川君と木下君。入場が始まりますので急いでください」

係りの先生が手招きをしている。

係りに生徒ではなく先生を配置していると所からも、この決勝戦は今までとは違っていると分かる。

『さて皆様、長らくお待たせいたしました！　これより試験召喚システムによる召喚大会決勝戦を行います！』

聞こえてくるアナウンスの声は、今まで聞いたことのない声だった。もしかしたらプロを雇っているのかもしれない。社会的に注目されている試験校だから、ありえなくはない。

『出場選手の入場です！』

『二年Fクラス所属、坂本雄二君と、同じくFクラス所属吉井明久君です！　皆様、拍手でお迎えください！』

明久と雄二が入場してくる。

会場に響く拍手は昨日よりも多く、かなりの数の観客が入っていることが分かる。

きつと、この観客の中に姫路さんのお父さんもいるのだろう。

『なんと、最高成績のAクラスを押さえて決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラスのコンビです！　これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

「あの司会者、嬉しいことを言ってくれね」

「うむ。これで姫路の父親にも好印象になるじやろう」

きつと、試験召喚システムの効果をPRする狙いがあるのだろうか、これは今の僕達の取ってはありがたい。

『対するこちらにも二年Fクラス所属鮎川蓮君と同じくFクラス所属木下秀吉君です！　こちらは、三年生のAクラスを押さえて決勝に』

進出てきました！　こちらでも拍手でお迎えください！』

明久たちと同じように拍手と歓声を受けながら階段を上りステージへと上がる。

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは、テストの点数に比例した――』

司会のルール説明を聞き流しながら、雄二、明久と対峙する。

「さてと、ついに直接対決だな」

「そうだね。明久と、雄二相手でも、負ける気はないけどね」

「それはこっちの台詞だよ。絶対に勝ってみせる！」

「手加減はせんぞ。真剣勝負じゃ！」

『それでは試合に入りましょう！　選手の皆さん、どうぞ！』

司会の説明も終わり、審判役の先生が、僕らの間に立つ。

「――試験召喚サモン」――

四人とも、いつもと変わらない姿の召喚獣が呼び出される。

『日本史　Ｆクラス　坂本雄二＆吉井明久』

215点&166点

『

「！？　明久、どうしたのその点数？」

「ここしばらく、明久の勉強につき合わされ続けだったからな。明久、あそこまでやってやったんだから、これで負けたら承知しねえぞ！」

「わかってるよ」

くっ！ 明久がここまでの高得点を取ってるとは誤算だった。
せいぜい雄二が200点に明久が100点だと思っていたのに。

『日本史 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

418点& 83点

』

「ちっ！ 流石に蓮はでたらめな点数だな」

「本当だよ。でも……負ける気はしないよ！」

「こつちも油断はしないよ。Fクラスの力は点数じゃ量れないってのは試召戦争で思い知ったしね」

「こちらにも負ける気はないのじゃ！」

お互いににらみ合ったままの膠着状態が続く。

向こうはうかつに動けば僕の召喚獣の点数が脅威になるし、こちら
も下手に動くと二対一に持ち込まれかねない。

「衝撃波」

「「なにつ！」」

膠着状態を破ったのは僕の召喚獣だった。

左手を後ろに向けての衝撃波の使用。

大きい反動を利用して、一瞬で雄二の召喚獣に肉薄する。

「ッ！？」

雄二の召喚獣に横なぎの一撃を浴びせる。

雄二は両手のメリケンサックで、受けきった。

「雄二！」

「余所見をしている暇はないぞ、明久あ！」
こちらに駆け寄ろうとした明久に、秀吉が切りかかる。

「くっ！」

「雄二、悪いけど先に倒させてもらおうよ！」

雄二の召喚獣に、点数、リーチで勝っている僕の召喚獣は終始有利に戦いを進める。

近づいてくれば、左手。離れば剣の一撃。

「はあああっ！」

「！？ チイツ！」

僕の召喚獣が、雄二の召喚獣を切り倒し雄二の召喚獣は消滅した。

「くっ……済まぬ、蓮」

向こうでも明久が秀吉を倒したところだった。

「勝負だ！ 蓮！」

「望むところだ！」

僕と明久の召喚獣がすれ違う。

『日本史 Fクラス 吉井明久 VS Fクラス 鮎川蓮
132点 VS 308点』

□

衝撃波での点数消費が痛い。

まだ腕輪は使えるけれど、明久はそんな隙を与えてはくれないだろう。

「くっ！ とりゃあっ！」

「はあああっ！ ぐっ！」

試合は正に一進一退。

僕の召喚獣の大きい得物では動きの早い明久の召喚獣を捕らえきれない。

明久の召喚獣も、迂闊に攻められない上にリーチで負けている分戦いにくそうだ。

袈裟切り、突き、足払いに上段からの振り下ろし。

お互いに一瞬も止まることのない攻撃の応酬はお互いの点数をしっかりと削っていた。

「くっ！ 蓮はどうして観察処分者でもないのにそんなに召喚獣の扱いが上手いのさ！ 転入生なのに！」

「そんなこと教えられるわけないでしょ！」

鏑迫り合いに移行する。

点数では僕が勝っているけれど、僕の召喚獣が剣を片手でしかもてないのに対して明久の召喚獣は木刀をしっかりと両手で持っている。

鏑迫り合いでは僕のほうが不利だ。

「おりゃあっ！」

「うわっ！」

鏑迫り合いで押され気味になっていたところを、左手で明久の召喚

獣をはじくようにして距離を取る。

「衝撃波」

「!？」

明久との距離ができたところで、右手の剣を地面に突き刺し、左手を明久の召喚獣に向ける。

左手から放たれた空気の奔流はあつという間に明久の召喚獣を呑みこんだ。

「はあああああっ！」

「!？」

明久の召喚獣が足元に現れた。

「っ！」

「蓮の腕輪って、弱点があるよね」

そのとおりだ。

僕の召喚獣の腕輪、『衝撃波』は、一見便利に見えるけどいくつかの弱点がある。

一つは大きい反動。召喚獣をしつかり固定していなければフィールドから弾き出されかねないほどの反動がかかる。

二つ目はタイムラグ。姫路さんの『熱線』が発動してからほぼ一瞬で効果を発揮するのに比べて『衝撃波』には発動から放たれるまでに数瞬のタイムラグがある。

三つ目に効果範囲。衝撃波は進んだ距離が長いほど効果範囲を広げる。つまり裏を返せば僕の召喚獣に近ければ近いほど効果範囲が狭くなる。

そして、反動があるために、発動している間は僕の召喚獣は動けずえに剣も使えない。

「これで——終わりだあ!!」

明久の召喚獣が木刀を突き出してくる。

僕の召喚獣は、回避も防御もできずにまともにその一撃を受けてしまった。

『日本史 Fクラス 吉井明久 VS Fクラス 鮎川蓮
8点 VS 0点』

『坂本、吉井ペアの勝利です!』

召喚大会は、明久、雄二の優勝。僕、秀吉の準優勝で幕を閉じた。

第二十九問 召喚大会決勝戦！ F対Fの頂上決戦。（後書き）

土日にストックが出来なかったOTZ

本当なんで土日のほうがPCに触れないんでしょうか……

第三十問 友情の輪の中に入れないのは想像以上に凹む……（前書き）

PV2万突破を確認しました。

これを糧に、今の更新ペースを維持していきたいと思います。

大分きつくなってきましたが（汗

第三十問 友情の輪の中に入れないのは想像以上に凹む……

バカテスト 現代社会

問『動物や植物（トータムと呼ばれる）が、自分達の部族に深く関連している信仰することをなんというでしょう』

姫路瑞希の答え

『トータミズム』

教師のコメント

正解です。人類の宗教的思想の基本的なものですので覚えておきましょう。

鮎川蓮の答え

『トータムボール』

教師のコメント

それはインディアン部族が作成した偶像の一種です。

吉井明久の答え

『13トータムボール！！』

教師のコメント

なぜ13本なんですか？

鮎川蓮のコメント

コイツ……なんで微妙に古いネタを持ち出してきやがるんだ！

第三十問 友情の輪の中には想像以上に凹む……

「お兄ちゃん！ すつつつごい格好良かったよ！」
授賞式と、腕輪の簡単なデモンストレーションを終えて、教室に帰る途中なんだけど、待ち構えていた葉月ちゃんの抱きつき攻撃によって明久がダメージを受けている。

「四人とも、お疲れ様。凄かったわね」
「あはは。そうでもないよ」

「お兄ちゃん、凄いですう」

「葉月ってば、アキが困ってるわよ？」

身長的に、葉月ちゃんが明久に甘えれば甘えるほど、明久の鳩尾に深刻なダメージが刻まれてしまう。

「あの、吉井君」

「あ、姫路さん。僕の活躍見てくれた？」

なんだろう。バカな明久がここまで自慢げに話していると殴りたくなってくる。

「はいっ！ とっても素敵でした！ 今度土屋にビデオをコピーしてもらおうかと思うくらい！」

姫路さんの目がきらきらと輝いている。

けれど、おそらくムツツリー二のとっているビデオには、明久の活躍はあまり写ってないと思う。

「坂本。アンタ試召戦争のときは散々だったくせに、今回は随分と点数が良かったわね」

「試召戦争のときに散々だったからこそ、だ。あれ以来、日本史は重点的にやってきたからな」

「それであんなに高得点だったんだ」

いくら雄二でもあの点数はちょっとおかしいと思っていたんだけど、こういわれると納得がいった。

「簡単に言うが大変だったぞ？ 特に先週例の話（姫路さんの転校話）を明久が聞いてからは、殆ど毎晩奴の勉強につき合わされていたからな」

なるほど、どうりであの明久が150点オーバーなんていう成績を

残せたわけだ。

それにしても、そこまでして僕と秀吉を倒したかったんだろうか……。

「後夜祭のとき、お話があるので駐輪場まで来てください！」

後ろから突然、告白の前フリみたいな台詞が聞こえてきた。
見ると顔をトマト並みに真っ赤にした姫路さんがダッシュで喫茶店に戻っているところだった。

そんな台詞を言われた明久は――

「…………あれ？」

どうやら今の台詞が本当に自分に向けられたものかどうか考えているらしい。

こんな調子だと、後夜祭のときも約束を忘れるんじゃないだろうか。

今度は表情が変化しだした。

本人は一言も発していないから、そばで見ていると妄想癖の危ない人に見える。

「明久、雄二、蓮。話し込んでいるところ悪いのじゃが、喫茶店を手伝ってもらえぬかのお主らの優勝と、ワシ等の準優勝のおかげで客が増えて大変なんじゃ」

明久の行動にちょっとドン引きしていると、着替え終わった秀吉が

チャイナ服のスカートを翻しながらこちらに走ってきていた。

ここで下着はどうなっているんだろう、何て考えてしまうと、明久の同類になってしまいそうだから止めよう。

「あ。そういうばそうだったわね。ほらアキ！ もう大会もないんだから、きっちり手伝ってもらうからね！」

「うん。今まであまり手伝えなかった分しっかり頑張るよ！」

「やれやれ、かつたるいな」

「ほら坂本も文句言わないの！」

秀吉の言葉に三者三様の反応を示しながら、喫茶店の中に消えていく。

僕を残して。

「えっと……僕ってマジで忘れられてない？」

「大丈夫じゃ。ワシはおぬしのことも呼んだぞ」

決勝戦が終わってから、本格的にクラスの皆に僕の存在が認識されなくなっただよう……。

秀吉に慰められながら、ウエイトレス服に着替える僕の背中からはきっと哀愁が漂っていたに違いない、と、蓮は断言します。

『ただいまの時間を持って、清涼祭の一般開放を終りました。各

生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「流石に疲れたのう……」

「最後のほうは皆休憩なしだったからね……」

「……………（コクコク）」

二日間にわたった清涼祭の終了を告げる放送を聴いた途端に、足から力が抜けるのを感じた。

まさか、あそこまでお客さんが増えるとは思わなかった。

なまじFクラスは教室が狭いからお客さんを捌くのが大変なんだよ

……

「そういえば、姫路さんのお父さんはどうしたの？」

明久がふと声を漏らす。忙しくて忘れていたけれど、そもそも今回の清涼祭の一番の目的は姫路さんの転校阻止だ。姫路さんのお父さんは顔も知らないから喫茶店に来てたとしても分からないけれど。

「ん？ 未来のお義父さんが気になるのか？」

「な！？ べ、別にそういうわけじゃなくて！」

「はいはい。明久がそういうなら今はそういうことにしておいてあげるよ」

「ちょ、蓮まで……」

さつき忘れ去られたことの復讐だったりする。

「後夜祭のときに話をしに行くといっておったから、結論はそのときじゃな」

秀吉が返事を返してくれる。

喫茶店が成功して、教室の設備も改修もどうにかするめどが立っ
し、それになによりFクラスから召喚大会の優勝チームと準優勝チ
ームが出たんだ。姫路さんのお父さんもこれでFクラスのことを認
めてくれるとは思うけど、人の心——特に親心は僕には分らない
からな。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

「ええっ！？ どうして!？」

僕には明久のその反応がどうして、なんだけど……

「どうしてって言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょ
？」

その反応は至極当然だと思う。

間違っても葉月ちゃんみたいにあの格好のまま平気で帰るようにな
ってはいけない。

「すみません。すぐ戻りますので」

「待って！ 二人とも考え直すんだ！ カムバアーク！」

こうしてみると、姫路さんと島田さんが明久を振ったように見える
から不思議だ。

現実ではありえないけど。

「ふむ。ならばワシも——」

「させるかっ！ せめて秀吉だけは着替えさせない！」

秀吉の足にしがみつく明久。アホなんじゃないだろうか。

「なっ!？ 何をするのじゃ明久！」

「……………（フルフル）」

前言撤回。やっぱりコイツらアホだ。

ムツツリーニも明久と同じように秀吉の足にしがみついている。

ムツツリーニのこの行動にはあまり驚かなくなってきた。

「追い明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

明久を呼ぶ雄二の声は全くといっていいほど疲れを感じさせない。常日頃から霧島さんから逃げ回っているだけあつて無駄にタフだ。

「そうじゃったな」

忙しくていけなかったけど、一応報告はしないと。

「三人とも先に行っておいてくれ。ワシは着替えてから——」

「そうは行かない！ 秀吉も一緒に行く！」

「……………（クイクイ）」

「あつ、ムツツリーニも来る？」

「……………（コクコク）」

なんとしてでも秀吉を着替えさせまいとする明久とムツツリーニ。

と、いうかこういう時だけ無駄な意思疎通の早さだ。

「困ったのう。雄二、何とか言つてやつてくれんか？」

「ん……………、まあいいだろ。秀吉とムツツリーニも行こうぜ。明久を説得するのも面倒だし」

「ならば蓮」

「右に同じ」

この状態の二人を説得するのは面倒とか言うレベルを通り越している。

「やれやれ、雄二に蓮まで……。仕方ないのう。着替えは後回しじや」

「よし。ほら明久にムツツリーニ。秀吉の足を離してやれ」

「うん」

「……………（コクコク）」

「やれやれ、ワシのこんな姿を見ても何の足しにもならんじやろうに……と、というか雄二と蓮はワシを売ったような気がするのじやが」

決してそんなことはないと思う。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

明久と雄二がいつものようにノックと挨拶をして学園長室につかつかと入り込む。

「おぬしら、やはり全く敬意を払っていないように見えるのじやが……」

「そう？ きちんとノックをして挨拶をしたよ？」

まあ、明久の態度は雄二と比べればいくらかマシではある。

「アタシは前に返事を待つように言っただがねえ」

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「言われなくても分かっているよ。アンタ達に賞状を渡したのは何処の誰だと思ってるんだい」

遠慮の文字がこの世で一番に会わない、容姿が妖怪じみている老婆。

「ちよいとそのジャリ、何か言っただかい？」

「いえ、何も」

「フン……そうかい」
チッ！ 耳元で叫ばないとろくに会話も出来なさそうなのに察しがいいババアだ。

「それで、白金の腕輪は返却したほうがいいですか？」
明久が貰ったばかりの白金の腕輪を見せながら尋ねる。

「いや、それは後でいいさね。どうせ不具合はすぐには直らないんだ」

「そうなんですか」

「まあ、召喚システムに関連している技術である以上一朝一夕身にはどうにもならないよ」

実際、召喚システムは、未だに制御が出来ていない。

偶然やオカルトで出来ているシステムだけに、簡単にいじめることは出来ない、筈のだが、そこにいるババアは遠慮なくいじくっているらしい。

（そういえばどうしてあいつらは俺達がババアと繋がっていると思っただんだ？）

雄二がぶつぶつ呟いている。

明久には聞こえなかったみたいだけど、僕には聞こえていたのでその疑問に答えると、この部屋には盗聴器が――

「だから、教室の改修と交換で条件で僕達がこれをゲットするって言う取引はこれで――」

「待て明久！ その話はマズイ！」

「え？」

「……………盗聴の気配」

「やられたか！」

そうだった。メンバーの中には思ったことをすぐ口にする明久が**バカ**

たことを忘れていた。盗聴器を外してから話すべきだったか……。

「あいつら……！ 追うぞ明久！」

「ちよっ……雄二、どうしたこと!？」

「盗聴だ！ 奴ら、学園長室に盗聴器を仕掛けてやがったんだ！」

「なんだって!？」

「今の一連の会話、特に明久の『学園長との取引』の話も聞かれていたはず。もし、というかおそらく録音してるだろうから大変なことになる！」

「録音!? 冗談じゃない！」

録音が公開されれば、文月学園の信用は地に堕ちる。

あの足音と気配からして常夏コンビだったはずだから、さっさと見つけて常夏ごと証拠を隠滅しないと！

「急げ！」

「分かった、秀吉とムツツリー二も協力して！」

「うむ」

「……………（コクリ）」

「えっと、明久、僕もいるんだけど……」

「あっ！ 蓮も！」

なんかついでも言われて気がして、というかまた忘れてたよね僕のこと！

「雄二！ 向こうは例の常夏コンビでしょ！」

「そうだ！ チラツと例の髪形が見えたから間違いない！」

「ってことは二人組みだよね！ こっちも二人組みに分かれよう！」

「皆常夏コンビの特徴は覚えてるよね？」

「坊主とモヒカンじゃな？」

「ああそうだ」

「了解じゃ！　ワシとムツツリーニは外を探す！」
えっと……

「僕は？」

「え……」

「蓮はすまないが一人だ。お前なら一人でもあの常夏を伸すことができるだろう？」

まあ、否定はしない。

「明久！　まずは放送室を押さえるぞ！」

「オーケー！」

「僕は潜伏できそうな場所を片っ端から当たってみる！　携帯電話はいつでも出られるようにしておいて！」

「了解だ！」

波乱尽くめの清涼祭。　まだまだ終わらせてはくれないようだ！

第三十問 友情の輪の中に入れないのは想像以上に凹む……（後書き）

次回で清涼祭は終了する予定です。

ほんとは30話で終わらせるつもりだったのに……

第三十一問 清涼祭終了！ 最後の最後まで波乱尽くでした……。 （前書き）

なんか過去最高峰にgggな気がする今回の話。

え？ いつもだろ？ ハハハ…… 否定はしません。

取りあえず、今回で清涼祭篇終了です。

第三十一問 清涼祭終了！ 最後の最後まで波乱尽くでした……。

バカテスト 英語

問『今あなたが持っているものを英語で答えてください』

姫路瑞希の答え

『This is a pen.』

教師のコメント

正解です。当たり前ですね。

鮎川蓮の答え

『I have a pencil sharpener now .

』

344

教師のコメント

どうして鉛筆削りだけを持っているのですか？

土屋康太の答え

『This is a camera.』

教師のコメント

後で職員室に来てください。

霧島翔子の答え

『This is Yujii.』

教師のコメント

どうして坂本君が霧島さんと一緒にいるのですか!?

第三十一問 清涼祭終了! 最後の最後まで波乱尽くでした……。

—前回までのあらすじ—

召喚大会も無事に終わり、明久と雄二が優勝を勝ち取った。学園長との取引も達成し、僕達は意気揚々と学園長室へ。そこでも飛び出した明久の不用意な一言。

録音された音声が公開されたら大変なことになるぞ！（by無駄に
タフなクラス代表）

僕達は無事に常夏を見つけ処刑することが出来るのだろうか！？
緊迫の清涼祭クライマックスが今始まる！

—あらずじ終—

「……いないか」

四階の教室、トイレを探し、常夏がいないことを確認する。

「常夏が行きそうなところ……」

常夏は教頭と繋がっているわけだから、教頭室、は可能性としては
あるけど、

教頭室に一般生徒がいたら怪しまれるからこれはバツ。

放送室は明久と雄二が抑えたはずだからバツ。

校外逃亡は、ムツツリー二と秀吉が阻止しているからバツ。

常夏の目的は、僕達の取引の内容を公にして学園長と僕達の信用を
失わせること。

ならば、校内放送するのが手っ取り早いはずだけど……。

「放送？」

放送室以外で校内放送が出来るところは、職員室か、清涼祭の……

「屋上か！？」

後夜祭で使ったために新校舎屋上にも放送機材を置いているはずだ。

P r r r r r r r

屋上に向かって走っている中、携帯に着信が入った。

「もしもし？」

『蓮！ 常夏の居場所が分かったぞ！』
秀吉か。

「で、何処なの？」

『新校舎の屋上じゃ！』

やっぱりか。

「僕が今向かっている！ 明久と雄二に――」

『もう伝えておる』
なら大丈夫だろう。

話している間に屋上の扉の前まで来る。

ドアノブに手を掛け、開け――

「とにかく伏せろお！」

ドオン！

「……………え？」

ドアの向こうから、常夏の慌てた声と、爆発音が聞こえてきた。
この音は……………花火？

ドオン！

二発目。

さっきから、ドアからガチャガチャという音が聞こえている。

「って、よく見たら鍵閉まってんじゃない」

常夏はご丁寧に鍵まで閉めて放送を企んでいたらしいが、今回は裏目に出たね。

僕の出番はなさそうだし、秀吉たちに合流しようか。

校舎から出る前に、三発目の爆音と、校舎の揺れが伝わってきた。

校舎の一角が無残にも崩れ去っていた。

「こ、校舎がゴミのようだ……」

早くここから立ち去ろう。長居すると僕まで厄介ごとに巻き込まれそうな気がする。

「何で僕なの！？ 誰か、誰か助けてえっ！ 変態教師に犯されそうですーっ！」

「貴様よりによってなんて悲鳴を上げるんだ！」

校庭では雄二&明久VS鉄人の命を掛けたマラソンが行われていた。

「遅れてごめん〜」

「遅かったの蓮」

「……………もう始めている」

どうして僕に電話するまでは校内にいた二人が既にまったりと打ち上げモードに入ってるんだろう？

「本当、遅いわよ」

「……………優子？」

秀吉の隣にもう一つ同じ顔があった。

「どうして優子がここに？」

「……………Aクラスは打ち上げなんてやってないからね。お邪魔したって訳」

何処まで真面目なんだAクラス。

「痛てて……………随分と殴られたよ……………」

「くそっ、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか」

「む。明久と雄二も来たようじゃな」

「……………先に始めておいた」

「追いかけてっこお疲れ様」

雄二と明久も無事（？）到着したようだ。

ただ、二人とも顔の面積がいつもの2倍近くに膨れ上がっている。

「そういえば、明久と雄二は何処をぶっ壊したの？」

遠くからじゃ、どの部屋が爆発したのか分からなかった。

「教頭室だよ」

「ああ。今頃ババアのがさ入れが始まっているところだろうな」
「なるほど……」苦労様

「それにしても、こういう賑やかなのもいいわね」
優子がポツリと漏らした。

「まあ、Fクラスならではだよね」

「普段は迷惑なんだけどね」

「……返す言葉もございません」

「そういえば、お店の売り上げてどうだったの？」
明久の呟き。

「そういえばまだ知らされていない。」

「そうね。すごいって程じゃないけど、二日間の稼ぎとしては結構な額になったんじゃないかしら」

「そういつて島田さんが収支の書かれたノートを見せてくれる。」

「ふむ。どれどれ……」

「これは……」

雄二と顔を見合わせる。

「「この額だと、机と椅子は厳しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」」
机と椅子を50セット買うにはどう見積もっても足りない。」

「うーん……。やっぱり、出だしの営業妨害が痛かったよね」
明久の言うとおりだ。

喫茶店では、どれだけの数お客さんが来ても店の席の数や回転率には限界がある。

清涼祭序盤の暇な時間が勿体無かった。

「すみません。遅くなりました」

ちよつと考え込んでいると、後ろから姫路さんの声が聞こえてくる。そういえば後夜祭のときにお父さんと話をするって言ってたっけ。

「あ、瑞希。どうだった？」

「はいっ！ お父さんも分かってくれました！ 美波ちゃんの協力のおかげです！」
それは良かった。

姫路さんの転校阻止という、今回の最大の目的は達成されたわけだ。

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、吉井君……」

僕はお邪魔みただから退散しようかな。

明久たちから離れたところにいた、秀吉と合流する。

「秀吉は姫路さんの転校の話は気にならなかったの？」

「いや、ワシは姫路のお父上も分かってくれると信じておったからな。それにあまり大人数で詮索するのも迷惑じゃろって」
お、大人だ……。優子とは比べ物にならないほど大人だ。

「何か言った？ 蓮」

「のわあっ！」

秀吉の後ろから、もう一つ同じ顔が現れたって、この下り前にもやった気がする。

「優子も居たんだ」

「何よ、アタシがいたら迷惑だって言うの？」

「いや、全然」

「そ、そう。ならいいけど……」

そういつてコップからジュースを飲む優子の顔は心なしか少し赤い。

「あのさ……蓮」

「ん？ どしたの？」

「昨日はありがとう」

「……何の話？」

「ほら、アタシ達が連れて行かれたとき」

「あー、あの誘拐事件？」

「うん。あの時蓮が来てくれなかったらどうなってたか……」

「来ても危なかったけどね」

拳銃まで出てきたときは本当に死ぬかと思った。

「あの時は本当心配したんだから……」

「アハハ……自分でも死んだと思ったよ……」

「まだ、お礼言ってなかったから」

別にそんなこと気にしなくてもいいのに。

もし優子たちがあいつらに傷つけられてたら冗談抜きで皆殺しにしていたと思うし、何もなくてよかった。

「ねえ、右手は本当に大丈夫なの？」

「うん。打撲と裂傷だけで済んだし」

僕はそういつて包帯が巻いてある右手を見せる。

「！？ 血が……」

「へ？ あ、本当だ」

いつの間にか傷口が開いていたらしい。包帯が赤くにじんでいる。

「本当に大丈夫なの!？」

「心配性だなあ。こんなの血が出てるだけで別になんともないって」

「……ダメ」

「何がダメなの？」

「ちゃんと見せなさい」

優子が僕の右手に手を伸ばす。

「大丈夫だって」

僕は右手を引っ込める。

「むう……大人しく見せなさい!」

「うわっ!」

優子が僕を押さえつけるように覆いかぶさってきた。

「にゅ」

しかもあるうことが僕の胸に顔をうずめてくるんだけど!?

「ん？」

なんか酒臭いぞ。

優子が落としたジュースの缶を見る。

『オトナのオレンジジュース』

ああ……酒か……。

「オイ! 誰だ優子に酒を渡したのは! いや、そもそも酒を買ってきたのは誰だ!」

僕の必死の叫びも、大半がお酒に酔っているクラスメイトには聞こ

えなかったようだ。

「あ、姉上が蓮を襲っておる!？」

「秀吉!」

良かった。どうやら秀吉は無事なようだ。

早く優子をどけてくれると……

「済まぬ。邪魔をしたの」

「待って!？ 出来れば優子をどかしてもらいたいんだけど!？」

「いや、蓮が姉上を酔わせて襲わせておるのかと……」

「しかもものすごい勘違いしてるし!？」

秀吉に必死に事情を説明して、何とか納得してもらえた。

「姉上、この体勢はまずいのじゃ」

「うゝん……」

「あれ？ 寝ちゃってる？」

いつの間にか眠ってしまったようだ。

「じゃあ、秀吉、優子をよろしく」

ガシッ!

秀吉の優子を任せて帰ろうとすると、優子に制服を掴まれた。

「ちょ、優子!？」

「う……蓮……」

「はい？」

「……………すう……………」

寝言か。

「どうしよつ秀吉?」

「どうしようも何も……そうじゃ!」

秀吉が何かひらめいたようだ。

「お主が姉上を家まで運べばよいのじゃ」

「なぜに!？」

「姉上が蓮を離さないのであればそうするしかあるまい。それとも、このままおいていくかの？」

「う……」

それはしたくない。

「ハア……分かったよ。じゃあ、秀吉道案内よろしく」

「うむ」

優子を抱きかかえた後、掴まれている手を離し、背中に優子を回す。

「お、蓮と秀吉、どうしたんだ？」

優子をおんぶして、公園を出ようとしたところで雄二に声を掛けられた。

「優子が酔っ払って寝ちゃったから送っていかうかと思って」

「そうか」

見つかったのが雄二でよかった。明久やFFF団の連中に見つかったらその場で襲われるところだったよ。

僕と秀吉は、酔っ払いで死屍累々の様相を呈していた公園を出た。背後から明久の悲鳴と思わしき声が聞こえてきたのが聞こえて気にはなっただけ、おそらくまた明久を島田さんが痛めつけているんだろうと当たりをつけて、心の中だけで冥福を祈っておくことにした。

「しかし、姉上がのう」

「ん？ どうしたの秀吉？」

秀吉が何か意味深な台詞を言った。

「いや、姉上がワシ以外の男子がいるところで寝るとは思わなくてのう」

「酔っ払ってるからね」

「うむ……姉上ならば酔っ払っておっても男子の前で寝ることはないと思うておったんじゃが」

「……アルコールの力を舐めないほうがいいよ」

「はあ、姉上も大変じゃの……。まあ、良い。あ、蓮その角を右じや」

秀吉と話しながら歩くこと15分。

「ここじゃ」

一軒家の前に来た。

「ここが秀吉の家？」

「うむ」

「そついえば、知らない男が娘を背負って帰ってきたら、家の人は僕に襲い掛かるんじゃ……」

「何気に失礼なことを想像しておるの……。大丈夫じゃ。蓮のことはわしも姉上も話しておるから」

「そうなんだ」

「それに、今日は母上も父上もおらぬ」

僕の心配を返してほしい。

「さあ、姉上の部屋は二階じゃ」

「おじゃましまーす」

家の中に入って、階段を上がる。

「この部屋じゃ」

「え……………」

秀吉に案内されたのは、ドア開けっ放しの下着や本が散乱している部屋だった。

しかも落ちている本が、その、所謂BでLなもので……。

優子の新たな一面を知った日だった。

ちなみに、次の日僕が優子を部屋まで送ったことが優子に知られて、秀吉もろとも理不尽な折檻を受けたのは別の話。

第三十二問 たった一枚の紙が多くの人間を動かした。

バカテスト 日本史

問『樂市樂座や關所の廃止を行い、商工業や經濟の發展を促した歴史上の人物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『織田信長』

教師のコメント

正解です。

鮎川蓮の答え

『六角定頼』

教師のコメント

えつと……？

鮎川蓮のコメント

日本の歴史上最初に樂市令を布いた人物です。

島田美波の答え

『ちょんまげ』

教師のコメント

もう日本には慣れましたか？

この回答を見て先生は少し不安になりました。

吉井明久の答え

『ノブ』

教師のコメント

ちよっと馴れ馴れしいと思います。

第三十二問 たった一枚の紙が多くの人間を動かした。

清涼祭が終わって文月学園は一種の開放感に満ちている。

現在清涼祭の騒動の中心にいた我らがFクラスは朝のホームルーム

の真っ最中だ。

最近気づいたことなんだけど、鉄人はHRの開始時間ぴったりに寸分の狂いもなくやってくる。あの先生は時間にも厳しいようだ。

「鮎川」「はい」「工藤」「はい」「久保」「はい」

いつものことではあるが、HRぎりぎりに教室に滑り込んできた明久。

毎日毎日全力疾走しているのだろうか？

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

淡々と進む出席確認。鉄人の声にクラスメイトは眠そうに返事をしている。

いつもと代わり映えのしない朝。

春先に比べ、幾分か熱を帯びてきた日差しは今日も穏やかに地上を照らしている。

今日もまた平穏で穏やかな日常が――

「坂本」「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せえっ!!』

雄二の一言であっという間に非日常（騒動）へと変貌した。

「ゆ、雄二！いきなり何て事を言い出すのさ!!」

いつもよりも小声で話していたというのに、教室の誰もがしつかりと聞き取っているあたり、Fクラスの連中には世間一般の常識が通用しないと改めて思い知らされる。

『どういうことだ！？吉井がそんなものを貰うなんて!』

『それなら俺達だって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみる!』

僕から見て、明久とFFF団の間には越えられない壁がある気がするんだ。

『ダメだ！ 腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』
『もつとよく探せ！』

必死で探しているFクラスの男子。

非常に見苦しいが今一度良く考えてほしい。

もしこの搜索でラブレターが出てきた場合、その人もFFF団の殺害対象に入るということを。

『……出てきたっ！ 未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！』

その突っ込みの前に、どうしたら卓袱台と置かないこの教室にそれほどどのパンが隠されているのかについて議論すべきだと思う。

「お前らっ！ 静かにしろ！」

鉄人の一言で、先ほどまで響いていた怒号が嘘のように静まり返る。

「それでは、出席確認を続けるぞ」

静寂の中、鉄人の出席簿をめくる音だけが響く。

「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」「戸沢」「吉井コロス」

流石はFクラス。

皆が寸分変わらずに明久への呪いの言葉を口にする。

「皆落ちて着くんだ！ 何故か返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ！」

明久の必死の叫びを一蹴する鉄人。

なんだかんだ言っても、Fクラスの扱いにおいてこの人に勝る人は

いない。

「先生、ここで注意すべきは僕じゃないでしょう!? このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ!」

「新田」「吉井コロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井ブチ殺す」

明久の文字通り命がけの抗議も見事なまでのスル―。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

「待って先生! 行かないで! 可愛い生徒を見殺しにしないで!」
我関せず、とでも言うようにこの殺気漂う異様な教室から出て行くとする鉄人。

それを必死に引き止めようとする明久。

もうなりふり構ってられないのは分かるんだけど、明久の台詞がちょつと気持ち悪い。

「吉井、間違えるな」

ドアの取っ手に手をかけたまま立ち止まり明久に声を掛ける鉄人。
何が言いたいんだろう? 自分のことは自分で何とかしろ、とかかな。

「お前は不細工だ」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ!」

たまに鉄人が本当に教師なのか疑問に思う。

「授業は真面目に受けるように」

それって休み時間は何をしててもいいって事だよな?

「先生待って! せんせーい!」

明久の必死の呼びとめもむなしく、鉄人はさつさとドアを開けて去ってしまった。

鉄人という強力無比なストッパーを失い、これでこのクラスでこれから起こるであろう暴動を止めることが出来る存在はなくなった。

「アキ、ちよつと話を聞かせてもらえる？」

速攻、というべき速さで島田さんが明久の肩を掴む。

明久の顔から冷や汗が出たところを見ると、かなりの握力で掴んでいるのだろう。

「あ、あはは……美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰ったの？ 誰からのの？ どんな手紙なの？」

「あーえつと、そのー」

まだ付き合ってもない二人がこうして命のやり取りをしているこの光景も異常だが、この光景に全く驚かないどころか、日常の一部として受け入れてしまっているあたり僕も普通ではなくなってきたいるのかもしれない。

「いいからおとなしく指の骨を――じゃなくて手紙を見せなさい」
島田さんに一つ言わせて貰うとすれば、明久の手紙一つで必死になりすぎだ。

自分で告白も出来ないくせに人一倍に嫉妬心だけは働かせるなんて図々しいにも程がある。

「あの、明久君」

「ん、なに？」

明久に声を掛けたのは、Fクラスの紅一点（島田さんはいろんな意味で女性とは言えない）である姫路さんだ。

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せてほしいです……」
どこぞの狂戦士とは違いかなり遠慮がちに明久のお願いをする姫路さん。

彼女はこのクラスで数少ない常識人なので、明久が断つても諦めてくれるだろう。

「その……ごめん」

「でも、でも……」

意外と食い下がっている姫路さん。

好きな人にラブレターが来るって事は、女子にとってはかなり重要な問題なんだろうか。

「いくら姫路さんの頼みでも、こればかりは聞けないよ」

「でも私は明久君に酷いことをしたくないんです！」

「ちょっと待って！　姫路さんまで僕に（明久に）暴行を加えることが前提なの！？」

前言撤回。彼女も僕と同じかそれ以上にFクラスの異常な色に染まってきたみたいだ。

「皆、ちょっと落ち着け」

パンパン、と手を叩く音と共に聞こえてきたのはこの異常なクラスを統べる代表であり、明久の親友（と僕は認識している）雄二の声だ。

「今重要なのは明久の手紙を見ることじゃない」
皆に聞こえるようにゆっくりと言葉を紡ぐ。

きつと嫉妬に狂うFクラスの面々を落ち着かせるようなことを言うてくれるのだろう。

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「前提条件が間違ってたんだよ畜生！」

明久が自分の荷物を掴んで教室から走り出す。
僕は雄二の発言に開いた口がふさがらない。

『逃がすなあっ！ 追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！ 吉井を殺せ！』

『サーチ&デス！』

「せめてデストロイで！」

「何をデストロイするの？ 明久の存在？」

「やっぱりそれもなし！！」

冗談抜きでFクラスのメンバーなら明久の存在ごとデストロイしかない。

「いたぞ吉井だ！ 空き教室に向かったぞ！」

「了解だ！ 見失わないように追ってくれ！ こっちは全部隊に連絡を取る！」

「オーケー！ B部隊は正面から、C部隊は背後から回って挟み撃ちにするんだ！」

「応っ！」

教室で授業の準備をしていると、そんな声が聞こえてきた。

なんて無駄な連携力なんだろう……。

「おい蓮。お前は明久を殺しにいかないでいいのか？」

「雄二こそ」

雄二が声を掛けてくる。

明久にFFF団＋島田さんをけしかけた張本人の癖にどうしてまだ教室に残っているんだろう。

「俺は明久の行動が読めているからな」

「……屋上でしょ？」

「なんだ知ってたのか」

転入して一ヶ月とちよつとしか立たない僕だけれど、告白スポットとしての屋上の噂は聞いている。

人も来ないため、告白する人が後を絶たないそうだ。

きっと明久のことだから、屋上で下見も兼ねて手紙を読もうとか考えているに違いない。

「明久相手だと、ムツツリー二は買収されるだろうし、クラスの連中も捕まえるのは難しいはず。クラスの連中を振り切って下見兼ねて屋上に行くと思う」

「そうだ、だから俺は――」

「待ち伏せ、か」

「ああ」

明久が雄二に勝てないわけだ。知力、体力、策略全てにおいて雄二のほうが上だ。

「で？ 僕になんか用？」

「いや、お前は明久の幸せがムカつかないのか？」

「雄二はそんな理由で明久を殺しかけてるのか!？」

まさかそんな理由だとは。

「ちつ、どうやら蓮は俺たちの気持ちかわからないようだな」

「分かる分らないの前に友達の幸福は普通祝福してあげるものだよね？」

「お前は何を言ってるんだ？」

くつ、まさかここまで常識が捻じ曲がっているとは！

「でえ？ 本題は？」

「ああ、お前も付いて来い」

「なにゆえ！？」

「バックアップだ」

「だが断る！」

「……木下姉と一緒に帰ったよな」

「！？ しょうがない。行こうか雄二」

こいつ、他人を脅すのに躊躇がない！

仕方がないから、事の顛末くらいは見届けてあげよう。

ちよつと面白そうだし。

「やはりここまで来たか、明久」

「明久君、言うことを聞いてください」

「雄二に姫路さん……」

階段を上り、明久が屋上へやってきた。

「ちなみに僕もいるからね」

「っ！？ 蓮まで……」

最近、僕の存在感について本気で悩んでいる。

「どうして僕がここへ来ると？」

「屋上は僕でも知っている告白スポットだからね。明久ならきっと下見も兼ねてここで手紙を読もうと考えると思った」

明久が忌々しそうな顔をしている。

「トイレでも行けば、誰にも邪魔されずに読めるはずなんだがな」

「あ」

やはりバカだ。

「ゴメン雄二。僕、ちょっとおなかが痛いから先にトイレに行ってくるね」

「明久君、ずっと気づかなかったんですか……？」

「しょうがないよ、明久だもの……」

姫路さんと一緒に明久に哀れみの視線を向ける。

「ゆ、雄二はどうして僕の邪魔をするのさ！ そんなことをしても、雄二にとってのメリットは何もないはずなのに！」

明らかな話題転換。

まあ、あの視線には僕でも耐えられないけど。

すると雄二が、急に真剣に語りだした。

「そうだな。確かにお前の言うとおり、こんな行動は俺にとって何

のメリットもない。いや、それ以前に俺は彼女がほしいという気持ち自体が全くない」

初耳だ。

雄二だって彼女くらいはほしがっていると思っていたのに。

霧島さんとか霧島さんとか霧島さんとか。

「だったら、どうして……？」

「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粹に——」

そうして雄二は真剣な顔のままで言い切った。

「お前の幸せがム力つくんだよ」

「アンタは最低の友達だ！」

いや、こんなことする奴はそもそも友達かどうかすら怪しい。

「さて明久。ここで『おとなしく手紙を渡せ』なんて野暮なことは言わねえ。本気でかかって来い」

雄二は学生服の上を脱ぎ、ネクタイを外した。

あまり見たことがなかったけど雄二の体は、しなやかで無駄のない、理想的な筋肉のつき方をしていた。

「姫路、上着を持っていてくれるか？」

「あ、はい」

雄二は姫路さんに上着を渡し、軽くシャドーを見せて見た。

鋭い音のするその拳は雄二が喧嘩慣れしていることを思わせる。

本気で明久を殺るつもりだ……。

「明久君、止めておいたほうが……」

姫路さんが明久に心配そうな声を掛ける。

確かに雄二と明久が戦って、明久が勝つ確率はかなり低い。

「心配ありがとう。けど、僕は止める気なんてないから」

「そうですか……。なら、もう止めません」

「……ごめん。心配してくれたのに」

「いえ……なんだか明久君らしいです」

あれ？ これ何処の少年漫画？

「僕らしい？ ーっと。これ、僕の方も持っていてもらえる？」

「あ、はい」

姫路さんに自分の上着を渡す明久。

「……明久」

こぶしを握って構えを取っている明久を見る。

「勝負だ雄二！」

いや、そうじゃなくて――

「……お前、バカだろう」

「へ？」

明久が姫路さんに渡した上着。

そのポケットにはピンクの封筒が入っている。

「あ、あの、手紙がポケットに入ってるみたいなんですけど……見ちゃってもいいんですか……？」

「だ、ダメだよ！ 戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろうが！ やれ姫路！ その手紙を始末するんだ！」

明久と雄二がもみ合っている。

「……あれ？ これってまさか……？」

姫路さんの様子がおかしい。

普通に考えれば他人の思いのつまつた手紙を始末することに戸惑っているように見えるのだろうけど、普段の明久を始末する姫路さんの様子を見ていると姫路さんが戸惑うようには見えない。

「姫路さん！」

「え！？ あ、はい。なんですか？」

「僕には分かってるよ。優しい姫路さんには手紙に込められている人の思いを踏みにじることなんて出来ないってこと。だから、おとなしく——」

「手紙を細切れにするんだ！」

「違うっ！ そうじゃない！ 今のは蓮だな！ そうやって僕の声を使つてつなぐのは反則だ！」

「はいっ！ 分かりました！」

そういつて姫路さんは、懇切丁寧に手紙を細切れにして見せた。

「ああっ！？ それもう絶対読めないよね！？」

「まさか姫路が本当に破るとは思わなかった。……スマン、明久」

「うん……ゴメン明久」

まさか姫路さんがこんな行動に出るとは思わなかった。

「せめてもの詫びだ」

そういつて雄二は手紙の切れ端を集めた。

「ありがとう、雄二。最後の可能性にかけてこの手紙をつなぎ合わせて——」

「——未練を断つてやる」

その手紙に火をつけた。

「つてうそお！？ ここまでやった挙句、容赦なく燃やすの！？
もうこれ１００パー読めないよね！？ 僕の幸せな未来は何処に行

つたの!？」

安心しろ明久。君に幸せな未来なんて待ってないから。

その後の必死の消火活動（明久のみ）の甲斐なく、手紙が全て灰になっていた。

「坂本君と鮎川君は手紙の主が誰だか気にならないんですか？」

姫路さんが安心したように僕と雄二に尋ねてくる。

「俺は明久の幸せを妨害できたらそれでいい。もつとも——」

「誰からの手紙だか、目星は着いてるけどね」

「え……っ!？」

「確かに、他人の書いた手紙を破り捨てたら問題があるよな？」

「そ、それは、その……っ!」

「雄二、その話、もつと詳しく!」

「ああ明久君は聞いちゃダメです!」

「こぺっ!？」

「ひ、姫路さん!？ 明久の首が大変なことになってるんだけど!？」

お茶の間には見せられない姿だ。

「ご、ごめんなさいっ! 私、大変なことを!」

「まあ気にするな。どうせ生かしていてもあの連中に殺されるだけだからな」

『ア~~~~! アンタよくもやってくれたわね~~~~!』

『吉井い! 絶対殺すう~~~~!』

『ガンホー! ガンホー!』

明久に無事明日は来るのだろうか……………。

第三十三問 坂本雄二結婚大作戦！ (前編) (前書き)

昨日は更新できませんでした。
すいません。

こゝ、今週末こそストックを……

第三十三問 坂本雄二結婚大作戦！ （前編）

文月新聞

僕が小さな頃、祖父が良くこう言っていました。

『明久、泥棒でもなんでもいい。一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげようと思います。

爺ちゃん……。

これで、いいかい……？

以上、

『女装が似合いそうな男子ランキングNo.1』

『コイツにだけはバカと言われたくない生徒ランキングNo.1』

『モテそうな男子（同性愛編）ランキングNo.1』

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

尚、女装が似合いそうな男子ランキングにノミネートされていた木下秀吉さんと鮎川蓮さんはアンフェアであるとの結論に達したため除外されています。

第三十三問 坂本雄二結婚大作戦！（前編）

Fクラス全員（秀吉除く）を巻き込み、若干一命が死に掛け、多くの負傷者を出したあのラブレター騒動も既に一週間前の出来事となった。

今、僕達の抱えている話題といえば――

「明久」

「ん？ なに、雄二」

「そっいえば、例のチケットはどうした？」

――召喚大会で明久と雄二が勝ち取った如月グランドパークのチケットの行方である。

「例のチケットって――如月グランドパークのプレミアムチケットのこと？」

「ああ。確か今週末がプレオープンの日のはずだが、姫路を誘って行ってみたりはしないのか？」

「な、何を言っているのさ雄二！ だって、あのチケット使って入

場したら、如月グループの力で一緒に行つた人との結婚を強要されちゃうんでしょ？ そんなことになったら姫路さんが可哀想じゃないか」

「そりや向こうも如月グランドパークを訪れたカップルは幸せになれるとか言うジंकウスを作りたいんだろーし、色々とちよっかいにかけてくとは思うけど」

「うんうん。そうだよね」

「姫路も満更じゃないと思うぞ」

「……………ほえ？」

今日も明久は鈍感なようです。

「いいじゃないか。勇気を出して誘つてみたら。意外とすんなりOKをもらえるかもしれないぞ」

今日も雄二は人生の墓場から逃れるために必死なようです。

「あ、あはは。またまた雄二つてば冗談ばかり。僕なんかが姫路さんと結婚なんて、そんなのあるわけじゃないか」

「ふむ。まあ、お前がそういうならそれはそれで構わないが。けどそれなら、チケットはどうしたんだ？」

「丁度身近に結婚を考えている人がいたからね。その人にあげたよ」
「そうか。そんな奴がいるなら都合がいいな。そのまま上手く結婚になれば、如月グループも喜ぶだらうしな」

「そうなつたら僕が如月グループをぶっ潰す算段を立てるけどね」
「そうだね。上手くいけば全員が幸せだもんね」

「その連中、上手くいきそうなのか？」

「うん。後は時間ときっかけの問題だけだと思うんだ」

「そうか。うまくいくといいな」

「大丈夫。きつとうまくいくよ」

今日も僕は忘れ去られているようです……。

雄二Side

時は流れ、週末。

「……俺は……無力だ……」

俺は朝から翔子とお袋の作戦に嵌り、警察のオッサンに『二次元と現実の区別が出来ない妄想野郎』のレッテルを張られた上に、如月グランドパークに来るハメになっていた。

「……やっとなつた」

嬉しそうにグランドパークの入り口を眺めている翔子。

そんな姿を見ると、つれてきた甲斐があるかもしれない。

「よし、翔子」

「……うん」

「帰ろう」

ミシッ

「……ダメ。絶対に入る」

「はっはっは。翔子、おれのひじ関節はそっちの方向には曲がらな

いぞ？」

肘を極めてきた翔子に、脂汗を浮かび上げらせながらも笑いかける。
まずい。指先の感覚がなくなってきた。

「……恋人同士は皆こうしてる」

「待て翔子！ お前は腕を組むという仲睦まじい行為とサブミッシ
ョンを同様に考えてないか！？」

「……？？？」

素で疑問符を浮かべるとは恐ろしい女だ。

きつとコイツには、世の中の恋人は皆、相手を逃がさないように肘
関節を取り合っているように見えるのだろう。

「……とにかく、入る」

左腕を人質に取られたまま入場ゲートへと連行される。

ブレオーブンという限定的な期間のためか、特に待つこともなく係
りの青年の前に進むことが出来た。

「いらつしゃいマセ！ 如月グランドパークへヨウこそ！」

その男は日本人ではないのか、若干訛りのある日本語で応対してき
た。

肌の色も顔もアジア系なので、何処の国の奴かは良くわからないが。

「本日はブレオーブンのデスが、チケットはお持ちデスカ？」

「……はい」

青年は翔子からチケットを受け取ると、笑顔のまま一瞬固まった。

「……そのチケット、使えないの……？」

翔子が不安そうな顔で尋ねる。俺としちゃ、使えないほうがいいんだが。

「イエイエ、そんなことはないですよ？ デスが、少々お待ちください」

係員はポケットから無線を取り出し、どこかに連絡を取り始めた。

「——私だ。例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始める。確実に仕留める」

「おいコラ。何だその不穏当な会話は」

こいつ急に眼の色が変わりやがった。まさか例のジnkスを作るための作業員か？

「……ウエディングシフト？」

翔子が首をかしげている。如月グループの陰謀を知らないコイツには良くわからない単語だろうな。

「気にしないでください。コッチの話デース」

取り繕ったようににもとの口調に戻る係員。あからさまに怪しい。

「アンタ、さつき無線で流暢に日本語しゃべってなかったか？」

「Japanese is too difficult for
understanding」

俺が指摘した途端、いきなりやたらと発音のいい英語を喋りやがった。

なんなんだコイツ？

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場さえさせてくれたら、後は放っておいてくれて構わない」

潔いというか、もう開き直ってるとしか思えないそのネーミングのおかげで向こうが何をやるうとしているかが良くわかった。

だが、そんなものに乗る気はない！　そうしないと、俺の人生が……っ！

「そんな事いわズニ、お世話させてくだサーイ。とっても豪華なおもてなしさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！　そんなことされたら、我が家は食中毒で大変なことになってしまう！」

あの母親は間違いなくザリガニを伊勢海老と勘違いして食卓に上げるだろう。

なんて恐ろしいことをしてくれるんだ、この似非外国人め……！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いの二人の愛のメモリーを残しマース」

「……雄二と、お似合い……（ポツ）」

翔子は似非野郎の言葉に顔を赤らめていた。

コイツは係員の言葉遣いに違和感を感じないのだろうか？

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。

なんだか見覚えのある奴だな？　帽子で顔を隠しているのが怪しいが……

「I appreciate your act」

「あ、あぶり……？」

似非外国人が英語で礼を言つてカメラを受け取る。

スタッフのほうは、外国人が言っている意味が分からないのか、アホな声を出している。

やっぱり妙だ。

スタッフのほうに見覚えがあるのもそうだが、俺の知り合いに二人ほど外国語の発音がやたらいい奴がいる。

——ちよつと試してみるか。

雄二Side Out

蓮Side

（チッ！ 雄二の奴が怪しんでいる）

はろー。この小説の主人公（忘れてないよね？）鮎川蓮です。

僕は今、如月グランドパークにいます。

雄二と霧島さんのデートを応援しよう！ と明久が面白半分で提案し、Fクラスのメンバーが集まったわけですが、目の前で雄二がスタッフに扮した明久に疑いの視線を浴びせている真っ最中というわけ。

ちなみに僕は、メイク&この前テレビで見た外国人タレントの声帯模写をして係員やってます。

「悪いが少し電話をさせてくれ」

「……分かりましタ」

雄二が携帯電話を取り出して電話を（おそらく明久の携帯にだろうが）掛ける。

P r r r r r r r r r

「ああ、すみません。僕の携帯ですね」

明久の尻ポケットから携帯の呼び出し音が鳴る。

「……いよう明久。テメエ、面白いことしてるじゃないか……」

「人違いですっ！」

ダッ！

「あっコラ！ 逃げるなテメエ！ ええい、離せこの似非外国人！」
今の雄二を離れたら明久が無残な変死体として発見されそうだ。

「彼はこのスタッフのエリザベート・ハナコ（35歳）、通称ステイーヴでース。吉井ナントカさんではありません」

「黙れ！ 人種性別年齢氏名全てに堂々と嘘をつくな！ 島もどう考えてもその名前で通称ステイーヴはないだろ！ ついでに俺は吉井なんて苗字は一言も言ってない！」

「しまったっ！」

「ん？ 貴様その声といい、英語の発音といい、明久より低いその身長といい……お前蓮だな！？」

「何を言っているのデスか？ 私はロータス（英語で蓮）・エイン・スウィートフィッシュ（ドイツ語で鮎）でース」

「完全に当て字じゃないか！？」

チッ！ ばれたか……。

僕と明久の存在を確認した以上、ほかのメンバーについても警戒するだろう。

やり辛くなつた。

「翔子、スマンがちょっと我慢してくれ」

「……??？」

雄二はそういつて、きょんとしている霧島さんのスカートを掴み、軽く捲りあげる。

つて！？ いきなりになにをっ！？

「……………（ギラッ）」

雄二の大胆行動に僕がテンパっている間に、近くに潜んでいたムツツリー二が霧島さんのサービショットに反応してしまった。

「咄嗟にカメラに手を伸ばすその動き……。やはりムツツリー二も来ていたか」

はい。そうですよ。僕と明久がいてムツツリー二がいないわけじゃないですか。

「……雄二、えっち」

霧島さんが少し困つたような顔で雄二に抗議している。

こんな人の多いところでスカートを捲られるという大事をやられたのに、満更でもないあたり、霧島さんの眼中には雄二しか映っていないに違いない。

「なっ！？ 違うぞ翔子！ 俺はお前の下着なんかには微塵も興味がない！」

「……それはそれで、困る」

「ぐああああああっ！ 理不尽だあっ！」

霧島さんの握力で、雄二の頭蓋が軋む音がする。

今のうちに写真撮影を済ませてしまおう。

「では、写真を撮ります。はい、チーズ」

フラッシュと共に、電子音が聞こえ撮影が終了する。
カメラをムツツリー二に渡し、印刷してもらう。

「すぐに印刷いたしますので、そのままお待ちください」

「……わかった。このまま待ってる」

雄二にアイアンクローをしたまましゃべる霧島さん。
そういう意味じゃないんだけど……。

程なくして、ムツツリー二が印刷を終え、写真を持ってきた。

「!? —— はい、どうぞ」

写真を見たときの動揺を押し殺し、雄二と霧島さんに写真を見せる。

「……雄二、見て。私達の思い出」

「……なんだ、この写真は」

写っているのは霧島さんの後姿とアイアンクローに悶絶している雄二。そして――

「さ、サービス加工も入れておきました」

その二人を囲むハートマークと『私達、結婚します』という文字。

写真を撮った張本人が言えるせりふじゃないかもしれないが、この二人に幸せは訪れそうにない。

「この写真を、パークの写真館に飾ってもいいですか？」

「蓮、正気か!? これを飾ることでここに何のメリットがあるって言うんだ!?」

メリットどころかデメリットしかないだろうが、明久がそうするよ
うに言っていたから、僕は従わざるを得ない。諦めてくれ、雄二。

「……雄二、照れてる？」

「すまない。この写真で照れる要素が何処にも見当たらない」
なんて、印刷された写真を見ていると、

『あぁっ！ 記念撮影してる！ アタシらも撮ってもらおうよ！』

『オレ達の結婚の記念に、か？ そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

まあ、なんと頭の悪そうなカップルが歩いてきた。

つか、何でそんなに偉そうなんだ？

「すみません。こちらは特別企画ですので――」

一応下手に出て謝しておく。

これはパークの許可を取って、僕たちが雄二と霧島さんだけを対象にやってることだから、他の客までやる余裕はない。

『あぁっ！ いいじゃねーか！ オレたちやオキヤクサマだぞコルア！』

『きゃーっ。リユータ、かつこいーっ！』

上から見下ろすように威嚇してくる男のほう。

絵に描いたようなチンピラんだけど、そのチンピラを見て喜ぶ女のほうもどうかと思う。

あと、一つ言うとなれば、『お客様は神様』っていうのは、お店の接客の心構えであって、お客である貴様らが持ち出すような言葉ではない。

こんな奴がプレオープンとはいえ園内をはいかいしているのもパークにとって迷惑になるだろう。ということで駆除しておこう。

「お客様。この往来ではなんですので、完全なツーショットをお撮り致します。こちらへ」

頭の悪いカップルを人の少ない場所——具体的に言うとトイレの裏——に連れ込む。

「貴様ら調子こいてんじゃねえぞゴルアッ！」

『ぎゃああああああああああああっ！』

駆除完了。

その後戻ったときには、雄二と霧島さんの姿はなかった。

第三十四問 坂本雄二結婚大作戦！ (中編) (前書き)

今回は短いです。

どうしても2話で収まらなかった……。

第三十四回 坂本雄二結婚大作戦！（中編）

坂本夫妻のマル秘恋愛テクニック講座

「……おい翔子。とりあえず俺に分かるように状況を説明しろ」

「……これは、私達夫婦が恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」

「ちなみに僕、鮎川蓮と吉井明久がアシスタントです」

「驚いた。このタイトル、『の』の部分以外嘘しか書いていないぞ」

「……では、ハガキの紹介」

「たまには俺の話聞け」

「……『突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です』」

「ハガキの差出人よ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。コイツが本当に恋愛相談の相手にふさわしいか、もう一度良く考えて欲しい」

「……『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないか心配です。どうしたら良いでしょうか？』」

「いや、どうしたらと言われてもな」

「……夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない」

「頼むから他人事と思ってくれ」

「……だから、私の考えた浮気防止法を教えてあげる」

「翔子よ、それは俺の身に降りかかる不幸予告と考えていいのだから？」

「……用意するものは三つ。アシスタントさん。お願い」

「「はいはい」」

ガラガラ

「？ 浮気防止に道具が必要なのか？」

「……一つ目は」

「一つ目は？」

「……『手錠』」

「翔子ストップだ。一つ目からいきなり犯罪臭がする」

「……二つ目は」

「やっぱり聞いていないな。それで、二つ目は？」

「……『エプロン』」

「ちょっと待ってくれ。急にお前の考えが読めなくなった。と、いつかその組み合わせで俺に何をするつもりなんだ？」

「……そして三つ目は」

「三つ目は？」

「……『ビデオカメラ』」

「貴様何を撮るつもりだ！？ 手錠とエプロンでドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ！？」

「……その三つを用意して、夫に浮気の怖さを教えてあげるといい」
「俺は今何よりお前が怖い」

「……以上、『バカなお兄ちゃん大好き（１１歳）』ちゃんからのおハガキでした」

「差出人小学生かよ！？ 世も末だな！？」

「どうしてだろう、蓮。僕他人事とは思えないんだ」

「奇遇だな明久。僕もこんなことをやる人間を身近に知っている気がする……」

第三十四問 坂本雄二結婚大作戦！（中編）

雄二Side

「さて。それじゃ、テキトーに回って帰るか」

「……楽しみ」

チンピラカップルの相手をしている蓮を尻目に、俺達は園内を回っていた。

前評判どおりの最新アトラクションが沢山ある。

3Dの体験アトラクションから絶叫マシン、コーヒーカップやメリーゴーランドなど、知っているアトラクションはすべて揃っているようだ。

中には、見た目だけでは想像もできないようなものもある。

「映画館でもあれば楽なんだがな」

「……折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

翔子に却下されたので、仕方なく妙な雰囲気にならないようなアトラクションを探す。

すると、そんな俺達にヒョコヒョコと着ぐるみが近づいてきた。さっきの狐の着ぐるみに似ている。違いは服装だ。さっきの奴と違って大きなリボンをしているところを見ると、こいつはメスなんだろう。

『お兄さん達、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声。ボイスチェンジャーなどは搭載してないのか、その声は普通の人間の声だった。……というか、聞き覚えのある声だ。気のせいかな、クラスメイトの優等生の声に聞こえてならない。

こいつも確認しておくか。

「そつえば、さっき明久がバイトの女子大生に映画に誘われてたな」

『ええっ！ 明久君が！？ それは何処で見たんですか！？』

本当にコイツらは、揃いも揃って……。

「おい姫路。アルバイトか？」

『あ……っ！ ち、違います！ 私——じゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ？ 見てのとおり狐の女の子だよ？』

「じゃあ、フィーとやら。お前のおススメを教えてもらえるか？」

『あ。う、うんっ。フィーのおススメはねっ、向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

姫路——ではなくてフィーは噴水を挟んだ向こうにあるお化け屋敷を指さす。ふむ。ハイ病院を改造したとか言う例のアレか。

「そうか。ありがとう」

『いえいえっ。楽しんできてねっ』

「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中を押して歩き出すと、姫路が慌てたように俺の手を掴んできた。

『ままま待つてください！　どうしておススメ以外のところに行くんですか！？』

「どうしてもクソもあるか。お前の口ぶりから察するに、お化け屋敷に余計な仕掛けが施されていることは明白だろう。態々そんなところに行く気はない」

『そ、そんな困りますっ！　お願いですからお化け屋敷に行って下さいっ！』

「断る」

そのお願いとやらのために残りの人生を捧げる気はない！　断固として拒否し、俺は自由を謳歌するんだ！

雄二Side Out

蓮Side

『お願いですっ！　お化け屋敷はきつと楽しいですから！』

「い・や・だ！」

チンピラカップルを駆除し、雄二たちをやっと見つけたと思ったら、雄二がフィー、もとい姫路さんに掴まれているところだった。

話している内容から察するに、姫路さんがお化け屋敷に行くように勧めて雄二が断っている、という構図か。

助けに入ろうかな？なんて考えていると、向こうのほうから何かが近づいてきた。

『そこまで雄二——じゃなくって、その不細工な男！』

「その頭の悪そうな仕草……明久かつ！」
颯爽と登場したのはフィーの色違いの狐の着ぐるみ（たしかノインだったはず）だった。

『失礼な！ 僕——じゃなくてノインの何処が頭が悪いつて言うんだ！』

「黙れ！ 頭部を前後逆につけている奴をバカといって何が悪い！」
本来はマスコットの名の通り可愛らしい外見をしているであろうその狐の着ぐるみは頭部の装備が前後逆になっているせいでとてもシユールな生物に変わり果てていた。

「……雄二、ノイちゃんはすっかりさんだから」

「翔子。すっかりで頭部が前後逆になる生物がいたら自然界で即座に淘汰されると思うぞ」

今回は雄二に賛成だ。

すっかりで即死する生物などいたら食物連鎖の底辺もいいところだろう。

もしかしたら植物よりも下かもしれない。

『あ、明久君つ。頭が逆です！ ああつ！ 今小さな子が明久君を見て泣き出しちゃいましたよ！？』

『うわっ、しまった！ 通りで前が見えないと思った！』

『早く直さないと坂本君にばれちゃいますっ！』

今頃気づく明久だが、前が見えないのにどうやってここまで来たんだろう？

意外と侮れないかもしれない。

……さて。そろそろ助けに入るか。

「はい。すみません。お待たせいたしました」

雄二と霧島さんに近づいて声を掛ける。

「蓮、貴様ついに似非日本語すら使わなくなったな！？」

雄二がなんか言ってるけど気にしない。

「坂本雄二さん、というか雄二。お化け屋敷に行ってくれない？」

「だからいやだといってるだろうが」

「コトワレバ、アナタの実家にプチプチの梱包剤を大量に送りマース」

「やめろっ！ そんなことされたら我が家の家事がすべて滞ってしまっ！ そしてお前は どうしてこのときだけ似非日本語を使う！？ さらに何処でその情報を仕入れた！？」

明久から仕入れました。

『ところで明久君。さっき女子大生の人から声を掛けられていたって聞きましたけど？ まさか、大事な作戦の最中に他の女の人と……』

『え？ なんのこと？ 僕は別に何も——ってあれ？ どうして携帯電話を取り出すの？ 誰かを呼ぶ気？』

『美波ちゃんが来てくれるそうです。お話、ゆっくり聞かせてくださいね？』

姫路さんは着ぐるみを着たままどうやって携帯を操作したんだろう？
彼女も侮れないスキルの持ち主なのか……。

『だ、ダメだよ！ オープン初日に刃傷沙汰なんてココの評判に――
ひいっ！ なんだかすごい勢いで誰かが走ってきているんだけ
ど！？ 土下座でも何でもするからころさないでくださいっ！』

ファンシーな狐の痴話喧嘩って、なかなか見れるもんじゃないよね
……。

仕方がない。奥の手を使おう。
霧島さんに近づいて、耳もとで囁く。

「坂本翔子さん、お化け屋敷は抱きつき放題ですよ？」

「……雄二、お化け屋敷に行きたい」

「汚いぞ蓮、翔子を使って罠に嵌めようなんて！ それと、翔子を
勝手に入籍させるな！ そいつの苗字は霧島だ！」

「……大丈夫。すぐに変わるから」

抗議する雄二の肘関節を極める霧島さん。

彼女は結婚相手の意思は関係ないのだろうか……？

「で、では、この誓約書にサインしてください」

「なんだこれは？」

「ただの誓約書です」

「お化け屋敷に誓約書が必要なのか……まあ、面白そうではあるな」
雄二が誓約書に手を掛ける。

その誓約書にはこう書かれていた。

「誓約書」

1・私、坂本雄二は霧島翔子を妻として障害愛し、苦楽を共にすることを誓います。

2・婚礼の際には、如月グランドパークを利用することを誓います。

3・どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

「……はい雄二。実印」

「……朱肉はこちらです」

「俺だけか！？俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか！？」

安心してくれ雄二。僕だってこの状況も如月グループの考えもおかしいと思っている。

とりあえず、冗談ということにして、雄二と霧島さんにはお化け屋敷の中に入れてもらう。

「それでは、お邪魔になりそうなその大きな鞆をお預かりいたします」

「……お願い」

霧島さんの鞆を受け取る。

遊園地に来るにしては荷物が大きいと思っていたところだ。

「……零れちゃうから、横にしないで欲しい」

「この鞆をですか？分かりました。気をつけます」

零れる……か。何が入っているんだろう。

「では、いつてらっしゃいませ」

「……雄二、行こう」

「痛だただだっ！肘がねじ切れるっ！」

雄二の抵抗むなしく、霧島さんと雄二はお化け屋敷の入り口に立つ。

いつてらっしやい。出来れば生きてまた会おう……。

あのお化け屋敷には、明久考案の作戦が施されている。

と、いうのも歩いていると、廊下のスピーカーから、『姫路のほうが、翔子よりも好みだな。胸も大きいし』と、雄二の声真似をした秀吉の声が流れてくるというものだ。

さらに、処刑道具として釘バットが下りてくるなんて鬼畜にも程がある。

そのおかげで、雄二たちがお化け屋敷に入ってから出てくるまでの小一時間、雄二の叫び声が途切れることはなかった。

明久はこのどさくさに紛れて、本気で雄二殺害を目論んでいないだろうか？

「お、お疲れ様でした。どうでしたか。結婚したくなりましたか？」
「あれと結婚を結び付けて考えられるのは、明久だけだと思っていたが、お前もなのか？」

いやだって、こう言うように台本に書いてあるんだもん。

「この作戦は明久考案だから、文句があるなら明久に言ってくれ」

「認めたな！？ ついに明久の存在を認めたな！？」
「だって気づいてるでしょ？ どう見ても」

逆にここまでして気づかないのは全世界でも明久くらいのもんだろう。

でも、明久考案の作戦にしないといけなかったんだ。

そうじゃなかったら、如月グループ考案の作戦になってしまうところだったんだ。

如月グループの作戦。

1、詐欺。2、ヤクザを使つての脅迫。3、人質をとつての脅迫。

鬼畜にも程がある。

「……そろそろ、お昼」

大企業の暴挙に頭を悩ませていると、霧島さんの声で現実に戻された。

腕時計を確認してみると、午後の一時を過ぎている。

そろそろ次の作戦の時間だ。

「……あの、私のバック——」

「では、豪華なランチを用意してありますので、こちらにいらしてください」

さっきの霧島さんの言葉で、バックに何が入っているのかは大体分かってしまったが、心を鬼にして歩き出す。

昼食会場に来てくれないと、霧島さんが一番望むものが体験できないんだ。

「翔子、どうした？」

「……なんでも、ない」

「????」

寂しそうな霧島さんの声を背後に歩を進める。

きつと満足させるから、待っててね霧島さん（雄二は除外）！

第三十五問 坂本雄二結婚大作戦！ （後編）（前書き）

また一日空いてしまいました。

悩んだ割に結局いつものとおりグダってる気がします……。

第三十五問 坂本雄二結婚大作戦！ （後編）

「……………土屋と」

「工藤の」

「「性活小嘶っ！」」

「はい。このコーナーでは、日々の生活に根ざした
ちよつとエッチな小嘶をボクこと工藤愛子とムツッ——」

「……………土屋康太」

「ムツツリー二君が紹介していくというものです」

「……………最近、本名を呼ばれない……………」

「では、今回のテーマですが——」

「……………本名……………」

「——『シャワーの正しい使い方』です」

「……………っっ！（ドバッ）」

「ええっ！？ もう鼻血！？ ムツツリー二君、想像力豊か過ぎない！？」

「……………構わず続けろ」

「う、うん。えつと、ちよつとエッチなお話ということなので、ボクの体験談をお話します。」

実は先日、学校帰りに雨が降ってきて」

「……………っ！（ダラダラ）」

「運の悪いことに、その日は部活でふざけていたらプールに着替えを落としちゃって、

下着がビショビショになっちゃったんだ」

「……………っっ！（ダバダバ）」

「下は流石に我慢して穿いてたんだけど、上は——ってムツツリー二君！？」

もう二リーッターくらい血が出てるみたいだけど本当に大丈夫なの！？」

「……………構わずに、続けるんだ……………っ!!」
「そ、それで、雨でシャツが透けてきちゃって」
「……………つつっ!!!（ブシャーアアアア）」
「やっぱりこの企画無理があるよ! まだシャワーの話に入っていないのに相方がグロッキーになってるんだもん!」
「……………死しても尚、魂で聞き続ける……………っ!」
「そんなの無理に決まってるでしょ!? とにかく今回はこれで終わり!」
「それではまた次回お会いしましょう! お元気でー!」
「……………続きが気になる」
「それより先に保健室!」

雄二Side

似非外国人もとい蓮について歩いていくと、小洒落たレストランが見えてきた。

「こちらでランチをお楽しみください」

もう既に似非日本語を使うつもりはないのか、いつもの口調に戻っている蓮に案内されたのは、パーティ会場のような広間だった。

そこらじゅうに丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。この雰囲気、レストランというよりは――
「……クイズ会場？」

そう。一応丸テーブルの上には豪華な食事が用意されてはいるが、TVでよく見るクイズ会場のようになっていた。

「いらつしゃいませ。坂本雄二様、翔子様」

ボーイが現れ、俺たちを席に案内する。……コイツも見覚えがある面だな。

「秀吉、ボーイの真似事か？」

「秀吉？ 何のことでしょうか？」

あくまでも認めない秀吉。まあいい。明久と同じように、道具を使うまでだ。

携帯電話を取り出し、アドレス帳から、『木下秀吉』を呼び出す。すると、俺が通話ボタンを押すよりも先にボーイが動いた。

「おおっと、手が滑ってしまいました！」

ポケットから携帯を取り出し、噴水のある方向に思いっきり投げつけた秀吉（?）。

遠くから、ポチャンと何かが水没する音が聞こえた。

「そ、そこまでやるか!? あれは確実に壊れたぞ!？」

「何のことでしょうか？」

いくらあまり使っていないとはいえ、携帯を捨ててくるとは……敵ながらたいした役者根性だ。

「それでは、こちらにどうぞ」

「あ、ああ……」

ボーイに連れられて会場の中を移動する。

「お客様は未成年との事ですのでこちらを用意させていただきました」

席に着くと、秀吉がグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくる。

ラベルが見えるように持っているあたり、徹底した演技だ。流石は演劇部、といったところだろうか。

「オードブルでございます」

グラスを置くと、すかさず運ばれてくる料理。豪華な、という前置きは間違いではないようで、慣れない料理に苦笑しながら、ナイフとフォークを手取るようになった。

もつとも、翔子はこういった席には慣れているのかもしれないが。

そして、デザートも食べ終え、ここには何の仕掛けもないのかと安堵しかけたそのとき。

『皆様。本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます！』

会場にアナウンスの声が大きく響き渡った。

『なんと本日ですが、この会場に結婚を前提としたお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしやっているのです！』
飲んだ水が少しだけ鼻から逆流した。

『そこで、如月グループとしてはそんなお二人を応援するための催しを企画させていただきました！ 題して「如月グランドパークウエディング体験」プレゼントクイズ』

出入り口を閉鎖する重々しい音が聞こえてくる。退路を断つとは、おのれ明久。俺の行動パターンは予測済みということか……。

『本企画の内容はいたってシンプル。こちらの出題するクイズに答えていただき、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験していただけるというものです！ もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが』

大問題だバカ野郎。

『それでは、坂本雄二さん&翔子さん！ 前方のステージへとお進みください！』

ご丁寧にも、司会が俺たちのほうをさしてくれたおかげで、会場の視線が俺たちに集中した。

翔子かというと――

「……ウエディング体験……頑張る」

「落ちて着け翔子！ そうついたものはだな、きちんと双方の合意の

下に痛だだだっ！

耳が千切れるっ！　行く！　行くから離してくれっ！」

翔子に引っ張られながら、自分にただの体験だと言いついて聞かせて壇上に上る。

『それでは「如月グランドパークウエディング体験」プレゼントクイズを始めます！』

俺と翔子の間に、大きなボタンが一つ設置されている。

これを押してから解答するという、オーソドックスなシステムのようだ。

そうだな……。正解したらプレゼント、ということは間違え続けたら無効になるのだろう。それなら俺が間違え続けるとするか。

『では、第一問！』

ボタンに手を伸ばし、問題を待つ。

さて……。どんな問題が来る……？

『お二人の結婚記念日はいつでしょうか？』

おかしい。問題の意味が分からない。

——ピンポーン！

しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを押してしまった。

だが、いくらこいつでも答えの存在しない問題に答えることなんて

『はいっ！　答えをどうぞ！』

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！ 恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」
『お見事。正解です！』

しかも正解！？

司会者を睨みつける。すると、観客に見えない角度で、俺に向かつて片目を瞑ってきた。
さては……出来レースかつ！

『第二問！ お二人の結婚式は何処で挙げられるのでしょうか？』

——ピンポーン！

素早くボタンを押し、マイクに口を寄せる。
既に問題がただの質問と化しているように感じられるが、そんなことはどうでもいい。

『鯖の味噌煮！』

『正解です！』

「なにいつ！？」

馬鹿な！？ 場所を聞かれたのに味噌煮が正解なんてありえるのか！？

『お二人の結婚式は、当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名「鯖の味噌煮」で行われる予定です！』

「待ていつ！ 絶対その別名は今この場で命名しただろう！ 強引にも程があるぞ！」

『第三問！ お二人の出会いは何処でしょうか？』

ダメだ、聞いてねえつ……！ だが向こうのやり口は分かった。今度は確実に間違えてみせる！ 翔子が動くより早くボタンを押して間違った解答を――

「……させない」

ブスッ！

「ふおおおおっ！ 目が、目があつ！」

——ピンポーン！

『はい、解答をどうぞ』

「……小学校」

『正解です！ お二人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚に至るといふ、なんとも仲睦まじい幼馴染なのです！』

俺が今目を突かれたのは見えていないのか！ 何処をどう見たら仲睦まじいなんて単語が出てくる！？

こつなつたら、翔子の妨害が間に合わないタイミングで間違えてやる！

『それでは第四問！』

——ピンポーン！

妨害が来る前にボタンを押す。

どんな問題が来るか分からないが、『分かりません』と答えれば100%間違いになるだろう。

「——分かりません」

『正解です！』

な、何——っ！

『ただいまの問題は、宇宙の果てはどうなっているか？ でした』
なるほど、それは確かに答えは誰にも分からない……。

最後の切り札もかわされ、もはや間違えることは不可能だ、と諦め
そうになったその時、

『ちよつとおかしくな〜い？ アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜？』

不愉快な口調の救いの神が現れた。

雄二Side Out

蓮Side

『ちよつとおかしくな〜い？ アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜？』

雄二を出来レースに上手くはめ、あと一問でウエディング体験、というところで闖入者が現れた。

あのバカ口調……生きてやがったか……。

スタッフの制止も何処吹く風と、威嚇しながらチンピラカップルが壇上へと上がってくる。

『じゃあ、こうしよーよ！ アタシらがあの二人に問題を出すから答えられたらあの二人の勝ち、答えられなかったらアタシらの勝ちってことで！』

この会場で一番問題なのは貴様らの思考回路だ。

だが、ああやって騒ぎ立てるタイプのバカは企業にとってはタチが悪い。

自分達が常識ハズレな行動をしているとは思えずに、要求を呑まなかった企業が悪いと必要以上に騒ぎ立てる。

雄二のほうを見てみると——アイツ！ 嬉々としてやがる！

『じゃあ、問題だ』

チンピラが周りの意見を完全無視して発言する。
どうにかしてあいつを止めないと！

チンピラカップルのウエディング体験なんて見せられたら目が腐ってしまふ！

『ヨーロッパの首都は何処だか答えろっ！』

そう。今まさにこの瞬間。会場の空気が凍ったんだ。

『オラ、答えろよ。わかんねえのか？』

確かに分らない。僕の記憶が正しければ、地球上の全史のなかで『ヨーロッパ』なんていう名前の国が存在したことはない筈だ。

『……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。『如月グランドパークウエディング体験』をプレゼントいたします』

『おい待てよ！ こいつら答えられなかっただろ！？ オレたちの勝ちじゃねえかコルア！』

『マジありえなくない！？ この司会バカなんじゃないの！？』

バカなのはお前らだバカ、とは言えず。

居た堪れない雰囲気の中ステージに幕が降りる。

明久以上のバカがいるなんて、世界つてのは広いんだな……………。

『それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！ 皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！』

雄二と霧島さんのウエディング体験が始まった。

あのカップルのせいで完全に冷めてしまった会場が心配だったが、サクラの人たちの頑張りもあってか、園内全部に聞こえるかというほどの拍手が聞こえてくる。

ステージの端に雄二の姿が見える。

白の燕尾服に身を包み、いつもの雄二の姿は陰すら見えない。

『それでは新郎のプロフィール紹介を——』

あれ？ そんなの予定にあったっけ？

まあ、明久あたりに聞いて、簡単なプロフィールを作っているんだろう。

『——省略します』

思わずこけてしまった。

『ま、紹介なんていらねえよな』

『興味ナシ』

『ここがオレたちの結婚式に使えるかどうかが問題だからな』

『だよな』

最前列からこんな声が聞こえてきた。
いわずもがなあのチンピラカップルの声である。

分かっていたとはいえ、外見に相応しいマナーの持ち主だ。

『……他のお客様の迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮いただけますようお願い致します』

『コレ、アタシらのこと言ってるの？』

『間違えだろ。俺らはなんたってオキヤクサマだぜ？』

『だよね〜っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。要は俺たちの気分が良いか悪いかの問題だろ？ な、これ重要じゃない？』

『うんうん！ リュータ、イイコト言うね！』

ちょっと用意しておこうか。

ステージの裏に回る。

少し用意をしておいたほうがよさそうだ。

『本イベントの主演、霧島翔子さんです！』

僕が会場に戻ったときには、丁度霧島さんが入場するところだった。

『……………綺麗』

何処からともなく感嘆の声が聞こえる。

霧島さんの黒い髪に白い肌が、純白のウェディングドレスによく映

えている。

霧島さんは雄二の元に歩み寄り、何かを話している。

「……雄二のお嫁さんになることが夢だったから」

霧島さんは涙声で雄二に告げる。

目には光るものが。

不覚にももらい泣きしてしまいそうになった。

きっと雄二はこの状況でも断るだろう。

坂本雄二とは、どんな状況でも自分の正義を貫く男だ。

けれど、今日、雄二に自分の夢を告げたことは、霧島さんにとって必ずプラスになると思う。

『あゝあ、つまんない』

何かを言いかけた雄二を止めたのは、反吐が出るほど下卑た声だった。

『マジつまんないこのイベントあゝ。人のノロケなんてどうでもいいからさあ、早く演出とか見せてくんない？』

『だよな。お前らの事なんてどうでもいいっての』

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ？ バカみてえ、ぶつちやけキモイんだよ！』

『純愛ごっこでもやってんの？ あのオンナ、アタマおかしいんじゃない？』

『そっか！ コレってコントじゃねえ？ あんなキモイ夢ずつと持つてる奴なんていねえもんな！』

『えゝ！？ コレってコントなのお？ だとしたら、超ウケるんだけど』

口々に文句を言い、霧島さんを指さして笑い始めるクス共。
誰も止めない。

すると、霧島さんが走り去っていく音が聞こえた。

僕は客席最前列目指して歩き出す。

後ろから聞きなれた声が聞こえた気がしたけど、もうどうでもいい。

「オイあんたら」

『ああ？ なにか用かよ』

「……まだ」

『ああ？』

「邪魔だ。出て行け」

『はあ？ 何言ってるの？ アタシらはオキヤクサマなんだけど』

「残念だが、僕はアンタ達と同じこの客だ」

僕はさつきステージ裏で私服に着替えている。

私服なら、クスをつまみ出してもパークの責任にはならない。

「さつきから、アンタらの所為で折角のイベントをゆっくり見れないんだよ。」

皆の迷惑になるから出て行ってくれないかな？」

『はあ？ 何言ってるんだ？ オレたちがためえらのために出て行くワケないじゃん』

『アンタバカじゃないの？』

コイツ等……ッ！

「……なら、力づくで出て行かせるまでだ」
『ああ？』

バキィ！

『ぐふうっ！』

『リュ、リユータ！』

クズ（男）を気絶させ、首根っこを掴んで出口から放り出す。

『あ、アンタ、なにすんのよ！？』

「……オマエも殴られてエのか？」

『ひいつ！』

完全に萎縮しているオンナを尻目に会場へ戻る。

『霧島さん？ 霧島翔子さーんっ！ 皆さんっ、花嫁さんを探してください！』

やっぱり霧島さんは戻ってきていないか。

「さ、坂本雄二さん！ 霧島さんを一緒に探してください！」

「悪いが、パスだ」

雄二が不服そうにスタッフに答えている。

「雄二？」

「ああ？」

「……クズは5分くらいで目が覚める。傷もつけてない」

「……分かった。だが、次手を出したらお前もぶん殴るからな」

雄二が会場を出て行く。

「……後はヒーローに任せますか」

僕が出来ることはもうない。

きつと霧島さんのヒーローが全て解決してくれる。

「Arbeit……ein, held」

週明けの学校にて。

「おい明久」

「なに、雄二？」

……来た。

「如月グランのパークでは随分と色々やってくれたな」

「あははっ。何言ってるのさ。僕は一日家でゲームをやってたんだよ？ 如月グランドパークになんていけるわけないじゃないか」

「……そうか。お前がシラを切るならそれでいい」

「な、何を言ってるのさ。変な奴だなあ」

「ところで、お前にプレゼントがある」

「え？ なになに？」

「今話題の映画のペアチケット（……）だ。気になる相手がいれば一緒に行くといい」
雄二が大声で告げる。

クラス中に聞こえるように。

「ペアチケット？ うーん、そんなもの貰っても、使い道に困って——」
「それじゃあな」

『ア、アキっ！ そういえば、ウチ週末に映画を観たいと思ってただけ——』

『あ、明久君っ！ 私も丁度観たい映画があっただんですけど！』
『ほえ？ なになに？ どうして二人ともそんなに殺気立ってるの！？ このチケットは換金して生活費に痛あゝあっ！ もげちゃう！ 人体の大切なパーツが色々ともげちゃうよ！』

明久の悲鳴が響く。

その悲鳴を背景に雄二が僕に近づいてきた。

「どうしたの雄二？ 僕にもペアチケットくれたりするの？」

「いや、お前へのお礼はもう渡してある」

「え？」

「卓袱台の裏をってみろ」

雄二に促されて、卓袱台を裏返す。

卓袱台の中央に、可愛い便箋がセロハンテープで止めてあった。

「これって……」

「……ラブレターよね？」

「!？」

後ろから女子の音がする。

マズイ！ 僕の本能が振り返ってはいけないと警告している！

ギシギシとゆっくり振り返るとそこには――

「うふふふ……」

『とっても良い笑顔』の優子がいた。

「えっと……」

「もう、運ったら。アタシに黙ってそんなもの受け取ってるなんてね」

「ちょっと待って、コレは雄二の策略だあああああああああああああああ
ああああ!!!」

言い終わる前に間接を極められた。

「まったく……余計なことを企むからだ、大バカ野郎共が」

意識が沈む前に雄二の音が聞こえた。

第三十五問 坂本雄二結婚大作戦！ （後編）（後書き）

チンピラをどうするか、本当に悩みました。

社会的に抹殺したり、雄二がボコツた後に蓮が更にグチャグチャにしたりなど、

かなり黒いものも考えましたが、結局はこんな感じになりました。

次回はプール編かな、と思っています。

それでは。

第三十六問 毎年夏の前にダイエットをしようと決心するけど、結局間に合わない

今回も一日空きましたね。済みません。

言い訳、になってしまいましたが最近書いている分がグダっている気がします。

筆も、元から遅いのになに遅くなる始末……。

とにかく頑張るしかないですね。

では今回からプール編です。

かなり悩んだ末に、ggdggdという……

ホント、どうすればいいんでしょう（泣）

第三十六問 毎年夏の前にダイエットをしようと決心するけど、結局間に合わない

特別コラム／鉄拳人生相談／

「えー、今回は、私、鉄拳先生が諸君の悩みに答えよう」

「ちなみにアシスタントは僕、鮎川蓮です」

「さて、まずは一人目のハガキを読んでくれ」

「了解しました！ えっと、三年生のT村Y作さんの相談です」

『鉄拳先生。僕の悩みを聞いてください。実は僕には好きな人がいます。』

その人はとても可愛らしく人気があります。ですがそのK下H吉さんは戸籍上では♂のようなのです。

これは同性愛になってしまふのでしょうか。

先生、僕はどうしたらいいか教えてください。』

「すまない。いきなりすごい相談が来たので困っている」

「さすが文月学園ですね……」

「君が好きになった相手にはおそらく双子の姉がいるはずだ。

容姿に引かれたのであれば彼女に思いを告げることだ。容姿でなく内面に惹かれたのであれば――

冷静に良く考え直すことだ。

一部の生徒の間では”彼は第三の性別『秀吉』である為同性愛ではない”という説があるが、決してその節に惑わされないように。君が健全な学園生活を送れるように願っている」

「……」

「どうした鮎川」

「……なんか、双子の姉の下りを聞いていると、なんかこう、ムカムカとするんですね」

「……そうか。お前も冷静に良く考えることだ」

「……はあ……」

「さて、次だ」

「あ、はい。続いては二年生のK保T光さんの相談です」

『最近、寝ても覚めても僕の頭から離れない人がいます。彼――Y井A久君が笑う姿を見ると僕も幸せな気持ちになり、彼が沈んだ表情をしていると僕も悲しくなります。相手は同性なのですが……この気持ちは恋愛感情なのでしょうか』

「君はここ最近の間に強く頭を打ってないだろうか。記憶にないとしても、念のために病院で検査を受けることをオススメする。」

同性愛云々の話はその後だ」

「ず、随分と突き放しましたね……」

「さあ、気を取り直して次の相談だ」

「はい。次は、え……」

「どうした？」

「いえ、何でもありません。二年生のS水M春さんの相談です」

『私には、一年生の頃からずっと好きなお姉さまがいます。ですが、最近そのお姉さまが悪い男に騙されています。どうしたらその男を殲滅できるか教えてください』

「貴様らには同性愛以外の悩みはないのか!!」

「せ、先生落ち着いて……」

「鮎川、俺は帰る。このコーナーは俺の手には余るようだ」

「ええ……僕もこの人たちに向ける言葉は持っていません……」

「「はあ……」」

第三十六問 毎年夏の前にダイエットをしようと決心するけど、結局間に合わなくて海に行かない……。

「ってな事があつて、おかげで散々な週末だったよ」
週明けの教室。

朝のHRが始まる前の時間を使って、いつものメンバーで雑談をしていた。

明久が言うには、週末に明久の家で雄二と遊んでいるときに、不毛な戦いがおき、雄二がシャワーを使ったらしい。

だが、万年金欠明久君宅はガスを止められていて、お湯が出なかったらしい。

仕方なく明久と雄二は学校のプールへ。

騒いでいたところを鉄人に見つかって拳骨付きの補習を食らったらしい。

「そうじゃったのか。それは災難じゃったのう……」

気遣うように柔らかな表情を浮かべる秀吉。

友人を気遣う優しさは認めるけれど、今回の件は明久と雄二に自業自得だと思う。

「おまけに今週末はプールの罰掃除だよ。はあ……」

……ちよつと哀想になつてきた。

いくらなんでも、補習に加えて罰掃除まで課すなんて。

「……………重労働」

ムツツリーニが呟く。

学校のプールは巨大だから、家の風呂掃除とはレベルが違う大変さだと思う。

やったことないけど。

「褒美というほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え？ そうなの？」

落ち込み始めた明久を励ますようなタイミングで、雄二が告げる。
意外と鉄人も太っ腹なところもあるんだな。

「ああ。だから、秀吉と蓮、ムッツリーニも今週末プールに来ないか？」

誘われたのは嬉しいけど、今週末はバイトのシフトが入ってるから遠慮させてもらおう。

「ただし、ムッツリーニには掃除を手伝ってもらうけどな」

雄二の一言で頷こうとしたムッツリーニが動きを止めた。

ここで『秀吉は？』なんて野暮なことは聞かない。

彼らの中では秀吉は「秀吉」という性別であって、プール掃除を押し付けるには忍びないという考えが働いているからだ。

あれ？ 僕は掃除しなくて良いのか？

「ちなみに、姫路と島田にも声を掛けるつもりだ」

「……………ブラシと洗剤を用意しておけ」

即答かよ！

ムッツリーニの名に恥じない行動だ。

「うむ、そうじゃな。貸切のプールなぞ、こんなときでなければなかなか体験できんじやろうし相伴させてもらうかの。もちろん、ワシも掃除を手伝うぞ」

「え？ 結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

プール掃除はお安い御用のカテゴリーには入らないと思うのは僕だけだろうか。

「で、蓮は？」

明久が期待するような目でこちらを見てくる。

僕に何を期待しているのかは分からないけれど、バイトを休むわけにはいけないのでここは断って――

「ちなみに、木下姉にも声を掛けようと思っているんだが」

「週末はバイトがあるから遠慮するよ」

「何っ!？」

雄二が驚いている。

どうしたんだろう。別に優子が来ても来なくても僕の返事は変わらないのに。

P r r r r r r r r

「蓮、携帯なってるぞ」

「あ、本当だ」

携帯を取り出して、画面を開く。

「授業中に鳴ったら即没収だぞ。電源くらい落とすとけよ」
「う……」

今までは平日に携帯が鳴ることがなかったんだよ。
せいぜいバイト先の店長くらいだし。

あ。

「……雄二」

「何だ？」

「やっぱり、僕もプール行くよ」

「は？」

「……バイトがオフになった」

メールにはこう書かれていた。

『今週末は出会いを探しに行ってくるので休業

店長』

うちの店長（37歳独身）もかなり天真爛漫というか、掴みどころがないというか、

変人というか……とにかく変な人なのである。

できれば婚活は定休日にやって欲しいところだが。

「まあ、お前が来るなら別に理由はどうでも良いがな。んじゃ、後は向こうの二人だな。」

おい、姫路、島田！」

何時何処で聞いても良く通る声だ。

「どうしたの坂本？ 何か用？」

まずやってきたのは島田さん。

ドイツからの帰国子女で明久に恋する女の子だ。

照れ隠しで明久を半殺しにさえしなければ可愛い女の子だと思うよ。

「呼びましたか、坂本君？」

続いてやってきたのが、我らがFクラスのむさい男の中でも一際異彩を放つ存在。

姫路さん。

温厚な性格に愛らしい外見。成績優秀でスタイル抜群というなんともハイスペックな女の子だ。

最近Fクラスの思考に染まってきた気がして、なんとも不安だ。

「二人とも今週末は暇か？ 学校のプールを貸切で使えるんだが、良かったらどうだ？」

「え……？」

プールという単語で二人がピクンと反応する。

「あ、さては二人とも予定があつたりする？」

これは我らが観察処分者。愛すべきバカにして超がつくほどの鈍感男、吉井明久の弁。

こう、なんというか気づきそうで気づかないあたりが見てるこつちとしてはもどかしいというか。

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな……？ プールって言うことやっぱり水着だし……」

「そ、そうですね。水着ですよ……。その、えつと……」

島田さんは自らの胸部へ、姫路さんは腹部へそれぞれ視線を送る。

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが……。一つ言っておくと、秀吉は来るぞ。水着姿を明久に見せに、な」

何っ！ 秀吉は明久に水着姿を見せたかったのか！？

それは知らなかった。これは秀吉をぜひ応援しなければ……ってあれ？

「ひ、卑怯よ木下！ 自分は自信があるからって！」

「そ、そうですね！ 木下君はズルイです！」

「……？ おぬしらは何を言っておるのじゃ？」

突然ものすごい勢いで秀吉を非難する二人。

そうか、さっきの雄二の言葉は起爆剤だったのか。

秀吉がBでしな趣味に走ったのかと一瞬本気で思ってしまったじゃないか……。

「で、どうするんだ二人とも？」

「い、行くわ。その、イロイロと準備して……」

「そ、そうですね。準備は大切ですよね」

やっぱりFクラスの面々は雄二に思うとおりには転がされてる気がする。

「そういえば、いい加減水着を新調せねばいかんのう。丁度良い機会じゃから買いに行つて来ることにしようかの」

秀吉は水着を新しく買うようだ。

「そういえば僕も久しくプールなんて行ってないからなあ。僕も買つてこよう」

たぶんもう入らないと思うし。

僕と秀吉の発言によほど心惹かれるものがあつたのか、こちらを見る明久の目が心なしか輝いているように見える。

「う、ウチも新しいのを買おうかな……？」

島田さんが釣られたのか、ポツリと呟く。

女の子は毎年買い換える人もいるらしいから島田さんもそのタイプなんだろうか。

別に嫌いではないけれど、ちょっと勿体無い気がする。

「あれ？ でも美波ちゃん。この前水着の話をしたときに『去年買ったばかりだから今年は要らない』って……」

どうやら、単に明久の目が気になったただけのようだ。

「み、瑞希！ 余計な事言わないの！ こ、今回買うのは……そう！ 勝負用だから別口なのよ！」

「島田（さん）。焦って更に墓穴を掘っているぞ」

「……気のせいよ」

思いつき目をそらす島田さん。

ここまでわかりやすい反応をしているのに明久は気づかない。不思議だよなあ。

「あ、そうだ雄二、霧島さんにも声を掛けておいてね」

「……言われなくてもそうするつもりだ」

あれ？ いつもの雄二と反応が違う。

てつきり今回も霧島さんには内密に話を進めるものだと思っていたのに。

やっぱり先週のウェディング体験で覚悟を決めたのだろうか。

「うんうん。雄二も素直になったね」

「本当だね。やっと霧島さんの想いを受け止める気になったんだね」

「いや、そういう問題じゃない」

「「????」 それじゃ、どういう問題さ」「

「いいか、想像してみる明久、蓮。俺の立場で後々このことが翔子に知られるという状況を」

雄二が何時に泣く真剣な表情で聞いてくるので、真剣に考えてみるえ、雄二の立場で、週末に女の子と学校のプールを貸切で遊んだ場合。

そのことが霧島さんに知られたら……。

「樹海の奥……いや、湖の底……」

「永久凍土……いや、溶岩の中……」

「俺の死体の処理方法まで想像する必要はないが、まあそんなところだ」

なるほど。流石に雄二も素直にならざるを得ないわけだ。

僕としては、彼女がいると約一名失血死の可能性が増える奴がいるので心配だけど。

「そういえば、蓮は木下姉を誘わなくて良いのか？」

「？　どして？」

「想像してみる。コレだけのメンバーがプールに集合して遊んだのにもかかわらず、自分だけ仲間はずれになったと知った木下姉の行動を」

また雄二が真剣な顔で促してくる。

えっと、僕の立場で、今回のことが後になって優子に知られた場合……。

「……バラバラの変死体……いや、樹海の養分……どちらにしても、死は免れない……」

「ま、そういうことだ。木下姉のことだ。お前が誘えば二つ返事でOKだろう」

「???　何で？」

「……ハア、なんで俺の周りには鈍感野郎が集まるのか……」
その言い方だと僕まで鈍感という括りに入れられているようだ。

失礼な。明久はともかく、僕は鈍感じゃないよ。

「とにかく、全員オツケーのようだな。んじゃ、土曜の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

雄二のそんな台詞と同時に、鉄人がドアを開ける音が響いた。

昼休み。僕は雄二と一緒にAクラスにやって来ていた。
理由は察しがつくだろう。霧島さんと優子を誘うためだ。

コンコン。

扉をノックする。

こうしないとFクラスの人間は中に入りにくい。
前に普通に入ったことがあったけど、『Fクラスがまた攻めてきた！』とか勘違いする人がいて大変だった。

まあ、それほど先の試召戦争は大きな衝撃だったんだろうけど。

「はい……！？」

中から出てきた女子生徒……たしか佐藤美穂さんが、僕と雄二の顔を確認して固まった。

今Fクラスは宣戦布告は出来なくなってるんだけど。
それとも、雄二の顔に気圧されたんだろうか。

「……翔子はあるか？」

「？ あ、はい」

「あ、あと優子も」

「呼んだ？」

「！？」

いつの間にか、僕のすぐ後ろに優子が立っていた。
その隣には霧島さんもいる。

本当仲良いよなこの二人。

「うん。ちょっとお話が……霧島さんも」

「？ アタシと、代表？」

首を傾げる優子の様子は可愛いんだけど、顔に疑いの表情が出ている。

やっぱり僕らのお話、は警戒するんだろうか？

「えっと……優子、週末プールに行かない？」

「行くわ」

「即答！？」

理由の一つも聞かれるのが普通だと思うんだけど、優子はまさかの即答だった。

「霧島さんには雄二から言いなよ」

「ぐっ……」

苦々しそうな顔をする雄二。

別に一緒にプールに行くだけなんだから、そこまで覚悟を決める必要なんてないと思うんだけど。

結局、雄二が霧島さんと優子に事情を説明して、一緒に行くことになった。

いや、雄二と一緒にプール、というだけであそこまで想像できるとは。

霧島さんの思考も少しずれているのかもしれない。

優子はというと――

「絶対気づかせてやるんだから！」
何かを決心しているようだった。

何故か悪寒がするんだけどどうしてだろう……。――

第三十七問 思い込みの激しい人は総じて人の話を聞かない。（前書き）

申し訳ありません！

一週間以上空いてしまいました。

分からないとは思いますが、私は今画面の向こうで土下座を行っています。

言い訳をさせていただくと、純粹にモチベーションというか、今までの妄想の勢いがなくなってきたというか……。

今回も短い上にバカテストはお休みです（初の事態）。

次回も出来るだけ早く書いて、元のペースと量に戻したいと思っていますので、

暖かく見守っていただければ幸いです（汗）

第三十七問 思い込みの激しい人は総じて人の話を聞かない。

第三十七問 思い込みの激しい人は総じて人の話を聞かない。

土曜日がやってきた。

僕が校門前にやってくると、既に秀吉と優子、姫路さんが待っていた。

「おはよう」

「おはよう」

「おはようじゃ」

「おはようございます」

挨拶を返してくれる三人も、僕も私服。

学校に来るのに制服じゃないって言うのもなんか変な気分だ。

「皆早いね」

「そう？ 普通だと思うわよ」

「坂本君と霧島さんはもう職員室に鍵を取りに行っていました」

し」

あの二人ももう来ているのか。
霧島さんとはかく雄二は明久と同じくらいの時間に来ると思っていた。

「姉上はずつと楽しみにしておったからのう。今朝もワシより早く起きておったのじゃ」

「ちょ、秀吉っ！」

秀吉に優子が抗議している。

そうか、優子もプール楽しみにしてたのか……。

「優子って泳ぐの好きなんだ？」

「……」

あれ？ 言葉の選択を間違えたかな？

姫路さんにいたっては『優子ちゃんも大変ですね』とか呟いてるし。

「おはよー。絶好のプール日和だね」

四人で何のこともない世間話をしていると、明久に声を掛けられた。
空は雲ひとつなく青空が広がっている。

空気はだんだんと夏の熱気を帯びており、プールには絶好の天気だ。

「おはようじゃ明久。良い天気じゃな」

「おはようございます明久君。今日は良い一日になりそうですね」

「おはよう明久。水着忘れたりしてないよね？」

「蓮！　いくら僕でもプールに行くのに水着を忘れたりはしないよ！」

冗談だから。

今この場にいるのは僕と秀吉、姫路さんと明久。

それにもう一人。

「ムツツリー二、おは——」

「……………！！（カチャカチャカチャ）」

鬼気迫る、という言葉がぴったりな様相でカメラの手入れをしているムツツリー二だ。

「あ、あのさ、ムツツリー二」

「……………今、忙しい」

「明久、こうなったムツツリー二は人の話なんて聞かないから無駄だよ」

シャッターチャンスを狙っているときと、来るべき戦いに備えて力メラの整備をしているとき——要するに問う札関係のことをしているときのムツツリー二の集中力には目を見張るものがある。

その集中力の一割でも勉強に向ければDクラスくらいには行けただろうに。

「ムツツリー二。準備は良いけど、結局無駄になっちゃうんじゃないかな」

明久がムツツリー二に問いかける。

「……………なぜ？」

「いや。だって、ムツツリー二はどうせ鼻血で倒れちゃうじゃないか」

まあ、チャイナドレス程度の露出で鼻血の海に沈んだんだ。

水着——それも姫路さんの——に耐えられるはずがない。

「……………甘く見てもらっては困る」

そついいながら、持っていた大きなスポーツバックの中を見せてくるムッツリーニ。

「……………輸血の準備は万全」

「うん。最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」
鞆一杯に入っているのは、何処で手に入れたんだ、と突っ込みたくなるような量の輸血パック。

プールに行くからといって輸血パックを準備する人間は、日本広しといえどもこの男だけだろう。

「準備といえば、秀吉と蓮は新しい水着を言うとか言ってたよね？
忘れずに買ってきた？」

「うむ。無論じゃ」

「ああ。忘れてたらこんなに悠長に話してないって」
少なくとも、水着を売っているところがないか探しているだろう。

「ちなみに、買ってきた水着じゃが——」

「……………（くわっ！）」

目を輝かせている明久に、目をむいているムッツリーニ。

「——トランクスタイルじゃ」

「「バカなああああつ！」」

な、何をそこまでショックを受けているんだろう。

「最近、お主らはワシを女として見ているようじゃからな。ここらで一度ワシが男じゃということを再認識させよう——二人とも聞いておるか？」

「酷いよ秀吉！ 君は僕のことを嫌いなのかい！？」

「……………見損なつた……………！」

「な、なんじゃ！？ なぜワシは責められておるのじゃ！？」

「き、気にしないでいいと思いますよ。木下君」

「姫路さんの言うとおりでだよ。いちいち気にしてたら進まないから」

「ハッ！ まだだ！ まだ蓮がいるじゃないか！」

「……………」

「え、えつと…………？」

いきなり明久とムツツリー二に縋るような視線を向けられる。

そんな視線を向けられても困るんだけど…………。

「さあ、蓮！ 君はどんな水着を買ってきたの？」

「えつと………… 僕が買ってきたのは——」

「……………（くわっ！）」

「——秀吉と同じ、トランクスタイルなんだけど」

「バカなああああっ！」

あ。なんか既視感。
デジャブ

「あのさ、僕も秀吉も男なんだけど、その辺忘れてないよね？」

「くそ………… 今からでも……………」

「……………」

だめだ。聞いちゃいねえ。

——タタタタッ

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」

「わわっ！？」

「もう葉月つてば。アキがびっくりしてるでしょ？」
明久の後ろから走ってきて、明久の背中に飛びついたのは葉月ちゃん。

清涼祭で、チャイナ服のまま帰宅するという伝説を残した小学五年生である。

「やっぱり葉月ちゃんだ。おはよう」

「えへへー。三週間ぶりですっ」

天真爛漫をそのまま体現したかのような明るい性格。
清涼祭の二日目以来だから、確かに三週間ぶりになる。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。どうして葉月は呼んでくれないんですかっ？」

「あ、うん。ゴメンネ葉月ちゃん」

今のやり取りで気づいた人もいるだろうけど、葉月ちゃんは明久のことが好きだ。

というか、既に『婚約者』を名乗っていらっしやる。

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。どうしてもついてくるって駄々こねて聞かないものだから……」

島田さんが溜息混じりに呟く。

島田さんの性格からすれば最低でも明久よりは早く来ているものだと思いますが、遅かったのにはそんな理由があったらしい。

「あれ？ 坂本はまだ来てないの？ ウチが最後だと思ったのに」
「いえ、もう来ていますよ。今職員室に鍵を取りに行って——あ、丁度戻ってきたみたいですよ」

噂をすればなんとやら。

校舎のほうから雄二と霧島さんが歩いてくるのが見えた。

「おはよう雄二、霧島さん」

「おう。ちゃんと遅れずに来たみたいだな」

「……おはよう」

偉そうな雄二。その隣で静かに挨拶を返したのは、雄二の幼馴染で、婚約者でもある霧島翔子さんだ。

美人で学年主席の才女、運動神経抜群と欠点の見つからない人なんだけど、恋愛関係は苦手みたいだ。

雄二が喰らっているあの拷問を見るとね……とても恋人には見えな
いよ。

「これで全員揃ったか？」

雄二が確認を取る。

「うん。葉月ちゃんが飛び入り参加した以外は全員いるよ」

「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていてくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉通りにいったん男女に別れる。

姫路さんと島田さん、優子は霧島さんに、僕と明久、秀吉にムツツ
リーニ、そして葉月ちゃんは雄二に——って、あれ？

「こら。葉月ちゃんは女子更衣室に行かないとダメでしょ」

「秀吉もだよ」

僕が葉月ちゃんに注意すると、明久もかぶせてきた。そうそう。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室に——って

「いや、明久。秀吉はコッチで合ってるから」

「？ 何言ってるのさ蓮。女子は女子更衣室に行かないと」

この反応は……秀吉を本気で女子と思っている反応だ。

「えへへ。冗談ですっ」

「ワシは冗談ではないのじゃが……」

ほら、葉月ちゃんは冗談って言ってくれたけど、秀吉は納得してないじゃないか。

「ほら、遊んでないで行くわよ。葉月、木下」

「し、島田！？ ついにお主までワシをそんな目で見るように！？ 嫌じゃ！ 女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじゃ！」

「何言ってるんだ秀吉！ 秀吉が男子更衣室で着替えたら、ムツツリーニが天に召されてしまうじゃないか」

ついに女子にまで女子扱いをされるようになったか……。

島田さんはどつちかというと、明久と秀吉と一緒に着替えるのが面白くないって感じだけ。

「……皆、秀吉は男よ」

ここで助け舟を出したのは秀吉の双子の姉である優子。

「優子ちゃん、その……木下君は男の子には見えませんか……」
姫路さんの意見も否定できない。

黙っていれば、ではなく普通に喋っていても秀吉は女子に見える。

「……蓮」

「……何？」

「Fクラスで秀吉はどんな扱いを受けてるの？」

「……完全に女子、もしくは第三の性別『秀吉』扱いだね」
少なくとも男子としては扱われていない。

「ハア……本当Fクラスって分からないわ」

優子が溜息をつく気持ちも分かる。

もう転入して二ヶ月近く経つから大分慣れたけど、僕も最初のころはFクラスのメンバーの常軌を逸した行動に驚かされっぱなしだった。

「あの……。それなら木下君と鮎川君は別の場所で着替えるのはどうでしょう？」

「何で僕まで!？」

ココで僕にまでとばっちりが来るとは思わなかった。

「あつ！ そうだよ。葉月ちゃんを注意していたから気がつかなかつたけど、蓮も男子更衣室で着替えたらダメだよ！」

「……………」

い、いかん……。

ジト目で僕を見ってくる優子の視線が痛い。

「秀吉はともかく、僕はれっきとした男なんだから、別に場所に着替える必要はないよ」

「待つのじゃ蓮！ ワシはともかくとはどういう意味じゃ！」

だって秀吉の普段の扱いを見ていると、僕が何を言っても聞いてくれなさそうだし。

「ダメよ！ 鮎川や木下とアキが一緒に着替えるなんて！」

「……雄二の前で脱いだら……」

こ、怖い……。

こちらを睨んでくる島田さんと、雪女を思わせるような雰囲気をつた霧島さん。

「なんじゃ霧島まで!？」

「別に僕も秀吉もちゃんとした男なんだから……」

「男子更衣室で着替えるのは許さない」

「……はい」

二人の有無を言わさぬ態度に、別室で着替えることを了承させられてしまった。

着替える前からこれなんて、本当に先が思いやられるよ……。

第三十八問 自分の気持ちを素直に言つものすごく恥ずかしい……（前書

今回も短いです。

そしてバカテストはお休み……。

早く、早く前みたいに勢いのある妄想が戻って欲しい！

あれ？ こうやって書くと私がまるで妄想癖みたいじゃないですか

……（汗）

第三十八問 自分の気持ちを素直に言うのってものすごく恥ずかしい……

第三十八問 自分の気持ちを素直に言うのってものすごく恥ずかしい……

優子 Side

447

アタシは今、集合場所のプールサイドにいるのだけれど……。

「……雄二は見ちゃダメ（ブスッ）」

「ぐあああっ！ またか！？ またなのか！？」

「ふわぁ……お姉さんのお胸、凄いです……」

「ムツツリーニっ！？」

「……先に、逝く……」

「Worauf für ein Standard haben, und jene, die nicht haben!? Was war für mich ungeni-
gend!」

「な、何なのよ。この空間は……?」

收拾がつかないなんてレベルじゃないわ。

それにアタシFクラスの人たちとあまり親しくないし……。
なんか心細くなってきた……。

蓮、早く来てよ……。

Side Out

蓮 Side

「早く行こう。もう皆着替えてると思うよ」

「うむ。しかし、やはり納得がいかぬな……」

僕と秀吉は、小走りでプールに向かって移動している。

女子更衣室でも男子更衣室でもない着替え場所なんて、プールのそばにはなかったから、態々校舎にまで行って空き教室を使うことになってしまった。

更衣室の間を通り過ぎ、プールサイドへと出る。

そこにはなんだかカオスな空間が出来上がっていた。

「う、うう……。俺は未だに眼が見えないんだが……全員揃ったのか?」

目から涙を流しながら雄二が話している。

霧島さんもあそこまで完膚なきまでに目を潰さなくてもよかっただろつに。

目を潰されてちゃ雄二が泳げないし。

まさか泳がせない気なのか……？

「いや、秀吉と蓮がまだ来てないかな」

「……………秀吉と蓮は、トランクスタイル……………」
ムツツリー二にいたっては既に瀕死の重症だ。

「待たせて済まぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、いかんせん校舎からプールが遠くての」

僕が啞然としてみると、秀吉はもう明久たちのところに走っていた。

「（うつ）●（ん、そ）（んな）（に待っ）□（てな）♪（いよ、）（秀）×（吉）」

「落ち着け明久。ここは地球だぞ」

完全に動揺している明久に雄二の冷静はツツコミが入る。

普通の学校生活ではあまり見ることが出来ないやり取りなんだけど、これにもなれてしまっている自分がいる……。

「ど、どうじゃ…………？ これで少しは、ワシも男らしく見えるかの…………？」

恥ずかしそうに秀吉が歩いていくけれど…………。

「わつ。お姉ちゃん、とっても可愛いですっ」

「んむ？ 可愛いじゃと？ 島田妹よ、何を勘違いしているのか知らんが、ワシは見てのとおり男じゃぞ？」

きつと、その格好では秀吉が男に見えることはない。

「ふえ？ でも、葉月はその水着、女の子用だと思うです」

そう。秀吉が着ているのは確かにトランクスタイプの水着だが上にはショートタンクトップがついている。下は普通のパンツに、ショートパンツタイプのズボンボタンを一つ開けた状態で重ねている。まあ、トランクスタイプといえないこともないけれど、町の人に聞いたら十人中十人が『女物』と答えるだろう。

「な、なんじゃと!？」

秀吉よ……そこは驚くところではないぞ。

というか、その反応だと、もしや秀吉は今まで上半身に何も無い水着を着たことがないのではないだろうか。

「き、木下……！ アンタ何処までウチ等の邪魔したら気が済むの……！」

「木下君は卑怯です……！ トランクスだなんて私達を油断させておいて、最後の最後に裏切るなんて……！」

二人の気持ちも分かるには分かるんだけど、秀吉は男だからね？

「秀吉！ やっぱり秀吉は僕らの気持ちを察してくれたんだね！」

「……………永遠の友情と劣情をその水着に誓う」

明久とムツリー二は姫路さん達と対極で、凄く喜んでいる。

だが友情はともかくとして、劣情を誓うのはいただけないかな……。

「ひで〜よ〜し〜？ アタシ、前に言っただわよね？ 軽々しく女の格好しないようにって？」

鬼だ。鬼がいる！

「ち、違っのじゃ！　ワシは本当に男物を買ったはずなのじゃ！
きちんと店員にも『普通のトランクスタイルが欲しい』と言ったの
じゃぞ！？」

「多分、その店員さんは勘違いをしたんでしょうね……。何も知ら
ずに木下君に『トランクスタイルが欲しい』なんて言われたら……」

「そうね……。ウチでも間違いなく女物を勧めるわ……」

「そ、そうじゃったのか……。ワシも少しはおかしいと思ったのじ
ゃ。なにゆえに男物の水着に上があるのじやろうかと……」

そこで少ししか違和感を感じないところが秀吉らしいというか、そ
こまで女物の衣装になれてしまっている時点で、普通の人生は歩め
ないと思うんだ。

「ま、そういうことだから優子もあんまり秀吉を責めないでやって
よ」

「……！？」

皆に近づきながら優子に声をかける。

もちろん僕の水着はトランクスタイル。

上はついていないのでまごう事なき男物だ。

「れ、蓮……その格好は……」

「何って、普通のトランクスタイルの水着じゃない。男物の」

「……………（ブシャアアアッ！）」

「ムツリーニっ！？」

僕の姿を視認した途端、明久とムツリーニの様子がおかしくなっ
た。

ムツリーニにいたっては既に鼻血の海に沈んでいる……って僕が
来る前からそうだったっけ？

「何で鼻血出してるのさ!？」

「だって、蓮！ 自分の格好をよく見直してみてよ！」
そっいう明久は鼻を押さえて上を向いている。

僕の今の格好……普通の男物の水着を着ている。

特に何も羽織っていないから、上半身は裸だけど……ってまさか!？

「……明久は、僕の今の格好をどう見てるの？」

「……女の子が男物の水着を着ているように見えます」

やっぱりか。

僕は秀吉と比べると男に見えると自負していたんだけどな。

「優子はそう見える？」

「へ？ ……そうね。少なくとも顔は男には見えないわね」

「……そうですね。でも……」

「……体のほうは坂本を色白にして、細く小さくした感じね」
顔は男には見えないって……僕の一番の悩みなんだけど。

体のほうは……まあ、鍛えてはいるからね。

筋肉隆々なんて言葉は似つかわしくもないかもしれないけれど、それなりに筋肉もつけたつもりだし。

「……吉井君。蓮の足元のほうから見てみなさい」

「？ えつと……あれ？ 男に見える」

「ちよつと待て明久。その発言、僕にとってはスルーできない問題だぞ！」

「……言われてみると」

ムツツリー二もなんとか立ち上がった。

うん？ これって……

「僕が男として認められたってことでいいのかな？」

「そうだね。まだ鼻の奥は熱いけど、出てこないし」

「……………耐えられる」

「……………良かったわね」

「……………うん。なんか釈然としないけど、ありがと、優子」

この際、男としてしてもらえるなら、多少の違和感はスルーしよう。

「良かったです……………これで鮎川君までと考えると……………」

「本当よ……………ありがと、鮎川、木下さん……………」

「……………蓮がうらやましいのじゃ」

「秀吉のは半分自業自得だと思っただけ……………」

姫路さんと島田さんは胸をなでおろしている。

秀吉からは羨望や嫉妬のまなざしを感じるが、そもそも秀吉がきちんと男物と伝えていれば良かった筈なので自業自得だろう。うん。

「はあ、本当、Fクラスって分からないわ……………」

「ま、まあ、気にしたら負けだよ……………っ！」

優子にフォローを入れようとして、優子の姿が視界に入る。

あんまりファッションのことは分からないから、上手く言えないんだけど、

ビキニタイプの水着に、下半身は腰の位置からパレオを巻いている。色はクリーム色で統一されていて、優子の白い肌に良くあっている。

一言で言つと……可愛い……。

「どうしたのよ？」

「うえ？」

優子が急に話しかけてきたから、思わず変な声が出てしまった。見惚れてた、つては言えないし……。

「蓮は姉上の水着姿に見惚れておつたのじゃ」

「秀吉いー！ー！」

何を暴露してくれちゃってんの！？

「え？ えつと…… / / /」

「…… / / /」

「さて、そろそろ泳ごうか…… って、蓮と木下さんはどうしたの？」
聞かないでくれ明久。

顔から火が出る。

「えつと、優子……？」

「…… / / /」

皆が散らばった後、僕は優子と話そうとしているんだけど、優子がさっきからどこかに飛び立ってしまっているんだ。

「…… 優子？」

優子の肩を掴んで軽く揺らす。

「…… ふえ？」

どうやら戻ってきたくれたみたいだ。

「えつと、その……」

「……」

「水着、可愛いよ」

言ったあー！。言ってしまった……！

「にゃ、にゃにを……ううん。ありがとう、蓮……／＼／」
そういつて歩いていく優子。

振り返る前に見えた微笑は……とても綺麗だった。

第三十八問 自分の気持ちを素直に言つものすごく恥ずかしい……（後書

えっと……ごめんなさい。

私の今の實力では、甘甘シーンは書けないのです……。
自分で書いてて恥ずかしくて（汗）

頑張つて甘甘シーンも書けるようになります！

第三十九問 プール開きって、どうして梅雨の寒い時期にやるんだろう……？

まだプール編終わらねえーーーー！！

はい。いきなり取り乱してしまいました。

まさか、プール編が如月グランドパークよりも長くなるとは……。

そして未だに妄想力は戻らず。

かなりギリギリの状態で更新しました。

それではどうぞ。

第三十九問 プール開きって、どうして梅雨の寒い時期にやるんだろう……？

バカテスト 国語

問 次のことわざの空欄を埋めなさい。

『少年（ ）易く、学成り難し』

姫路瑞希の答え

『少年老い易く、学成り難し』

教師のコメント

正解です。姫路さんも若いうちから勉学に励むようにしてくださいね。

吉井明久の答え

『少年遊び易く、学成り難し』

教師のコメント

意味としては会っているような気もしますが、不正解です。ですが流石吉井君。いつも勉強をせず遊んでいるだけはありませんね。

吉井明久のコメント

いやあ、それほどでも。

鮎川蓮の答え

『少年死に易く、学成り難し』

教師のコメント

勝手に殺さないでください。

土屋康太の答え

『少年キレ易く、学成り難し』

教師のコメント

キレル十代！？

鮎川蓮のコメント

先生も気をつけてくださいね……。

第三十九問 プール開きって、どうして梅雨の寒い時期にやるんだろっ……？

「あの、明久君」

軽く準備体操をして、明久と一緒にプールに飛び込むと、梯子をそろそろと降りてきた姫路さんに声を掛けられた。明久が。

「ん？ なに？ 姫路さん？」

「明久君は水泳は得意ですか？」

「あ、うん。まあ、人並みには……」

「？ 明久君、どうして目を逸らすんですか？」

それは、姫路さんがパレオをはずしているからだと思うよ。

「実は私、ぜんぜん泳げないんです」

「まあ、僕も姫路さんがものすごい速さで泳ぐところは想像できないけど」

「ん？ 瑞希って水泳苦手なの？」

僕に続くように放たれた台詞は、僕達と同じように、勢いよく水に飛び込んできた島田さん。

姫路さんとは対照的で、運動全般が得意だったりする。走る飛ぶは言うに及ばず、球技水泳なんでもござれだ。

「はい。恥ずかしいんですけど、水に浮くくらいしか出来なくて」「そういうことなら、いつも勉強を教えてもらっているお礼に、うちが瑞希に泳ぎを教えてあげようっか？」
そういつて胸を張る島田さん。

いつもは姫路さんに勉強を教えてもらっているのです、そのお返しが出来て嬉しいんだろう。

「よければアタシも手伝うわよ」

「？ あ、優子」

プールの飛び込み台からひよっこり顔を出したのは優子。

Aクラスでもトップクラスの成績に、運動神経抜群と彼女もまた欠点が見当たらない。

強いて言うならあの趣味かな……。

「え？ 優子ちゃんもいいんですか？」

「ええ。姫路さんにはお世話になってることもあるし」

？ 優子と姫路さんってこんなに仲良かったわけ？

「は、はい。それならよろしくお願いします」

「任せてっ！ こう見えても水泳は得意なんだから」

「あら、アタシも結構得意よ」

優子はともかくとして、島田さんと姫路さんのやり取りは、いつもと逆で面白い。

勉強ではAクラスレベルの姫路さんがFクラスの島田さんに教えてあげているけれど――

「――こうして見ていると、美波がAで姫路さんがFみたいだね」
「優子は相変わらずAだね」

「「寄せて上げればBくらいあるわよっ！――」」

「ぐべあっ――」

「しふああっ――」

な、何でいきなり鳩尾を……明久も殴られてるし。

「ど、どうして水泳もAクラスレベルだっていつて怒られるんだ…

…」

「え？ あ、そういうこと？」

「何のことだと思ったのさ？」

「ふえ？ そ、それは……」

「……？」

いつもと違って優子がもごもごと喋っている。

本当なんで殴られたんだろう……。

『……雄二。ちなみに私はCクラス』

『？ 何を言ってるんだお前は？』

離れた場所では、雄二と霧島さんも良く分からない会話をしていた。
ムツリー二が異常に目を輝かせているのが謎だ。

あとで、意味を聞いてみようか。

「……わかったわ瑞希。アンタが泳げない理由」

「え？ なんですか？」

「そんなに大きな浮き輪をずっとつけてるから何時までたっても泳げないのよ！ 外しなさい！ そしてウチに寄越しなさい！」

「アタシも欲しいわね」

「み、美波ちゃんと優子ちゃんも落ち着いてください！ 目が怖いですよ！？」

「瑞希には分からないのよ！ 水の抵抗が少ないおかげ手早く泳げるっていうウチの悲しみが！」

「良い？ 姫路さん。それは脂肪の塊なの。たくさんあっても無駄

なのよ？」

「そ、そんなこと言われても……」

なんか、議論が白熱してきたみたいだ。
僕達は邪魔しないほうがいいかな。

「明久、行こうか」

「そうだね。邪魔しちゃ悪いし」

『み、美波ちゃん！ 優子ちゃん！ あまり良い事ばかりでもない
ですよ？ 肩が凝って大変ですし……』

『肩こりくらい我慢するわー！！』

離れ際に聞こえてきた優子と島田さんの声は魂がこもっている気がした。

「お兄ちゃん！」

「わぶっ！？」

明久の背中に何かが突然飛びついてきて、明久は耐えられずに水に沈む。

「な、何！？」

「えへへー。お兄ちゃん、葉月と遊ぶですっ」
水面に顔を出したのは葉月ちゃん。

「うん、いいよ。何して遊ぼうか？」

「じゃあ、『水中鬼』をしますっ」

「水中鬼？ 水の中でやる鬼ごっこのことでもいいの？」
水中鬼と聞けば、こういうイメージだ。

やったことないけど。

「違うですっ！ 鬼ごっこじゃないですっ。『水中鬼』ですっ」

「『？ 鬼ごっこはどう違うの？』」

明久と声が被る。

水中鬼と、鬼ごっこは同じものだと思うんだけど。

「水中鬼は、鬼になった人がそうじゃない人を追いかけるですっ。それで、鬼が他の人を——」

葉月ちゃんが一生懸命説明しているけれど、やっぱり僕がイメージしている鬼ごっこそのものだ。

鬼が他の人を追いかけて、そしてタッチを——

「鬼が他の人を水の中に引きずりこんで、溺れさせたら勝ちですっ」

「『鬼だ！ それは確かに鬼だ！』」

なるほど。どつりで『ごっこ』の部分がなくなるわけだ。

言うなれば水中版の『リアル鬼ごっこ』。

命がかかってるじゃないか。マジで。

最近の小学生は恐ろしい遊びをやってるんだなあ……。

いや、葉月ちゃんのオリジナルかもしれないけど。

「でも、ダメだよ葉月ちゃん、そんな遊びをやっちゃ本気で命に関る。」

「あう……。ダメですか？」

ダメです。

どんなに不服そうな顔をしてもお兄さんはそんな遊びを認めるわけ

にはいきません。

「いい、葉月ちゃん？ その遊びはとっても危険なんだ。今からそれを教えてあげるね。——おい。霧島さん！」

明久が諭すように葉月ちゃんに言った後、離れたところにいる霧島さんと呼んだ。

霧島さんと呼んで何をするつもりだろう。

水中鬼の犠牲にするなら雄二が適任だろうに。

「……なに？」

いつの間にか霧島さんが近くまでやってきていた。

殆ど音が聞こえなかった。

やっぱり泳ぎも上手だ。

「雄二と水中鬼っていう遊びをやって欲しいんだ。ルールは簡単で、雄二を水の中に引きずり込んで溺れさせた後、人口呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

なるほど。

やっぱり明久も雄二を犠牲にするつもりだったようだ。

「……行ってくる」

そして霧島さんも違和感を持っていない。

ま、まあ、彼女は雄二関連になると、思考がちよっとアレになるから……。

雄二に近づく霧島さんは、音もなく、それでいて速い。まるで魚雷のようだ。

「お？　なんだ？　いきなり足が……おわああっ！？　だ、誰だ！？　誰が俺を水中に（ガボガボガボ）」

「……雄二、早く溺れて」

「ぶはあっ！　しょ、翔子！？　何をトチ狂って……！（ガボガボガボ）」

遠くで繰り広げられる水中鬼。

「ね？　危ないでしょ？」

「はいです……。葉月、水中鬼は諦めるです……」

「命は大事にな？」

葉月ちゃんも分かってくれたようだ。

少し残念だが、小さな子供に命の大切さを教えるために、雄二には犠牲になってもらおう。

「明久っ！　蓮っ！　貴様らの差し金だな！？」

「のわあっ！　こつち来たあ！？」

「ダメだよ霧島さん！　きちんと捕まえてくれないと！」

「……ごめん」

「わっ。お兄ちゃん達、とっても泳ぐの早いですっ」

僕と明久、雄二と霧島さんの水中鬼、スタート。

「あれ？ プールを使ってるのは誰かと思ったら、代表だったの？」
「あつ！ 工藤さん危ない！」
「え？ きゃあつ！？」

制服姿の工藤さんのそばを水の塊が掠めていった。

「な、何！？」

「ごめんごめん。これ、あんまりコントロール利かなくなつてさ」
さっきの水の塊は僕が撃ちました。ごめんさない。

「蓮、それどうやってるの？」

「まいった。当てられるこっちは痛えんだが？」

明久と雄二も聞いてくる。

「えっと……掌底と寸打の合わせ技で、掌に近いところの水に弱い回転をかけて球状を維持しながら飛ばす……かな？」

「「分からん」」

うん。僕もやってるうちに出来たことだから、詳しい原理は良くわかってない。

「とりあえず、蓮は普通じゃないって事は分かったわ」

「あれ？ 優子？」

「どうしたの愛子？」

「Aクラスの工藤か。どうしてこんなところにいるんだ？」

流石雄二。ちゃんと名前覚えてたんだね。

明久は覚えてなさそうだけど。

「ボク？　ボクは水泳部だから」

「え？　今日は水泳部は休みになってるって聞いたんだけど」

「うん。すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど、人の声が聞こえるから寄ってみたんだ。良かったらボクも混ぜてもらって良い？」

「ああ、別に構わないぞ。俺たちのプールって訳でもないし——」

雄二がそこでいったん言葉を切る。

そして島田さんのいるほうを指さす。

「——既に一人増えてるみたいだしな」

さつきから見知らぬ女子が一人増えてるんだよね。

『お姉さまっ！　どうしてプールに行くのにミハルに声を掛けてくれないのですか！？　ミハルはこんなにもお姉さまを愛していますのに！』

『ミハル！？　アンタどうしてここにいるのよ！　プールで遊ぶなんて誰にも言わなかったはずだけど！』

『ミハルにはお姉さまを害虫から守る特別な情報網がありますから！』

なんというか、また暴走系の登場人物が増えてしまった感じが……。

「あのさ、ボクも泳いでいいかな」

もう向こうは放っておこう。收拾がつかない。

「別に遠慮することは無いんじゃない？　ここは学校のプールな訳だし」

「ありがと。それじゃ、水着に着替えてくるね」

スポーツバックを片手に更衣室のほうへ向かう工藤さん。
すると、その途中で振り向いて――

「覗くなら、バレないようにね♪」

――爆弾を落としていった。

「全員集合っ！」

「おい明久、どうやって――ぶふおっ！」
「ぶべらっ！」

作戦会議でも始めそうな雰囲気。明久と雄二に水弾が直撃した。

「な、なにするんだ蓮！」

「そうだよっ！ 邪魔するなんて！」

「なんというかさ…… 本当学習しないよね……」

僕は半ば呆れながら後ろのほうを指差す。
そこには――

「アキ？ やっぱり覗く気だったのね？」

「明久君…… おイタはいけませんね？」

「……雄二？」

――修羅がいた。

「「心の底からごめんなさい」」

「蓮は興味ないの？」

速攻で謝る明久と雄二、そして優子が尋ねてくるんだけど、

「うん。まったくない、って言ったら嘘になるんだけど、覗きよりも優子とプールにいるほうが楽しいかも」

ここにいる女の子たちをおいて覗こうなんて思わないし、それに…僕には優子の水着姿だけで十分だし…。

「ッ！ー！」

一瞬で赤くなる優子。

ちよつと大胆な発言だったかも…。

僕まで顔が熱くなってきたよ…。

「そういえば、ムツツリー二は？　いつもなら真っ先に動きそうだけど」

「ムツツリー二ならば、ほれ。向こうで血液の補充に忙しいようじやぞ」

「…………なるほど。道理で静かなわけだよ…………」

覗きを止めた身で言えないかもしれないけれど、カメラを構える余裕もなく、必死で血液パックを取り替えている友人は、酷く哀れに見えた。

第四十問 血まみれプール日和……ってあれ？ どうしてプールで戦ってるの？

予想以上に長くなってしまったプール編、最終話です。

第四十問 血まみれプール日和……ってあれ？ どうしてプールで戦ってるの？

バカテスト地理

問 『ユーラシア大陸北部にある、世界最大の国土を持つ国を正式名称で答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ロシア連邦』

教師のコメント

正解です。ちなみに『ロシア』だけでも正式名称となります。

鮎川蓮の答え

『ソビエト社会主義共和国連邦』

教師のコメント

君達が生まれる前に崩壊しています。

土屋康太の答え

『パンゲア』

教師のコメント

それは大昔に存在した超大陸です。

吉井明久の答え

『ムー大陸』

教師のコメント

それは存在したかどうか分かりません。

鮎川蓮のコメント

もう国じゃなくて大陸の名前になってる……。

第四十問 血まみれプール日和……ってあれ？ どうしてプールで戦ってるの？ この小説ってバトル物だったわけ？ という疑問を抱くけれど、やっぱりプールはいろんな意味で戦場。

工藤さんが着替え終わり参加してしばらく。

僕と雄二、明久は休憩のためにプールサイドのベンチに腰掛け、皆の姿をなんとなく眺めていた。

「あのさ、雄二、蓮」

「「なんだ？」」

バチツツと水面にボールが叩きつけられる音が響く。

「僕の気のせいかもしれないんだけど」

「「ああ」」

ズバン、と勢いよくサーブを打つ音が鳴る。

「あの二人、ヤケに険悪な雰囲気で水中バレーをやってない？」

「大丈夫だ、俺にも険悪な雰囲気に見える」

「というか、あんな光景を和気藹々と、なんて捉える人がいたらすぐに眼科か神経科に行くことをお勧めするよ」

『美波ちゃん！ 絶対に譲りませんからね！』

『上等よ瑞希！ スポーツでウチに勝とうなんて思わないことね！』

ボールよ割れろ、というか本当に割れかねないほどに本気で打ち合う島田さんと姫路さん。

最初は仲良く、それこそ和気藹々とやってたように見えただけ、いつの間にあんなことになったんだろう？

「ときに明久」

「ん？ なに、雄二？」

「この前お前にやった映画のペアチケットはどうした？」

映画のペアチケットって言うと、あれか。

明久たちと一緒に雄二と霧島さんの結婚を応援しに如月グランドパークに行った後に、そのお礼（復讐）としてもらった奴だ。

明久はどうしたんだろう？

「姫路さんと美波が随分と見たがつていたから、それなら二人で見
てくるといいよって、あげちゃったよ」

「……間違いない」

「……それが原因だね」

「へ？ 何が？」

『負けたほうが諦めるって約束、忘れてないわよね！』

『もちろんです！ 美波ちゃんのこそ負けても約束を破らないでく
ださいね！』

『そっちこそ！』

恋する乙女の戦いが勃発しているということか。

ただ、島田さんはともかくとして、姫路さんまでここまで熱くなる
とは思わなかった。

やっぱりFクラスに毒されてきているのかな？

「ほう……姫路と島田の勝負とは面白いのう。どちらが優勢なのじ
や？」

疲れたのか、秀吉もプールから上がって、僕たちが座っているベン
チのほうへやってくる。

「今のところは姫路が優勢だな」

「あら、意外ね。球技なら美波のほうに軍配が上がりそうなものな
のに」

いつのまにか、優子も僕の隣に来ていた。

なんというか、パレオを外している分だけ、露出が多くて目のやり場に困るといふか。

いや、パレオをつけていても困るけど。

「姫路さんと島田さんの一対一ならそうなるんだろうけどね」
動揺を優子に気取られないように両陣地を指差す。

姫路さん側には霧島さんが、島田さん側には、ミハル（？）とか呼ばれてた女の子がそれぞれボールを追っていた。

「まあ、代表は運動神経もいいからね。美波と互角でも驚かないわ」

姫路さんと島田さんでは力の差は歴然だけど、それだけでは勝負は決まらない。

幸い、姫路さんのペアである霧島さんは、スポーツも優等生なように、彼女は巧みにボールを島田さんがいないところに落として、得点を挙げていた。

「それにしても、島田の相方は動きが不自然じゃな。故意に手を抜いておるように見えるのじゃが」

「あ、やっぱり秀吉もそう思う？」

一方、島田さんのペアはさっきからミスばかりしている。

サーブは全部外しているし、ボールが飛んできたら落とすか場外へと飛ばしてしまう。

構えや動きを見てみると、霧島さん並みかそれ以上に上手いように見えるんだけど。

ある意味、徹底した手抜き様だ。

『美春。アンタ、絶対手抜いてるでしょ……!!』

『そんなことはありませんわお姉さま！ 美春はお姉さまのために全力で（手を抜いていま）す!!』

『これにはウチの大切なものがかかってるんだから本気でやりなさい!!』

『はい！ 美春もお姉さまのために本気で（手を抜いていま）す！ あんなのとデートなんて、お姉さまのためになりませんから!!』

あ、ついに本音が出た。

『アンタ、やっぱりウチを負けさせるためにこちら側に来たわね…

…!!』

『ほらお姉さま！ ボールが来ましたよ!!』

『あっ！？ もう、早く言いなさいよっ!!』

島田さんたちが言い争っているうちに、姫路さんが打ったサーブがコートの中に落ちた。

『はい。これで15点。1セット目は代表& a m p・姫路チームの勝ちだよ!!』

『1セット目?』

『大方3セットマッチなんだろ。5セットもやるとは思えないからな』

『それもそうだね』

コートチェンジまでやってるのか。
さすがに本格的にやってるなあ。

「お姉ちゃん、ファイトですっ」

葉月ちゃんは無邪気に島田さんを応援している。

「それじゃ、2セット目行くよ!」

工藤さんの言葉で、第2セットが始まった。

「ああと、手が滑ってしまいました!」

開始と同時に宙に舞ったビーチボールは、どうすればそうなるのか、サーバーの後ろに飛んでいった。

「パートナーがああザマじゃ、島田の勝利はないな」

「そうだね、いくら美波が上手くても、一人じゃ勝てないよね」

「実質3対1だしね」

「もはや勝負は見えたも同然じゃな」

あのパートナーの子が変われば話は別だけれど、このままじゃ島田さんの勝ちに一つもない。

『……美春、もう一度言うけど、次のサーブからは本気を出しなさい』

『ひ、酷いですお姉さま! 美春はお姉さまのために一生懸命頑張っているというのに、その頑張りを疑うなんて!』

『下手な演技はいらないわ。良く聞きなさい美春。これが最後の警告よ』

『お姉さま信じてください! 美春はお姉さまに嘘なんてつきません!』

なるほど。人はこうやって嘘に嘘を重ねていくんだな……。

『いい？　ここまで言ってもまだ本気を出さないというのなら――』
『ですから、美春は本気を出してますと何度も』

『――ウチは明日から美春の事を、「清水さん」って呼ぶことにするわ』

『……………』

「ねえ、今のサーブ見た！？　垂直に変化したよ！？」

「どうやればビーチボールでそんな芸当が出来るのじゃ！？」

「流石の翔子もアレは取れないな……！」

「大いに物理法則を無視してるよね……」

「……いや、それはお前（お主）が言うな」「」

うつ……そりゃ、僕の水弾も物理法則は多少無視してるかもしれないけど、さっきのサーブほどじゃないよ。

『お姉さまごめんなさい！　美春は嘘をついていました！』

『いいのよ美春！　これからも友達でいきましょうね！』

コートでは、無駄な寸劇が繰り広げられている。

「でも、これで形勢は一気に逆転だね」

島田さんのパートナーの子はさっきまでとは動きに雲泥の差がある。運動が得意じゃない姫路さんでは、今の島田さんペアに勝つことは難しいだろう。

「やれやれ。姫路も可哀想だな。折角のデートのチャンスが奪われるとは」

隣では雄二が頬杖をつきながらこんなことを呟いている。

パアンッ！

大きな破裂音がプールに響き渡った。
どうやらビーチボールが割れたらしい。

「あ……！ ごめんなさい。美春、ちょっと力を入れすぎてしまいました。代わりを探してくるので、お姉さまたちは休憩しててください」

ボールを割ったのは、やはり島田さんのパートナーの子だった。

おかしいな。あのボール、割るためにはかなり強い力をかけないといけないのに。

島田さんのパートナーがボールを捜している間、姫路さん達は休憩することになった。

「お疲れ様。皆凄く気合が入っていて、見ていて凄く楽しいよ」
明久が、ベンチに座った姫路さんに声を掛ける。

「あ、はい。ありがとうございます。私も皆と遊べて嬉しいです」
「あはは。それは良かったよ」
体の弱い姫路さんのことだ、今まで大人数で、こうやって騒ぐなんて経験が少ないのかもしれない。

姫路さんが楽しめるのは良い事だ。

「あ、そうでしたっ」

姫路さんが突然、何かを思い出したようにポンツと手を叩いた。
この瞬間、僕や明久、雄二、秀吉とムツツリー二は、本能的に良くないものを感じ取った。

「ちょっと失敗しちゃって、人数分用意できなかったんですけど――」
マズイ、マズイと僕の本能が警告を鳴らしている。
しかし姫路さんは無常にもにこやかに言葉をつむぐ。

「――実は、今朝作ったワッフルが三つ」

「第一回っ！」（明久の声）

「最速王者決定戦っ！」（雄二の声）

「ガチンコっ！」（僕の声）

「」「水泳対決――っ！」「」（僕と明久と雄二の声）

「」「イエ――っ！」「」（秀吉とムッツリー二の声）

姫路さんが言い終わる前にタイトルコールが入る。

突然の事態についていけないのか、女子は全員目を丸くしていた。

「明久、ルール説明だ！」

「オッケー！ ルールはとっても簡単。このプールを往復して、最初にゴールした人の勝ちと言う、誰にでも分かる普通の水泳勝負です」

そう、本当にただの水泳勝負。

ただし、この勝負は一位と二位とそれ以下の順位には大きな隔たりがある。

姫路さんの殺人ワッフルは三つ。それにたいして僕たちは五人。

つまり、生き残ることが出来るのは二人ということになる。

「バカなお兄ちゃん達、突然どうしたんですかっ？ 急に水泳勝負なんて、葉月びつくりですっ！」

「葉月ちゃん、男にはね、大切なものをかけて戦わないといけないときがあるんだよ」

「ふえー。お兄ちゃん、かつこいいですつ。プライドを賭けた勝負
つて奴ですねっ」

明久の言葉に目を輝かせる葉月ちゃん。
けれど、この水泳勝負にかかっているのは、男のプライドなんてか
つこいいものではなく、命なんだよ。

「よくわからないけど、五人の中で誰が一番速いかには興味あるわ
ね」

「そうですね。体力では鮎川君か坂本君が一番に見えますけど……」

「まあ、蓮は人外バンザイの域に到達してるわね」

「……動きの速さなら、吉井や土屋も引けを取らない」

僕たちの緊迫した状況を知らない女子メンバーからは、そんなのん
きな言葉が聞こえてくる。

てか、人外バンザイって何だ人外バンザイって。
僕か！？ 僕のことなのか！？

「へえー面白そうだね。それじゃ、ボクが判定してあげるよ」

工藤さんがスタート兼ゴール位置に立つ。

25メートルプールの往復、50メートル勝負だ。

「はい、行くよ！ 位置について——」

工藤さんの声が響く。

僕は飛び込みの構えを取る。

ムツリーニは強敵だけど、今日は出血で弱っている。
秀吉に体力勝負で負けることはない。

「よーい——」

罰を免れるのは二人だけ。

ムツツリー二は弱っていて、秀吉には負けない。
そうになると、敵はあの二人――

「スタートっ！」

「くくたばれえっ！」「くく」

すたーとの合図とともに、僕、明久、雄二は、お互いに向かってとび蹴りを放っていた。

「くそっ！ やっぱ二人とも僕と同じ事を考えていたんだね！？」
「てめえらこそ卑怯な真似してくれるじゃないか！ この恥知らずが！」

「雄二と明久にだけは言われたくない台詞だねっ！」
言い争っている二人を放ってプールに飛び込む。

三人とも水着以外は何も来ていないから、投げ技閉め技は役に立たない。

拳で沈めるには時間がかかる。

ここは――

「くらえっ！」

「のわあっ！？」

ゼロ距離で押し合っている明久と雄二に向かって水弾を飛ばす。

「くっ！ 蓮！ 卑怯だ――へぶっ！？」

「くそっ！ 蓮がいることを忘れていた――ぐふおっ！？」

ふははははは！ これだけ離れば、二人に出来ることは何もない！
この勝負――僕の勝ちだ！！

「あのさ、三人とも。戦うのもいいけど、木下君とムツツリー二君はそろそろ折り返しだよ？」

僕の水弾を避けつつも取っ組み合いをしている明久と雄二。

水泳勝負なんて半分忘れていた僕たちに、工藤さんからあまり嬉しくない情報が舞い込んできた。

「おい明久！ 蓮！ ムツツリー二と秀吉がいつの間にか折り返してきているぞ！？」

「ホントだ！ 雄二と蓮なんかを相手にしている場合じゃない！」

「ちいっ！ 足止めているつもりが、僕も足止めされていたなんて……！」

ついつい熱くなって、K Oを狙っていたみたいだ。

落ちて着いて秀吉とムツツリー二の残りの距離を……ってあと20メートルくらいじゃないか！？

「雄二、蓮！ このままじゃ僕らの負けは確定だよ！？」

「そうは行くか！ 俺と蓮でムツツリー二を殺る！ 明久は秀吉をやれ！」

「オッケー！ 目、即、殺だね！」

雄二と僕はムツツリー二のレーンに、明久は秀吉のレーンに飛び込む。

こうなればムツツリー二を殺してでもゴールを阻止してみせる！

「行くぞムツツリー二っ！」

「……………卑怯なっ……！」

卑怯上等！ 僕はここで死ぬわけにはいかないんだっ！

スピードの落ちたムツツリー二に向かって水弾を放つ。

頭を振ってよけられたが、ムツツリー二は完全に止まった！

「雄二！」

「おうよ！」

「……………っ！」

ムツツリー二の動きが止まった瞬間を狙って、雄二がムツツリー二に飛び掛る。

あとは力で勝る雄二がムツツリー二を沈めれば――

『あ、明久君っ！何をしているんですかっ！？』

姫路さんの声がした。

凄く慌てていたようだけど――

「あはは。そういえばこれ、秀吉の水着に似ているね」

「んむ？　そういえば胸元が涼しいのう」

僕の目の前には上半身裸の秀吉と、秀吉の水着の上を片手に立っている明久。

どういう状況？

「……………死して尚、一片の悔い無し……………！」

後ろを振り返ると、水中に沈んでいくムツツリー二の姿が。

そしてムツツリー二を始点にどんどん水が朱に染まっていく。

「大丈夫かムツツリー二！？」

「雄二っ！　この出血量はやばくない！？」

「ごごごごめんなさいっ！　神に誓って僕は何も見えていないから！」

「き、木下！　早く胸を隠しなさい！　土屋の血が止まらないから！」

「いいいいヤじゃ！　ワシは男なのじゃ！　胸を隠す必要はないのじゃー！」

「木下君我儘言っちゃだめですっ！　土屋君が死んじゃいます！」

「……愛子。救急車の手配、頼める？」

「はい。やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「……どうやったらこんな状況になるのかしら」

「バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「お姉さま、愛しています……」

結局、ムツツリー二は僕たちと救急隊員の必死の救命活動で一命を取り留めた。

そして、週明けの朝。

「……吉井、坂本、ちょっと聞きたいことがある」

鉄人が現れるなり、低い声で明久と雄二を呼び出した。

「断る」

「黙秘します」

いつもの事ながら拒否の構えを取る明久と雄二。

「どうしてプール掃除を命じたはずなのにプールが血で汚れるんだ！？ 鉄拳をくれてやるから生活指導室で詳しい話を聞かせろ！」

「説教なんて冗談じゃねえ！ むしろ死人を出さなかったことを褒めてもらいたいくらいだ！」

「そうですよ！ 本当に危ないところだったんですからね！」

「黙れ！ お前らの日本語はさっぱりわからん！ 拳で語り合った
ほうが早い！」

「ええい、この暴力教師め！ 逃げるぞ明久！」

「了解っ！」

「貴様ら、今度は反省文とプールの掃除では済まさんぞっっ！！」

そして始まる二人と鉄人の追いかっこ。

今日もFクラスは平和です。

第四十問 血まみれプール日和……ってあれ？ どうしてプールで戦ってるの？

次回からは強化合宿編に入りたいと思います。

第四十一問 盗撮、盗聴、脅迫は立派な犯罪ですよ？（前書き）

今回から強化合宿編に入ります。

この小説のキーポイントになると考えているのでかなり悩んでいます。

つまり何が言いたいかというと、『更新遅れるかもしれません』ということです。

もちろんできるだけ早く更新したいと思いますが、もし更新がなくても、

『悩んでいるんだなあ』と、暖かく見ていただければ幸いです。

第四十一問 盗撮、盗聴、脅迫は立派な犯罪ですよ？

バカテスト物理

問『密度の異なる大気の中で光が屈折し、通常とは異なった景色の見え方をする現象をなんと言うでしょう』

姫路瑞希の答え

『蜃気楼』

教師のコメント

正解です。

鮎川蓮の答え

『砂漠でよく見るもの』

教師のコメント

確かにそのような話は良く聞きますが、そのような回答では不正解です。

吉井明久の答え

『霧』

教師のコメント

不正解です。霧は、空気中の水分が、気温の低下に伴って水として漂い、白く見える現象です。

ですが吉井君にしては、まともな回答だったと思います。

土屋康太の答え

『暗黒星雲』

教師のコメント

暗黒星雲は光を遮断します。

第四十一問 盗撮、盗聴、脅迫は立派な犯罪ですよ？

新学年になってから二ヶ月が経過し、日没の時間にはつきりとした変化を感じ始める今日この頃。

程よい気温の所為でいつもより早起きしてしまい、HRまでのんびりしようと屋上へ。

いつもより静かな校内。

グラウンドからは部活の朝練の音が。

「最悪じゃあーっつっ!」

屋上に響く明久の絶叫。

「つて、明久!」

「……………」

明久は見事なまでのOTZ状態だ。
その手には……手紙のようだけど。

「どうしたの明久?」

「……ハッ! な、なんでもないよっ!」

「?」

僕に気づくと、まるで鉄人から逃げるような速さで屋上から立ち去ってしまった。

「まあ明久のことだから、また何か厄介ごとを持ってきたんだろうな」

このときの僕はあまり気にしてなかった。

このくらいのはFクラスにいれば日常茶飯事だし、またいつものように明久が酷い目にあって終わるのだろうと思っていたんだ……。

「見ないで！　こんなに汚れた僕の写真を見ないでえ！」
教室に戻ると、明久の絶叫に迎えられた。

「どうしたの？」

「む、蓮か。実はの、明久に脅迫状が送られてきたらしいのじゃ」
脅迫状？　明久に？

さつき屋上で叫んだのはこの手紙の所為か。

「それってどんなの？」

「えつと……『あなたのそばにいる異性にこれ以上近づかないこと』
だつて」

「異性が……警告だけ？」

「ううん。『この要求を聞き入れない場合、同封されている写真を
公開します』って」

半分涙目の明久から一枚の写真を手渡される。

そこにはブラを持って立ち尽くす明久（着替え中メイド服着崩れバ
ージョン）が写っていた。

「……」

開いた口がふさがらない。

「恐ろしい威力でしょ？　これはもう、僕を死に追い詰めるための
卑劣な計略といっても過言ではない……」

「考えすぎではないかのう？　メイド服くらい、人間一度は着るも
のじゃ」

いや、君のその認識は少し世間一般の常識から離れているぞ。

「明久君、木下君、鮎川君おはようございます」

「姫路さん、おはよう」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かったんじゃない」

「はい。途中で忘れ物に気づいて、一度取りに帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

そういつてはにかむ姫路さん。

男ばかりのFクラスには貴重な女子なんだけど、最近ますますFクラスの危険思想に毒されてきてしまっているようで、僕としては明久の命が心配だ。

「丁度良い。先ほどの写真が騒ぐほどのものではないと、姫路に証明してもらおうと思うかの。姫路、少々良いか？」

いや、さっきの明久の写真は騒ぐレベルのやばいものだって。

女性ものの下着を持ってメイド服着てる男子の写真なんて世に出回ったら変態の称号を冠することは避けられない。

「姫路に質問なのじゃが、もし明久のメイド服の写真があったらどう思うかのう？」

正直、その切り込み方はどうかと思う。

「もしそんな写真があったら——とりあえずはスキャナーを買います」

秀吉のちよっとおかしい質問に返されたのは、ちよっとおかしい答えだった。

「……どうしてスキャナー？」

いやな予感を感じながら、姫路さんに問い返す。

「だって、そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEB配信できないじゃないですか」

「明久落ち着くのじゃ！ 飛び降りなんて早まった真似をするでない！」

「離して秀吉！ 僕はもう生きていける気がしないんだ！」

僕の隣では、窓から飛び降りようとする明久と、それを必死で止めようとしている秀吉が。

「そうだ。ムツツリー二に相談してみれば？」

「そうじゃの！ ムツツリー二ならば、こういうことにも詳しいじやろつから、犯人を見つけ出してくれるやもしれん」

「おおっ！ なるほど！」

認めたくはないけど、盗撮や盗聴ではムツツリー二には勝てない。きっと明久の脅迫犯も見つけてくれるだろう。

「助けてムツツリー二っ！ 僕の名誉の危機なんだ！」

「後にしろ、今は俺が先約だ」

「あれ？ 雄二？」

ムツツリー二の席に倒れこむように駆け寄る明久を遮ったのは我らが代表の雄二だった。

「ムツツリー二、雄二と何の話をしてたの？」

ムツツリー二に問いかける。

雄二がムツツリー二に相談するなんて、よほどの事があるに違いない。

「……………雄二の結婚が近いらしい」

「雄二と霧島さんの結婚？ そんな既に決まってることより、僕が校内の皆に女装趣味の変態として認識されそうなのほうが重要だよ！」

「なんだと？ お前が女装趣味の変態なんて、それこそ今更だろうが！」

「黙れこの妻帯者！ 人生の墓場へ帰れ！」

「うるさいこの変態！ とつとメイド喫茶へ出勤しろ！」

「……」

「……」

「「傷つくくらいならお互い黙ってればいいのに」」

男子高校生二人が顔を突き合わせて睨みあいながら涙を流している様子はなかなかシニールだ。

「で、でも、まだ結婚の話程度で済んでよかったじゃないか。僕はてつきり、あのペースだとも子供が出来たことにされているのかと——」

「……明久、笑えない冗談はよせ」

「まあ、二人とも落ち着いて。まず雄二のほうから聞こうか。何があつたの？」

「ああ。実は今朝、翔子がMP3プレーヤーを隠し持っていたんだ」

「MP3プレーヤー？ それくらい別にいいんじゃないの？ 雄二だって前に学校に持ってきてたし」

明久の言うとおり、校則違反ではあるが、そこまで騒ぐようなことでもない。

「いや、アイツは結構な機械音痴だからな。そんなものを持ってる、しかも学校に持ってくるなんて不自然なんだ」

霧島さんは機械音痴なのか。

しかし流石幼馴染。そんなことにまで気がつくなんて。

「そこで怪しく思ってたけど没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」

えっと、プロポーズしていると、この前の召喚大会準決勝で、明久と秀吉が霧島さんと優子に勝つために雄二の声真似をしたっていうアレだよな。

僕は気絶してたから覚えてないけど。

「き、霧島さんは可愛いねっ！ そんな台詞を記念にとっておきたいなんて——」

「いや。婚約の証拠として父親に聞かせるつもりのようなのだ」

「それは……またヘビーな内容だね……」

「MP3プレーヤーは没収したが、中身はおそらくコピーだろうし、オリジナルを消さないことには……」

そういつて雄二はポケットからMP3プレーヤーを取り出す。

どうみても再生専用で、録音できるようなタイプじゃない。

「そんなわけで、ムツツリー二にはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい。さっきも言ったようにアイツは機械音痴だからな。密かに盗聴器を仕掛けるなんてことができるわけないから、きつと盗聴に長けた実行犯がいるはずなんだ」

「……………明久は？」

ムツツリー二が、今度は明久のほうへ向く。

実際僕も明久から詳細を聞いたわけじゃないから、どんな状況かいまいち分からない。

「実は、僕のメイド服パンチラ写真が全世界にWEB配信されそうなんだ」

「……何があつたの？」
全く要領を得ない。

「ごめん。端折り過ぎた。要するにね——」

——事情説明中——

「——そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。写真を撮られた覚えなんてないから、きつと盗撮の得意なやつがこっそり撮影したんだとおもう」

「なんだ。明久も俺と同じような境遇か」

「……脅迫の被害者同士」

「いや、脅迫で仲間が出来てもね……」

そもそも脅迫自体が珍しいことなのに、同じクラスに同じタイミングで二人。

これは同一犯だな。

とりあえず、全員の説明を終えたところで、ガラガラと教室の扉が開く音が聞こえてきた。

鉄人がやってきたようだ。

「遅れてすまないな。強化合宿のしおりの所為で手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

席に着く、といっても自由席だから、開いている近くの席に座るだけだ。

「……………とにかく、調べておく」

「すまん。今度お前の気に入りそうな本を持ってくる」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクション2を持ってくるよ」

「……………必ず調べ上げておく」

ムツリーニは二人の頼みを快諾したようだけど、なんというか、そういう本で、っていうのはね……。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえあれば問題はないはずだが」

前の席から順番に冊子が回ってくる。

僕も一冊とって後ろに回した。

「集合の場所と時間だけはくれぐれも間違えないように」

鉄人の声が響く。

確かに集合場所を間違えたらシャレにならないな。

学力云々は抜きにしても、皆との泊まりのイベントは参加したい。

冊子の中から、集合場所が書いてある部分を探す。

今回の学力強化合宿の行われる場所は、卯月高原という少し洒落た避暑地で、文月学園からは車だと4時間くらい。電車とバスの乗継だと5時間くらいかかるところだ。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとにそれぞれ違うからな」

「やっぱりAクラスはリムジンバスとかで向かうのかな」

「ああ。そうだろうな」

「するとワシらFクラスはマイクロバスじゃろうか」

「いや、他のクラスのバスの補助席に別れて乗る、という方法もある」

「いいか、他のクラスと違ってFクラスは……現地集合だからな」

『『案内すらないのかよっ！？』』

嗚呼格差社会。

あまりの扱いの差に、全旧友が涙した……。

第四十二問　ザ・心理戦、どうして電車の中で命をかけて戦わないといけないの

間が開いてしまい、申し訳ありません。

今回はバカテストお休みです。

第四十二問 ザ・心理戦／＼どうして電車の中で命をかけて戦わないといけないの

第四十二問 ザ・心理戦／＼どうして電車の中で命をかけて戦わないといけないのだろうか

強化合宿初日。

車窓から流れる景色には緑が多く混じり始め、いつもの街から遠く離れたところに来ていると実感できる。電車に乗ってからまだ1時間だが、窓の外には既に田園風景が広がっている。

「あと二時間はこのままですね」

僕から、明久たちを挟んで向こう側にいる姫路さんが呟く。

「二時間か。眠くもないし、何をしていようかな」

明久の声は退屈そうだ。実際、狭い車内では特にすることもないし、僕も退屈だ。

読みかけの小説でも持って来ればよかった。

「雄二、何か面白いものはない？」

「鏡がトイレにあったぞ。存分に見てくるといい」

「それは僕の顔が面白いといたいのかな？」

「いや、お前の顔は割りと——笑えない」

「笑えないほど何！？ 笑えないほど酷い状態なの！？」

「面白いといったのはお前の守護霊のことだ」

「守護霊？ そんなものが見えるの？」

「ああ、見えるぞ。血みどろで髪を振り乱している珍しい守護霊が」

「そいつはどう考えても僕を護っていないよね」

どちらかといえば、呪っていると思う。

「安心しろ。半分冗談だ」

「あ、なんだ、ビックリしたよ」

「本当は茶髪だ」

「そこは一番どうでもいいよね！？」

「そして、血みどろの上に右手の包丁を振りかぶっている」

「ちよつと待って！？ それって僕を殺そうとしてるよね！？ て
いうか雄二ならともかく蓮が言うのはやめて！ 怖いから」

どうして雄二ならよくて、僕はダメなんだろう。

僕も霊は見える程度だし、明久に言った言葉も冗談だし。

「美波、何を読んでいるの？」

雄二の対面に座っている島田さんは、さっきから何かの本を熱心に
読んでいる。

帰国子女の島田さんは漢字が苦手だから、滅多に本は読まなかった
はずだけど。

「ん？ これは心理テストの本。100円均一で売ってたから買っ
てみたんだけど、意外と面白いの」

「へえ。面白そうだね。僕にも問題出してよ」

「うん。いいわよ」

「あ、僕も参加する」
ちよーどいい暇つぶしになる出そうから、僕も参加することにしよう。

「はいはい。それじゃあいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げてください』」

色のイメージか。

似合う色？ とかな。

「『？緑、？オレンジ、？青』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

「えっと——って美波、そんなに怖い顔で睨みつけられると答えにくいんだけど」

明久と熱をこめた視線（？）で見つめる島田さん。

あんなに見られていたらだれだって答えにくい。

「べ、別にそんなわけじゃ……！ いいから早く答えなさい！」

「ん……順番に『緑↓美波、オレンジ↓秀吉、青↓姫路さん』って感じかな」
ビリッ！

島田さんの手元からものすごい音がした。

「え、えっと……？」

「……とりあえず、鮎川の答えも聞きましょうか」

僕の答えはとりあえずなんだね……。

「えっと、僕は……『緑↓霧島さん、オレンジ↓バイト先の店長、青↓優子』かな」

「店長って女性だったんだね」

「うん。未婚のアラサー。最近店放り出して婚活とか行きだすから

困ってるんだよ」

見ていて面白いけれど、関るのは疲れる、っていうタイプの人だ。

「さて、鮎川の答えも聞いたし、アキ、どうしてウチが緑で瑞希が青なのか説明してもらえる？」

本当に僕の答えはどうでもいいんだね……。

「明久、自分のためにもちゃんと答えたほうがいいよ」

「怒らないから正直に言ってみて？」

ほら、もう既に死亡フラグが立ってるし。

「前に下着がライトグリーンだったから」

「坂本、窓開けて」

「はいよ」

「捨てる気！？ 僕を窓から捨てる気！？」

「島田、ゴミを窓から捨てるな」

「雄二、止めてくれてありがとう。でも今サラッと僕をゴミ扱いしたよね？」

「いいのよ。ゴミじゃなくてクズだから」

最近、島田さんは明久のことが好きじゃなくて、日々殺そうとしているのではないかと思い始めた。

「あつ！ ちょっと！」

近々、本当に殺されることになりそうな明久の身を案じていると、雄二が島田さんから、心理テストの本を取り上げているところだった。

「どれどれ？ 緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青は——なるほどなあ」

本の内容を読み上げながら、雄二が僕や明久、島田さんを見ながらニヤニヤしている。

こいつがそんな笑い方をするときには総じてろくなことを考えてはいない。

ちよつと待て。さっき雄二が読み上げた内容が本当だとすると、僕の元気の源はアラサー女性になるのか!?

「さっきの問題に深い意味はなかったんだからね!」

「悪い悪い。面白そうだったんで、つい借りちまった」

「そう思うなら、雄二も参加したら?」

「そうだな。俺も参加するか」

「ワシも参加しようかの」

僕たちの後ろの席から、秀吉がヒョイと顔を出した。

ムツツリーニは寝ている気配がするし、やっぱり退屈だったんだろ
う。

「別にいいけど」

島田さんは不機嫌そうだ。

島田さんが友達で、秀吉が元気の源だったことがそんなに気に食わないのかな?

そう思うならまずは事あることに明久を殺すことをやめないとけないと思うけど。

「それはありがたい——ところで明久よ、『次の色でイメージする異性を挙げよ』とあったのじゃが、オレンジでイメージするのは誰じゃ?」

「秀吉」

「……少し嬉しいから困る……」

「まさか秀吉って!？」

BでL? もしくは本当に女子?

「ち、違うのじゃ! ただ、いつも一緒におる友人としては嬉しいという意味じゃ!」

良かった。秀吉がそんなことになったら、優子は秀吉を殺しかねない。うん。

「あの、私もいいですか?」

姫路さんも参加の意思を表明する。

ただ、島田さんはさっきの明久の答えにご立腹みたいだからなあ。

「そうだね。皆でやろうよ」

そんな空気を知ってか知らずか、島田さんの代わりに返事をしたのは明久だった。

「ところで美波ちゃん。さっきの問題の『青で連想する異性』って

――」

「あ、僕も気になる」

霧島さんはともかく、優子があのお店長よりも僕の中で小さい存在だとは思わない。

「……教えない、絶対に」

「そ、そんなあ……」

「……第二問行くわよ」

僕らの不満を遮るように、島田さんが本を開く。

「『1から10までの数字で、今あなたが思いついた順に2つ数字

を挙げてください』だって。どう?」

「俺は5・6だな」と雄二。

「ワシは2・7じゃな」と秀吉。

「僕は1・4かな」と明久。

「僕は8と10だな」と僕。

「私は3・9です」と姫路さん。

それぞれの数字をいい終わり、島田さんが本を見ながら結果を口にする。

「えっと、『最初に思い浮かべた数字は、あなたがいつも見せている顔を表します』だって。それぞれ——」

島田さんは、順番に指を差しながら、

「坂本はクールでシニカル」

「木下は落ち着いた常識人」

「アキは死になさい」

「鮎川は友達思いな人」

「瑞希は温厚で慎重」

と告げた。

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「ねえ、僕だけ罵倒されてなかった?」

「友達思いつても嬉しい」

「温厚で慎重ですか」

口々に感想を言い合う。明久が何かぼやいているが、いつものことなので気にしない。

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ——」

さっきと同じように、順番に指さして、

「坂本は公平で優しい人」

「木下は色香の強い人」

「アキは惨たらしく死になさい」

「で、鮎川は手のつけられない暴れん坊」

「瑞希は意志の強い人」

と告げた。

「秀吉は色っぽいのか」

「姫路は意志が強いそうじゃな」

「ねえ、僕の罵倒エスカレートしてなかった？」

「暴れん坊つてのも、罵倒に近い気がするんだけど」

「坂本君は優しいそうです」

心理テストをネタにわいわいと盛り上がる。

これも家族ではない、仲間での旅の醍醐味だ。

こんな感じで、島田さんの心理テストを何問かやってみる。
そうこうしていると、

「あ、ムツリーニ、おはよう」

ムツリーニが明久の肩を叩いていた。

「目が覚めたようじゃな」

「……………空腹で目が覚めた」

「あれ？ もうそんな時間？」

「もう1時過ぎだからね」

「確かにもういい頃合じゃの。そろそろ昼にせんか？」

「そうだね。あまり遅くなると、夕飯が入らないし」

「あ、お昼ですね。それなら——」

と、姫路さんが傍らにおいてある鞆から何かを取り出そうとしている。

嫌な予感、というか拙いことが起こると生存本能が警告を鳴らす。

「——実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら……」
予感的中。

クラスメイトの分までお弁当を用意してくれるその心遣いはとても稀有で嬉しいことなんだけど、残念なことに、そのお弁当本体が簡単にこの世から逃れられるほどの力を持っているんだ……。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまつてのう」

「……………調達済み」

「ゴメンね姫路さん。僕も張り切つてちょっと多めに作つてきちゃつたんだ。だから、いつも栄養を取れていない明久に食べさせてあげてよ」

皆が一斉に自分の昼食を見せる。

自分の分は自分で、これは常識だぞ明久！

「ごめん。実は僕もこうして惣菜パンを」

「おっと、手が滑つた（パシッ）」

「……………足が滑つた（グシャッ）」

「ああっ！ パン！ 僕のパン！」

明久が惣菜パンを取り出した瞬間に、雄二が叩き落とし、ムツツリー二が踏み潰した。

流石の連携。明久は全く反応できていない。

「あはは。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末に——」

「——してはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させてもらおう。明久は姫路の弁当を分けてもらつといい」

「……（ガンのくれあい）」

「おっと、ゴメン雄二。僕も手が――」

「――滑らないようにきっちり掴んでおいてやるからな」

「……（メンチの切り合い）」

アホな寸隙を繰り広げている場合か。特に明久。

「あの、明久君。良かったら……」

おずおず、といった様子で明久に弁当を差し出す姫路さん。
男としては嬉しいシチュエーションだ。

差し出されているのが劇薬でなければ。

「アキ。良かったらウチのお弁当も食べてみる？」

戦況はほぼ詰んだ！ そう思っていたら、島田さんが戦況をひっくり返す発言をしてくれた。

「ありがとう！ 美波も分けてくれるんだね！ それならいっそのこと、皆でお弁当を広げて少しずつ摘もうよ！」
なんてことを言ってくれるんだこの野郎！？

「わ、ワシとムツツリー二は向こうの席じゃから、遠慮させてもらおうかの」

「………！（コクコク）」

秀吉とムツツリー二は上手く逃げたか！

「俺も遠慮しておこう。明久に貰ったパンもあるしな」
雄二も逃げ出す算段を立てたようだ。

「雄二、そんなこと言わずに――」

「そうか明久！ 俺の弁当も食ってみたいか！ それなら好きなだけ食え！」

「もごあつ！」

反論しようとした明久の口を雄二がサンドイッチを突っ込むことでふさぐ。

今のうちだ。

「姫路さん。悪いけど僕も遠慮させてもらっね。僕は自分の分だけで精一杯だし、馬に蹴られたくはないしね」

最後のほうは明久には聞こえないように話す。

「ふえ？ あ、はい。そういうことなら……」

よし！ 回避成功！

雄二には、僕がなんて言ったか聞こえていたようで、さっきから『上手くやりやがったな』的な視線が突き刺さっている。

「――うまい」

サンドイッチを飲み下した明久の第一声。

「これ雄二の手作り？」

「……悪いかな？」

「いや、別に……」

そりゃ雄二だからね。料理もこなすんじゃないかな。普通に。

「それじゃ、はい。ウチのもどうぞ」

島田さんが明久に自分のお弁当を差し出す。
オーソドックスな中身のお弁当だ。

姫路さんとは違って、島田さんは料理も出来そうだし、普通にいしそうだ。

「それじゃ、早速」

手掴みで弁当の中からシユウマイを取り、口に運ぶ。

「あのね、その……。勇気を出して言うけど……。そのシユウマイんだけど、実はアキに食べてもらおうと思ってね——」

島田さんがもじもじしながら、言葉を紡いでいる。

まさか、ここで告白か？

「——辛子を入れてみたの」

「君はバカかいっ!？」

処刑宣告だった。

「ああっ!？ 辛あっ!？ これ物凄く辛あっ! もう口の中が大変なことになってるよ!？」

のた打ち回っている明久の味覚は、おそらく破壊されているだろう。

「明久、それはある意味ラッキーかもしれないぞ」

雄二の言葉の意味を考えると、味覚が破壊されている今なら、姫路さんのお弁当も食べられるんじゃないか……。

味覚が破壊されていれば、化学薬品を食べても大丈夫なんだっけ？人間って。

「姫路さん、お弁当貰うねっ!」

「あ、はい。一杯食べてくださいね」
「いただきますー！」

姫路さんの弁当を口に運んだ明久は、そのまま動かなくなった。

第四十三問 冤罪で罰を受けた人は浮かばれない……。 (前書き)

間が開いてしまい、申し訳ありませんでした (土下座)

今回も、バカテストはお休みです

第四十三問 冤罪で罰を受けた人は浮かばれない……。

「300J! チャージ!」

雄二の声でムツツリーニが機械を操作する。

「離れる!」

ドンッ!

ボタンを押した途端、明久の体が大きく跳ねる。

「どうだムツツリーニ!?」

「……………戻らない」

「く、もう一回だ! 雄二!」

「ああ! 300J! チャージ!」

「……………完了」

「離れる!」

ドンッ!

「戻ったよ! 雄二!」

「ああ!」

「ううつ……」

小さな声を上げて、明久が目を覚ました。

「明久、起きたか！ 良かった……。電気ショックが効いたようだな……」

雄二の言葉を聞いた明久が『嘘だろ！？』という顔をしているが、残念ながら現実だ。

君の体は、それほどイチバチの状況に陥っていたんだよ。

「おお！ 明久、目が覚めたか！ お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めたときは、もうダメじゃと思ったぞ……」

「ああ、確か『二百三高地を攻略できないばかりか、数百の兵と多くの銃器を失ってしまうとは……』だっけ？」

「僕の前世って一体……？」

「二百三高地って事は明久の前世は人間だったようだね」

「待って！？ 僕の前世は人間かどうかも危ぶまれてたの！？」

冗談だ。

二百三高地ということは、明久の前世は旧日本軍の部隊長、つて所か。

「ところで、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく、贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

「流石スポンサーつきの私立……やることのスケールが違うね……」

初めてAクラスの設備を見たとき以上の驚きだ。

「そういえば、雄二、秀吉、蓮もこの部屋で一緒なんだね？」

「うむ。ムツリー二も含めた五人でこの部屋を使うのじゃ」

「あれ？ そういえばムツリー二は何処行つたの？ 覗き？ 盗撮？」

「友人に対してそんなことが言える明久って一体……。ムツリー二は明久を蘇生した後、どこかに行っちゃったけど……」

「…………… だたいま」

噂をすれば帰ってきたようだ。

「おかえり、ムツリー二」

「…………… 明久も、無事で何より」

「普通は手料理で生死の境を彷徨ったりはしないんだけどね……………」

「…………… 情報も無駄にならずに済んだ」

「情報って、俺と明久が頼んだ例のヤツか。随分早いな」

明久と雄二の脅迫犯の情報か。

たった一日で情報なんて掴めるものなのかな？

ハック以外で。

「…………… 昨日、犯人が使ったとおも割れる道具の痕跡を見つけた」
流石ムツリー二。

「…………… 手口や使用機器から、犯人は同一人物と思われる」

「まあ、盗撮や脅迫をする人間なんてそんなにいないだろうしね」

沢山いたら、それは問題だろう。

「それで、犯人は誰だったの？」

ムツツリー二に問うのは明久。

自分が脅迫されている以上、焦る気持ちも分からないでもないが、脅迫犯に気づかれないように調査を進めている以上、ムツツリー二でも断定は不可能のはず――

「……………犯人はお尻に火傷の跡があることしか分からなかった」

「君は一体何を調べたんだ」

名前や人相、カメラの位置からの行動パターンならともかく、お尻に火傷のあと！？

ムツツリー二の調査方法が凄く気になるところだ。

「……………校内に網を張った」

そういつてムツツリー二が取り出したのは、小さな機械。

「……………小型録音機」

毎回思うのだが、ムツツリー二の犯罪道具コレクションは何処から手に入れているのだろうか？

僕が軽く引いているうちに、ムツツリー二は録音機のボタンを押してしまっていた。

——ピッ——らっしやい』

録音機から聞こえるのは、ノイズ交じりの人の話し声。

まあ、校内全部を網羅した以上、ムツツリー二でもそこまで精度のいいものは使えなかったか。

『……雄二のプロポーズを、もう一つお願い』

「しょ、翔子……！　アイツ、もう動いていたのか……！」

「よっぽど早く手に入れたいんだね」

『毎度。二回目だから安くするよ』

『……値段はどうでもいいから、早く』

チイツ！　これだからブルジョワは……！

『流石お嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日——と言いたいところだけど、明日から強化合宿だから、引渡しは来週の月曜で』

『……わかった。我慢する』

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かった……」

「タイムリミットが伸びただけだね」

「犯人のほうは、口調じゃ誰か判断できないか……」

「……それで、こつちが手がかり」

ムツッリーニが録音機を操作する。

『——相変わらず凄い写真ですね。こんなものを撮っているとバレたら酷い目にあうんじゃないですか？』

『ここだけの話、前に一回母親にばれてね』

『大丈夫だったんですか？』

『文字通り、お尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか……』

『それはまた……』

『おかげで未だに火傷の跡が残っているよ。乙女に対して酷いと思わないかい？』

そうか。前時代の罰がいいなら僕がのこ引きの刑に処してあげよう。

車裂きでもいいが。

「……………分かったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の跡か」

「今の会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居がかっているから、誰とまでは特定できないけどね」

問題なのは、唯一手に入れた手がかりが――

「お尻の火傷か……。仮にスカートを捲って回ったとしても、分からない可能性があるし、うゝん……………」

「……………赤外線カメラでも、火傷の跡は写らない」

男子高校生が三人集まって、女子のお尻を見る相談か……………ものすごく犯罪臭がする。

「そうだ！ もうすぐお風呂だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久。何故ワシが女子風呂に入ることが前提となっておるのじゃ？」

「……………っ！」

「ど、どうしたんだ蓮？ ……いきなり涙流し始めて……………」

「いや、ここで女子風呂で僕の名前が挙がらないことに過去類を見ない喜びを感じていたんだ……………」

「そうか……………。だが明久、秀吉も無理だ」

「どうして無理なのさ」

「しおりの三ページ目を見てみる」

雄二に言われたとおりに、しおりの三ページ目を開く。

合宿での入浴時間について

・ 男子A B Cクラス	20 : 00	21 : 00	大浴場（男）
・ 男子D E Fクラス	21 : 00	22 : 00	大浴場（男）
・ 女子A B Cクラス	20 : 00	21 : 00	大浴場（女）
・ 女子D E Fクラス	21 : 00	22 : 00	大浴場（女）
・ Fクラス木下秀吉	20 : 00	21 : 00	個室風呂？（

場合によっては鮎川蓮も同様）

「……くそっ！ これじゃ秀吉に見てきてもらうことが出来ないっ
！」

「そっいうことだ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ！？」

「……この場合によつてはつてどういう意味だろうね」

「さあ？ 多分、野郎共がお前の裸を見てどうもなければ男子風呂
に入つて良いつて事じゃないか？」

これは前よりも扱いが進歩したと見ていいんだよね……？

そつやつて五人で（約一名別のことを考えているが）うんうん唸つ
ている時だった。

——ドバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

ドアが碎けるんじゃないかという勢いで開け放たれ、女子がぞろぞ
ろと中に入ってきた。

「な、なにごとじゃ！？」

「ああ……また厄介ごとの気配が……」

「木下と鮎川はこつちへ！ そつちのバカ三人は抵抗をやめなさい

「！」

先頭に立つ島田さんが、窓からだっしゅつしようとした明久たちの機先を制した。

「何故お主らは咄嗟の行動で窓に迎えるのじゃ……！」

「そこは気にしちゃダメだよ。Fクラスなんだし……」

細かいことを気にしていたらFクラスなんかで生活できなくなる。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

窓を閉めながら離す雄二。

こんなときでも威厳を失わない声は聞いているものを威圧するかのようだ。

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなた達が犯人だって事くらいすぐに分かるって言うのに」

ま、小山さんみたいなヒステリックには逆効果かもしれないけど。

「犯人？ 犯人って何のことさ？」

「コレのことよ」

小山さんが明久たちの前に突きつけたのは――

「………CCDカメラと小型集音マイク」

ああ、盗撮されてたんだ……。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたわ」

「え！？ それって盗撮じゃないか！？ 一体誰がそんなことを」

「とばけないで。あなた達以外に誰がそんなことをするって言うの？」

Fクラスの皆とか、あと小山さん限定で根本とか。
女子の可能性もあるけどね。

「違う！　ワシらはそんなことをしておらん！　覗きや盗撮なんて
そんな真似は――」

「そうだよ！　僕たちはそんなことはしない！」

「……………！（コクコク）」

秀吉の反論に合わせて、明久とムツツリー二が前に出る。

けどそんなことしても無駄だと思うんだよね。

「そんな真似は？」

「……………否定……………出来ん……………っ！」

ほら。

「ええっ！？　信頼足りなくない!？」

いや、校舎の壁破壊に教頭室爆破。その他Fクラスが起こした事件
は数え切れないんだから……………。

「まさか、本当に明久君たちがこんなことをしていたなんて……………」

「アキ、信じていたのに、どうしてこんなことを……………」

どうしてだろう。信頼という言葉を使う二人の後ろに、明らかに信
頼の欠片もないものが置いてある気がする。疲れてるんだろうか。

「美波、とりあえず信じてるなら拷問道具は用意してこないよね？」

どうやら幻覚ではないらしい。

「皆、やっておしまい！」

「……雄二、浮気は許さない」

「翔子待て！ 落ち着ぎゃあああああつ！」

「さて、真実を認めるまでたつぷりと可愛がつてあげるからね？」

「あのね。僕、今まで美波ほどの巨乳を見たことがぎゃああああああつ！」

「明久君。まさか、美波ちゃんの胸見たんですか？」

「あははっ。やだなあ。優しい姫路さんはそんな重そうなものを僕の上に乗せたりなんてふぬおおっ！？」

「質問にはちゃんと答えてくださいね？」

僕の目の前には阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっている。

「ねえ蓮？」

「ん？ なに優子？」

「一応確認しておくけど——」

「ああ、もちろん濡れ衣」

「——フルコースでいいのよね？」

.....
え？

「ちょっと待って優子！？ 僕は罪を認めていないしそもそもコレは濡れ衣——」

「犯人はいつもそう言っわ！」

「ちょ、マジで、本当に僕の話をきいぎゃあああああああああつ！」

僕だけ逃れることは出来ないらしい。

30分後。僕たちは証拠不十分で解放された。

「なんか、今日はいつもより命の危険が多いよ……」

「酷い濡れ衣じゃったのう……ワシと蓮だけ被害者扱いというのも解せぬが」

「ホント、酷い誤解だったよ」

「僕は優子にフルコースを喰らったんだけどね……」

今回ばかりはマジで死ぬかと思った。

ちゃんと男扱いしてくれているのは嬉しいんだけど、できればもう一步譲歩して話を聞いて欲しかった……。

「……まだ覗いてないのに」

「………見つかるようなへまはしないのに」

「その返答はぎりぎりじゃと思うぞい」

「雄二、大丈夫？ さっきから黙っているけど」

そういえばさっきから雄二の声が聞こえない。

霧島さんに完膚なきまでに叩きのめされた可能性もあるけれど。

「……上等じゃねえか」

少し怒りを孕んだ……いや、怒りを抑えた声が聞こえる。

「え？ 雄二、どうしたの？」

「どうせここまでされたんだ。本当にやってやろうじゃねえか……」

「まさか、それって……」

「ああ。そのまさかだ。流石に覗きはやりすぎかと思ったが、向こうがあんな態度で来るなら容赦はいらねえ！ 本当に覗いてやろうじゃねえか！」

「やっぱりか……」

まあ、止めないけどね。覗かれても女子の自業自得だし。

「雄二、霧島さんの裸が見たいなら、個人的にお願いしたほうがいいんじゃない？」

「バ、バカを言うな！ 俺は翔子の裸になんか微塵も興味はねえ！」
「明久は明後日の方向に話を転がす天才だよ……」

「ふむ。もしか例の尻に痕のある犯人探しかの？」

「ああ。流石に覗きはやりすぎかと思っただが、あっちがそんな態度で来るなら容赦はいらねえ。思う存分覗いて犯人を見つけてやろうじゃないか！」

碌に確認もせずに端から僕たちを犯人扱いしてきた女子。

僕たちからすれば堪ったもんじゃないよ。

「……………さっきのカメラは盗撮犯が使っているものと同じだった」
ムツリーニから、僕らに都合のいい情報が。

「つまり、どういうこと？」

流石明久。

「さすがだな、明久。この程度の会話にもついて来れないとは」

「ま、要するに、雄二と明久を脅迫している犯人は同じ人間で、さっきの覗き犯の使っていたカメラがその犯人と同じものだった。そして、強迫犯はお尻にやけどの痕があるって話だから――」

「そっか。そのやけどの痕がある人を探したら全部解決するって訳だ！」

「これでもう迷う余地はないな」

「そうだね、やってやろう！」

「早く行かねば風呂の時間が終わってしまうぞ！」

「……………（コクコク）」

「先手必勝だね」

「え？ 三人とも協力してくれるの？」

「「「当然（じゃ）」」」

友人の危機に立ち上げられるのがFクラスだ。

「よし！ お前ら往くぞ！」

「「「「応っ！」」」」

こうして僕らは女子風呂の覗きに立ち上がった。

第四十四問 虎穴に入らずんば虎児を得ずとは言うけれど、いざ入ってみたら

強化合宿一日目の日誌を書きなさい

姫路瑞希の日誌

『電車が止まり駅に降り立つと、不意にめまいのような感覚が訪れました。』

風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵なことが起こるような、そんな予感がしました」

教師のコメント

環境が変わることといい刺激が得られたようですね。姫路さんに高校二年生という今この時にしか作ることのできない思い出が沢山出来ることを願っています。

鮎川蓮の日誌

『電車の喧騒から開放されて、合宿所での一日目。普段と違う環境で、普段と違うことが起き、改めて文月学園が普通の高校とは違うことを実感した』

教師のコメント

文月学園は注目されている試験校ですからね。

鮎川君も文月学園の一員であるという自覚を持ち、折り目正しい生活を送ってもらいたいです。

土屋康太の日誌

『電車が止まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚は何だったのだろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄二の日記

『駅ホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような不思議な香りがした。』

これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければ、もっと違った香りがしたかもしれませんね。

第四十四問 虎穴に入らずんば虎児を得ずとは言っけれど、いざ入ってみたら龍が待ち構えてましたなんて笑えない……。

「……………後半組の入浴時間、残り三十分」

現在僕たちは全力で階段を駆け下りている。

もちろん音を立てないために靴やスリッパは履かずに靴下で走っている。

「時間がないね、急ごう」

「そうだな」

一応人に見られて、警戒されないように周りに注意しながら走っていたのだが、入浴の時間とかぶっていることもあってか、幸いにも人通りは皆無だった。

「……………この階段を降りて、しばらく廊下を進めば女子風呂」
口に出すのは『……………女子風呂の場所は確認済み』とのたまう我らがムツツリー二だ。

今度機会があつたらさも当然のように女子風呂の場所を確認していた理由を聞こうと思う。

問題なのはムツツリー二が立ち止まった位置。

ここは既に一階。

この先の階段を降りると、そこは地下ということになる。
地下にある以上、外からの覗きは不可能。真正面から挑むことになる。

「よし。時間がない。このまま突っ込むぞ」
目的地を前に雄二が告げる

「……………（コクリ）」

もちろんここで止まるという選択肢は最初からない。
僕らは黙って頷き、一気に階段を駆け下りた。

「君たち、止まりなさい！」
前方から、鋭い静止の音が響く。

「更衣室にカメラが仕掛けられていたと聞いて警戒していたら――まさか本当に除き犯がやつてくるとは思いませんでした」
あれは……化学の布施先生か。

「雄二、どうする！？ 布施先生だよ！」

「構わん！ ブチのめせ！」

「そこは構いなさい坂本君！ 私は一応教師ですよ！？」

「了解！ 一撃で蹴りをつける！」

「吉井君もそこは構いなさい！？」

雄二の言葉で明久が先行する。
今は緊急時だ。後で真犯人を突き出せばいくら教師でもちよつと怒るくらいで許してくれるはずだ。

「この前の補習の恨みを喰らえっ！」

「「思い切り私心で行動しているだろ（おるじゃろ）！？」」

明久の拳が布施先生に向かって突き出される。

男子高校生の本気の拳だ。中年教師にどうにかできるレベルじゃない。
い。

「ひいひいっ！ さ、試験^{サモン}召喚！」

――明久の拳は突如現れた小さな身体に阻まれた。

「し、試験召喚獣！？」

明久がその場から飛び退く。

先生の足元に見えるのは、おなじみの魔方陣だ。

ということは先生が召喚したのは僕らも使っている召喚獣ということになる。

Fクラスレベルの点数でも人間の数倍の力を持ち、教師レベルでの力は計り知れない。

ただ、召喚獣は物理干涉——つまり物体に触れること——が出来ないはずなんだけど……

「くつ……教師の召喚獣は物体に触れられるのか……！」

忌々しげに雄二が呟く。

そう。今明久の拳が防がれたということは、布施先生が呼び出した召喚獣は物理干涉能力を持つということになる。

「ふう……間に合いましたか。まあ、吉井君が『観察処分者』に認定される前は雑用を自分達でやっていましたからね。物体に触れるほうが都合がいいですよ。こうして暴走した若人を止めなくてはいけない時もありますし」

と、言うことは、召喚獣の扱いにも慣れていると見て間違いないだろう。

「けど、卑怯ですよ！ 自分が造ったテストを受けたら、点数が高くなるに決まってるじゃないですか！」

「いや、正式な勝負というわけではないので卑怯なものにもありませんし、さっき自分が一方的に暴力を振るおうとしたことを棚に上げていませんか……？」

正論だ。

「それに教師もちゃんとテストを受けているのですよ？ 他の学年の先生が作った問題で」

「え？ そうなんですか？」

「そうなんですよ。『教える側にも相応の学力が必要だ』というのが学園長の考えですので」

意外だ。あのババアがそんな考えを持っていたとは。

「さて、それでは大人しくしてもらえますか？」

布施先生が召喚獣に構えを取らせる。

物理干渉できる召喚獣相手だ。生身じゃまず勝負にならない。

「こうなりや徹底抗戦だ！ 布施センを召喚獣ごと叩き潰すぞ！」

「その意気だよ雄二！ ここは任せたからね！」

「待てやコラ」

その場から脱兎の如く逃げ出そうとした明久の肩を雄二が掴む。

「一応聞いておこう。明久、お前化学の点数は？」

「後一点で二桁だった」

「先に行けバカ！」

「教師相手に一人は辛かろう。ワシも手伝おう」

「僕も残ろうか」

秀吉と共に雄二の隣に立つ。

「いや、蓮は先に行ってくれ」

「どうして？」

「この先にも教師が待ち構えてないとも限らない。お前は教科によつては教師にも勝てる。明久とムツツリー二のサポートをしてくれ」

「そういうことなら、遠慮なく先に行かせて貰うよ」

雄二と秀吉が召喚する声を背後に布施先生とその召喚獣の脇を通り抜ける。

布施先生も行かせていいものか迷ったが、雄二と秀吉が召喚した以上、二人の対応をしなくてはいけないため、妨害できなかった。

「そこで止まれ」

先に行った明久とムツツリー二にやっと追いついたと思ったら、行く手に別の先生が立ちふさがった。

「……………大島先生」

ムツツリー二が苦々しげに呻く。

相手はムツツリー二の師匠とも呼べる存在で、僕の鬼門である保健体育の教師大島先生だ。

教科が保健体育である以上、僕は戦力にならないが、ムツツリー二の保健体育ならば教師にも匹敵する實力のはずだ。

「ムツツリー二」

「……………（コクリ）」

ムツツリー二は真剣な表情で頷き、大島先生の前に歩み出た。

「……………大島先生」

「なんだ？」

「……………これは覗きじゃない」

まさかムツツリー二は大島先生を説得するというのか！？

「それなら何だと言っただ？」

大島先生もこちらの話を聞く姿勢を見せる。
覗きなんて、それ相応の理由がないと試みないはずだ。それも正面突破。

何かしらの理由があると踏んだに違いない。

「……………これは——」

ムツツリー二の言葉を待つ。

「——保健体育の実習」

サモン
「試験召喚だ」

ムツツリー二はアホじゃないだろうか。

理由に嘘をつくにも、もつといい嘘があつただろうに。

「ムツツリー二、ここは任せたよ！」

「ゴメン、僕じゃ大島先生は止められない！」

サモン
「……………試験召喚」

召喚するムツツリー二の声はどこか不満げだ。まさかさっきの話で説得できるとか万に一つも思っていたんだろうか？

「ムツツリー二、大島先生を片付けたらまた会おう！」

「片付ける、か。いいかお前たち。教師を……………舐めるなよ」

『体育教師	大島武	V S	Fクラス	土屋康太
保健体育	6 6 3 点	V S		4 2 4 点

『

「……………は？」

走り去る一瞬前に見えた点数に我が目を疑った。

保健体育で600点……。

僕には不可能だ……。

「まさか、点数操作とか……？」

明久も同じような疑問を持ったようで、口から呟くようにそんな台詞が出る。

「俺たち教師がそんな真似をするか。バカモノが」

明久の独り言に返答があつた。

この野太く、力強い声は――

「「出たな鉄人！」」

「西村先生と呼べ！」

女子風呂の入り口を背に立っているのは、筋肉隆々の生活指導。

誰もが恐れる最恐の教師、鉄人こと西村宗一教諭だ。

個人的意見を言うと、僕は西村先生じゃなく、西村教官といったほうがしっくり来る。

「まったく、お前たちは知らないだろうが、教師は教師で勉強をしているんだぞ？ より良い教師になるためにな」

「あ、そうなんですか。それは大変ですね」

「ああ。教育者というものは大変なんだ」
しみじみと呟く鉄人もとい西村教官。

苦労しているみたいだ。いや、Fクラスが原因だろうけど。

「ちなみに、西村先生はどのくらいの点数を？」

「俺はこの前のごたごたの所為で試験を受けそびれてな。今は点数

がないんだ」

「ごたごたと言うと、担任の交代のことだろうか。」

「そうですか、無いに等しい点数ですか。流石は筋肉バカの西村先生ですね」

「吉井、念のため血液型を聞いておこう」
明らかに輸血前提だ……。

「と、とにかくそこは退いてもらいますっ！ 試験召喚^{サモン}」
明久が召喚獣を呼び出す。

『補習教師 西村宗一 VS Fクラス 吉井明久』

NONE VS 929点

『

「かかってこい」

鉄人は拳を構える。まさか召喚獣と素手でやりあうつもりなのか！？

「先生、僕の召喚獣がものに触れられる特別製だって事忘れてます？」

「阿呆。我が校で一人だけの問題児のことを忘れるものか」

「でも、だったら……」

「さっき言っただろうが。点数がないと」

強力な力を持つ召喚獣も、点数が無ければ召喚できない……が、鉄人なら素手でも召喚獣と渡り合えそうな気がする。

「そうと分かれば日ごろの恨みもこめて——くたばれ鉄人っ！」
明久の召喚獣が鉄人に突っ込む。
突撃すると見せかけ、横っ飛びのフェイントをかける。

そのまま死角から木刀を――

「ふんぬっ！」

――叩きつけようとしたところを鉄人の拳で叩き落された。

「……はい？」

「……バカな……っ！」

叩き落された木刀は床に転がっている。

「そ、そんなバカな！？ 素手で召喚獣に勝てるはずが……！」

明久は再度、無手となった召喚獣を鉄人に突っ込ませる。

しかし――

「召喚獣なら殴っても体罰にならんからなあ！」

「ごぶあっ！」

――呼吸を合わせた蹴りで浮かせ、そのまま召喚獣に五度拳が叩き込まれた。

「っ！ 明久っ！」

明久の召喚獣が倒されたのは予想外だが、今鉄人は拳を放った反動で僕への対応が出来ないはず。なら――

「速攻で倒す！」

姿勢を低くして鉄人に突っ込む。

下手なフェイントはなしだ。ただスピードをそのままに力をぶつけて――

——刹那、僕の視界に僕に向かって飛来する物体が写った。

「っ！？」

反射的に足を止め両手を交差させて物体を防ぐが

「重っ！？」

飛んできたのは……明久の召喚獣の木刀！？

鉄人の足元に転がっていたのを僕めがけて蹴ったのか！

召喚獣は怪力だから、その召喚獣が持つ武器も比例して重くなる。

腕がしびれているが、それだけの質量を蹴り飛ばす鉄人はまさに人外！

「フエイントを入れておけば結果は変わったかもしれない」

「っ！」

腕で視界を遮った隙に、鉄人が僕の目の前に接近していた。

「歯あ食いしばれえ！」

開いた腹部に拳を叩き込まれ、動きが完全に止まったところを腕をとられ一本背負いを喰らう。

「がつ！」

まともな受身も取れず、床に叩きつけられ、意識が混濁する。

「俺も鬼ではない。きっちり指導を終えたら開放してやる。——そ
うちの三人もな」

「へ？」

「あ？」

未だにグラグラする視界で鉄人の目線を追うと、その先には捕縛された雄二、秀吉、ムッツリーニの姿があった。

「さて、まずは英語で反省文でも書いてもらおうか。文法や単語を間違えていたら何度でもやり直した！ 終わったものから部屋のシヤワーを浴びて寝てもよし！」

僕は一発で終わらせて部屋に帰ったが、明久が帰ってきたのは日付が変わるところだった。

第四十五問 あなたが今欲しいものはなんですか？ **平穏な日常です。**（前書き）

ああ、三日連続投稿が凄く久しぶりな気がします。
これが当たり前になるように努力しないと。

それでは第四十五問です。どうぞ。

第四十五問 あなたが今欲しいものはなんですか？ 平穏な日常です。

バカテスト国語

問『幸福や不幸は予測のしようが無い例えをなんと云うでしょう？』

姫路瑞希の答え

『人間万事塞翁が馬』

教師のコメント

正解です。これは『城塞に住む老人の馬がもたらした運命は福から禍へ、また禍から福へと人生に変化をもたらせた。まったく禍福というものは予測できない』という故事成語です。

吉井明久の答え

『敵モンスターとのエンカウント』

教師のコメント

それは先生も同感ですが、違います。君はいい加減にゲームから離れましょう。

土屋康太の答え

『強い風が吹くタイミング』

教師のコメント

強い風が吹くとどうして幸福に結びつくのでしょうか？

鮎川蓮の答え

『Fクラスの皆の行動』

教師のコメント

間違いですが否定は出来ませんね……。

第四十五問 あなたが今欲しいものはなんですか？ 平穏な日常です。

「……雄二、一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスとの合同自習だ。

自習内容は自由で、質問があれば周囲の生徒や教師に聞いてもOK。完全に生徒任せの内容のため、机も生徒同士が向かい合うような並びになっている。

「でも、何で自習なんだろう？ 授業はやらないのかな？」

「授業？ そんなものやるわけないだろうが」

明久の疑問に雄二が即答する。

雄二としては自分の膝を狙って来る霧島さんから逃げる絶好の口実だったようだけど。

「やらない？ どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を聞いて理解できるのか？」

「むっ。失礼な。雄二にとってはそうかもしれないけど、僕にとってはAクラスもFクラスも大差ないよ」

「おお、凄いのう」

明久の発言に秀吉が食いついているが、多分秀吉の想像している内容とは違うことをこの明久^{バカ}は考えているはずだ。

「どっちも理解できないからね」

「……それは、違う意味で凄いのう」

「てか、Fクラスレベルの授業理解できないって、明久本当に高校生？」

Fクラスでの授業は基礎レベルの簡単なものを丁寧にやっているから、教科書と先生の話で大体分かるものだけだ。

「……この合宿の目的は、モチベーションの向上だから」

雄二を追って、しっかりと霧島さんも僕らのテーブルにやってきた。ポジションは雄二の隣。どうやら雄二の膝の上は諦めたらしい。

「翔子、それだけじゃ明久には分かんのだろ。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題じゃないということだ」

霧島さんに続いて、雄二が補足説明する。

流石婚約者。息ぴったりだ。

「おいコラ。今なんか失礼なこと考えなかったか？」

「何のことかな？」

雄二に読心された。

妙な勘のよさはどこから来るんだろう。

「あ、代表ここにいたんだ。じゃあ僕もここにしようかな」

霧島さんの邪魔をしないように席を外そうか、何て考えていたら、あまり聞きなれない声が聞こえてきた。

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？ 久しぶり」

声の主はAクラスの工藤愛子さん。

非常にボーイッシュな女の子なんだけど、僕とは対極というか、かなり奔放な感じがする。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79。特技はパンチラで好きなものはシュークリームだよ」

……………おかしい。普通の自己紹介では混じることの無い単語が混じっていた。

「ん？ どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑っているわけじゃないんだ。ただ、その…………」

明久は本当に学習しない生き物のようだ。

「あ、さては疑ってるね？ なんなら、ここで披露して見せよっか？」

工藤さんが短いスカートの裾をつまんだ。

「緊急回避っ！」

カオスの気配と身の危険を感じ、その場からバック宙で飛びのく。そのまま仕切りを飛び越える。

仕切りの向こうにいた人たちが、『空から人が！？』とか驚いているが気にしていられない。

仕切りに耳を当てて、明久たちの様子を窺う。

『目がっ！ 目がああああっ！』

『……浮気はダメ』

霧島さんの声と雄二の叫び声、ついでに何かがのた打ち回っている音が聞こえる。

危なかった……カオスに巻き込まれるところだった……。

『……………明久。工藤愛子にだまされないように』

続いて聞こえてきたムツリーニの声は非常に冷静だった。

おかしい。普段のムツリーニならこの状況に冷静でいられるはず無いのに。

『あれ？ ムツリーニ、随分と冷静だね。僕ですらこんなにどきどきしているんだから、てつきり鼻血の海に沈んでいると思っただのに』

『……………騙されるな。奴はスパッツを穿いている……！』

成程。そういうことなら僕が出て行っても大丈夫そうだ。

仕切りを飛び越えて宙返りしながら明久たちのテーブルに戻ると――

「蓮！？ アンター一体何処から現れたのよ！」

――いつの間にか優子がいた。

「あ、ちょっと僕が苦手な話題っぽかったから仕切りの向こうに緊急回避していたんだ」

「だから宙返りしながら出てきたわけね……」

宙返りのところには突っ込みは来ないのだろうか。

「あはは。流石ムツツリー二君。バレちゃったか。まあ、特技って訳じゃないけど、最近凝っているのはコレかな？」

笑いながら工藤さんが取り出したのは――

「……………小型録音機」

――掌サイズの小型録音機だ。

「うん。コレ、凄く面白いんだ。たとえば――」

カチカチと録音機を操作する。

しばらく間を置いて録音機のスピーカーから声が聞こえてきた。

――ピッ！ 『工藤さん』『僕』『こんなにドキドキしているんだ』

『やらない？』

爆弾だ。恐ろしい威力の爆弾だ……！

「…………ええ、最っつ高に面白いわ」

「…………本当に、面白い台詞ですね」

明久の背後には鬼も裸足で逃げ出しそうなオーラを纏った姫路さん

と島田さんが。

「瑞希、ちよつとアレを取りに行くのを手伝ってもらえる?」

「分かりました。アレですね? 喜んでお手伝いします」

不気味な笑顔をたたえながら、学習室を出て行く二人。

その二人と入れ違うように秀吉が入ってきた。

首を傾げながら。

「秀吉、どうかしたの?」

「いや、さつき部屋を出て行く姫路と島田に石畳を運ぶのを手伝ってくれといわれたのじゃが、何があつたのかと思つての」

明久の処刑が迫っている。

「はあ、本当にFクラスつて分からないわ……」

僕の隣で溜息混じりにこんなことを呟く優子だけど昨日は他の女子に混じって僕を拷問していたはずだ。

「工藤さん。キミが……」

明久が急に真剣な顔をして工藤さんに話しかける。

直前の雄二の顔を見ている限り、工藤さんが盗撮犯かと疑っているんだろつ。

ここは慎重な言葉で……

「ん? なに、吉井君?」

「あゝ。えつとゝ、その、キミが——」

「ボクが?」

「キミが——僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ!」

「ぶつ……くく……あ、あははははははっ!」

「ちょっと、蓮!？」

「き、聞いた優子!？ 明久の奴、ストレートにつ、あ、ヤバイ、笑いが止まらないっ!」

「まあ、確かに信じられないことを口走ったわね」

「勇者だな明久。録音機を前にそこまで言うとは」

笑いを何とか飲み下し、みんなの会話に混ざろうとすると、雄二の声が。

「ごめんね。折角だから録音させてもらったよ」

そういいながら工藤さんが録音機のボタンを押す。

——ピッ! 『僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ!』

また笑いがこみ上げてきた。

「コレは恥ずかしいな」

「……………加工なし。ストレート」

「ひあああああつ! お願い工藤さん! 今のは消して!」

「吉井君って、からかい甲斐があつて面白いなあ。つつい苛めたくなっちゃうよ」

——ピッ! 『お願い工藤さん!』 『僕にお尻を見せて』

「うわあああんっ! 僕がどんどん変態になつてる気がするよ!」

明久が言つた直後。

放たれるものすごい殺気を感じた。

「……………今の、何かしらね? 瑞希」

「……………なんでしょうね? 美波ちゃん」

無表情で石畳を設置し始めるその姿は非常に不気味だ。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されているのに、これ以上問題を起こすような発言をするバカがいるのかしら？」

「困りましたね。そんな人がいるなら、厳しいオシオキが必要ですよね？」

「二人とも！ コレは誤解なんだ！ 僕は問題を起こす気はなくてただ純粹に『お尻が好きって』だけなんだ！ —— 待って！ 今は途中に音を重ねられただけなんだ！ お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！ そっちの皆も笑ってないで助けてよ！ 特に雄二と蓮！」

そんなことを言われても。

「…………… 工藤愛子。おふざけが過ぎる」

明久の惨状を見て一人だけ立ち上がった男がいた。ムツツリー二だ。

「ムツツリー二！？ 助けてくれるの？」

「…………… 任せておけ。対抗する」

ムツツリー二は工藤さんと同じように小型録音機を構えている。

成程。その録音機で工藤さんに更に音を重ねるつもりか。

「姫路さん。美波。良く聞いて。さっきのは誤解で、僕は『お尻が好き』って言いたかったんだ。『特に雄二』の『が好き』ってムツツリーニイーツ！ 後半は責様だな！ 対抗するって、対抗して僕を追い詰めるって事だったの！？」

「…………… 工藤愛子。お前はまだ甘い」

「くっ！ 流石はムツツリー二君……………！」

どこかの少年漫画のようににらみ合う二人。

もうこの二人には明久を殺す罪悪感なんて微塵も無いに違いない。

「……吉井、雄二は渡さない」

「吉井君……やっぱり坂本君と……」

真に受けて明久にライバル心全開の霧島さんと、どこかにトリップし始めた優子って、

「優子さん！？ 何を想像していらっしゃるんでせう？」

「……はっ！？」

「優子、気がついた？」

「え？ 今、アタシ？」

「優子、いいかい？ 優子が呼んでいる薄い本の中のことなんて、現実ではまず起きないから、すぐに妄想の世界に飛び立つのはやめようって、優子さん？ わたくしめの肘関節はそちらの方向には曲がりませんのことよ？」

「……それ、何処で知ったの？」

しまった。優子の趣味を知ったことを本人に伝え忘れていた。

「……この前の清涼祭の打ち上げのあと、優子を家まで送っていったときに……」

「……そう」

「違うんだ優子！ 僕は見ようと思ってみたわけじゃなくて、床に散乱してたからどうしても目に入ってしまっただけなんだ！」

「大丈夫よ」

そういつて微笑む優子の目は全く笑っていない。

「——その記憶を書き換えてあげるから」

「ちよつと待って、僕は誰にも話さないから僕の肘をとっているその手に力をこめる必要はまったくないと思われるうつつうつつああああああああああああっ！」

次に僕が目を覚ましたとき、部屋には鉄人の怒声が響き渡っていた。

第四十五問 あなたが今欲しいものはなんですか？ 平穏な日常です。

（後書き

次回予告。

再び覗きに挑戦する僕たち。

しかし戦いの中で誰も予測できないことが起こった。

次回 第四十六問 『パンドラの箱は開けたら本当に大変なことになる』

それは、悲劇の始まり。

と、初めて次回予告を入れてみました。

次回から、バカテスにあるまじきシリアスモードに入ります。

次話は珍しく既に出来ているので、明日更新できると思います。

それでは。

p s . 改善点、酷評など、内容は問いません。

感想がいただけると、作者は小躍りして喜びますので、よろしくお願ひします。

第四十六問 パンドラの箱は開けたら本当に拙いことになる。(前書き)

次回予告とおりの内容だぜ

って、次回予告を書いた時点で出来上がっていたから当たり前か。

それでは超シリアスモードに入る第四十六問です。どうぞ。

第四十六問 パンドラの箱は開けたら本当に拙いことになる。

バカテスト現代社会

問『アフリカや、中東などの発展途上国に多く見られる、一人の男性が複数の女性と結婚することをなんと言うでしょう』

姫路瑞希の答え

『一夫多妻制』

教師のコメント

正解です。日本などの先進諸国では、複数の女性と結婚することは重婚として認められていけませんので注意して下さい。

鮎川蓮の答え

『トド』

教師のコメント

トドも確かに繁殖期になると一頭のオスの周りに多数のメスが集まり群れを形成しますが、それはハレムと呼ばれるものです。そもそも人ではありません。

土屋康太及びFクラス男子の答え

『男の夢』

教師のコメント

日本では認められていません。

第四十六問 パンドラの箱は開けたら本当に拙いことになる。

地獄の自習時間と、平穏な夕食タイムが終わり、いよいよ入浴の時間。

僕たちは部屋で顔を突き合わせていた。

「僕は工藤さんが犯人だと思っただけど」

「その可能性は高いだろうな」

明久に雄二が答える。

工藤さんの口調はムツツリー二が録音したものに近いし、なにより今日見せた小型録音機の手際。アレを見る以上、彼女がそういった類のものに精通していると見てもいいだろう。

「それじゃ、工藤さんを一気に取り押さえる？」

「いや、それはやめたほうがいいと思う」

「どうしてさ、蓮？」

「……………チャンスは一度きり。失敗したら犯人は見つからない」

僕に続いてムツツリー二が状況を説明する。

「もし取り押さえてみて間違いだった場合、それを見ていた真犯人は尻尾を出さなくなるってことだろ？」

「うん」

「……………（コクコク）」

明久のために雄二が補足するのも日常茶飯事の光景だ。

「証拠の隠滅、更なる脅迫。どちらにしても良い状況にはならん
う」

「そういうこと」

「けど、あんなに怪しいのに手を出せないなんて……………」

「せめて、お尻にあるって言う火傷の痕を確認できたらいいんだけどね」

腕や足ならまだしも、場所が悪い。

「いつそのこと怒られるの覚悟でスカート捲りでもしてみる？」

「……………奴はスパッツを穿いている」

「スカートを捲ったところで火傷の痕は見えないよ」

こうなると、残る方法は一つだけ。

「……………確認するには女子風呂を覗くしかない」

「やっぱりそうなるんだね……………」

「でも、どうしようか？ 何か作戦を練らないとあの先生たちの警備を突破するのは難しそうだよ？」

「作戦とはいうが、あの場所はただの広い一本道じゃったから、正面突破しかないと思うぞい」

「あの通路だと、身を隠すのは不可能だからね……………」

遮蔽物は皆無。どうやっても見張りの先生に見つかってしまう。

「そうだな。作戦を立てる時間はないし、正面から向かっていくし

か方法は無いな」

珍しく雄二も賛同する。

午前中はあの騒ぎで午後は回復試験。

作戦のさの字も見えていなかった。

「だが、方法が無いわけでもない」

「え？ 作戦があるの？」

「作戦なんて立派なものじゃないがな。要するに正面突破を成功させればいいんだろう？」

「いや、それが難しいからこうして悩んでるんだけど……」

「正面突破しか方法が無いなら、成功させるだけの戦力をそろえる」
「運のいうとおりだ。質は向こうが上でも数で上回れば勝機はある」

分かりやすくいえば覗き仲間を増やすって事だ。

「それじゃ、すぐにでも話をしにいかないと、時間切れになっちゃうよ？」

「安心しろ。夕飯時に声は掛けてある。もうすぐ来るはずだ」

「坂本。俺たちに話って何だ？」

雄二が言うが早いか、部屋のドアが開けられ、Fクラスの皆がそろそろと入ってきた。

いつの間に話していたんだろうか。全く気がつかなかった。

「よく来てくれた。実は皆に提案がある」

雄二が良く通る声で話す。

『提案？』

『今度はなんだよ。正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえな』

全員がダラダラしている。

Fクラスの面々はもともと勉強が得意ではない上に、今日は一日勉強漬けたから無理も無いか。

「――皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『『詳しく聞かせろ』『』』

なんて無駄な団結力なんだ。

「昨夜俺たちは女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも教師達の妨害を受けた」

卑劣なのはどちらかというと僕たちのような気がするけど……。

『ふむふむ。それで？』

「そこで風呂の時間になったら女子風呂警備隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷アガルタの光景だ。どうだ？」

『『『乗った』『』』

なんて嫌な団結力なんだ……。

それはともかく、コレで仲間が増えた。

昨日の教師は三人。一クラス全体で攻めれば突破も不可能ではないだろう。

「ムツツリーニ、今の時間は？」

「……………二〇一〇時」

入浴開始から十分。今から向かってちょうどいい時間帯だろう。

「今から隊を五つに分けるぞ。A班は俺に。B班は明久、C班は秀吉、D班はムツツリーニ、E班は蓮にそれぞれ従ってくれ」

『『『了解つ！』『』』』

「いいかつ！俺たちの目的はただ一つ！理想郷への到達だ！
アガルタ

途中に何があるとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き進め！神魔必滅！見敵必殺！ここが我らが行く末の分水嶺と思え！」

『『『おおおつっ！』『』』』

「全員気合を入れる！Fクラス、出陣^でるぞ！」

『『『おつしやああーっ！』『』』』

一つの崇高な（邪な）目的のため、Fクラスは一つになった。

「西村先生、今日はもう彼らは来ないのではないですか？昨日あれだけ指導したのですし」

「布施先生。彼らを侮つてはいけません。彼らは生粋のバカです。あの程度で懲りるようであれば、今頃模範的生徒になっているはずですから」

「そうでしょうか？いくらなんでも、そこまでバカでは——あ、アレは！？」

——トトトトトト！

『おおおおおつ！障害は排除だーっ！』

『邪魔する奴は誰であれブチ殺せーっ！』

『サーチ&デース！』

「に、西村先生大変です！ 変態が編隊を組んでやってきました！」
「まさか、懲りるところか数を増やしてくるとは……っ！」

「吉井！ 木下率いるC班が布施と接触したぞ！」

「オーケー須川君。皆、秀吉がやりあっている間に一気に駆け抜けるよ！ 全員遅れないようにね！」

明久はそう叫んだ後、階段を駆け下り始めた。

もちろんFクラス全員がついていく。このくらいで遅れを取るようなやつじゃない。

「よ、吉井君！ 皆さん！ 待ちなさいっ！」

布施先生の横を通り過ぎるときに慌てた声が聞こえた。

もちろん無視して駆け抜ける。布施先生も最初こそ追ってきたけれど、ある程度したら悔しそうに秀吉たちの相手に戻った。

「あれ？ 諦めたのかな？ まだ追ってくると思ったんだけど」

「諦めたってよりは『干渉』を嫌ったんじゃないか？」

明久の疑問に答えたのは須川君だった。

「よし、秀吉の部隊が布施先生を取り囲んだぞ。僕たちはこのまま進む」

後ろでは、秀吉率いるC班が数に物を言わせて戦いを有利に進めて

いる。

首級を上げるのも時間の問題だろう。

「吉井、いけそうだな」

「そうだね。このままなら無事に辿りつけそうだね」

明久と須川君が頷きあいながら廊下を曲がる。

だが、その先に多数の人間の気配を感じる。

「そこまです、薄汚い豚共！ この先は男子禁制の場所！ おとなしく引き返しなさい！」

「し、清水さん！ あと、その他女子多数！？」

案の定、廊下を曲がった先には、清水さんを筆頭に女子の大部隊が展開されていた。

「吉井。数も質も、圧倒的にこちらが不利だ……！」

こちらはFクラス男子の五分の四。大して向こうは少なく見積もってもニクラス分の女子がいる。戦力差は圧倒的だ。結果は予想するまでも無い。

「清水さんお願いだ！ そこを退いて欲しい！」

「ダメです！ そうやってお姉さまのペッタンコを堪能しようなんて、神が許しても美春が許しません！」

「違うよ！ 僕の目的は美波のペッタンコなんかじゃないんだ！」

「嘘です！ お姉さまのペッタンコに興味がない男子なんているはずありません！」

明久っ！ 後ろ！ 後ろに鬼が！

「本当だよ！ ペッタンコは所詮ペッタンコなんだ！ 今の僕には美波の地平線のようなペッタンコよりも大事なことが右肘がねじ切れるように痛いっ！」

「黙って聞いてれば人の事をペッタンコペッタンコと……！」

島田さんが明久の右肘を本来ありえない角度で曲げている。

Dクラスの清水さんがいるなら、同じ後半組のFクラス女子の島田さんもいると考えるのが普通だと思うのだけれど……。

「忘れたの？ ウチと瑞希は後半組なのよ。——もつとも。前半組からも参加してくれている人がいるみたいだね」

島田さんはそういつて目線で廊下の奥を指す。

「やつほー、吉井君。何を見に来たのかな？ 僕を覗きに来てくれたんなら嬉しいんだけど」

「工藤さん！？ どうしてここにいるの？」

拙い状況だ。脅迫犯の疑いのある工藤さんがここにいると、……浮気は許さない』いざ女子風呂を覗いたとしても『翔子待て！ 落ち着けぎゃあああああぁぁぁっ！』犯人かどうかの確認が出来ない。これは完全に計算外だ！

「さあて。やっぱり昨日のあれだけじゃ懲りなかったみたいね」

「優子……っ！」

工藤さんに霧島さんだけじゃなく、優子まで出てきているなんて……。

「さあ、どうする？ 今すぐ抵抗をやめるなら少しは痛めつけるレ

ベルを下げてあげるわよ」

そういつて優子は召喚獣を呼び出す。

「どうせレベルを下げてたって生死の淵に追いやられそうだからね。それに僕たちもそう簡単に譲れないんだよっ！」

「そう。なら……覚悟しなさいっ！」

優子の声に合わせ、僕も召喚獣を呼び出そうとしたとき――

「全く、家畜にも劣る輩です。さつさと潰してあげましょう！」

清水さんの声が聞こえた。

『そうよ！ さつさと死になさい！』

『アンタ達なんてゴミよ！』

『同じ空気を吸っているだけで恥ずかしいわ！』

Fクラスをバカにする女子。

その台詞は……

お前なんてなあ、家畜以下のモルモットなんだよ！

役に立たねえならさつさと死ねよ！

ゴミクズが！ 話しかけんじゃねえ！

ゴミと一緒に空気吸ってると思うと吐き気がするぜ

遠い昔の、心の奥に沈めたはずの記憶を、浮かび上がらせた。

君はモルモットなんだ。ならばモルモットらしい振る舞いがある
だろう？

お前は人じゃない。実験動物だ！

ボクハ……モルモットじゃない、ニンゲンダ！

モルモットに幸せになる権利なんてない

シアワセニナルケンリガナイ？

ナラドウスル？

ウバエバイイ？

コワセバイイ

ゼンブ

コワシチャエ

「あら、急に大人しくなったのね。諦めたのかしら、蓮？」

コ
ワ
ス

ゼンブコワス

コ
ワ
ス

第四十六問 パンドラの箱は開けたら本当に拙いことになる。(後書き)

次回予告。

蓮「鮎川蓮です。次回予告を任されたので、さっさと進めちゃいます。

教師と女子軍に蹂躪されるFクラス男子。もはや戦局は詰んだと誰もが思ったそのとき、予想し得ないイレギュラーが現れる。

次回 第四十七問『Shout Of The Tragedy』
って、僕の台詞無いの!？」

作者より。

ちよつと次回予告を蓮にお願いしてみました。

そしてお知らせが。

このお話の最後から、ちよつとオリジナルのシリアスモードに入ります。

今までと違い、展開に苦慮する中で更新遅れが発生する可能性大です(汗)

出来れば、長い目で見守っていただくと嬉しいな……と。

それでは。

第四十七問 Shout Of The Tragedy(前書き)

やってしまった……OTZ

本当にやってしまった……OTZ

今回、遂に暴走しました作者ですOTZ

久しぶりの三人称に大苦戦。

文字数は今まで最高峰に少ない上、バカテストはおやすみです。

そして、色々とバカテストにあるまじき雰囲気になっている気が……

オリジナル展開開幕、そして作者完全暴走のお話です。

批判は受け付けますが、できれば優しく、そしてアドバイスもつけて下さると嬉しいです……。

それではどうぞ。

第四十七問 Shout Of The Tragedy

No Side

女子風呂に続くでの戦闘は女子の圧倒的な有利だった。

数でも質でもFクラス男子を圧倒的に上回り、戦況は完全に詰んだ。

「さて、そろそろ始めようか。ムツツリー二君？」

「……………わかつている」

抵抗できる力のあるものは戦いに身を投じた。

力の無いものは――

「気にするな！ 女子の召喚獣なんかじゃ俺たちは止められねえ！」

「あつ！ 待つんだ須川君！」

「教育的指導っ！」

「ぐふっ！」

――必死の抵抗むなしく倒れていく。

『て、鉄人だと！？』

『奴を生身で突破しないといけないのか！？』

『バカをいうな！ そんなの無理に決まってるだろ！？』

彼らの前に立ちはだかるのは、筋肉隆々の補習教師西村宗一。
その圧倒的な戦闘能力でFクラス男子を次々となぎ倒していく。

明久の叫びも蓮には届いていない。

「ううう……」

呻きながら顔を上げた彼の双瞳は血のような赤に染まっていた。

「蓮……」

優子の呟きが廊下に響く。

それほど今の廊下は静まり返っていた。

「まったく……豚の分際でうるさい奴ですね。豚は豚らしく――！」

「……キヒイ……」

更なる侮蔑の言葉を吐こうとした清水美春の身体が宙を舞った。天井近くまで舞い上がった清水美春が立っていた位置には、右手を振り上げた格好で狂ったような笑みを浮かべる鮎川蓮の姿が。

「きゃああああああっ！」

「清水さん！？」

「蓮！？」

清水美春の身体がドサリ、という音と共に床に叩きつけられた。

意識は無く、目立った外傷も無いが、蓮が吹き飛ばしたのは確実。突如として行われた暴挙に廊下は混乱状態に陥る。

しかし、この場にいる人間で、ただ一人、状況を理解して行動を起こしたものがいた。

「鮎川あ！ 貴様、女子生徒に暴力を振るうとは何事かあ！ お前

のような不屈き者は補習！」

生活指導の西村宗一、人呼んで鉄人である。

鉄人は、相手にしていたFクラス男子生徒をその場に放り投げ、蓮に己の拳を突き刺そうと走る。

十分な助走に、鉄人自身の体重、その人間離れた筋力が乗った拳が蓮に向かって放たれた。

「……………なっ！？」

誰もが蓮が倒れふすところを想像したが、結果は違っていた。

その場には鉄人渾身の鉄拳を右手一本で受け止めている男子生徒の姿があつた。

「嘘だろっ！？」

「鉄人の拳を受け止めやがつたぞ！？」

その拳の威力を身を持って知っているFクラス男子からは、驚愕の聲がこぼれる。

「鮎川……………貴様、自分が何をしたか分かっているのか？」

「……………キャハッ」

鉄人の問いに返されたのは先ほどと同じ狂った笑み。

次の瞬間、身長189cm、体重97kgの鉄人の身体が宙に舞つた。

『『『何いつ！？』『』』

Fクラスは一人の過不足なく、全員が驚きの声。
しかし、吹き飛ばされた鉄人は、空中で体勢を立て直す。

「むう……」

「……アヒヤッ！」

鉄人が着地する瞬間、凄まじい速度で蓮が踏み込み、突きを放った。

「ぐうつ……！」

鉄人は、腕を交差して蓮の一撃を受け止める。
が、勢いに負け、数m後ろに後退する。

蓮は、間髪いれずに鉄人の間合いへと踏み込み、二撃、三撃目を入れる。

鉄人はその全てを防御するが、顔にはだんだんと苦悶の表情が浮かび始める。

「教師を……舐めるなあっ！」

叫びと共に放たれた拳は、華奢な蓮の身体を簡単に宙に浮かせた。

「ふんっ！」

鉄人は、追撃に踏み込み突きを放つ。

しかし、蓮は空中で体勢を変え、突きを避けると、その腕に手をつけて跳躍。

鉄人を飛び越え、後ろに回った。

「ちいつ！ 貴様、その身体のどこにそんな力を——っ！？」

振り向いた鉄人が反応する前に、蓮は鉄人の懐に入っていた。
そのまま低い体勢から、上向きに掌底を打つ。

「ぐはあ！」

その一撃を鳩尾にまともに喰らい、鉄人の両足が床から離れる。
一瞬目を閉じた鉄人が再び目を開けたとき——蓮は鉄人の後ろにいた。

「……キヤハハアツ！！」

「ぬおっ！」

笑いながら鉄人の頭を後ろから鷲掴み、そのまま床に叩きつける。
ドオン、という音と、地響き。

召喚獣用に加工作れた床には輝が入り、叩きつけられた鉄人は沈黙した。

『鉄人！？』

『嘘でしょ……！？ 西村先生が……』

絶対的な強さを誇っていた鉄人が倒れ、驚きを隠せない面々。
しかし、コレだけの破壊をした蓮はまだ止まらない。

次なる標的は……Fクラスを罵倒した女子。

「ひっ……」

「あ……ああ……」

蓮の赤い瞳に射抜かれた女子は恐怖の表情を浮かべ、後ずさる。

鉄人が倒れた今、暴走する蓮を止めることができるものなど存在しない。

先ほどまで、勢いに乗り、Fクラスを罵倒していた女子が一転、ただ一人の男子生徒に怯え、声一つ上げることも叶わない。

蓮と女子生徒の距離は、一步、また一步と近づいていく。

彼らの距離は、そのまま女子生徒の無事が約束された距離。

彼らの距離がゼロになったその瞬間、圧倒的な暴力によって彼女達は捻じ伏せられる。

そして、後一步で女子生徒と蓮の距離がゼロになるそのときだった。

「……蓮……」

蓮と女子生徒の間に、優子が割って入った。

優子はそのまま蓮に近づき——そして、その華奢な身体を抱きしめた。

『木下さん!?!』

『危ないよ! 離れて!』

『姉上!?!』

回りは必死に優子を制止する。

しかし優子は腕に更なる力を込め、蓮の耳元で囁いた。

「大丈夫。蓮やFクラスの皆はゴミじゃないから……。それはアタシが良く知ってるから。だから……。怖がらなくても大丈夫だよ」

「ゆ……う……」……?？」

優子に抱きしめられている蓮の瞳に浮かぶのは、怒りと、ほんの少しの憎悪。

そして、恐怖。

次の瞬間、蓮の身体から力が抜けた。

優子に身体を預けるようにして倒れこみ、そのまま眠りに落ちる。

蓮の髪は徐々に色を取り戻していた。

第四十七問 Shout Of The Tragedy (後書き)

次回予告

優子「なんかオリジナル展開に入った途端、バカテスの本筋から外れまくっている気がするわね。まあ、良いわ。とりあえず今は任せられた次回予告をしましょう。」

皆が騒然となった二日目の夜が開け、文月学園二年生は、いつもの調子を取り戻していた。そんな中、目を覚ました蓮と明久たちは……。

次回、第四十八問『我を忘れた行動の後、自分がやった事を思い出して、恥ずかしさで死にたくなる。』

どうやら、アタシの出番は無いようね……」

作者の言い訳コーナー

今回色々とやってしまった作者です。

本当にすみません。この小説を書き始めたときから考えていた展開とはいえ、実際に書いてみると、あまりの重さに筆が全く進まない
(汗)

そして作中屈指のチートキャラ鉄人を倒してしまった蓮……。自分で書いておきながら、蓮がこの先どこへ行くのかわからなくなつてきます(汗)

今回はまたほのぼのというか、原作に近い雰囲気に戻せると思うの

で、どっぞお待ちを。

第四十八問 我を忘れた行動の後、自分がやった事を思い出して、恥ずかしさを

メリークリスマスです。

今年も何一つ予定の無いクリスマスがやってまいりました（涙）

作者の非リア充っぷりは置いておいて、第四十八問です。
どうぞ。

第四十八問 我を忘れた行動の後、自分がやった事を思い出して、恥ずかしさ

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強できたし、とても有意義な時間をすごせました』

教師のコメント

Aクラスと交流することで、姫路さんに得るものがあって何よりです。

今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくのも良いでしょう。

鮎川蓮の日誌

『今日の夜の記憶が無い。理由は分かっている。分かっているが、認めたくない。』

やはり僕は白鳥の群れに紛れたアヒルなのだろうか……』

教師のコメント

あまりに抽象的過ぎて、良く分かりませんが、鮎川君は悩んでいるようです。

悩みが深いならば、一度周りの人に相談してみてください。

先生でよければ、いつでも話を聴きましょう。

土屋康太の日誌

『前略 夜になって寝た』

教師のコメント

前略はそうやって使うものではありません。

吉井明久の日誌

『全略』

教師のコメント

あまりに豪快な手抜きに、一瞬言葉を失いました。

第四十八問 我を忘れた行動の後、自分がやった事を思い出して、恥ずかしさで死にたくなる。

「殴る！ コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」
僕は物騒な叫び声で目を覚ました。

見れば、明久が花瓶を持って、雄二に振り下ろさんとしている。

朝っぱらから何をやっているんだろう……？

ガチャッ

「おいお前ら！ 起床時間だ——ぞ……？」

「死ね雄二！ 死んで詫びるんだ！ あるいは法廷に出頭するんだ！」

「何だ！？ 朝からいきなり明久がキまっているぞ！？ 持病か！？」

「ええい落ち着くのじゃ明久！ 西村先生、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝っていただきたい！」

「……………！（コクコク）」

「……………お前らは朝から何をやっているんだ」

その後、鉄人が明久に鉄拳を食らわせ、明久の暴走は治まった。

「あ、蓮、起きてたんだ」

「にや！？ あ、うん。明久が雄二に花瓶を振りかざしているところから」

「起きてたんなら助けてくれ！？」

いや、だって明久が雄二を殺そうとするのは今に始まったことじゃないし。

逆もまた然り。

明久たちの様子はいつもと変わらないように見える。

昨日の夜、女子の軍団に囲まれたあたりから記憶が無い。補習で記憶が飛ぶほどの目にあっただんどうか……………？

「それでさ、蓮……………」

急に明久が、言いにくそうに僕に話しかける。

普段はあまり見ない光景だ。

「何？」

「その、昨日のあれは……………」

昨日のアレ？

えっと確か、清水さん達に囲まれて、皆が鉄人にボコられてたところくらいまでは覚えてるけど。

「はぁ……明久、お前じゃ話しにならない」

そういつて、雄二が明久を押しつけて前に出る。

「蓮……昨日のお前は普通じゃなかった。行動もそうだが、それ以上、髪の色が変わったんだ。何か心当たりはあるか？」
「！？」

髪の色が変わる。

もちろん心当たりはある。

忌々しい、二度と思い出したくないような記憶の中に。
知られたくない、僕の出生の中に。

「その顔だとあるみたいだな」

「……うん。僕、暴走しちゃったんだよね？ 怪我した人はいなかった？」

「ああ。鉄人と清水美春がお前に気絶させられたがな。特に目立つた傷は無かったそうだ。鉄人にいたっては、目を覚ました後俺たちに補習をしゃがったからな」

「そう……」

「言いにくいことなら今は聞かない。お前が話そうと思ったときでいい。いつでも聞いてやるから今は忘れろ」

「……ありがとう雄二」

僕の暴走を見て、理由を聞かないで、普通に接してくれた人は初めてだ。

皆の優しさに、ちょっと涙が出てきたけれど、それを押し殺す。

きつとまだ、泣いちゃいけないから。

「とりあえず、状況確認と作戦は飯を食いながらだ。早く行かないと、朝飯食いつぱぐれるぞ」

そういつて雄二たちは部屋を出て行く。

僕も後に続く。今は甘えよう。純粹に、皆の心遣いが嬉しかった。

「雄二、そういえば、昨夜妙なことを言われたよ」

「ん？ なんだ？」

なんとか朝食の時間に間に合い、いつもより急いで箸を進めていると、雄二の正面に座っている明久が口を開いた。

「工藤さんに、『まだ脱衣所に見つかっていないカメラが一台残っている』って」

「なんだと？」

「それは……」

明久の言葉に思わず箸が止まる。
その言葉が本当なら……。

「怪しいよね」

「いや、そうとは限らんじやる。工藤が犯人ならば、態々怪しまれるようなことを言うとは思えんぞ」

「うん。僕が犯人でもそんなことは言わない。黙っていれば明久たちに手がかりを与えることにはならないんだから」

「……………確認するしかない」

やっぱりそれしかないか。

だけど、今、圧倒的に情報が足りていない状況で、工藤さんの証言はありがたい。

「だが、工藤の情報はありがたいぞ」

「え？ カメラが残っているって事が？」

「ああ。それを工藤しか知らないって事は、そのカメラに女子の着替えが録画されている可能性が高い。それを手に入れたら、入浴していない女子の確認もできるからな」

「……………隠し場所なら五秒で見つける自信がある」

さ、流石ムツツリー二だ。

その手のことでムツツリー二に並ぶものはいない。

「けど、本当にそんなカメラがあるかどうかも怪しいよ？」

「いや、明久。それは早慶だと思うよ」

「ああ。蓮のいうとおりだ。そもそも、初日に女子にカメラが見つかったことがそもそもおかしいんだ。あんなに盗聴や盗撮に長けている犯人が、素人に見つかるような隠し方をするとは思えない。そうなる——」

「……………二段構え」

「そつだ。最初に見つかったカメラはカモフラージュだった可能性が高い」

「そして、ついでに僕たちに罪をなすりつけたって訳だ」
「用意周到じゃな」

一度カメラを見つけた以上、女子の警戒心は薄れる。
そうなれば本命のカメラが見つかる可能性は低くなる。

「けど、それならお風呂の時間を避けて、そのカメラを取りに行けばいいって事だね」

「……………それは無理」

「え？ 何で？」

「……………時間外だと、脱衣所は厳重に施錠されている」

初日のカメラ騒ぎと、その夜の僕たちの覗きの所為か。
ここまでやることなすことが裏目に出るとはね…………。

「結局今までどおりの方法を貫けて事か…………」

「そのようじゃな」

「最終的にはその方法に落ち着くんだね…………」

結局あの警備を突破して女子風呂までたどり着かないといけないうとに変わりは無い。

「そこで昨日の反省だ。明久、昨夜の敗因はなんだと思う？」

雄二が明久に話を振る。

僕は昨日のことはよく覚えていないんだけど。

「敗因？ うーん、向こうが女子の半分を防衛に回してきたことじゃないかな？」

教師陣に加えて、女子の半分。一日目と同じ防衛状況を想定した戦力では突破できない。

少なくとも、布施先生に競り勝っていたことから考えれば、教師陣だけなら昨日のメンバーでもなんとかあったはずだ。

「……………敵側には工藤愛子もいた」

ムツツリー二はその一点だけが悔しいようだ。

まあ、ムツツリー二のとりえは保健体育だけだから、しょうがないといえはしょうがないけど。

「そこで、こちらも更に戦力を増強しようと思う。Fクラスだけではなく、他のクラスも味方につけて向こうに対抗するんだ」
なるほど。そちらの目的もあったのか。

流石雄二、アフターケアもばっちりだね。

「む？ 明久、どうしたのじゃ？」

「うゝん。なんというか、この作戦がいつものやり方と違う感じがしてなんだか……。ほら、向こうの戦力が大きいからって、こっちの戦力を増やすって言うのが、僕たちらしくない気がする」

どうやら明久も雄二の作戦の違和感には気がついたようだ。
試召戦争に、召喚大会と戦力差をもつてもしない雄二の策に触れてきたんだ。

ここにきて戦力の増強、何て手を使うのは違和感があるだろう。

「ほう……。明久も頭が回るようになってきたな。その通り。このやり方の目的は正面突破だけじゃない」

「んで、他の目的って何？」

「僕らの保身。だよな、雄二？」

「ああ」

「僕らの身を守る？ 誰から？」

「強いて言えば学校から、かな」

「学校から？」

「いいか？ 今のところは成功していないから大きな問題にはなっていないが、覗きは立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風呂に到達したとしても、例の真犯人が見つからない限り、俺たちは処分を受けることになる」

覗きをむぎむぎ見逃すほど、法治国家日本は甘くない。

しかも、風呂場の位置関係から、こちらの手段は正面突破に限られる。

つまり、バレずに覗く、何て真似は不可能だ。

つまり――

「僕たちが処分を受けないようにするための手段が戦力の増強、というよりはメンバーの増員だね」

「増員が処分を逃れる手段になるって？」

「ああ。人数を増やせば、覗き犯の特定は難しくなる。向こうだって戦いながら全員の顔を覚えるなんて事は出来ないだろうからな」
「じゃが、ワシらは既に面が割れておるぞ」

秀吉の弁。確かに僕たちは言い逃れが出来ないところまできている。僕にいたっては暴走& a m p ; 暴行の罪が上乘せされる。

「文月学園は世間から注目を浴びている試験校だからな。不祥事はきつちり全員処分するか、ひた隠しにするかのどちらかだ」

「もし面が割れている僕たちFクラスメンバーだけを処分した日には、ただでさえ世間から批判の声が出ている『クラス間の扱いの差』についてマイナス要因が増えるだけだからね」

「えっと……？」

「補足説明すると、僕たちだけが処分を受けると、世間の人からは、

『成績の悪い生徒だけが処分を受けて、成績の良い優等生達は処分を免れた』という風に見える。そうなれば、文月学園への風当たりは強くなるばかりって事」

ただでさえ、画期的なシステムで注目を浴びているんだ。

そんな明らかなバッシングの元は排除したいに決まっている。

「なるほど。流石雄二。汚いことを考えさせたら右に出るものはいないね」

「知略に富んでいると言え」

「流石雄二だよ。いろんな意味で」

「いろんな意味……」

他人を躊躇無くスケープゴートに使うところとか。

「ふむ。ならば今日は協力者の確保を主軸に行動するというわけじゃない？」

「ああ。幸い合同学習は殆ど自習みたいなものだからな。動きはとりやすいだろう」

「そうだね。じゃあ、まずは何処から行く？」

他のクラスへの接触か……

「当然Aクラスからだ。同じ手間なら能力が高いほうがいいからな」

「Aクラスならば昨日の合同学習で交流もあるしのう。話もしやすいじゃろうて」

「決まりだな。合同学習に時間にAクラスと話をするぞ」

「了解。ムツツリー二もそれでいいよね？」

「……………問題ない」

「雄二、明久」

これ以上、迷ってられない。
早めに告げておこう。

「なんだ、蓮？」

「僕は……………この騒ぎからは降りるよ」
「えー!？」

昨日あんなことになった以上、僕がいけないほうが雄二たちも動きやすいだろうし、僕自身まだ気持ちの整理がしていない。

「どうしてさ！ 蓮！」

「……………」

「…………俺達は昨日のことは気にしていないぞ？」

「…………違うんだ。皆がどう思つかじゃなくて…………僕自身が、その…………」

きつと女子生徒からは距離をとられるだろうし、話を聞いた男子からもどんな目で見られるか分からない。

嫌われるのは慣れているけれど、せめて雄二たちに迷惑はかけたくない。

「…………分かった」

「ちよつと、雄二!？」

「明久、少しは蓮の気持ちも察してやれ」

「…………ごめん、蓮」

「うっん。僕のほうこそ、こんなところで止めるなんていってごめんね」

僕以外のメンバーは覗きのために動き出す。

第四十八問 我を忘れた行動の後、自分がやった事を思い出して、恥ずかしさ

次回予告

明久「えっと、今回は僕が次回予告をするようです。

決戦の夜が来た。猛る者と悩む者。彼らが辿る道は……

第四十九問『作戦から脱落するのはいつだって辛いものだ。』」

雄二「おお、よく台詞覚えていたな。バカの癖にやるじゃないか」

明久「何だと雄二ー!!」

蓮「あ、あはは……。次回もお楽しみに」

作者の言い訳コーナー

どうして明るい話を書けないんだOTZ

まさか、作者の現実が暗いからか!?

リア充からほど遠い作者の戯言でした。

p s . 今回の日誌。蓮の喩えは間違えていませんからね。

第四十九問 作戦から脱落するのはいつだって辛いものだ。(前書き)

クリスマス、どうでしたか？

作者は例年通りの一人クリスマスでした(泣)

モテナイ作者は置いていて、第四十九問です。どうぞ！

第四十九問 作戦から脱落するのはいつだって辛いものだ。

バカテスト国語

問『「どんな人でも美しく飾れば立派に見えること」を現す諺を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『馬子にも衣装』

教師のコメント

正解です。馬子とは馬を引く仕事をする貧しい子供のことを言います。

吉井明久の答え

『雄二にも衣装』

坂本雄二の答え

『明久にも衣装』

教師のコメント

態々こんなところで息を合わせなくても……。

鮎川蓮の答え

『学園長にもドレス』

教師、吉井明久、坂本雄二のコメント

気持ち悪いもの想像させるな……！！

学園長のコメント

気持ち悪いとは失礼さね！！！！

第四十九問 作戦から脱落するのはいつだって辛いものだ。

「Aクラスなら、久保を説得するのが妥当だな」

朝食の時間が終わり、Aクラスとの合同学習の時間がやってきた。
今日の行動軸は、他のクラスとの接触。

そのために僕は作戦から降りたつもりだったんだけど。

『とりあえず、他のクラスとの接触にはついて来てくれ』

『何故！？ 僕は皆から避けられるはずだよ！？』

『脅しの道具になるし、お前が変わっていないことのアピールにもなるんじゃないか？』

結局、召喚獣を使った実際の戦闘には関らないけれど、他クラスとの交渉には協力することになってしまった。

ま、まあ、鉄人を腕力で沈めた人間がバックにいたら交渉も有利に進められるだろうけど。

「うむ。久保が相手ならば明久が適任じゃな」

「……………頼んだ」

Aクラス男子の筆頭格、久保君への交渉役は、満場一致で明久に決まった。

「あ、うん。別にいいけど、どうして僕なの？」

「……………」

明久、世の中には知らないほうがいい事が沢山あるんだよ。そう、多すぎる。

「あ、あのさ。なんだか凄く嫌な感じがするんだけど、本当に大丈夫だね？」

「そ、そうじゃな。一応、久保はお主に悪意は抱いておらんと断言できる」

「……………彼に悪気は無い」

「むしろ好かれているといってもいい……………」

「三人とも、どうしてそんな奥歯に物が挟まったような言い方をするの？」

もう一度言おう。

この世の中には、知らないほうが良い事が沢山あるんだ。

「明久、早く行って来い」

「え？ でも……………」

「安心しろ。少なくともこのメンバーの中では、お前が一番久保に好かれている」

「あ、うん」

雄二の説得で明久も了承したようだ。

「……ただし、危なくなったらコレを使え」

雄二が明久のポケットに何かを押し込んだ。
明久がそれを取り出している。

スタンガン（二十万ボルト）

流石文月学園。

同級生と話をしに行くだけなのにスタンガンが必要だとは。

「そ。それじゃあ、行ってくるね」

スタンガンの衝撃に、少し顔を引きつらせながら、明久は交渉に向かった。

「ただいま」

「明久、どうだった？」

「ごめん。失敗だったよ」

「そうか。まあ、無事でよかった」

「いや、特に危険なことはしていないんだけど」

明久の交渉は失敗に終わったようだ。

何はともあれ、明久の身に何も無くてよかった。

「しかし、そうなると他クラスとの交渉を迅速に進める必要があるな」

「それはそうだけど、今は一応授業中だよ？」

自習、という形がとられているが、監視の先生もいるし、僕たちFクラスは目をつけられているのでこうやって話すのにも注意が必要だ。

僕に至っては昨夜の事があるから監視の先生の目が鋭い。

「鉄人やこの部屋の人間の注意を引くためには、僕が囷になるのが手っ取り早いね」

昨日大変なことをやらかしたんだから、教師としては僕を野放しにはしたくないだろう。

「だが、どうするんだ？ 俺たちを監視しているのは鉄人だぞ？」

「昨日僕が倒したのも鉄人だよ」

座布団から立って部屋の出入り口、それも鉄人がいるほうの出入り

口に歩く。
自らのほうに向かってくるからなのか、鉄人の重心がわずかに下がった。

鉄人や他の教師人だけじゃなく、生徒達——特にAクラス女子——からも僕に視線が集まる。思ったよりきつい。

「……どうしたんだ、鮎川？」

「ちょっとお手洗いに行こうかと思って」

「……」

一体僕がどんなことを言い出すと思ったのだろうか。
鉄人が無言になる。

「……まあ、いいだろう。授業中だからな。寄り道をせずに速やかに行ってください」

「はい」

鉄人のそばを通って廊下に出る。
ここで僕の役目は終わり。

明久たちは、部屋の人間の注意が僕に移った隙について鉄人とは逆のほうから抜け出しているはずだ。

トイレまで行って、しばらく時間を潰してから帰ると、部屋の中に明久たちの姿は無かった。

「……蓮……」

コップを持ってたっている優子と鉢合わせ。
さっきからしきりに口をパクパクさせている。

「どしたの？」

「ふえ？ え、えつと……」

こうして優子と何気ない会話をしているつもりなのだが、周囲からは僕たちに視線が向けられている。

特に女子の視線は鋭く、視線に物理干渉能力があれば、紙くらいには穴が開くんじゃないか、というくらい力が込められている。

「昨日、さ……」

予想はしていたけれど、優子が話そうとしているのは昨日のこと。僕自身は覚えていないけれど、昨日、暴走した僕を止めたのは優子だったらしい。

そのときに抱きしめられたらしい、というのは嫉妬を込めた視線を向けてきたムツツリー二の弁。

「ん？」

「……あつ……な、なんでもない！」

はつとしたように周囲を見回した後、優子は足早に去っていった。多分、周囲から発せられる視線に気づいたんだろう。

それに昨日のことは、こんなに人の多いところで話す内容じゃない。話せばきつと、僕の過去の話になる。

そんなものをこんな大勢に聞かせるわけにはいかない。

コインの裏に存在するのは僕だけなんだ

結局、優子意外は僕に話しかけない。というか、僕に近づかないようにしているように見えた。

終始視線に曝されて、正直勉強どころではなかった自習時間を終え、恒例の出撃前ブリーフィング。

「結局、手を貸してくれたのはD、Eクラスだけじゃったな」

「仕方ないだろう。Bクラスは代表が代表だけにまとまりが無いし、Cクラスは代表が小山だからな。男子連中がしり込みするのも無理は無い」

「けど、D、Eクラスだけでも参加してくれるなら、昨日よりも大分状況は良くなったよね」

「まあそうじゃな。向こうも入浴中は最大でも半数しか防衛に回せんからのう」

「Dクラスか……」

昨日僕が伸してしまった清水さんもDクラスだったはずだ。

別に彼女本人に対してどうこうという感情は無いけれど、クラスメイトが暴行されたら憤るものだろう。特に文月学園はクラス内の絆が深くなりやすいし。

「でも、ここまで大きな騒ぎにすると、女子の入浴自体が中止になつたりしないのかな？」

「いや、それはない」

明久の言葉に、僕と雄二の返答が重なる。

「どうして？」

「教師陣にもプライドがあるだろうからな」

「『男子の覗きを防げないかもしれないから入浴は控えてください』なんて言えないでしょ」

「あ、そっか」

明久は納得したようだ。

もちろん、召喚獣を使った防衛線を生徒に抜かれるわけには行かないのだから、入浴が中止になる可能性は限りなく低い。

「あとこれは憶測だが……教師たちは今回の騒ぎを好ましく思っている可能性がある。蓮のことを除いてな」

雄二、それは思っても言わないのがマナーってmondだよ。

「え？ 僕らの覗きを？」

ほら。明久はスルーしてるし。

「ああ。あくまでこの合宿は『学習意欲の向上』が目的だからな。目的が何であれ、召喚獣を使った勝負をする以上勉強せざるを得なくなる。女子側も同様だ。防衛には召喚獣が不可欠だからな」
「なるほど。だから僕は身柄を拘束されたりしないんだね」

物理干渉できる教師の召喚獣がいる以上、覗く側も覗かれる側も召

喚獣の勝負で白黒つける必要がある。そのために皆必死で勉強するだろう。

「さてムツツリーニ。作戦開始時間と集合場所は両クラスに通達してきたか？」

「……………問題ない」

さつき雄二に聞いたところ、作戦開始時刻は二〇一〇時。前半組みが脱衣を終えたあたりを狙うらしい。

D・Eクラスの参加で覗く男子側の人数は百人近くになり、昨日の様な完全なワンサイドゲームにはならないはずだ。

僕は参加しないけど。

「吉井っ！ 大変だ！」

突如としてドアが開かれ、血相を変えた須川君が部屋に入ってきた。

「須川君、どうしたの？ 作戦開始時刻まではまだ少しあるはずだけど」

「やられた！ 大食堂に敵が待ち伏せしていたんだ！ 今は戦力が各階に分断されて散り散りになっている！」

「なんだって！？」

……………女子が先手を打ってきた？

他クラスに接触したのは明久たちだけ。それも隠密行動だったから女子にこちらの動きが漏れることは無い。

「……………情報が漏れるようなことはない」

ムツツリー二も否定している。
と、なると――

「こっちの考えを読まれていたか……！」

「霧島さんだね」

「よほど雄二の覗きが許せないんだね」

霧島さんなら雄二の考えていることなど手に取るようにわかるだろう。

これでこちらのアドバンテージは無くなったか。

「……………迷っている時間はない」

「雄二、どうする！？」

「ここで体勢を立て直すしかない！」

そう言っただけ雄二は僕のほうを見てくる。

この状況なら、戦力は一人でも多いほうがいいんだろって……

僕はゆっくりと首を横に振る。

「……………分かった。とにかく迷っている時間はない！ 出るぞ！」

「……………了解！」

僕はただ、戦場に出て行く五人の背中を見ていた。

『このスケベ共！ 大人しくお縄につきなさい！』

『覗きなんてさせないからね！』

『くそおつ！ どうしてこんなところに女子が！？』
『知るか！ とにかく応戦しろ！』

廊下から戦闘の音が聞こえる。

状況は明らかに男子側の圧倒的な不利。

皆、目的のために必死になっている。そんなときに僕は……。

特に思い出そうとしたわけでもないのに、文月学園に転校してから
のことが頭の中に浮かんできた。

最初、Fクラスの異様な雰囲気と常軌を逸した行動に度肝を抜かれ
た。

成績最下位のFクラスの一員として、上位クラスとの試召戦争を戦
った。

Aクラスには後一步届かなかったけれど、全力を出した結果だ。後
悔はない。

清涼祭では、姫路さんの転校を阻止するつもりが、いつの間にか文
月学園の存亡をかけた問題に巻き込まれていた。

優子たちが誘拐されたときは心臓が止まるかと思った。

召喚大会は、後一步のところまで準優勝だったけれど、一生懸命にな
ることは楽しかった。

明久宛のラブレター一枚で明久が生死の境を彷徨ったこともあった。

雄二と霧島さんの仲を応援するために如月グランドパークにも行っ

たし、
皆で騒いだプールは楽しくて、時間なんて忘れていた。

強化合宿の最初は、明久の相談からだった。

なんとなく皆でもお泊り、なんてことで浮かれていた合宿で覗きの
ために奔走することになるとは思わなかった。

けれど、Fクラスに入って、バカ達と一緒にになって、バカになって
騒ぐことは思ったより楽しくて、いつの間にかFクラスを受け入れて
いた。

こんなにも楽しい時間が続いたのは初めてだった。

けれど、きっとこの幸せは続かない。

続かないと分かっていたのに、この幸せを失うのが怖い。

「……らしくないな」

らしくない。失うことには慣れていたはずなのに、こんなにも恐れ
ている。

「……蓮」

「!？」

名前を呼ばれたと思ったら、ドアを開けて誰かが入ってきた。

「……優子……」

入ってきた人物は、今僕が一番会いたくて、一番会いたくない人だった。

第四十九問 作戦から脱落するのはいつだって辛いものだ。（後書き）

次回予告。

今回は次回予告は簡潔に行きたいと思います。

次回 第五十問「A black monologue, white darkness」

蓮の過去が見える！（予定です）

第五十問

A b l a c k m o n o l o g u e , w h i t e d a r k n e s s

ザ 超展開。

そしてシリアス。

解りました。僕が過去話を書くとき全部シリアス系になります。
実力が……圧倒的に不足しているっ！

失礼。

それでは節目の五十問目をどうぞ。

批判はお手柔らかに。感想もいただけると嬉しいです。

「……蓮」

「……優子………」

ドアを開けて部屋に入ってきたのは優子だった。

昼間の自習時間も、僕に話しかけてから、話を聞きたがっているとは思っていた。

部屋まで押しかけてくるとは思わなかったけれど。

「……優子、何やってるのさ。女子が簡単に男子の部屋に着ちゃダメでしょ？ 特に今は僕たち女子風呂を覗こうとしてるんだよ。だから帰って——」

「蓮！」

「……なんだよ」

つい辛辣な声が出てしまう。

イライラしているんだ。そのイライラを優子にぶつけてしまう自分が嫌だ。

「蓮………昨日の——」

「——っ!——」

ダッ!

気がつけば僕は駆け出そうとしていた。

昨日のこと、髪の色が変わったこと。知られたくない。
知られたら皆離れていく。

イヤダ……

マダハナレタクナイ……

ミンナトイツシヨニタイ……

頭の中がぐちゃぐちゃで、自分でも何を考えているのか分からない。
けれど、話しちゃいけない、話せない、嫌われたくないっ!!

ガシッ

走り出そうとした僕の右腕を優子の右手が掴んでいた。
振り切るのは簡単だ。

けれど、どうしてもその手を振り切ることが出来なかった。
振り切ってしまったら、僕と優子の関係も切れてしまいそうだった。

「蓮……」

優子が声を掛けてくる。きっと話せといわれるんだ。

僕は――

「話したくないなら、話さなくていいから。だけど、苦しいときは
アタシや皆を頼ってよ。アタシは、何があっても蓮の味方だから」
「っ……」

掛かる言葉は僕の恐れていた言葉じゃなかった。

優しい声で、安心を感じる。けれど、声の中には確かな意思がある。
『味方』この言葉に魅力を感じる。

ふと振り返ると、優子は僕に微笑みかけていた。

「……っ」

その顔はとても綺麗で――

「……ズルイよ……」

とても愛おしくて――

「そんな顔されたら………失いたくないって思っちゃうじゃないか……」

――絶対に失いたくない、そう強く思った。

目から涙がこぼれる。

そんなことはどうでもいい。ただ、目の前の笑顔を見ていたい。愛しいその笑顔を失いたくない。

愛しいその笑顔を――仮面を外して見ていたい

話そう。僕の闇を。

受け入れてくれるか分からない、いや、きっと拒絶されるだろう。それでも、優子に嘘はつけない。

壁を壊そう。仮面を外そう。皆には………本当の僕を知ってもらおう――

「優子、話すよ――僕の闇（過去）を」

今、部屋の中には僕と優子の二人きり。

外の覗き騒ぎの喧騒から切り離され、静寂が支配する空間。

ふさわしい。そう思った。

闇の話には、静か過ぎるくらいがちょうどいい。

僕は口を開く。優子に真実を語るため。そして、自分自身と向き合うため。

「最初に言うね。僕は——普通の人間じゃない」

「え？ 何言って……そうね。蓮は普通の人間じゃないわね」

「違うんだ。ちよつと勉強が出来るとか、ちよつと運動が得意とか、そんな話じゃないんだ。僕は、優子たちとは根本的に生まれが違うんだよ」

「……………どういうこと？」

「僕はね……俗にいう『試験管ベビー』って奴なんだよ」

「え……？」

試験管ベビーといっても、愛に囲まれて生まれる人もいる。けれど、僕はそうじゃない。いや、その対極だ。

「米軍による遺伝子強化、操作実験の試験体。戦うためだけに生み

出された『生物兵器』、それが……僕だ」
「……………」

「受精卵の状態からミクロ単位の手操作を受けて、遺伝子レベルで改造された。

生まれた後も、実験、データ収集の名目で身体を弄られ続けた。実験を受けてないときも基地の隊員の憂さ晴らしに殴られたり、強度を測るという名目で拷問にかけられたりもした」

「そんな……………」

信じられない、という顔で優子が見ている。

僕が逆の立場なら、きっと僕も同じような反応をするだろう。

「そんなの……そんなのって……………」

「研究所から一步も出れなかったから、正しい日時は分からないけれど、多分僕が五歳のときだと思う。昨日と同じようなことがあったんだ」

「え……………」

「研究所の人は僕を人としてみてくれなかった。きっと僕をモルモットみたいな実験動物と同じように考えていたんだと思う。でもさ、『お前は人間じゃない』って、初めて面と向かって言われて、その意味が分かってくるにつれて頭が真っ白になって、気がついてたラベッドに縛られてた。後から聞いたって言うか、説教されたんだけど、気が狂ったかのように叫びながら完全武装の兵士数十人に重傷を負わせてしまったらしい」

「……………」

「その後、僕はまた改造された。どんなことをされたのかはよく分からないけど、昨日みたいに暴走するときは、髪と瞳と色素が抜けるような身体にされたらしい」

「昨日の、あれは……」

「そう。清水さんと女子の言葉で、昔の事思い出してさ」

辛かった。人間としていきられなかったあのころ。

あのときの僕を見る周りの目が嫌で、思い出すたびに全部壊したくなる。

「多分地獄のような日々だったんだと思う。けどそれも10年前に終わったんだ」

「え？」

「なんかさ、急にお偉いさんが『そんな非人道的な実験は中止しろ』なんて言ってきたんだって。どうせなら、始まる前に言ってくれば良かったのに」

「……」

「そしてさ、僕は母さんのところに帰れたんだ」

「お、母さん……？」

みさと

「鮎川美里。僕の卵子提供者。僕の唯一の家族だった」

「だった……？」

「死んだんだ。病気で。たった二年しか一緒にいられなくて、親戚も、僕のことを『得体の知れない化け物』って。誰も引き取ってくれなかった。だから、今も一人で暮らしてる」

「今は落ち着いているけれど、昔はよく暴走してたんだ。」

だから周りの人を怖がらせることも多かったし、だいたいその後は化け物扱いされて、引越すことになって。身体が弱かった母さんは辛かったみたいで。

葬式のときにさ、『お前がいなければ』って。『お前みたいな化け物が美里を殺したんだろう！』って」

「そんなのって！」

「うっん。正しいよ」

「え？」

「正しいんだよ。親戚は。僕は人間じゃない。普通人間とは遺伝子レベルで違う。」

人の形をした何か、なんだ。だから……さよなら」

もう話すことは話した。僕の過去。僕の闇。

誰にも知られたくなかった白い闇。

僕はここにいる資格はない。

人じゃないから。皆と違うから。だから……さよなら。

「蓮っ！」

優子が僕を呼んで、そして――抱きしめられた。

「！？ 優子……？」

「そんな悲しいこと言わないでよ！ さよならなんて言わないでよ！」

泣いてる。僕が泣かせたのか……。

「僕は人間じゃないから、だから皆と一緒にいちゃいけないんだ」
「違うっ！」

普段の優子からは想像できないような叫び声。

「アタシは蓮を人間じゃない、なんて思ってない。蓮が自分のことをどう思っているかも、蓮は創られた存在じゃない。研究者が生み出した兵器じゃない。」

今、アタシが抱きしめてるのは、鮎川蓮って言う名前の、一人の男の子だよ……」

時が止まった気がした。

自分は人と違うんだ。人間じゃないんだ。そう思うことで逃げていた。

心を守るために今まで逃げ続けていた。

けれど、優子の言葉は、僕の中の奥深くに閉まっていた心に響いて。どうしようもないほど心が震えていた。

嬉しい。こんな僕を受け入れてもらえた。

それだけで、いままでの16年が報われた。そんな気がした。

「……っ……優子……ううう……」

気がつけば優子にしがみついて、泣いていた。嗚咽をかみ殺しながら、静かに。幸せをかみ締めながら。

優子はそんな僕を黙って抱きしめてくれた。

第五十問 A b l a c k m o n o l o g u e , w h i t e d a r k n e s s

次回予告

蓮「鮎川蓮です。今回は僕の生い立ちの話だったね。

我ながら恥ずかしいことを……／／／

と、とにかくっ！ 次回予告に行きます！

明久たちが帰還した。

圧倒的な敵戦力に打ち勝つ為、雄二はある作戦を発動させる……。

次回。第五十一問『逆境のときこそ冷静になれ、なんて言うけれどそれが出来れば最初から誰も苦労はしない。』

次回もお楽しみに！」

作者の言い訳コーナー

蓮の過去をやっとかけました。

重い……。自分で考えて、自分で書いておきながらメチャクチャ重
い……。

そして表現できてない……

偏に作者の技量不足です。分かってるよっ！

今回は、今回の続きからです。

ちゃんとギャグも入れますから。ちゃんと明るくするからあっ！（
爆）

次回も見えていただけると嬉しいです。

感想をいただけるともっと嬉しいです。

それでは。

第五十一問 逆境のときこそ冷静になれ、なんて言うけれどそれが出来れば最初

バカテスト古典

問『次の和歌の空欄を埋めなさい。

いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重に（ ）かな』

姫路瑞希の答え

『いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重に（匂ひぬる）かな』

教師のコメント

正解です。この和歌は伊勢大輔という女性が詠った物です。
春の歌として有名なので、覚えておきましょう。

鮎川蓮の答え

『いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重に（切り倒す）かな』

吉井明久の答え

『いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重に（切り倒そう）かな』

教師のコメント

二人揃って献上品の桜に何をしようとしているのですか!?

島田美波の答え

『いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重に（蹴り倒そう）かな』

教師のコメント

蹴って倒れるようなものではありません。

吉井明久のコメント

美波ならやりかねない……。

第五十一問 逆境のときこそ冷静になれ、なんて言うけれどそれが出来れば最初から誰も苦労はしない。

あの後、どれくらい泣いていたのかは分からないけど、僕が泣き止んだら優子はすぐに部屋を出て行った。顔を真っ赤にして。

僕も今部屋で悶えているところだ。

「優子にあんなことしてしまうなんて……恥ずか死ぬ…… / / /」

まさか抱きついたらまま、泣き続けるなんて……。

ガチャ

少し壊れかけていたところに、明久たちが帰ってきた。

「どうだった？」

「……」

聞くまでもないようだ。三人は口から魂が出ているように見える。

「明久、雄二、秀吉、ムツツリー二。話しておきたいことがあるんだ」

話そう。さっき決めた。

明久たちにも僕のことを知っておいて欲しい。

僕は話した。優子に話したように。

生い立ちも、今まで過ごしてきた人生も、拒絶される恐怖も、包み隠さず。

「……以上が、僕の生い立ち」

「……」

暫しの沈黙。

「……で？」

四人の反応は思いのほかあっさりしていた。

「で？ ってどういうことだよ！？ 僕は勇気を振り絞って話したのに！」

「お前がどういう目的で創られて、どういう人生を歩んできたのかは知らないけどな。」

少なくとも、ここにいるのは俺にとっては普通の人間だ。ちょっと身体能力が人間離れしてるけどな」

雄二はニヤツと笑っている。

「蓮は蓮だよ。ちょっと不器用で、いつも優しい。大切なバカ友達

さ」

明久はにっこりと微笑んでいる。

「……………そんなこと気にするな」

ムツツリーニは表情こそあまり変えないが、口元は緩んでいるし、声も優しい。

「お主が人間ではなかったら、姉上の立場が無いではないか……」
秀吉が何か言っていたようだけど、よく聞こえなかった。

「さて、蓮の話は終わりだな？」

「え？ うん。今日皆はどうだったの？」

四人が目を逸らした。

「……………まさか高橋女子まで参加してくるとはな」

「あの人、もう反則的なまでの強さだったよ……………」

どうやら、上手く行かなかった理由は、高橋女史の参戦らしい。

「じゃがどうする？ このままではお主らは脅迫犯の影に怯え、且つ覗き犯という不名誉な称号を掲げられてしまうぞい」

そうやって懸念を表明する秀吉は他の三人と違って傷が見当たらない。

おそらく無罪放免だったのだろうけど……………。

「勿論諦める気は毛頭ない。残るチャンスは明日だけだが、逆に言えばまだ明日が残っているんだからな」

明日は四日目。いよいよ合宿の最終日だ。
五日目は帰るだけの日程だから、覗きのチャンスは明日が最後ということになる。

「そうだね。圧倒的な戦力差だったけど、そんなのは僕らにとってはいつものことだし。こういった逆境を覆す力こそが僕らの真骨頂だよ！」

教師陣が賛成している以上、こちら側との戦力差は圧倒的なはず。それでも明久の言葉には絶望、何て色は全く見えない。
いままで、これ以上の戦力差で戦ったことなんて日常茶飯事だったんだ。

「……………このまま引き下がれない」
「こんなこと、Fクラスになってからは慣れっこじゃ」

ムツリーニと秀吉も同調する。
きっとFクラスのほかの人たちも同じ気持ちだろう。

「そうか。お前たちが諦めていないなら、まだ手は残されている」
「流石は雄二！ 何か考えがあるんだね！」
「当然だ。俺を誰だと思っている？」

雄二が悪い笑みを浮かべる。
この顔は、試召戦争、召喚大会でも見せた逆境を跳ね返すときの顔だ。

「それで、今回はどんな作戦で行くの？」
「正面突破だ」

「明久、そんな絶望した表情になるのはまだ早いと思うよ？」

「そうだ。最後まで話を聞け。正面突破の基本スタンスは変えないが、その分事前準備で考えがある」

「正面突破を続行するって事は、こっちの戦力を更に増やすって事？」

「そうだ。向こうの戦力はもう頭打ちだ。アレ以上は戦力を増やせない。口惜しいことに今日は負けたが、向こうの戦力を知ることが出来た。これは大きいぞ」

「……………他クラスでの目撃情報も集めた」

どうやら情報収集は万全なようだ。

もともと、教師中心の布陣という時点で、いくつかの弱点があるんだけど。

「向こうは教師中心の防御主体の布陣だが、色々と弱点がある。それがなんだか分かるか？」

「微塵も分からないね」

「チヨキの正しい使い方を教えてやる」

「ふぎやあつ！ 目が、目があつ！」

雄二の指が明久の目に突っ込まれる。

流石は雄二。いつも霧島さんに喰らっているだけあって、キレ、正確さ申し分ない。

「教師中心の布陣っていうことは、『干渉』が起こる可能性があるって事だよ」

「蓮のいうとおりだ。科目の違う教師フィールド同士が接触すると、両方のフィールドが打ち消されるんだ。だから――」

「要するに、教師はよほど開けた場所でなければ複数人を配置できない、ということじゃろ？」

「そういうことだ」

召喚獣がなければ、男子高校生を止める術はない。
ならば教師は『干渉』を万が一にも起こさない布陣を敷いてくる。

「その干渉と、ムツツリー二が調べてくれた情報を基に考えると、
明日の相手側の布陣は大体こんな感じになると予想できる」

雄二がテーブルの上に紙を引いて布陣の予想図を書き込んでいく。

「あれ？ 高橋先生は今日とは違う場所になるの？」

「確実に、というわけではないが、俺が向こうの立場ならそうする。
必ず通らなければいけない場所に主力を配置するのは定石だからな」

雄二の予想では、高橋先生の配置は地下への階段前。

女子風呂へ行くためには、その階段を通るしかないから、そこに主力をおくのは当たり前だ。

「そんなら、どうして今日もそうしてこなかったのかな？」

「多分、圧倒的な戦力差を見せて戦意を挫きたかったんじゃない？
Fクラスはともかく、他のクラスには結構効くかも知れないし」

「ああ。俺たちの進路はある程度予想できていたみたいだしな」

「ふむ。確かにあの点数は圧巻じゃったのう」

一体どんな点数だったんだろう？

「それにしても、こうしてみると結構苦しい勝負だね。鉄人と大
島先生（保健体育教師）、高橋先生（学年主任）の前は絶対通らな
いといけないし」

「それに加えてこちらの戦力はD・E・Fクラスの男子のみ。それ

に大島先生は僕対策としても有効だしね……」

保健体育だと、教師どころかFクラス相手にも劣る僕だ。
大島先生の突破は難しい。

「ああ。そこでだ。俺たちの勝利のためにはどうしてもある奴を無傷で鉄人の前に送り出す必要がある」

「ある奴？」

「明久だね。観察処分者の召喚獣で鉄人に勝利する」

「ああ。別に蓮でもいいんだが」

「うーん……明日は参加するけれど、鉄人の相手が……」

一回勝ったけれど、アレは暴走状態で、の話だ。

今通常状態で勝てるかといわれたら自信がない。

実際に初日は明久と二人掛りでも敗れている。

「蓮だと鉄人と生身でぶつかることになる。高橋先生の事もあるから、鉄人には極力明久をぶつけない」

「明久が、鉄人と戦いたくないって気持ちは分かるんだけどね。それでも鉄人とまともな勝負が出来るのは明久だけなんだ」

「ああ。人と猛獣は武器を持ってこそ初めて対等の敵たり得る。その武器を持っているのは観察処分者たる明久、お前しかない」

明久の点数でも、物理干渉できる召喚獣なら鉄人相手にも勝機はある。

「じゃが、そうなると高橋先生の場所を無傷で通過する必要があるじゃろう？」

「ああ。大島はムツツリー二にやってもらうとしても、高橋女子と戦うための戦力が足りない。というか、今の戦力だと高橋先生のと

ころまで辿り着くことすら出来ないな」

雄二は予想図を見ながらうなっている。

教師一人当たり十人をぶつける必要があるとして、三階と二階だけで八十人が必要になる。

更に女子生徒もいるわけだから、こちらの圧倒的な戦力不足は否めない。

「作戦を成功させるためには、どうしてもA、B、Cクラスの協力が必要になる」

B、Cクラスは高橋先生のところに辿り着くため、Aクラスは高橋先生打倒のための戦力、といったところか。

「前置きが長くなったな。そういった理由から、他のクラスからの協力は必要不可欠となる。そこで、明日の作戦開始時刻まではその根回しに全力を注ぐことにする」

「要するに、A、B、Cクラスを仲間にするって事でしょ？ でも一度断られてるし、そんなに上手くいくかな？」

「そこを何とかするのが俺たちの仕事だ」

そういつて雄二が取り出したのは、デジカメと、部屋に備え付けられている浴衣だ。

備え付けの浴衣は使っちゃいけないって言われてたはずだけど……。

まあ、覗きをしようとする人間がそんなルールを守るはずないか。僕もだけど。

「それをどうするの？」

明久が聞いているが、浴衣は着る以外の用途が思いつかない。

「着せて写真を撮り、A―Cクラスの野郎共の劣情をあおる。うまくやれば覗きへの興味がわいて協力を取り付けられるはずだ」

「ふん。雄二の作戦っていつもそんな感じだよね」

「ほっとけ。ん？ どうした蓮？」

「いや、ちよつと劣情って聞いて昔のことを思い出してただけ……」

研究所で、研究員（男、つかオッサン）に襲われそうになったこととか。

「でも、効果はありそうだしやってみる価値はあるね。はい、秀吉の分」

「……またワシが着るのかのう……？」

そういう仕様がデフォルトです。

「安心しろ、お前だけに着て貰うわけじゃない。姫路と島田にも着てもらおう」

「いや、ワシ一人できるのが不満だとかそういうわけではないのじやが」

なら、何が不満なんだろう？

浴衣を着る

←
写真で男子の劣情を煽る

←
男子の劣情の対象＝女子

ああ……そういうことが……。

「それじゃ明久、姫路と島田に連絡を取ってくれ。ムツツリーニはカメラの用意を」

「僕はちよっとお手洗いに行ってくるね」

よく考えたら昼間の自習時間に行ったきりだ。

「——これじゃ壊れて弁明も出来ないだろうがこのクズ野郎！」

「そう！ その気持ち！ それが今僕が雄二に抱いてる気持ちだよ！」

僕が部屋に戻ると、明久と雄二が取っ組み合いをしていた。

いつもの事ながら、何をやってるんだろう……。

「何を訳分からんことを！ と、とにかく今は翔子の部屋に行つて誤解を解いておかないと大変なことに——」

ガラッ（雄二が廊下に繋がるドアを開ける音）

ドゴッ（廊下にいた鉄人が雄二に拳を叩き込む音）

グシャベキグチャッ（雄二がテーブルを巻き込んで壁に激突する音）

「部屋を出るな」

「了解です」

一言も発さなくなった雄二の代わりに返事をしておく。
流石覗き主犯格の部屋。他の部屋とは比べ物にならない警戒態勢だ。

「ちなみに秀吉とムツツリー二は携帯持ってないの？」

「うむ。特に必要ないからの」

「……………いざというとき鳴り出すと困る」

男子高校生としては珍しい理由だな。特に後者。

「……………こうなったら巻き込んでやる……………」

「蓮！ 携帯貸して！」

「あ、ああ……………はい」

何か明久がぼそぼそと呟いた後、僕に携帯を借りに来た。
特に断る理由もなかったので、明久に携帯を渡すと――

『To: 木下優子 From: 鮎川蓮

浴衣を着て僕の部屋まで来てくれない？ 大事なことを伝えたいんだ』

こんなメールを送っていたらしい。

「ゴパアッ！ ちょ、明久なんてメールを――」

「蓮も道連れだあ！！！！」

パキッ！

逆パカ――携帯や携帯ゲーム機の間接部分を本来とは逆方向に開くこと。モニターと本体が切り離されて使い物にならなくなる。

「あ、明久あつ！？ な、なんて事を！？ これじゃあ優子に訂正メールを送れないじゃないか！？」

「ふははははは！ こうなったら蓮も道連れだよ！」

大事な話って何だ！？ あれじゃまるで告白の前フリじゃないか！

「……蓮の携帯で訂正メールを送ればよかったと思うのじゃが」

「……」

秀吉の言葉に空気が凍った。

明久に話を聞く（拷問＆折檻）と、島田さんに間違っただけで告白まがいのメールを送ってしまった、その直後に雄二に携帯を壊されたらしい。

「……明久」

「は、はい……」

明久はボロボロになっているがそんなことは関係ない。
言葉を続ける。

「……取り敢えず、合宿から帰ったら僕の携帯弁償な？」

「そんな！？ 僕の食費が厳しいことを知っていてそんなことを言うなんて！ 蓮！ 君は鬼なのか！？」

「一つ言おう。明久、自業自得って言葉知ってるか？」

「そんなぁ……」

明久が凹みだしたがそんなことは関係ない。

どうやって優子に言い訳をするか……。

第五十一問 逆境のときこそ冷静になれ、なんて言っけれどそれが出来れば最初

次回予告

雄二「くそっ！ 俺は翔子の誤解を解かないといけないんだ！
こんなところで次回予告なんてしている場合じゃきゃぴっ！」

明久「まったく、次回予告コーナーで暴れないでよ……。
このバカが使い物にならなくなったので、今回は僕が。」

僕たちの都合に関係なく夜は更けていく。

寝静まる部屋に侵入者が現れる……。

次回 第五十二問『昔、夜這いは恋の始まりだったらしい』
お楽しみに！！」

第五十二問 昔、夜這いは恋の始まりだったらしい。(前書き)

切りどころがなく、長くなってしまいました。

今回の文字数7000文字オーバー！。

最高文字記録です。

もっと文字数を安定させるように気をつけないと……。

それではどうぞ。

第五十二問 昔、夜這いは恋の始まりだったらしい。

強化合宿の日誌

強化合宿三日目の日誌を書きなさい

土屋康太の日誌

『前略。 （坂本雄二に続く）』

教師のコメント

今度はリレー形式ですか。次から次へとよく思いつくものです。

坂本雄二の日誌

『そして翔子が俺の浴衣の帯を緩めようとした。俺は慌ててその手を押さえつけ、思いとどまるように説得した。ところが、隣では島田が明久に迫っていて妙な雰囲気になっている。更に蓮は木下姉と部屋の外で（鮎川蓮に続く）』

教師のコメント

君たちに一体何があったのですか？ 土屋君が略した部分がとても気になります。

鮎川蓮の日誌

『昨日の夜のこととで自分の殻に籠っていた。そんな僕を殻から引きずり出してくれたのは優子だ。

明久たちも僕の闇を受け入れてくれ、16年で初めて自分に自信がもてた。

夜中に優子が部屋にやってきたことに驚いたけれど、時間が経つ前に、今の気持ちで薄れる前に、言わないといけない。感謝の言葉を

（ 吉井明久に続く ）

教師のコメント

君の話は相変わらず抽象的でわかりにくいですが、何か壁を乗り越えたということでしょうか。

それならば喜ぶべきことです。しかし、夜中に木下さんがやってきたのですか？

先生としては、鮎川君が感謝の言葉を伝えた後、どうしたのか気になります。

吉井明久の日誌

『後略』

教師のコメント

ここでその引きはないでしょう。

第五十二問 昔、夜這いは恋の始まりだったらしい。

—— コンコン

明久とお話（折檻）して、優子への言い訳を考えていると、控えめなノックの音が扉から聞こえてきた。

「あ、いらつしゃい姫路さん」

来客は姫路さんだった。

おかしいな。僕たちの部屋は鉄人が監視しているはずなのに。

「姫路さん、廊下で鉄人に絡まなかった？」

「西村先生はいましたけど、お菓子をあげたら通してくれました」
そして姫路さんの手にはお菓子の入った籠（おそらく手作り）。

「……さらば鉄人、安らかに眠れ……」「……」

あの必殺料理は西村先生のも効果があるのか……。

「ところで、明久君は明久君はどうして浴衣姿なんですか？」

「これ？ 部屋にあるのを着てみたんだ。折角あるならと思ってさ。
似合うかな？」

珍しい。明久の嘘に無理やり感がない。

「はい。とっても似合ってます！ 綺麗な肌や細い鎖骨が凄く色っぽくて！」

それは男に対する褒め言葉じゃないんだけど……。

「姫路、よく来てくれた」

「こんばんは坂本君。お邪魔しますね」

「早速だが、プレゼントだ」

雄二が手に持っていた浴衣を姫路さんに手渡す。

なんというか、速攻だなあ。

「浴衣、ですか？ ありがとうございます。ところで話って……？」
戸惑いながらも雄二にお礼を言うところ、姫路さんも真面目ないい

子だよなあ……。

最近はFクラスに毒された所為で明久へのオシオキが殺人レベルにまで昇華されているが……。

「話というか、姫路さんにお願ひがあるんだ」

「お願ひ？」

「うん。実はね、その浴衣を着た姫路さんの写真を撮らせてもらいたいんだ」

「え……っ？」

目をぱちぱちとさせて驚く姫路さん。

そりゃ男子の部屋に呼ばれていきなりこんなことを言われたら誰でも驚く。

優子ならその場で関節技をかけてから話を聞くだろう。

「あゝそのゝなんていうか……」

明久は案の定困っている。

仕方がない。ちよつと助けてあげよう。

「明久は、姫路さんとペアルックで写真を撮ろうって言ってるんだよ。」

合宿のいい思い出になるからね」

「そ、そうだったんですか……明久君が私とペアルック……」

いかん。姫路さんが別の世界に飛び立ってしまった。

もつとオブラートに包んでおくべきだったか？ いや、それだと姫路さんはもつと壮絶に思い込む可能性がある。

「そ、そうなんだよ。僕も秀吉も一緒に写るから！」

「え……っ？」

わーーーー！ バカ！ すっごいバカ！

何のためにフォローしたのか分からないくらいの外的台詞だよ！

「……………」

どうしよう！ 明久がこんなこと言うと思ってなかったから、フォローが思いつかない！

「まあ、明久君だから仕方ないですよ……。それじゃ、ちょっと着替えてきます」

姫路さんは溜息混じりにそういうと、着替えに行こうとする。
ナイス姫路さん！ ナイス自己完結！

今度明久にはもうちょっと女心というものを教えておく必要があるだろうな（お前が言うな）

あ、そういえばまだ姫路さんに写真を人に見せる了承を取ってないんじゃない？

「あ、待って姫路さん」

「はい？」

僕が呼び止める一瞬前に明久が姫路さんに声を掛けた。

明久と雄二はアイコンタクトを取っている。

『姫路さんに写真を見せて回ることを伝えるからね』

『まさか教えないつもりだったのか？』

これ、便利だな。

目線だけで意思疎通が出来るとは。軍用手話より便利だ。

問題は目が見えないと使えないという点だけだ。

「実は撮る写真なんだけどさ、友達とかに見せてもいいかな？」

「え？ 浴衣姿をですか？ それはちよつと恥ずかしいです……」

「何を言ってるんだ姫路。浴衣姿程度で恥ずかしいと思っていたら、明久の存在はどうなる？ バカの上に変態なんて、生きていけないほど恥ずかしいことじゃないか」

「離して秀吉っ！ このバカの頭を力チ割ってやるんだ！」

「雄二、『バカ』はともかく『変態』は明久が可哀想だよ」

「そうだな。明久は『バカ』ではあるが『変態』ではないな。すまなかつた明久」

「二人とも、バカは否定せんのじゃの……」

「「え？ だって明久がバカなのは紛れもない事実だろう？」」

「離してムツツリー二っ！ このバカ共の脳髓を引きずり出してやるんだ！」

悪乗りしすぎたか。

「とはいえ、何もただで頼もつて言うんじゃない。それなりの礼はさせてもらう」

雄二がそう告げながら姫路さんを手招きする。

「なんですか？」

全く警戒した様子のない姫路さん。

男子の部屋に躊躇なく来たり、雄二の手招きに寄って行ったりと、彼女には多少危機感が足りない気がする。

そんな僕の心配をよそに、雄二と姫路さんは明久に背を向けて小声で話し始めた。

「……明日の朝、明久の寝顔写真を……」

「……本当ですか？　ならいくらでも……」
成程。等価交換というわけか。

「交渉は成立した。問題ないそうだ」
「はいっ！　少しくらいなら裾を肌蹴けてもいいですっ！」

流石雄二。

交渉（仲間を売るとも言う）にかけては一級品だ。

「とにかく協力してくれてありがとう。それなら早速準備をお願いできる？」

「はいっ！」

そっいつて部屋のトイレに入って行く姫路さん。

さつきから明久の目に動揺が。

「明久……覗くなよ？」

「蓮！　そんなことしないよ！」

ならいいけど。

自分達の部屋でまで問題を起こしたら、明日の作戦に差し支える。
明日の作戦……あ、そうだ。

「……………（キュツキュツ）」

「……………ムツツリーニ」

一心不乱にカメラのレンズを磨いているムツツリーニに声を掛ける。

「……………何？」

「撮影のとき、明久と姫路さんのツーショットを一つ取ってあげてくれない？　明日は鉄人と戦わないといけないわけだし、それくら

いの役得はあってもいいと思うんだけど」

「……………蓮が浴衣を肌蹴させる」

「あ、僕が着るのは決定なんだね……………まあ、それくらいなら」

「……………分かった（グッ！）」

いい笑顔で親指を立てるムツツリーニ。

このテンションなら、いい写真が撮れるだろう。

ムツツリーニが鼻血の海に沈んだり、僕と秀吉が細かい注文に戸惑ったりはしたものの、写真撮影はなんとか終えることが出来た。

皆は鉄人に連日扱かれた疲れがたまっているのか、写真撮影が終わると、すぐに布団を敷いて寝息を立て始めた。

かく言う僕も、昼間神経をすり減らしたり——泣き疲れもあるけど——したので、布団に入るとすぐに寝付いた。

しかし、その眠りも長くは続かなかった。

カチャ…………

廊下から鉄人以外の気配を感じて目を覚ますと、誰からドアを開けて入ってきた。

時計を見ると、十二時を回ったところだ。

こんな時間に侵入者？ まさか脅迫犯が僕たちが嗅ぎ回っているのに気づいて始末しに来たとか！？

時間差で数人が入ってくる。数は……三人か。

そのうちの一人が僕の布団に近づいてくる。

おかしいな。僕は脅迫されていないし、そもそも脅迫犯は一人って言う前提だったけど？

そんなことを考えているうちに、侵入者は僕の枕元に辿りついた。こうなったら先手必勝だ。

相手が変な動きを見せる前に速攻で取り押さえる！

スッ（侵入者が僕に手を伸ばした音）

グッ！（僕が侵入者の手を掴んだ音）

ドサッ！（僕が侵入者を体勢を入れ替えて逃げられないよう間接を極めた音）

「い、痛いっ！ 蓮、痛いって！」

「……あれ？ 優子？」

さっきは警戒していて分からなかったけれど侵入者の一人は優子だった。

「どうしたの、優子？ こんな時間に」

「え？ いや、だって……蓮が大事な話があるって言うから……」

「ああ、アレか……」

撮影会ですっかり頭から抜け落ちていた。

そういえば明久が僕の携帯を使って優子に恐ろしい文面でメールを送っていたんだった……。

「とりあえず、さ。ここじゃ話し難いから、ちょっと出ようか」
「……うん」

浴衣姿の優子と一緒に部屋を出る。

もちろん鉄人には見つからないように。

「それで、さ……話って何……？」

さつきと同じ質問を繰り返す優子。

心なしか、顔が赤く見えるのは気のせいだろうか？

「うん……そこまで大事、って程じゃないんだけど」

「そう、なの？」

「うん。けど、絶対に伝えておきたいこともある……かな」

こうやって優子がやってきたのもいい機会だ。
時間が経たないうちに伝えておこう。

「実は、さ——」

僕は優子に、今日の夜部屋で起こったことを話した。

明久たちに僕の過去を打ち明けたこと。

明久たちは受け入れてくれたこと。

明久と雄二の騒ぎと、それに巻き込まれてメールを送られた僕のこと。

「……アンタ達のやることはわからないわ……」

「ハハハ……仰るとおりです……」

「……それで？ あのメールが勘違いだったって事は分かったけど、伝えたい事って？」

「うん。優子——」

椅子に座っている優子と正面から向き合い、その目をしっかりと見る。

この体勢が一番気持ち伝わると思うから。

「——ありがとう」

「ふえ？」

「伝えておきたかったんだ。時間が経つ前に。」

優子のおかげで、僕の過去を知ってもらうことが出来たし、僕自身もそれに向き合うことが出来た。

優子が受け入れてくれたおかげで、皆と一緒に場所に居れるんだ。

もう、皆と距離を置かなくていい。全部優子のおかげ。

だから——ありがとう」

まだ完全に乗り越えた、とはいえないけれど、優子のおかげで今日一歩目を踏み出すことが出来た。外に出てから10年。僕は本当の意味で解放されたんだ。

「……もつつ。そんなこと？」

優子の返答は予想していないものだった。

「え？」

「アタシは蓮の、その、友達？　として、当たり前のことをしただけなんだから。

こんな夜中に呼び出さないでよね！」

「え、うん……」

そっか。友達……か。

そんなこと面と向かって言われたのも優子が初めてだったんだよな。

「……ちよつと期待しちゃったじゃない……」

そんなことを考えていたからだろうか。

蚊の鳴くように呟いた優子の声は僕の耳に入ってこなかった。

「じゃあ、一度部屋に戻ろうか」

「ええ」

「お姉さま無事ですか！？　美春が助けに来ましたよ！」

鉄人や他の教師の目を盗んで部屋にたどり着くと、件の清水さんが部屋に乱入するところだった。

「み、美春！？　どうしてアンタがここに来るのよ！」

「さっきお姉さまのお布団に入ったら誰もいなかったから、もしかやと思っただら……！」

「やっぱりここに探しに来て正解です！」

流石清水さんだ。まず探しに来た前提からして他とは一線を画している。

「あ、危なかったわ……。昨日で懲りたと思って完全に油断していたもの……」

え？　昨日も来たの？

「お姉さま！　男の部屋に来るなんて不潔です！　大人しく美春と一緒に裸で寝ましょう！　いや、勿論イロイロするので寝かせませんけど！」

「やめるんだ清水さん！　これ以上はムツツリーニの命に関る！」

「……………！！（ボタボタボタボタ）」

撮影に熱心だったと思われるムツツリーニの布団からは赤い液体が流れ出ている。

「……………雄二、とにかく続き」

「翔子、お前は本当にマイペースだな！」

「なんか……………」

「凄い状況ね……………」

「なんじゃ！？　目が覚めたら女子が四人もいて、そのうち一人は姉上じゃと！？

その上雄二は押し倒されて、ムツツリー二が布団を血で染めておるぞ！？」

とにかく力オスだ。

「ああああつ！ 皆してそんなに騒いじゃダメだよ！ このままじや、鉄人に気づかれて――」

『なにごとだつ！ 今吉井の声が聞こえたぞつ！』
一つ下の階から聞こえてくる鉄人の声。

「……………」

「え？ なに？ 何で全員が『吉井が声を出した所為で見つかったじゃないか』みたいな目で僕を見るの！？」

いや、実際に鉄人が聞き取ったのは明久の声っぽいし。

「くそつ！ 明久の所為で面倒なことになった！ とにかくお前らは見つからないようにここから逃げろ！」

「なんだか納得いかない物言いだけど、雄二の言つとおりだ！ とりあえずここは僕らに任せて！」

「僕も行く。人数が多ければ逃げられる可能性も高くなる」

ちよつとした裏技を使えば（窓から飛び降りる）無傷で明日を迎えることが出来る！

「で、でも……………」

「お姉さま！ 迷っている時間はありません！ 早く服を脱いで美春の部屋に！」

「アンタは黙ってなさい！」

こんな状況でも口説きに掛かる清水さんははっきり言って凄いと思う。

鉄人が迫ってきているというのに。

『吉井に坂本お！ お前らだということは分かってるんだ！ その場を動くなよ！』

「鉄人の声だ！ かなり近いよ！」

「時間がない！ こうなったら俺が『必殺アキちゃん爆弾』で鉄人の注意をひきつけるから、その間に四人は部屋を出ろ！」

「分かったわ」

「美波！ そこは分かつちゃダメだ！」

「まず僕たちが部屋から出て鉄人の注意をひきつける。その隙に優子たちはドアから出て一気に部屋まで走れ！」

「うん……。ゴメンね。ウチらのために」

「……ありがとう」

「蓮……」

「……お姉さま、愛しています」

最後の清水さんの台詞にイラッときたのは秘密だ。

「雄二、蓮、行くよっ！」

「仕方ない、付き合ってやる！」

「抜かるなよ！ 二人とも！」

明久がドアの取っ手に手をかけ、一気に開け放つ。
バン！ ガスッ！

「ふぬおおお！？ よ、吉井貴様ああっ！」

「げ！？ 鉄人がドアで頭を痛打したみたいなんだけど？」

「それはファインプレイだ明久！」

「よくやった明久！」

まさか自分からスケープゴートを買って出してくれるとは。

「逃げるぞ明久！」

「了か——」

一気に駆け出そうとしたそのとき、計算違いが起きた。

鉄人が明久の所為で出遅れたため、部屋の中を覗き込もうとしている。

このまま覗かれたら中にいる優子たちが見つかってしまう！

「鉄人！ 僕はこっちだよ！」

明久が雄二の手を振りほどきながら鉄人に向かって一気に走る。計算どおり、明久の声に反応して鉄人はこっちを向いた。

「貴様は西村先生と呼べと何度言えば——」

「どりゃあああーっ！」

すかさず明久が脱いだ浴衣を鉄人の頭に巻きつける。

「き、貴様何を！？」

「おまけっ！」

そしてその上から帯で浴衣を縛る。

「せいっ！」

「ぬおっ！？」

その間に僕は鉄人のズボンからベルトを抜き取り、それを両足に巻きつけた。

「今のうちだ！」

「早く！」

すかさず優子たちに合図を出す。

四人は頷きながら、全力で廊下を走っていった。

「吉井、貴様はつくづく俺の指導を受けたいようだな……！」

そして鮎川！ 昨日今日と、貴様も問題児の仲間入りのようだな……

……！」

えゝっ！ 何で僕までターゲットに！？

「明久、蓮、後は頑張れよっ！」

雄二が僕たちに向かって親指を立てている。

そうはいくか！

「西村先生！ 坂本雄二がこっそり持ち込んだ酒を隠すために注意を逸らせとってきました！」

「キサマなんてことを言ってくれるんだ！？」

「ついでに灰皿もくすねてこいと言われました！」

「うおおおおっ！ 蓮、キサマあああっ！？」

僕らも雄二に親指を立てて返す。

雄二だけ助かるなんてさせないからね。何処までも一緒に逃げようじゃないか！

「吉井……。坂本……。鮎川……。貴様ら……。覚悟は出来てるんだろうなあああっ！」

「「「出来てませんっ！」「」」

鉄人が浴衣にベルトと格闘している間に、三人で走り出す。

自慢じゃないけれど、僕は運動面なら大体の人には負けないと自負しているし、

明久と雄二も、いつも逃げ回っているだけ会って逃げ足には自身があるはずだ！

「どうする雄二！　なんとか鉄人を撒かないと！」

「どうするも何も、普通に走っていたら逃げ切れないのは目に見えているだろうが！」

「だよな！　向こうは殆どバケモノだもんね！」

「ああ！　だから、向こうが入ってこられない場所に逃げ込む！」
「オッケー！」

鉄人が入ってこられない場所か。

狭い道は召喚獣がやってきたときアウトだ。

そもそもこの合宿所に狭い場所なんてなかったはずだ。

『何処に逃げようとも無駄だ！　観念して指導を受けろ！』
もう追ってきたか！　予想よりも早い！

「明久、蓮、こっちだ！」

「了解！」

鉄人に追いつかれないように全速力で学習室の横を駆け抜ける。

「ところで雄二、何処に逃げ込むの？」

「男の鉄人が入って来れない場所——女子部屋だ！」

「なるほどっ！　女子部屋は男子禁制の場所！　そんな男子禁制の女子部屋にパンツ一丁の明久が逃げ込んだら——」

「——死は免れない！」

逃げ込む部屋に寄らず、変態のレッテル＋社会的肉体的な死だ。

「行くぞ明久！」

「絶対にいやだ！」

向こうを見れば既に女子部屋が見えてきている。

優子の部屋番号を聞いておけばよかった。

いざというときに逃げ込めたのに。

「く……！ この期に及んでまだそんなことを……っ！ 仕方ない！ 明久、コレを着ろっ！」

雄二が明久に布状のものを投げ渡す。

「流石は雄二！ 以心伝心！」

明久は服だと思って喜んでいる。

僕の見間違いじゃなければ、白の上着に短いスカートの……セーラー服だと思っただけ。

「早く着ろ！」

「雄二、セーラー服の装着、完了したよ！」

変態だ。まごう事なき変態がここにいる……！！

「よし、コレで逃げ込めるな！」

「待つんだ雄二、これはある意味全裸よりも致命的だ！」

「雄二、そのセーラー服何処から調達したのさ？」

「そんなのは些細な問題だ」

はぐらかされた。まさかあのセーラー服を着た霧島さんと――

「おい蓮。何を考えているか知らんが、それはないと断言できるぞ」

心を読まれた。

「よし、それじゃ、ここからは別々に逃げるぞ」

前方に見える通路に僕と雄二は右、明久は左に――

「バカ言っちゃいけないよ雄二、蓮。逃げるなら何処までも一緒に
っ」

明久が雄二を掴んで離さない。

「断る！ そんな変態と並ぶ気はない！」

「黙れ！ この姿が嫌ならおとなしく貴様のズボンを寄越せ！」

「貴様はやりそれが目的だったか！」

「脱げ！ 又ゲエエエツ！」

「脱ぐものかあーっ！」

「ちよつと二人とも！ そんなことやってると鉄人が――」

「……………お前たち、何をやっているんだ？」

あ、言ってるそばから鉄人が。

「……………」

「……………」

「……………」

よし、状況を整理してみよう。

パンツ一丁の明久が雄二のズボンを無理やり脱がせようとしている。
そしてその光景を見守る僕。

客観的に見なくてもかなり暑苦しい絵面だ。

もつと言うと、腐っている方達（優子とか優子とか優子）が非常に
喜びそうな絵でもある。

そして、この状況を第三者が見たらどうなるか。

「……………まあ、女子に縁のないのは分かるが、そういったことは人目に付かないようにだな」

そう。ほぼ100%誤解されるということである。

「先生！ 補習でもなんでも受けますから言い訳をさせてください！！」

こうして僕たちの鉄人と過ごす熱い夜が決定した。

第五十二問 昔、夜這いは恋の始まりだったらしい。（後書き）

次回予告

優子「まったく、あんなメールを送ってくるから変な想像しちゃったじゃないの……／＼／

あの鈍感さんにはどう接していいのかわからないわ……。

落ち込んでいても仕方ないわね。次回予告に移りましょう。

遂に始まる最後の戦い。

背水の陣に臨む連たちの運命は？ そしてAクラスは協力してくれるのか？

次回 第五十三問『最終決戦前のレベル上げは徹底的に。』

次回もお楽しみにね！」

第五十三問 最終決戦前のレベル上げは徹底的に。（前書き）

今ドラえ○ん。見ています。

普段は見ないですけど、たまに見ると面白いですね。

さて、第五十三問です。どうぞ。

第五十三問 最終決戦前のレベル上げは徹底的に。

バカテスト英語

問 以下の英文を訳しなさい

『 Although John tried to take the airplane for Japan with his wife's hand made lunch, he noticed that he forgot the passport on the way. 』

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『 ジョンは妻の手作り弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中でパスポートを忘れていることに気がついた 』

教師のコメント

はい正解です。

土屋康太の答え

『 ジャンは

』

教師のコメント

ジョンです。

吉井明久の答え

『 ジョンは手作りのパスポートで日本行きの飛行機に乗った 』

教師のコメント

手作りパスポートという言葉の意味をもう一度良く考えてみてく

ださい。

第五十三問 最終決戦前のレベル上げは徹底的に。

「ふぁ……あふ……」

朝食の時間。

僕の正面に座っている明久が大きなあくびをする。

あの明久が朝食の時間より眠気を優先しているとは。

「流石に眠いぞコラ……」

明久の隣では雄二も目をこすっている。

二人がこんなに眠そうなのは簡単。

昨夜、鉄人に朝まで教育について（拳で）語られたから。

僕はともかく、明久と雄二は三日連続だし、眠くならないわけはない。

「お主ら、災難じゃったのう……。蓮が平気な顔をしているのが不思議じゃが」

ほら、僕はテクノロジーのおかげで一日や二日の徹夜は平気なよう

に出来てるから。

「災難といえば災難だったかも——ふああああ——」
こんな調子で補給テスト時間に明久が眠らないか心配だ。
鉄人を相手にしてもらわないといけないんだから、ちよつとでも点数を取ってもらわないと。

「弱ったのう。お主らがそんな調子では今夜はとて……」
「別に全く寝ていないわけじゃないから、気合が入れば目覚めると
思うけど——ふわあ——」

重症だな。

あの明久が好物のカロリーを前に眠気を優先するほどに。

「俺もダメだ……。ぜんぜん気合が入ら——ふおおおっ!？」
「ど、どうしたの雄二!？」
「ついに壊れたか!？」

だるそうにしていた雄二が何かを見た途端一気に覚醒した。
ついに神経回路が逝かれたのか？

「……………効果は抜群」
「あ、ムツリーニ、おはよう」

明久の後ろ、僕の正面の出入り口からムツリーニが出てきた。
手に持っているのは……写真？

「ムツリーニ。今しがた雄二に見せたものはなんじゃ？ えらく
興奮しておるように見えるのじゃが？」

「……………魔法の写真」

ムツツリーニが珍しく胸を張っている。
どうやら昨日の写真みたいだ。

「どれ、ワシにもその写真を見せてくれんかの？」

「……………（スッ）」

ムツツリーニが手にしている写真を僕たちに渡してくる。

「魔法の写真だって？ 何を言ってるんだか。僕たちももう高校生なんだし、たかだか写真程度で気合が入るわけがふおおおっ！？」

「ほう。これはまた……………」

「上手く撮れたもんだね」

ムツツリーニが見せてくれた写真の一枚目には、浴衣姿の姫路さんと秀吉が写っていた。

恥ずかしそうな上目遣いにプラスして二人の浴衣の胸元が少し覗いている。

流石ムツツリーニ。

趣味が細かいというよりは、徹底しているというべきか。

「僕、生きていて良かった……………」

早速明久の理性は崩壊し始めている。

「二枚目は何が写っておるのじゃ？」

渡された写真を捲ってみる。

そこには一枚目の二人よりも若干露出が多い浴衣を着た……………僕が写っていた。

「ぬおおおおっ！」

「これは……凄いのう」

「なんか自分が写っているを見るって変な感じだね……」

秀吉の気持ちが良くわかった。

しかもムツツリー二、撮る時に細かいポーズや表情の指定までしてくるもんだから安請け合いましたことを後悔した。

「明久、三枚目は何が写っておるのじゃ？」

「えっと……」

明久が更に写真を捲る。

すると今度は浴衣姿で迫る霧島さんとハーフパンツ姿の島田さんのツーショットが出てきた。

「す、凄い！ これもすごいよムツツリー二！ 僕は今、君を心から尊敬している！」

「確かに凄いのう……。上手く雄二と明久が写らんような角度で撮っておるし、もはやプロの領域じゃ」

「流石に他の人たちとはキャリアも潜ってきた修羅場の数も違うよね」

見つかったらお尻にお灸では済まない事を日常的にしてるし。

それにしても、まるでグラビア写真だな。

全員が浴衣姿じゃないのは仕方がないとしても、被写体がかぶらずに、それでいて雄二と明久がいらないような角度で撮るなんて。

「明久、四枚目は？」

「うん。えっと、四枚目は……」

明久が写真を捲ると、浴衣姿でほんのり顔を赤くした優子の写真が。

「何っ!？」

「あれ？ 木下さん？ 昨日部屋にいたっけ？」

「……………シャッターチャンスが訪れると思って尾行した」

「……………蓮？ 大丈夫かの？ さっきから固まっておるが」

「@ □ p f d w s t f p f t (秀吉、大丈夫だよ)」

「……………もはや地球人の言語ではなくなっておるぞ」

しまった！ つい動揺して…………。

「しかし珍しいのう。蓮がここまで動揺するとは」

「昨日も木下さんと二人きりだったみたいだし、何かあったの？」

「……………明久、何もなかったから殺気を収めてもらえると助かる」

腐ってもFFF団の一員って事か。

ちよつとでも異性の影があると容赦なく殺気が漏れてくる。

「して、五枚目は？」

「あ、うん。五枚目は——」

更に写真が捲られる。そこに写っていたのは——セーラー服姿の明久。

「……………綺麗に撮れたので印刷してみた」

「放して秀吉！ このバカの頭を力チ割ってやるんだ！」

「落ち着くのじゃ明久！ よく撮れておるではないか！」

「秀吉、その言葉はフォローになってないかも…………」

あの逃走しているどこかにムツツリー二が隠れていたってわけか。

「ムツツリー二、よく鉄人に見つからなかったな。どうやって隠れてたの？」

「……………企業秘密」

普通の隠れ方じゃないって事は良くわかったよ。

「驚いたぞムツツリー二。まさかここまで凄い写真を撮るとは」
いつの間にか目に輝きを取り戻した雄二がムツツリー二を労っている。

霧島さん以外の女子に殆ど興味を示さない雄二ですらこんな反応をするんだ。

普通の男子が見たら興奮は間違いない。

Fクラスが見たら流血しそうだ。

「これで増援も期待できるというわけじゃな」
秀吉の言うとおり、この写真なら、D・Eクラスが離れるどころか、A・B・Cクラスに増援も期待できる。

「……………これ、他の皆にも見せないといけないかな？」
明久がこんなことを言う気持ちも分かる。
実際、僕だって可能なら回したくない。

「明久。俺たちの目標を忘れるな。大局を見誤る人間に成功はないぞ」

「うんうん。試召戦争で失敗した雄二だからこそ説得力のある台詞だよ」

「ぐっ……………それを言われると……………」

「うん。それはそうだけど……………」

雄二は自分が勝負の要ってわかっていたのに勉強してなかったんだ

からね。

明久も、雄二の言葉で思いとどまったようだ。

「ごめん。確かに間違えていた。この写真は目的の達成のためだし、こんな未練は断ち切る。後でムツツリー二に一グロスほど焼き増ししてもらっただけで我慢するよ」

「一グロスは多すぎだろ」

「144枚だよ？」

「未練たらたらじゃな」

12枚の一ダースが更に二ダース。

12×12で144枚だ。

「そういえば、蓮はいいのか？」

「何が？」

雄二がニヤニヤしながら僕を見てくる。

こういうときの雄二は何か悪いことを考えているか、人をからかうことを考えている。

「いや、お前が木下姉の写真をあっさりと渡したからな。意外に思っただけだ」

そういいながらも雄二の顔はニヤついている。

「はあ……本音を言えば回したくないのは山々だけどね……なんでそう思っているか僕も分からないけど」

「ほう？」

「けど……雄二が霧島さんの写真を回したんだし、僕が駄々こねるのも良くないと思って」

「なっ!?! 何故翔子が出てくる!?!」

「さあね〜(ニヤニヤ)」

ふっ……僕をからかおうとするからこうなるのさ。

「ちっ。それじゃ、早速——」

雄二がペンを取り出し、写真の裏に何かを荒々しく書きなぐった。

『この写真を全男子に回すこと。女子及び教師に見つからないように注意！ 尚、パクッた奴は坂本雄二と鮎川蓮の名の下に私刑を執行する』

なるほど。注意書きをしないと一人目で盗まれてしまいそうだが——

「どうして僕の名前もあるの？」
その一点が謎だ。

「お前が鉄人を倒したって噂はかなり広まってるからな。お前の名前も入れておけばパクられることはまずないと思って良い」

「へ、へえ……」

まさかそんなに広まってるとは。

これは帰ったら全学年に広まることも覚悟しないといけないかもしれない。

「おい須川。これを男子に順番に回してくれ」

近くで食事をしていた須川君に雄二が写真を渡す。

須川君は頭に疑問符を浮かべながらもそれを受け取って、

「ふおおおおおおおっ！」

覚醒していた。

「ところで雄二、僕の写真は抜いておいてくれた？」

「そうだ！ 雄二、あんな写真を回したら戦意が上がるどころか駄

々下がりだよ！」

「安心しろ、あんなものを流したら士気がガタ落ちだからな。きっちり抜いておいた」

「そっか。それは良かったよ」

アレで士気が上がるのは久保君くらいのもだろう。

「うん？ ムツツリー二、お主、他にも写真を持っておったのかの？」

秀吉の言葉にムツツリー二の手を見ると、まだ一枚の写真が握られている。

ムツツリー二に渡された写真は明久のもの意外雄二が全部回したからムツツリー二の持っている写真はまだ僕らが見ていないものということになる。

「どれどれ、何が写っておるのじゃ？」

「あ、僕にも見せてよ」

秀吉が受け取った写真を、明久と共に横から覗きこむ。

そこに写っていたのは――セーラー服姿の明久（パンチラEdit ion）。

「……………思わず撮ってしまった」

「放して秀吉！ このバカの脳髓を引きずり出してやるんだ！」

「見ておらん！ ワシは何も見えておらんから落ち着くのじゃ！」

なにはともあれ、これで僕らの士気は最高潮に達していた。

カチッ カチッ

時計の針の音が大きく聞こえる。
いや、時計の音が大きく聞こえるほど、部屋の中は静まり返っている。

「明久、今更ジタバタするな。補充のテストも全て受けたし、写真も回した。やるべきことは全てやったのだから、後は何も考えず戦うだけだ」

部屋の隅で目を瞑っていた雄二が明久に声を掛ける。
本当に神経が太いというか、それだけ今まで修羅場を潜り抜けてきたんだろう。

「D、E、Fクラスは昨日に続いて全員参加の様じゃ。あとはA、B、Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな」

秀吉から情報がもたらされる。

補充テストの所為で昨日ほど根回しの時間が取れなかった。
だから回した写真の効果がどれほどのものか確認できていない。
つまり、ぶつつけ本番。開戦後に初めてこちらの戦力が分かることになる。

「……………今日こそ借りを返す」

珍しく闘志を燃やしているムッツリーニ。

昼間の保健体育の補充試験でもすごい勢いで問題を解いていた。写真のこともあって、やる気に満ちているのだろっ。

「作戦開始も近い。最後の打ち合わせを始めるぞ」

雄二が皆に呼びかける。

最後のブリーフィングだ。

「俺たちがいるのは三階だから、三階、二階、一階、女子風呂前の四箇所を突破しないと目的地にはたどり着けない」

この合宿の部屋割りは、三階にE、Fクラス、二階にC、Dクラス、一階にA、Bクラスとなっている。こんなところでもクラス間格差だ。

「三階の敵はE、Fクラスが抑えてくれる。二階の敵はDクラスが押さえてくれる手筈になっているが……」

「Dクラスだけじゃと敵しいじやろうな」

「教師もいるからね……」

教師陣だって、敵の強さに合わせた配置をしてくるはずだ。Cクラス抜きでの二階突破は難しい。

「でもここまで来たらやるしかないよ」

「勿論そのつもりだ。そしてここを突破すると――」

「……………高橋先生」

「そうだね。学年主席の高橋先生。多分ここに霧島さんや姫路さん、工藤さんもいると思う」

今回の作戦で大きな障害の一つがこの高橋先生。

雄二たちに聞いたところ、高橋先生の総合科目は7000点代後半だったらしい。

生徒ではまず先生を超える点数は取れない。

「明久とムツツリー二を通す一瞬の隙は俺が作る。だが、高橋先生は翔子たちをそのまま足止めするのは不可能だと思ってくれ」
雄二がそのまま三人を相手に出来るはずがない。
いや、三人とは限らないか。優子がいるかもしれないし、他のAクラス女子がいなくても限らない。
この戦力差での足止めがどれほど困難か。
考える必要なんてない。

「じゃが、足止めできねば……」

「ああ。明久とムツツリー二は前後を挟まれて終わりだ。作戦は失敗。俺は翔子に残りの人生を奪われ、明久は変態として生きていくことになる」

「作戦が失敗しても今と大して変わらない気がするのじゃが……」

「そだね……」

「とにかく、高橋先生は根性で何とかするしかない。A / Bクラスが協力してくれば、勝機は十分にあるんだが」

「ふむ。Aクラスはともかく、Bクラスは大丈夫じゃろ。きちんと全員が、特に代表格が女子に興味を持つておるからのう。あの写真が効くはずじゃ」

「そうだね。あの写真は正直凄まじい効き目があると思うよ」

「あははっ。秀吉の言い方だとAクラスの代表格は女子に興味がないように聞こえるよ?」

「……」

明久、何度でも言おう。この世の中には知らないほうが良いことがあふれているんだよ。

昨日君だってその一つを知ったじゃないか。

「そこまで言ったら、後はお前たちの仕事だ。分かっているな？」

「……………大島先生を倒す」

「そして僕は鉄人、だね？」

「あれ？ 僕は？」

「蓮は、不確定要素だ。咄嗟の状況に対応するために、作戦に幅を持たせておきたい。蓮はそのためにこれといった確定的な役割はない。その場で咄嗟に動いてもらうことになる」

「うん……………」

雄二も難しいことを言ってくれる。

戦い、特に乱戦ではあらかじめ自分のやることが決まっていたほうがやりやすい。

周りの状況を気にせずに動くことが出来るからだ。

それに、今回は作戦全体に不確定要素が多すぎる。

あの雄二が作戦に幅を持たせるほどだ。

かなり厳しい戦いになるだろうが――

「……………大丈夫。きっと上手くいく」

「うん」

「当然だな」

「だね」

「じゃな」

このメンバーなら何でもできる気がする。

どんな逆境も力に変えて、それを跳ね返すだけの力がある。

——ピピッ

何処からか電子音が聞こえる。

八時を告げる時報。作戦開始の法螺貝だ。

「……よし、てめえら、気合は入っているか！」

「……おうっ！」「……」

「女子も教師も、ＡクラスもＦクラスも関係ねえ！　男の底力、とくと見せてやるうじゃねえか！」

「……おうっ！」「……」

「これがラストチャンスだ！　俺たち五人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねえ！」

「……当然だ！」「……」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣^でるぞっ！」

「……よっしゃあ——っ！」「……」

強化合宿四日目、二〇〇〇時。今、覗きをめぐる最後の勝負が始まる^うとしていた。

第五十三問 最終決戦前のレベル上げは徹底的に。（後書き）

次回予告

蓮「流石ムツツリー二だね。優子の写真にはかなり動揺させられたよ。」

さて、次回予告です。

遂に始まる最終決戦。協力してくれる仲間達と共に、僕たちは女子風呂を目指す。

次回 第五十四問 『バカと覗きと最終決戦！ 死力を尽くせ、野郎共！』

次回もお楽しみに」

作者の一言コーナー
感想待ってます！

第五十四問 バカと覗きと最終決戦！ 死力を尽くせ、野郎共！！

バカテスト国語

問 次を示す四字熟語の漢字を答え、適切な例文を答えなさい。
『あいまいもこ』

姫路瑞希の答え

『漢字「曖昧模糊」』

例文 「責任の所在が曖昧模糊としていた」』

教師のコメント

『あやふやではつきりとしなさいさま』を表す四字熟語ですね。

読める人は多いのですが、書ける人はそう多くありません。よく出来ました。

吉井明久の答え

『漢字「合間妹子」』

鮎川蓮の答え

『漢字「愛舞母児」』

教師のコメント

何とか答えようという気持ちはだけは伝わってきました。

土屋康太の答え

『例文「小野小町・小野妹子・合間妹子の日本三大美女は遣隋使として旅立った」』

教師のコメント

一名男性が混ざっているので注意して下さい。

第五十四問 バカと覗きと最終決戦！ 死力を尽くせ、野郎共！！

『いたわ！ 主犯格五人組よ！』

『長谷川先生！ 向こうの五人をやります！』

僕たちが部屋を出てすぐのところに、長谷川先生を主体とする女子軍団が展開されていた。当たり前のことだけど、僕たちは徹底的にマークされていたみたいだ。

先行してきたのは召喚大会一回戦で戦ったEクラス代表の中林さんと、同じくEクラスの三上さん。

やる、とか倒す、とか言ってるけど――

「ふん、雑兵共が、この俺に敵うと思うなよ！――試験^{サモン}召喚！」

『Eクラス 中林宏美 & Eクラス 三上美子 VS Fクラス 坂本雄二』

数学 101点 & 92点 VS 22

4点

」

——今の雄二の敵じゃない。

「勉強してから出直しやがれっ！」

『『きゃあああ——っ！』』

雄二の召喚獣が、二人とは比べ物にならない速さで接近して拳を叩き込む。

勝負はたった一撃でついた。

今の雄二は、やる気になった雄二は、試召戦争の経験もないEクラス程度が勝てる相手じゃない。

「坂本君！ 待ちなさい！」

倒された中林さん達に遅れて、長谷川先生が追ってきた。
でも一瞬遅い！

「長谷川先生、残念ながらここは通しませんよ」

長谷川先生と僕たとの間に入ってきたのは、同じFクラスである須川君たち。

「吉井！ 坂本！ ここは俺たちに任せて先に行け！ 試験^{サモン}召喚！」
『『試験^{サモン}召喚！』』

壁を作るように須川君たちが召喚する。

「頼むよ須川君！」

「ここは任せた！」

「おうよっ！ それより、きちんと鉄人を倒しておけよ！ そうじゃないとここを片付けた後で覗きにいけないからな！」

「わかってるよ！ 女子風呂でまた会おう！」

須川君たちに背を向けて廊下を走る。

後ろからは、教師＆女子の連合軍相手に一步も引かない勇士達の怒号が聞こえてきた。

『翔子たん！ 翔子たん！ はあはあはああつー！』

『島田のペツタンコおおーっ！』

『姫路さん結婚しましょーっ！』

『木下さん！ 俺が迎えに行くよおーっ！』

「……全員やられちまえ」

「奇遇だね、蓮。僕も今同じことを思っていたよ」
特に最後の奴。

後で血祭りに挙げてやるから覚悟しろ。

「凄い士気じゃな。これなら三階の制圧は問題なさそうじゃ」

「みんなの気持ちが一つになっているからね」

「その一つになる理由が覗きつてところが凄く悲しいけどね」

階段のところまでに配置されていた教師は全部で四人。

全員がF、Eクラスの男子に押されていた。これならもう三階は安全地帯といってもいいだろう。

「でも、ここから先が勝負だね……」

「ああ。Dクラスだけなら、この先の制圧は難しい」

「Dクラスだけなのか、Cクラスも一緒に戦ってくれているのか……」

……

下の階から戦闘の気配を感じる。

もしDクラスだけだった場合、教師の注意から逃れて二階を通り抜

けられる時間はあとわずかだ。もちろんその後二階を制圧されてしまえば挟み撃ちにあつてどの道終わりだけど。

「……………躊躇っている時間はない」

「うん。行こう！」

「もうここまで来たら突っ込むだけだね！」

少し広めの階段を一気に駆け下りる。

踊り場を曲がって見えた先には――

『俺たちの覗きの邪魔はさせない！ 試験召喚！』
サモン

『先生、覚悟してもらいます！』

『き、君たちまで参加していようとは……………！』

『化学教師 布施文博 VS Cクラス 黒崎トオル&野口一心
化学 663点 VS 144点&132点』

――教師相手に立ち回っている、Cクラスの姿があつた。

「Cクラス！ 来てくれたんだね！」

明久が喜びの声を上げる。当然だ。僕らが待ち望んだ援軍なのだから。

「Cクラス・Dクラスの野郎共、協力に感謝するっ！ 二階は――俺たちの背中はお前らに任せるぞ！」

雄二が声高に叫ぶ。

『協力なんざ、足りめえだ！』

『女子風呂覗かないで、何のための男でえっ！』

『てめえらこそしくじるんじゃねえぞ!』

凄い。士気が高すぎてべらんめえ口調になっている。
ムツツリー二の写真の威力は凄まじかったようだ。

「あのさ、こういうのって凄く嬉しいよね」

「そうじゃな、仲間が増えていく喜びとでも言うべきかの」
明久の言葉に秀吉が同調する。

確かに、先の試召戦争では全力で拳を交えた相手が今は教師・女子
連合軍という強大な相手と一緒に戦ってくれている。
感慨深いものもある。

「その分仲間だった女子が敵だな」

「そこは気にしない方向で」

「その前に僕たちの味方に女子っていたか？」

「「……………」」

そこで黙り込まないでくれよ……。

と、とにかくこれで二階もクリア。

残るは一階と女子風呂前だ。

「こ、この調子ならA・Bクラスも協力してくれるよね!」

「さて、それはどうだろうな」

更に階段を降り、一階に近づく。

下の階からは人の気配はする。ここで両クラスが協力してくれなければ、戦闘は行われていないはずだが……

『…………護してくれっ…………』

『……メだ！……倒的過ぎる……』

一階でも戦闘が行われている。
だけど、様子が……

「よしっ！ これで一階の制圧もうまく——」
「いや、違う！ 様子がおかしいぞ！」

踊り場を折り返し、一階を見渡す。
するとそこには、教師女子連合軍に押されているBクラスの姿があった。

『Aクラス 霧島翔子&Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 加西真一

総合科目 4762点& 4422点 VS 169
2点 』

圧倒的な戦力差に成す術なく倒れていく仲間達。これは——っ！

「……雄二、悪戯はそこまで」

「明久君、ここは通しませんよ」

「翔子かつ！」

「姫路さん……っ！」

地下へと続く階段の手前。そこには雄二が予想したとおり、霧島さんと姫路さんという、女子最高戦力の姿があった。

「代表と姫路さんだけじゃないわよ」

「……優子っ！」

拙い……。優子まで出てきたか。

二日目にはいたけど、三日目は出てこなかったと聞いて油断していた。

既に僕たちの周りには彼女達に倒された仲間達が死屍累々と転がっている。

「Aクラスがおらんようじゃな……」

周囲を警戒していた秀吉が悔しそうに告げた。

周りを見れば、ここの総合科目でも、少しはなれたところの物理でもAクラスの姿は見えない。

結局立ち上がってくれたのはBクラスだけだったか……っ！

「オマケに随分と用心深い布陣だな！ クソッ！」

階段前の向こうの配置を見て雄二が吐き捨てる。

階段の真ん前に高橋先生がいて、先生はそこを動く気配を見せない。その周囲に霧島さんと姫路さん、他にも優子やAクラスの女子が何人が立っている。

あくまで高橋先生はそこを通ろうとするものを打ち倒すだけ、先生があの場合を動かない以上、隙についての突破は難しい。

（雄二、例の隙を作る作戦は？）

（それは問題ないが、通過した後で挟み込まれる。最低でもこの連中をひきつけておくだけの戦力がないと話にならない）

（じゃあ、蓮！ 蓮なら何とかできるんじゃないの？）

（無理だよ明久。姫路さんと霧島さんに加えて、高橋先生に優子ま
でいるんだよ？

僕でも逃げ回って5分持つかどうか……）

学年の主席に次席。それに加えて二人の倍近い点数を持つ高橋先生。更にAクラスでもトップクラスの優子に、Aクラス女子数人。周り全部が敵で気を抜けないというのに、こちらの戦力は僕たちとBクラスだけ。

この状況はあまりにも厳しい。

「……雄二、お仕置き」

「くっ！ 根本バリアーっ！」

「さっ、坂本！ 折角の協力者にその扱いはあんまりじゃないか！？」

『Aクラス 霧島翔子 VS Bクラス 根本恭二
総合科目 4762点 VS 1931点』

ダメだな。Bクラスで一番成績のいい根本でも霧島さんの召喚獣の前には塵に等しい。

一撃どころか一瞬で葬り去られた。

「明久君、おとなしく降参してください」

「蓮、年貢の納め時よ」

姫路さんと優子が召喚獣を携えてゆっくりとこちらに歩いてくる。近くでは雄二も同じように霧島さんに追い詰められていた。

『もうこれ以上は無理だ……。姫路に霧島に高橋先生なんて、勝てるわけがない』

『だいたい、姫路と霧島と木下が入っていないなんて、覗く価値がないじゃないか』

生き残りのBクラス男子二人から弱音が漏れる。

「諦めちゃダメだつ！　ここにいないって事は、まだ佐藤さんや美波がお風呂に入っているはず！　覗く価値は十分にある！」
何でそこで佐藤さんの名前が出てくるんだ？

そういえば、明久は試召戦争のときに佐藤さんに一方的にボコられてたね。

明久がここで諦めないのは僕にとっては予想通りだが、隣にいた秀吉には少し予想外だったようで、少し驚いたような顔をして明久に尋ねた。

「明久。なぜここまで圧倒的不利な状況になっても諦めないのじゃ？　お主は『観察処分者』じゃ。痛みのフィードバックもある。そこまでして写真を取り戻そうとして、苦しい思いをする必要もないじやろう？　そこまでしてもお主の評価は変わらぬはずじゃ」

秀吉の疑問はもつともだ。いや、この場にいる僕たち以外の全員が疑問に思っているだろう。

観察処分者の召喚獣を使う以上、明久は痛みからは逃れられない。ここまで圧倒的に不利な状況であれば、脅迫や写真のことは諦めて痛みを味わう前に登校するだろう。普通ならそうする。

けれど――

「――でもね、秀吉。そうじゃないんだよ」
「そうじゃ、ない？」

「確かに最初は写真を取り戻すつもりだった。真犯人を捕まえて、覗きの疑いを晴らすつもりだった。……でも、こうして仲間が増えて、その仲間を失いながらも前に進んで、僕は初めて気がついたんだ」

「明久。お主、何を言って――」

「――たとえ許されない行為であろうとも、自分の気持ちは偽れない。正直に言おう。今、僕は――純粹に欲望のために女子風呂を覗きたいっ！」

――ここにいる吉井明久は、『普通』が通用しない稀代のバカだ。

「お主は何処までバカなんじゃ!？」

「よく言った明久。それでこそ観察処分者だ！」

たとえ痛みを受けたとしても、目的のために突き進む。それが僕たちの『吉井（観察）明久（処分者）』だ！

「明久君。そこまでして私じゃなくて美波ちゃんのお風呂を覗きたいんですね……！ もう許しません！ 覗きは犯罪なんですからね！」

姫路さんが召喚獣を明久に突撃させる。

それに呼応するように、明久の口から叫び声が漏れる。

「世間のルールなんて関係ない！ 誰にどう思われようと、僕は僕の気持ちに正直に生きる！」

明久の召喚獣が、姫路さんの召喚獣を迎え撃つ。

その時――

『よく言った！ 吉井明久君!』

聞いたことのある声が廊下に響き渡った。

「だ、誰ですかっ!」

「待たせたね、吉井君。君の正直な気持ちは確かにこの僕が聞き届けた」

この声、この話し方。
学年次席にして恋する男。

「久保君！ 来てくれたんだね！」
Aクラス久保利光その人だ。

「到着が遅れてすまない。踏ん切りがつかず、準備をしながらもずつと迷っていたんだが……さっきの吉井君の言葉で決心がついたよ」
「決心がついたってそれじゃあ……！」

「ああ。Aクラス男子総勢二十四名！ 吉井明久の覗きに力を貸そう！ Aクラスの皆、聞こえているな？ 全員召喚獣を召喚して、吉井明久君を援護するんだ！」

『『『おお——っ！』』』

「お主らは何を言っておるんじゃ！？ 全員正気を保つのじゃ！」
「秀吉、これ以上言うのは野暮だよ。皆それぞれ決意をしたんだ」
「ありがとう久保君！ 君たちの勇氣に心から感謝するよ！」

Aクラスが参戦。

これで僕たち男子軍には、文月学園第二学年全クラスの男子が集結した。

「いや、感謝するのは僕のほうだよ。そうさ、君が言ったとおり、自分の気持ちに嘘はつけない。世間に許されない想いであるうとも、好きなものは好きなんだ……！」

そついつて歩いてくる久保君の背後からは良くわからないオーラが出ている。

拙いな。明久の言葉で久保君に変なスイッチが入っている。

「久保君。お仕置きの邪魔をしないでください」

「そうは行かないよ姫路さん。僕らは彼の覗きの協力すると決めたんだ。西村先生を妥当する唯一の力を、ここで失うわけには行かない」

久保君が姫路さんと切り結び、他のAクラスの皆は明久を護るよう
に立ちはだかる。

今、この瞬間こそがチャンスだ！

「雄二っ！」

「わかつてる！ 明久、ムツツリーニ！ 階段へ向かって走れ！」

援軍にやってきたクラスメイトに驚いている霧島さんを抜いて、雄
二が前に出た。

僕も優子を抜いててそれに続く。

「まさかAクラスの皆まで参加するとは思いませんでしたが、問題
はありません。ここは誰であろうと通しませんから。——試験^{サモン}召喚」
高橋先生の召喚獣が現れた。
でもここで立ち止まるわけには行かない。

「高橋女史、悪いがここは通してもらうぜ！ 行くぞ——起動^{アウェイクン}っ！」

雄二の掛け声を受け、召喚大会で手に入れた腕輪が起動する。

雄二の白金の腕輪の能力は召喚フィールドの作成。つまり——

「干渉ですか…… やってくれましたね坂本君……！」

「行け明久！ 俺たちを理想郷^{アガルタ}に導いてくれ！」

「任せとけ！」

「明久！ ムツツリーニ！ ここは任せて！ 抜かるんじゃないぞ
！」

「…………… 任された」

異なる二種類のフィールドが形成され、双方の効果が打ち消される。召喚獣が消えた隙を狙って、その横を明久とムツツリー二が通り抜ける。

『吉井たちに続け——っ！』

「雄二！」

「ああっ！」

雄二に声を掛けて白金の腕輪を切らせる。起動している間雄二は召喚できない。

Aクラス並の点数を持つ雄二が召喚できないのはこちらにとってハズレとなる。

多少点数は減ってしまっても、腕輪をOFFにさせたほうが良い！

「く……っ！ 吉井君と土屋君は逃がしましたが、あなたたちまでは通しません！」

既に高橋先生は召喚獣を呼びなおしている。

一度自分の召喚フィールドを消して、雄二のフィールドで召喚しようとしたようだ、雄二がフィールドを消したのを見て、すぐにフィールドを形成しなおし自分の召喚獣を召喚してきた。

「流石は高橋女史。判断が早い……！」

「ふう〜。でも、当初の目的は達成できたし、90点って所じゃない？」

「あら。随分と余裕なのね、蓮」

「……雄二、今度こそお仕置き」

一息つく暇もなく、僕の前には優子、雄二の前には霧島さんが。

「雄二、霧島さんの足止め、任せられる？」

「ふん。そのくらいはやって見せるさ……！」

「……雄二」

「……蓮」

「「「勝負!!」「」「」

最終決戦。いよいよ本番だ!!

第五十四問 バカと覗きと最終決戦！ 死力を尽くせ、野郎共！！（後書き）

次回予告と年末の挨拶

蓮「これが今年最後の投稿みたいだね。

それでは次回予告を。」

強化合宿最終決戦は遂に山場を迎える。

それぞれの敵と対峙し、全力を持ってぶつかり合う。

そんな中、蓮が語った心境とは。

次回 第五十五問「あなたがここにいる理由」

お楽しみに。そして――」

全員「良いお年を！！」

作者の一言コーナー

今年最後の投稿でした。

新年一発目が何日になるかわかりませんが、できるだけ早くしたい
と思っています。そして来年こそは初夢を見たいなあとww

それでは皆さん。良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3452x/>

バカと白黒と召喚獣

2011年12月31日18時51分発行